■ 第 1 回仙台ラウンドテーブル
「市役所（シティホール）を考える」
2018 年 11 月 26 日［月］ 13：00 - 18：45

□ 第 2 回仙台ラウンドテーブル
「みんなの市役所（シティホール）を模索する」
2019 年 1 月 27 日［月］ 13：00 - 18：45

□ 第 3 回仙台ラウンドテーブル
「地域コアとなる市役所（シティホール）を育む」
2019 年 4 月 23 日［火］ 13：00 - 18：45

主催

仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
一般社団法人　宮城県建築士会
一般社団法人　宮城県建築士事務所協会
公益社団法人　日本建築家協会東北支部宮城地域会

0.0 目次

0.0	目次	2
0.1	仙台市役所本庁舎建替	3
0.2	論考	4
0.3	論考	4
0.4	論考	5
	第１回仙台ラウンドテーブル「市役所（シティホール）を考える」	
1.0	前半ラウンドテーブル	7
1.1	テーブル A　【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える	8
1.2	テーブル B　【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える	8
1.3	テーブル C　【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える	8
2.0	後半ラウンドテーブル	61
2.1	テーブル D　【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える	62
2.2	テーブル E　【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える	62
2.3	テーブル F　【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える	62
3.1	主催・企画委員会	109

0.1 仙台市役所本庁舎建替

全体総括
菅原大助
仙台市財政局理財本部本庁舎建替準備室　室長

市民そして専門家の皆様の熱意への感謝

はじめに、仙台市役所本庁舎の建替えに関し、仙台ラウンドテーブルの開催から報告書発行までの一連の活動にあたり、宮城県建築士会、宮城県建築士事務所協会、日本建築家協会東北支部宮城地域会の３団体の皆様が連携し､多大なご協力を賜りました。また、本市内外を問わず多くの専門家の皆様にご登壇いただき、３回の開催で全 18 テーブル、合計 2,580 分間の議論を通じて忌憚のないご意見を頂戴することができましたこと、そして何より、市役所本庁舎の建替えに関する皆様の熱意に対して心より感謝申し上げます。

市役所は誰のものか

市役所の本庁舎は通常、行政の執務と議会の運営がなされる場です。しかしながらその執務は市民生活に直結しており、市民が人生の様々な節目において少なからず利用する場でもあります。海外では市役所は「シティホール」と呼ばれ、様々な活動の場として利用されるとともに、市民が地域のアイデンティティを感じる場の役割も担っています。

このことから、市役所は職員が働く場、市民の手続きの場としてだけではなく、市民一人一人が思い描く地域の姿を象徴した「みんなの庁舎」であると考えられます。

庁舎の設計条件

自治体の公共建築物の建設では、行政の担当者が予算の中で建築物の内容を企画し、アンケートや説明会、ワークショップ等を通じて地域住民等の意見を聴き、設計条件を整理している事例が多く見られます。また、大規模な建築物や重要な建築物の場合は有識者等で構成される委員会で意見を聞き、設計条件をまとめる事例も見られます。

一方で公共建築物の設計条件整理の課題は、①全ての住民等の意見を聞く物理的・時間的余裕がないこと、②多数の住民の中から抽出した者の意見に頼らざるを得ず、抽出方法は行政が設定するため、フィルターを通した「地域の意見」となっていること、の２点と考えます。

このような課題を解決するため、意見を聞く人数を増やす事例や、ワークショップ、説明会を複数回開催など、各自治体が地域の特性に応じた意見の聴取方法で取り組んでいます。

ラウンドテーブルの特徴

仙台ラウンドテーブル形式は、次の特徴があると考えます。

①市民、専門家による意見聴取の場

各回のテーマ設定、登壇者選定、発言の形式などは全て建築設計３団体の主体的な企画提案によるものです。これは東日本大震災の教訓から皆で考えることの大切さ、そして仙台市民に市民協働の素地があったからこそ開催できたのではないかと考えます。

②検討委員会委員の情報収集・情報共有の場

基本計画の策定にあたり本市も有識者等による検討委員会を設置しています。

ラウンドテーブルを開催し、検討委員が参加することで活動支援のひとつになると考えました。これにより情報収集や専門家としての共通認識の形成、新たな視点の発見の場として機能できたと考えます。

③ゴールや結論を求めない

各テーブルに結論は求めないため、意見の全体像から様々な方向性を見つけ出すことができると考えます。

ラウンドテーブルの活動を通して、従来の行政手法にとらわれず、仙台の地域性をふまえた意見聴取の場を設けることができました。今後は頂いた貴重なご意見をもとに「みんなの市役所（シティホール）」の実現を目指し設計に活かしてまいります。

仙台市役所財政局　本庁舎建替準備室
　室長　菅原大助

0.2

論考

小林淑子

一般社団法人　宮城県建築士会

ラウンドテーブルの面白いところは、

・建築に関わる三団体が、テーブルセッティングし、多方面の方々を招き、テーマについて自由に意見を出し合い、話し合ってもらうところ

・多方面の方々による討議が多岐にわたり、微妙に違うニュアンスで語られ、発展していくが、他者の意見や行政に対しての否定や批判はなく、結論は出さないところだと、思う。

ラウンドテーブルでちょっと大変だったところは、

・担当したテーブル討議をまとめなければならなかった時

・140分のかなり濃い討議内容の、深いもの、軽く発せられたもの、意見の強弱をフラットにして、さらに集約しなければならなかった時と、実感した。

ラウンドテーブルについて建築士会は、主催ではなく、後援という立場になったが、

・誰もが一市民（県民）として自由に意見を出すことのできる、テーブルをセッティングし、多様な意見を共有することは、地域社会に関わる建築士として、意義がある

・あらゆる方面の多様な意見を聞くことは、刺激的でさらなる思考に繋がると、魅力的なことがたくさんあった。

今後もシティホール、大規模ホール、文化芸術施設、といったラウンドテーブルが開催されるかもしれない。そんな単語が目に入ったら、建築士の方には是非、ご参加頂きたい。

（一社）宮城県建築士会　小林淑子

※建築に関わる三団体
（公社）日本建築家協会東北支部宮城地域会、（一社）宮城県建築士事務所協会、（一社）宮城県建築士会

0.3

論考

石原修治

一般社団法人　宮城県建築士事務所協会

「建築家の責任」

私たち建築家は「建築士」としての資格で仕事をしています。一般に「士業」と称して弁護士や司法書士と同じで専門性の高い国家資格で建築物の設計・監理を独占的に請け負って生業としています。その業務は建物の安全性や、機能性、衛生面のみならず街づくりや、環境への配慮、景観、都市計画まで幅広く人々の生活に大きな影響を与えることからその社会的な責任は大きいものと考えています。また建築物は一度作ってしまうと50年以上存在し続ける、歴史を刻むものであることも考えると未来への責任があるとも考えます。

その建築を生業とする団体が3つあります。「建築士会」「建築士事務所協会」「建築家協会」それぞれに設立の趣旨が異なりますが、お互いに切磋琢磨して建築を文化に高めるべき、社会の質を上げるために日々活動をしています。

東日本大震災の時もこの3団体を含めた建築関係者が行政に協力をしていち早く建物の応急危険度判定に出動して各地からの応援もいただき、安全、要注意、危険の判断をして震災の2次災害を防ぐべく活動しました。そのあとも国の復興補助を受けるために公共施設の被災度判定に奔走いたしました。私たちに与えられた社会的責任を全うできたと考えています。

今回の「仙台ラウンドテーブル」もその延長線上にあります。

建築の作り方も近年大きく変わりました。公共事業をつかさどる行政も変わり、納税者である市民の意識も変わってきています。「仙台市役所の建て替え」という仙台市民にとってとても大きな買い物であり、日々の生活に密着する施設の計画に建築の専門家として役に立てることは何かあるのではないかとの考えから行政の方と一緒に私たち建築3団体が企画いたしました。

宮城県建築士事務所協会　石原修治

0.4

論考

阿部元希

公益社団法人日本建築家協会

仙台ラウンドテーブル（以下ＳＲＴ）の目的等は既に他の部分で説明があるかと思うので、ここではその発足の一部背景についてお伝えしたい。

ＳＲＴの協働の背景には、震災復興シンポジウム『みやぎボイス』（以下ＭＶ）での協働の経験が活かされている。ラウンドテーブル形式の討論スタイルもそうなのだが、その運営理念の根幹に、『団体ごとの垣根を超えた企画会議』と、『多様な主体』が同時並行的に『対話形式の議論を交わす』シンポジウムというところに特色があると考えている。

始まりは２０１３年。東日本大震災から２年が経過したころ、目の前の問題解決に重きを置く現場に対して、未来につながる課題解決型復興、さらにはまちづくりに向けた多様な主体による協働・共創のプラットフォーム構築の大切さを痛感した建築・まちづくりの専門家らの有志により立ち上がったＭＶ。シンポジウムの参加者は、被災者、漁業者、農家、遠方から乗り込んできたボランティア、中間支援関係者、福祉関連支援者、土木技術者や建築家のような専門家、学識経験者、行政職員など、復興に取り組んでいるさまざまな立場の方々が一同に介し、お互いの意見を同時にぶつけ合うという混沌とした場であり、傾聴を強要させられる雑踏の中に放り込まれたかのような空気感は、多種多様な主体がそこに存在し、また意見や論点も混沌としているのだということがまさに表現されており、今もなお継続し開催している。

復興と建築まちづくりは地域ごとに様相が異なるため、平時からの継続的な「地域それぞれの地域経営の視点と活動」が大切だと言える。そこでは、制度や前例では応えきれない「隙間を埋め」「一人ひとりの特徴を知りそれに応える」ために、互いの「顔」を知り、地域社会の「全体像」を知る、その場となる体制・システム作りが重要であると考えている。

少子高齢化・人口減少社会での復興・建築まちづくりの進め方を見つけるために、震災後多くの復興計画でうたわれた「創造的復興」実現のために、関係する人と組織の「読解力」「連携性」を高めることができる協働の場がその役割を担っている。

そうした中で培われた、「連携と協働のプラットフォーム」と「経験と知見のアーカイブ」を「ＭＶ型プラットフォームの財産」とするならば、震災復興の場のみならず、次なる被災地を含めた、平時からの建築まちづくり活動にも大きく貢献できるものと確信している。まさに、仙台市役所本庁舎建て替えという、仙台市中心部にあって、建築、まちづくり、交通、経済、文化、歴史・・・地域に対し多大な影響を与える本事業に対し、多種多様な主体が、顔が見える場でそれぞれの意見を発することができ、その一方別の主張に対しても傾聴しなければならないという『対話型のＳＲＴ』の成果が、この建替事業の理念の根幹を担うことができたならば、被災地たる政令指定都市として、ひとつの立ち位置を示すことができたと言えるのではないだろうかと考えている。

（ここで記述したＭＶにかかる内容は、みやぎボイス２０１９にかかるクラウドファンディングでの公表内容を加筆、編纂したものである）

第１回仙台ラウンドテーブル
市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替シンポジウム

「市役所（シティホール）を考える」

市役所建替えプロジェクトの意味と意義についてみんなで考える

せんだいメディアテーク　１Ｆオープンスクエア
2018 年 11 月 26 日［月］

13：00	挨拶・趣旨説明
13：10	前半　ラウンドテーブル
15：40	休憩
16：00	後半　ラウンドテーブル
18：30	閉会挨拶
18：45	閉会

仙台ラウンドテーブル

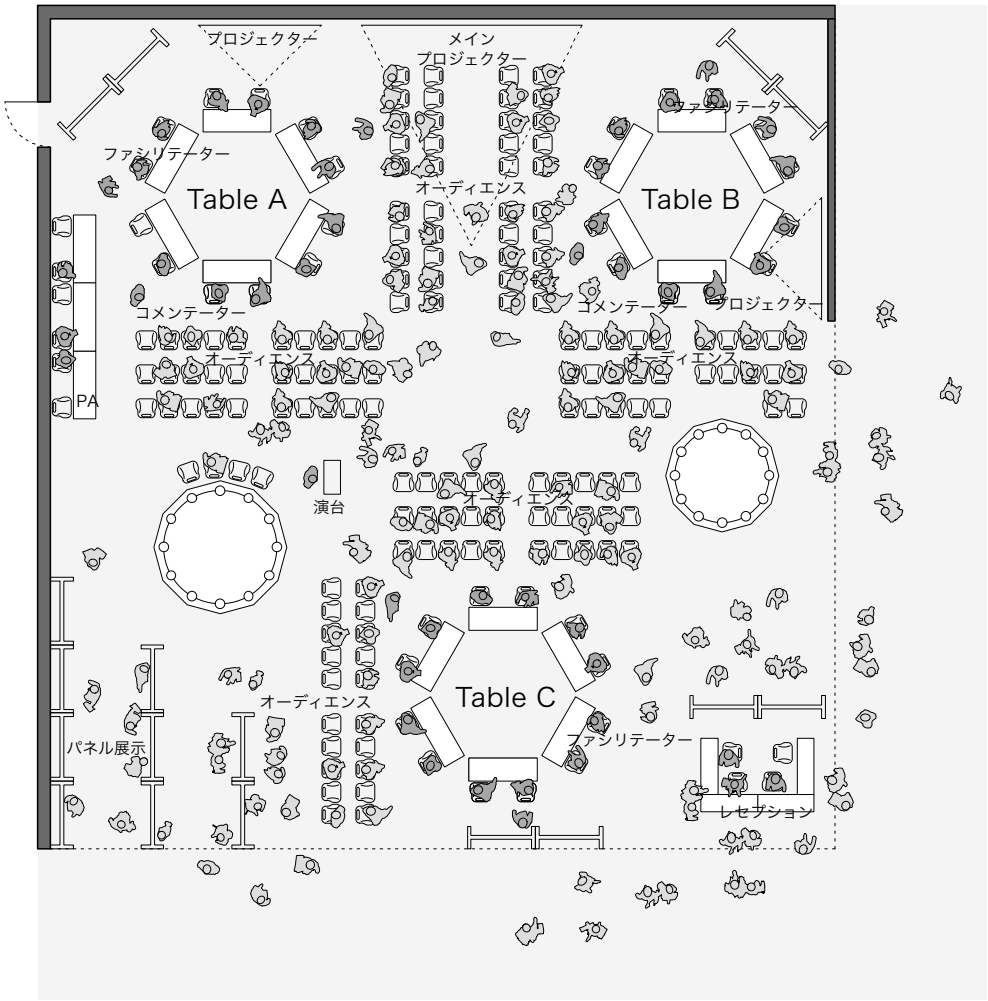
仙台ラウンドテーブルは、建築設計を生業とする地域の三団体と仙台市が協働して立ち上げた「市民のための社会づくり」を担うシンポジウムです。私たちは誰もが、一般的に言う市民であると同時に、様々な専門分野の専門家として日々働いています。バスの運転手は公共交通に関しての専門家でありますし、福祉施設で働く方はその分野の課題を良く知り、公務員は行政手続きの専門家です。また、主婦の方々は教育問題や介護の問題を広く扱っています。私たちはそういった専門スキルを学び、それを業務として社会に参加し対価を得て生活を送っています。
百年前であればいざ知らず現代では、様々な分野が高度に専門化され、専門知識が無ければ、その専門の方に通用するまともな意見が出づらい状況にあると思います。よく耳にする「素人に意見を求めてもまともな意見が出ない」という行政側のボヤキの原因はここにあります。行政職員はどんどん高度に専門化し、しかし一方で市民は専門性を持たされない市民でしかありません。
仙台ラウンドテーブルは、市民でもある専門家が中心となって、専門知識を持って行政側の計画を分かり易い市民の言葉に変換し、また、市民の純粋な言葉に専門的な位置付けを与えて行政側に伝えます。普段は専門知識を業務として行って対価を得ている専門家が、未来の地域づくりのために、業務受注以外の社会参加を行う取り組みです。この「仙台市役所本庁舎建替え」については、私たち建築設計の専門家が中心となって担いますが、医療関係のことであれば医療従事者が中心になり、教育関係の課題であればその専門家が中心となってラウンドテーブルを行えば良いと考えています。
この仙台ラウンドテーブルは、何かを決める会ではありません。個人の意見はどうしても偏りますが、しかし、議論を積み重ねることにより「意見の広がりはどこからどこまであり、関心の中心はどこにあるか」が共有され、ひとつのぼんやりした共通認識が形成されます。こうした共通認識がみんなで共有されることが仙台ラウンドテーブルの大きな成果だと考えています。
時代の転換点とも言える、東日本大震災の復興を経験した私たちの社会は、震災復興の現場での合意形成の重要性とそれが社会運営の原動力となることを思い知りました。また、そういったみんなで考え、共同体を運営する力こそが「東北らしい力」であることを強く認識しました。それが、仙台ラウンドテーブルの出発点でもあります。
こうしたラウンドテーブル的合意形成の試みを「仙台方式」として、仙台市の未来をつくる様々なプロジェクトに広げてゆければと、運営に参加した専門家はみんなで考えています。

JIA 宮城地域会　手島浩之

1.0 前半ラウンドテーブル

前半ラウンドテーブルテーマ

市民の視点から見た市役所建替えプロジェクトの意味と意義



せんだいメディアテーク１F ／オープンスクエア

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

1.1 Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

文責：　JIA 宮城地域会
佐伯裕武、阿部元希

市役所本庁舎は、現代社会において最も中心的な公共施設だと言えます。そのような施設に相応しい計画プロセスとはどういったものでしょうか？社会における理想的なプロセスの在り方と、現実的に選択可能なプロセスの在り方の間には大きな隔たりがあるかもしれません。その両面を踏まえ、計画上の様々な段階や完成後の運営の視点から、百万人の中心的都市空間にふさわしい計画プロセスとは何かを考えます。

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

1.2 Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

文責：　宮城県建築士事務所協会
石原修治、佐々木昌喜、大宮利一郎

百万都市の市役所本庁舎とは、市民にとってどのような存在なのでしょうか？窓口業務は区役所に分担され、市民の日常的な必要性からは切り離され、極端に言えば霞が関にあるような官庁ビルでしかないとも言えます。市民の誇りとなり、百万都市の象徴でありアイデンテティとなる「シティホール」とはいったいどのようなものなのでしょうか？

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

1.3 Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

文責：　宮城県建築士会
高橋直子、小林淑子

都市仙台では、定禅寺通・勾当台エリアを中心に通年を通して様々な祭りやイベントが行われています。その中で人々が集まる広場や観光のランドマークともなる市役所の在り方は密接な関係があると思います。そこには、日々の憩いの場の在り方、市民イベントや大規模な屋外フェスティバルの運営、伝統的な祭りの継続、スポーツや優勝パレードなどの記念式典など、日々の街の風景を創り出すための様々な関りが考えられます。これらの具体的な場面を通して、イベントの街仙台の現状を共有しつつ新しい市庁舎への期待と課題を拾い出していきたいと思います。

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

キーワード

□今の基本構想の中に都市ビジョンめいたものがない。
□都市ビジョンや都市構想は、どうやれば市民がつくれるのか。
□議会の動きが見えない。市民の前で議会の立場を明確に示すべき。
□行政だけに行政を担わせる限界。
□基本構想でも基本計画でも市民は決まってからしか意見が言えない。
□相手の顔が見えない中でパブコメは、中身があるものにならない。

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

キーワード

□百万都市の象徴でアイデンティティーとなる「シティーホール」
□用がなくても足を運ぶ、ここに行けば何かがある、出会いのある場
□市民の課題解決、ナビゲートしてくれる場
□コミュニティーができるサロンとしての機能
□授乳室、だれでもトイレ、キッズスペース誰でも使える市役所
□継続的な賑わいの「まちづくりセンター」や「シティーギャラリー」
□ガラス張りで、新しい議会、仙台発の試み
□仙台出身者の「スポーツミュージアム」魅力的な観光資源
□公共サービスを市役所だけで担う時代ではない、民間の力の活用、稼ぐこと
□今までの公共施設を作るプロセスではないものへの挑戦

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

キーワード

□都市区間としての広場の役割
□広場の管理・運営を企画段階から取り込む
□情報の集積場としてのハブの役割を持たせた広場
□観光客・外国人にも開かれた広場
□広場を超える広場
□市役所と広場の連携と、貫通する道路との関係
□すでに広場を活用している仙台の、新たなステップアップとして
□稼ぐ施設としての広場、運営、付帯設備

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

企画
手島浩之
JIA 宮城地域会

企画・ファシリテータ補佐
佐伯裕武
JIA 宮城地域会

企画・ファシリテータ補佐
阿部元希
JIA 宮城地域会

ファシリテータ補佐
吉田和人
JIA 宮城地域会

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

企画・ファシリテータ補佐
川口裕子
宮城県建築士事務所協会

企画・ファシリテータ補佐
奥山和典
宮城県建築士事務所協会

企画
氏家清一
宮城県建築士事務所協会

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

企画・ファシリテータ補佐
高橋直子
宮城県建築士会

企画・ファシリテータ補佐
小林淑子
宮城県建築士会

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

ファシリテータ
渡辺一馬
NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター代表理事

登壇
小野田泰明
東北大学工学部建築・社会環境工学科

登壇
三部佳英
（一財）宮城県建築住宅センター顧問

登壇
阿部重憲
(株) 地域計画研究所／都市プランナー

登壇
佐藤飛鳥
東北工業大学ライフデザイン学部経営コミュニケーション学科

登壇
青木ユカリ
NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター常務理事事務局長

登壇
小貫勅子
東北大学キャンパスデザイン室

登壇
松本純一郎
JIA 宮城地域会

登壇
渡邉宏
JIA 宮城地域会

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

ファシリテータ
榊原進
NPO 法人 都市デザインワークス

登壇
杉山丞
東北大学キャンパスデザイン室特任教授

登壇
平賀ノブ
（一社）芭蕉の辻まちづくりの会 代表理事

登壇
舛岡和夫
東北工業大学名誉教授

登壇
佐藤慎也
山形大学工学部建築デザイン学科　教授

登壇
内田有美
ＮＰＯ法人イコールネット仙台　理事

登壇
澤口司
(株) スイコー代表 / 泉青年会議所 OB

登壇
横山英子
あとりえ横山代表 / 仙台青年会議所 OB

登壇
竹下小百合
Venus Club 仙台支部代表

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

ファシリテータ
坂口大洋
仙台高等専門学校建築デザイン学科

登壇
石塚直樹
（一社）みやぎ連携復興センター

登壇
山田文雄
(株) 都市デザイン　顧問（仙台担当）

登壇
本郷紘一
せんだいディベロップメントコミッション (株)

登壇
大澤隆夫
音楽の力による復興センター東北　代表理事

登壇
平岡善浩
宮城大学事業構想学群　教授

登壇
武山祐樹
仙台青年会議所 2019 年度理事長予定者

登壇
武田均
仙台市スポーツ振興事業団常務理事

登壇
清本多恵子
宮城県建築士会 / 仙臺すずめ踊り連盟

登壇
高橋清秋
宮城県建築士事務所協会

登壇（後半のみ）
伊藤清市
NPO 仙台バリアフリーツアーセンター理事長

Table A 【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

渡辺（一）：
テーブルＡを司会進行いたしますせんだい・みやぎNPOセンターの渡辺でございます。私、目も悪ければ、実は耳も悪くて、僕自身そう言っている割に早口になってしまいますが、なるべく早口にならないようにしますので、皆様もできればゆっくりお話しいただけると大変助かりますので、宜しくお願い致します。
本日のテーブルＡのテーマというのが、「市民参加・市民協働の視点から、計画のプロセスと運営を考える」という題目でございます。先ほどの司会進行役の方からも、代表の挨拶からもありましたとおり、市民協働とか、市民に開くということとして、まさにこの会そのものがそういう観点で行われておりますし、その中でもこのテーブルがまさにその内容そのものを話し合うテーブルになっていて、その場を私みたいな門外漢がやる状況です。建築士でも建築家でもありません。恐らく、本日パネラーとしてお座りになっている大多数の方とか、後ろで聞いていただいている皆さんからすると、この月曜日の午後という時間にここに来るということは、関係者しかいないわけですよね。普通の市民は基本いないと思いますし、少しまどろっこしいことをこちらから何回も聞いたりするかもしれませんが、そこはご了承いただければと思います。
そういった方には、「もう言わなくたって当たり前じゃん」というところの説明をしていただければと思います。スライドに出しておりますが、仙台市役所の本庁舎の建替基本構想の概要は、皆様のお手元にもある資料を今拡大してお見せして正面にてお見せしております。今は、基本構想まで決まったところのようです。基本構想と基本計画の何が違うかすらあまりよくわかってはおりませんが、要は何かこの辺にこう建てて、日付はこれぐらいまでにやるよというぐらいまではどうやら決まっていますと。別な場所に移すことはなくて、現地でつくりますよぐらいまでは決まっており、何とでも読めるコンセプトはもうできているという状況でしょうか。
新本庁舎のコンセプトと書いてありますが、共通理念としては、「市民の生活や活動を支える市民中心の市役所の機能を強化し、また、市民協働の力や杜の都の魅力といった仙台らしさを市民が感じることができる環境整備をするとともに、過去の伝統・経験を現在から未来へとつなぐ役割を担わせるため」、ということになっていますが、僕は行政文書がよくわからなくて、何を言っているかが

Table B 【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

榊原：
改めまして、皆さんこんにちは。唯一ここだけぶっつけ本番になっておりまして、事前に打ち合わせなしで、ちょっと簡単に触れたいなというふうに思います。このテーブルＢですが、今回そもそもの「市役所を考える」と書いて、振り仮名で「シティホール」と読ませているというところから、普通の市役所ではなくて、「シティホール」というのがすごくキーワードになっているのじゃないかなというふうに思います。その中で、【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」というものを、ここのグループでは考えたいなというふうに思います。先ほど竹下さんからも、「私、専門家ではないので」って、市民の目線からどんどん言っていただければ構わないかなというふうに思います。
企画の趣旨、先ほど司会のほうからもありましたが、「百万都市の市役所本庁舎とは、市民にとってどのような存在なのでしょうか？窓口業務は区役所に分担され、市民の日常的な必要性からは切り離され、極端に言えば霞が関にあるような官庁ビルでしかないとも言えます。市民の誇りとなり、百万都市の象徴であり、アイデンティティとなる「シティホール」とはいったいどのようなものなのでしょうか？」というような問いかけをいただいております。
単なる本庁舎建て替えではなくて、シティホールをつくるという視点から議論をしていただきたいというふうに思っています。シティホールとは何かを考えて、多分ここの場で、2時間半で長丁場ではあるのですが、結論が出るとは思えませんので、何か大切な視点が複数あぶり出されればいいのかなというふうに思っております。
それで、今日８人おりまして、私ファシリテーターの榊原で、一応記録補佐で。

川口：
宮城県建築士事務所協会の川口と申します。補佐をやります。よろしくお願いします。

榊原：
一応この２人で進めますが、あと周りにもサポートがいますので、適時お願いすることになると思います。よろしくお願いいたします。
この８人で2時間半ということは、僕の司会進行を含めて１人15分、大体持ち時間は長くて15分ですので、15分は長いようで意外に短

Table C 【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

１．テーブルの主旨と自己紹介と各自の活動から見える様々な意見

坂口：
改めまして、仙台高等専門学校の坂口と申します。よろしくお願いします。
まず全体の進行について話します。一応、前半は３時40分までとなっております。約２時間半弱、皆さんと進めていこうと思っております。先ほどお話ししましたように、最初に、皆さんがどんな方かということを共有するために、お一人２～３分程度で自己紹介してください。もし可能であれば、文化やスポーツのようなハレの場としての話と市役所の基本計画にあるような日常的な広場としてのケの場としての話、日常と非日常の両面の話をしていただければと思います。前半は、市役所周辺の定禅寺通りに限らず、仙台市全体のさまざまなアクテティビティの課題まで、共有できればと思っています。なので、まず自己紹介をしていただいた後に、もう一回一巡してお話しいただき、全体的な課題と現在の状況を共有したいと思います。その後、少し整理をした上で、これからできる市役所はこういうものであったら良いだとか、あるいは、これから市役所を考えるときに、現状のアクティビティからするとこんな切り口があるのではないかというようなアイデアを出していければ、と思います。
最初に、企画担当の高橋さんから、そもそもこの場をどういうふうに設定されているかについて、ご説明いただこうと思います。

高橋（直）：
改めまして、高橋です。どうぞよろしくお願いいたします。
私は、仙台市役所本庁舎建替基本構想検討委員会の委員をやっておりました。基本構想では、昨年の今ごろから６回ほど出席しまして、いろいろな意見を言わせていただきました。今回の基本計画の大まかな目標として、配置を決めるということがあります。私は、基本構想の検討委員会で、市役所の反対側の勾当台公園まで含んだ形で考えてほしいと申し上げていたのですが、他の委員の方やいろいろな方からの意見を聞きますと、市民広場でイベン

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

よくわかりません。要するに全部やりますと書いているようなのですが、本当に全部やれるのかという疑問と、僕が理解している本庁舎というのは、本庁舎であればあるほど、市民から意見をもらうのは面倒くさいのではないかと。自分たちで決めたいものではないか、本庁舎でもあり、市議会棟があるわけですから、そこで決めたいのではと思います。計画する人たちがいて、決めるべき人がいて、その上で運営すればいい状況なのに、市民に開かれているという状況は面倒くさいのではないかと思います。「こういうことをしましょうよ」とか、「これじゃだめなんじゃないですか」という意見が出てしまうと、計画が滞ってしまうリスクもあるかと思います。しかし、ここでは開こうと言っている。ではその開こうという市役所本庁舎の建替えは、開かれているのでしょうか、ということについてお話が出来ればと重います。

皆さんからまず一度自己紹介を兼ねて、ご自身がどのようなことをしているのかということと、初めから大変面倒くさいことをお聞きしますが、こういったいわゆる行政手続上の設計プロセスを市民から見た場合、これでいいんだっけということについて、ご自身が思っていること、「いや、これでいいんだよ」と、「むしろ聞き過ぎなくらいだ」なのかとか、「こういうときにこういうことをやったほうがいいんじゃないか」とか、もしくは「ほかの街のこういう公共施設はこういうふうなプロセスで決めたらしいよ」とかという、そういう情報提供も含めていただければと思います。順番にやると緊張感がなくなるということはよく承知をしておりますので、緊張感を出すためにランダムにお願いしたいと思います。渡邉さんから、自己紹介とこの観点について思うところを少し述べていただければと思います。

渡邉：
最初は一番言いやすいと思うので言いますが、私もこういう公共建築を長くやっているので、先ほど一馬さんがなかなかよくわからないというお話をされていたけれども、ここの中では小野田先生の次ぐらいにこういう進め方、プロセスを体感しているかなと思います。渡邉宏と言います。出身は茨城県ですが、1972年に仙台に来ました。ですから間もなく半世紀になります。庁舎建替の話が出ている今、私は60半ばです。多分この建物ができるのは、予定でいくと10年後ぐらい。ということは、70半ばで後期高齢者

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

いので、自分が15分ということを少し念頭に置いて話していただければなというふうに思います。

大きく、ここのグループは前半と後半に分けたいと思っています。前半の部分では、自己紹介、今日来ている方たちの自己紹介ですが、その自己紹介も、ご自身の活動と、あと今の市役所にどのくらいの頻度でどんな用事で来るか、来ないなら来ないでいいです。「もう何年か前に来たことがある」でも何でもいいので、どのくらいの頻度で来るのか。例えば、「私、市役所の裏に事務所があるので毎日のように市役所を通っています。正面玄関を通って、裏口から抜けていくというのが通勤コースになっております」とか。

その後に、もうずばり「市民のためのシティホールとは何か」という問いが今回あるので、それをまず皆さんに拡散しないように、ここにキーワードで「私が考える市民のためのシティホールはこれです」というものをちょっと書いていただいて、それを補足説明していただくということにします。

後半は、ちょっと休憩を挟んで、そこから論点を深めたいなと思います、皆さんが休憩している間に論点を整理して、その後その論点を深めるというようなことで、大体2時間半終わるかなというふうに思っております。何か進め方で質問ありますか、大丈夫ですか。

マイクは2本ありまして、今、内田さんと舛岡さんの間にあるのが1本と、平賀さんと杉山先生のところにあるのが1本で、右側と左側で1本ずつを共有するような形ですので、譲り合ってお願いいたします。

それでは、自己紹介をどこから始めますか。では、内田さんからいいですか。ご自身の所属と、どんな活動をされているかということと、今の市役所にどのぐらいの頻度で、どんな用事で来るのか来ないのかというのをお願いいたします。大体2分ぐらいありますので、ここは。

内田：
今日はよろしくお願いします。「ＮＰＯ法人イコールネット仙台」で活動しております内田有美といいます。真ん中あたりにいるので、自分からだと全然思っていなかったのでちょっと今緊張しているんですけれども。

イコールネット仙台は、男女共同参画社会をつくるということを目的に活動しているＮＰＯ法人になっています。震災後は、女性の困難の調査ですとか、そういう女性たちの支援、あとほかにも、

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

トをやるということが非常に重要だということを、ひしひしと感じることが多々ありました。市役所の配置を考えるにあたって、市民広場・勾当台公園市民広場との関連がものすごく大きいということを実感しました。市民広場のみならず、定禅寺通も含めた広い意味でのランドスケープとして考えますと、広場を使ったイベントのような、今まで培ってきたことが、仙台にとってとても重要なのではないかと思っています。

今回、こちらにお集まりいただいた皆様の中には、イベントをされている方も多いので、具体的な問題点や、市役所を建て替えることによる発展性について話していただき、市役所建て替えの提案をしていく場になれば、というふうに考えております。坂口先生ともお話ししたのですが、具体的な部分を掘り起こしていって、皆さんが常に考えてらっしゃる疑問点や改善点などを話していただいて、2回、3回のラウンドテーブルへつなげ、市役所に対して、具体的な提案ができればと思っております。

坂口：
高橋さん、ありがとうございました。

今、高橋さんからお話いただいたことに2つだけ加えますと、市役所自体は仙台市の建物ですが、このテーブルには観光に関わっている方もおられることから、仙台市以外の人にとって市庁舎なりシティホールがどうあるべきかという意見も、いろいろ出てくると思います。その発展を考えていくと、文化のイベントでは、今日は大澤さんが来られていますが、仙台市は楽都言われるように、せんくらに代表されるような外を使ったいろいろなイベントが行われております。スポーツのイベントでは、武田さんが来られていますけれども、楽天が優勝すると優勝パレードは市庁舎になったりします。そういった意味で、もう少し広域的な市役所の役割を考えられるのでは、というのが1点です。

もう一つは、さきほど高橋さんがおっしゃったように、市役所単体の中にイベントホールをつくることはできない状況で、市役所プラスアルファの機能でどういったことができるかを考えることが、広がりのテーマとしては重要であると思っています。具体的には、市民広場や勾当台公園がそれにあたるかも知れません。市

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

に入ります。そういうときに、「あのときこういうことがあったな」というようなことで、自分なりに検証をしながら楽しめる、そういうような本庁舎です。ただ、本庁舎というのはかなり機能的な施設だから、本庁舎自身にコミットするのは難しいのかなとは思っていますが、今まで建築の設計をメインにやってきて、さらに手島さんや小野田先生、松本さんもいらっしゃるけれども、2011年の震災の後に、ご存じの方もいらっしゃるとは思いますが、「みやぎボイス」という震災復興まちづくりに直結する、プラットフォームと言えるシンポジウムを毎年開催しています。そのような実務の経験と公的な団体での活動を通して、何かお役に立てればなということで今日は参りました。
先ほどの一馬さんの質問で、今の進め方についてどう思うかということですが、端的に言うと、まちづくり、ハードが先行し過ぎており、基本構想を見られた方も大体そうだとは思いますが、今（本庁舎には）こういう課題がありますと提示されている。先ほどのコンセプトもそうですよね。これをいかに解決するかというところに重点が置かれていて、何のために、誰のためにつくるのかというところがかなり希薄だし、もう一つは、本日は議会の関係で市の方が来られていないという話だけれども、やはりリーダー、リーダーというのは市長だけじゃなくて、この事業に何らかの利害関係を持つリーダーの人たちのコミットが全然見えていないというのも言えます。そこは非常に問題かなと思っているので、これを機会にこの辺りが改善されていける端緒になればいいのかなと思います。以上です。

渡辺（一）：
ありがとうございます。今の渡邉さんのお話を伺って、僕も「あ、なるほどな」と、違和感があったのは多分そこなんだろうということで少し腑に落ちました。あれだけ危なそうな施設で、直下型地震来ていないからまだいいものの、直下型地震が来たら直ぐに壊れてしまって、余計に仙台市の都市機能が麻痺する時間が長くなるという自明の理にもかかわらず、何年放っておいてるんだという思いもあります。一市民からするとですね。
一方、さあつくろうとなった時に出てきている基本構想は、渡邉さんが仰ったように積み残してきた課題を全部ここに詰め込もうとしているようにも見えるけれども、これが解決されたらどんな

Table B
【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

男女共同参画推進のために社会で必要とされていることを推進しています。私自身も、イコールネット仙台が、委託を受けている仙台市男女共同参画推進センターエルパーク仙台の市民活動スペースで11年ほど働かせていただいています。
市役所にどのぐらいの頻度で行くかということなんですけれども、済みません、ほぼ行かないです。「市民のへや」とかに少し伺ったりということはあるんですけれども、なかなか市役所に行く業務もなかったりするので、余り行っていないです。今日はよろしくお願いします。（拍手）

榊原：
ちなみに、最後に行ったのはいつとかって覚えていますか。

内田：
多分震災の前かな。

榊原：
それでは、もう７年、８年。

内田：
補強工事した後に、「あっ、ここに補強が入ったんだ」と思って、私自身、余り仙台市の人間ではないので。

榊原：
舛岡先生お願いします。

舛岡：
舛岡和夫といいます。私は現在仙台市民ではなくて、南のほうの亘理郡山元町に住んでおります。また戻りました。実は、東日本大震災で我が家も流れまして、残った家を、２階だけ残ったので、それを丘のほうに移して、みんなの反対にめげず、私今ひとり住んでおりますが、かみさんは今上杉にお世話になっております。
私も一応建築出身なんですが、民家とか古い集落を調査していて、古い民家がどんどんなくなる、どうしたら残せるかということで、一つは自分で住んでみること、もう一つは岩手県の大野村が有名なんですが、北海道・東北の農山村の地域の振興、産業をいかに、地域の資源をいかに生かして生活できるかという実践をずっと重ねてきております。

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

庁舎のこういった場プラスアルファ機能によって、例えば羽生選手が優勝するとこうなるかもしれないとか、あるいは日常的に、本郷さんが今日来られていますけれども、あそこのイベントはこうなるのではないかとか、市庁舎のあり方自体は、外から変えられる部分も結構あるかと思います。
以上の２点が、今日の議論から、ヒントとして出てくるといいなと思っております。
では、皆さんにまず自己紹介していただきます。３分程度で、これまでのいろいろな軌跡も含めて今どういった活動をされているのかお話しください。その後、そうした活動をしている立場から見た問題点や、今現在行われている市庁舎の建て替え計画について、特にこういったことを今日話してみたいというような投げかけなど、お話しいただければと思います。よろしくお願いします。

武田：
スポーツ振興事業団の武田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。
私は役所の職員をやめてスポーツ振興事業団にいますが、仙台市でスポーツを20年以上担当してまいりました。主にスポーツイベントの写真を持ってきましたので、ご紹介をさせていただきます。
第28回になる仙台国際ハーフマラソン大会についてご説明します。これは前日と当日の写真です。こちらは、広場を使いまして高橋尚子さんのトークショーをしているところです。これが、トークショーに集まっていただいた方です。こういう形で皆さんに走る楽しさをお話しいただいています。これらは、坂口先生からお話しがあったような、ランナーだけではなく、市民・県民、全国から応援に来る方も含めて対象にした広場の使い方です。
こちらは、絆ということで、東北の祭りとして認められたお祭りを、ここで披露するということで使っています。ステージ活用です。
これは先月開催されました、杜の都全日本大学女子駅伝になります。これも仙台でもう14年になります。もともと大阪でやっていたものを、仙台に誘致した大会でして、全国26校、地元は２校参加して開催されているものです。ゴールは市民広場です。残間さんの角から曲がってきて70メーター走るとゴールします。ゴール

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

街になるのか、ということはどうやら書いていないらしいぞと。たまたま偶然になっているのもかもしれませんが、今、仙台市が次の10年の総合計画をつくり始めているわけですね、2年間かけて。先日その市民向けのキックオフがありましたが、結局そこでも仙台市として10年後どういう街にしますかということはまだうたわれていないのです。どうするかをみんなで考えようと言ってはいますが、10年スパンの目標がない中で、そこから30年間か40年間使うためのものはなかなかつくれないのかもしれないなと、今お話を伺い感じたところです。

松本：
松本純一郎です。
仙台市内で設計事務所を主催しておりまして、今回の主催団体の一つである日本建築家協会東北支部の宮城地域会に属して社会貢献活動を行っています。それと同時に、10年ほど前から「建築まちづくり基本法」というのを制定する運動をしておりまして、建築とまちづくりが一体化するような法律ができないかということで、東京大学の神田先生らと一緒にといいますか、その指導のもとにやっております。建築や街は文化的なものであって、公共的なものであるということを基本理念にしておりまして、やはり地域の風土とか歴史とか、そういったものが文化だということで、加えてやはり住民の意思を最大限に尊重した建築やまちづくりをこれから行っていく時代だということで、活動をしております。
また、東日本大震災では、小野田先生にも大変お世話になりましたが、集団移転の計画に参加したり、公的な災害公営住宅の住民のワークショップ等を先生のご指導のもとにやらせていただいたりという経験もしております。また、ある町の復興支援まちづくりの中で、小さな施設ですけれども、その運営者が最初から決まっていたという公共建築をさせていただいて、やはり最初からその使う方の考えが入ってくるということが非常に理想的な形の空間ができるといいますか、非常にいいものができたという経験をしております。
今回の市庁舎といいますと、非常に難しいと思います。今まで私が携わってきたようなまちづくりなどですと、いろいろな市民の意見なども入れやすいと言えます。具体的な話が出てきやすい。今回のような百万都市仙台の象徴としての市庁舎ということを考

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホール」とは何か」を考える

市役所は、後ほど配らせていただきますが、私、「宮城地域自治研究所」の理事、ここにも名誉教授の吉田先生いますが、これを配って市役所にも申し入れをいたしました。ですから今年になって1回来ました。以上です。（拍手）

榊原：
マイクを渡している間に平賀さん。

平賀：
皆さんこんにちは、平賀と申します。前、商工会議所女性会の会長をいたしまして、今は「一般社団法人まちづくりの会」の代表ということでやらせていただいております。ずっと生まれから、オギャーと生まれたのは元寺小路でございますので、家具の街ですね、そこで生まれまして、ずっと仙台なものですから、仙台が大好きな人間の一人です。
それで、歴史をこのごろ考えて、定禅寺もいいんですけれども、歴史的に大事なところはどこかなと考えて、今、芭蕉の辻を中心に、市民とともにいかに歴史を残そうかと。伊達政宗が、あそこ奥州街道の始まりなものですから、そういったことも知らない人がたくさんいらっしゃるので、それをきちんと置いていきたいなという思いで、みんなと一緒に立ち上げたわけでございます。
藤崎から日銀のところまでが予算に入っていなかったんですけれども、市民の声で仙台市から予算をもぎ取りまして、その道路をつくり上げることに成功しているところです。これから着工なんですけれども、でき上がるのは今から3年後ぐらいだと思いますけれども、それまでにどういう街にするかということで、今、市民とともにまちづくりを一生懸命やっている次第でございます。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

榊原：
平賀さんにどのくらいの頻度か聞いていなかったので。

平賀：
頻度は50回を下らないと思います。もういろいろな方に。

杉山：
東北大の杉山と申します。本業は主に大学のキャンパス計画に携わっています。

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

でそのまま入ってこのステージに向かいます。
これは表彰式の会場でございます。
こちらも杜の都全日本大学女子駅伝です。全国から、大学の関係者、保護者等も含めて数千人の方がここに集まってお祝いをしています。
これは今年の4月22日に行われた、羽生選手のパレードの写真です。報告会では市民広場のステージを使いたかったのですが、不特定多数集まることが予測され、また交通規制の問題もあり、ステージとしても広場としても使わなかったので、混乱はありませんでした。
これは間もなく始まります、テレビ局が開催しているスケートリンクです。冬場1カ月ほどアイスリンクとして、市民の皆さんに利用していただいている模様です。
市民広場は、私たちスポーツ側とすれば大変有効な、非常に大切な場所です。ぜひこういうものを残していただきたいです。たまたま写真は全部晴れていますけれども、雨天時にどうするのかなということが少し心配です。以前に新聞か何かに、屋根をかけたらいいのでは、という話が出ていましたように、雨対策も必要だと思います。ただ、基本的には、集まってきていただいた方をどう仙台の経済の活性化に結びつけていくのか、ということが最大の課題と思っています。以上です。

坂口：
大澤さん、よろしくお願いします。

大澤：
武田さんほどではないのですが、私も17年間ほど出たり入ったりしながら仙台市の文化行政を担当しているという不思議な者です。その間、仙台フィルハーモニー管弦楽団の支援や、仙台ジュニアオーケストラ、仙台国際音楽コンクール、オペラ「遠い帆」、それからせんくらなどの立ち上げに従事しています。現在は、公益財団法人音楽の力による復興センター・東北の代表理事として、被災3県に音楽を届けるという仕事をしています。29年一年度で193回コンサートをしています。毎日毎日のことなので、ちゃんと

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

仙台市とのかかわりについては何点かありますが、一つ目は地域住民として、父兄として、木町通小学校の建て替え時に、問題の多い計画に対して修正を求める親の会を立ち上げ、仙台市とかなり厳しい交渉をして多くの改善を獲得したことが、これは2000年ごろですけれども、ありました。
二つ目は、事業者として、東北大学が青葉山に新キャンパスをつくるための環境アセスですとか地区計画とか開発申請なんていう許認可事業にも長期間かかわっていました。
三つ目に、いわゆる有識者というくくりでプロポーザルの審査員ですとか、「仙台市都市景観賞」の審査員など色々とご指名頂きました。中でも長いものでは、「杜の都の環境をつくる審議会」の副会長というのを10年余り仰せつかり、併せてみどりの基本計画の策定部会長という大変な役回りも廻ってきました。その当時は市役所にも頻繁に通っていたんですが、最近は行く機会も減ってきて、最近では先々週の金曜ですかね、市役所建替えの関係で、説明を聞きに行ったくらいでしょうか、そんなところです。どうぞよろしくお願いします。（拍手）

榊原：
ありがとうございます。こちらに行きます。竹下さんお願いいたします。

竹下：
一市民で参加させていただいております Venus と　Club の竹下と申します。よろしくお願いいたします。私たちは、入会条件は女性だけという、女性だけの繋がる広がる団体をつくっております。本部は秋田にありまして、仙台はそこからおくれて2015年に発足しました。今現在、会員数は女性だけで100名で、専業主婦の方から子育て中のママ、個人事業主、会社員の方、あとはおばあちゃんまでという、大体20代後半から60代前半ぐらいまでの方が在籍していらっしゃいます。そこで、いろいろなイベントだったり、何か自分でやる時に横の繋がりをつくっていこうというのがコンセプトで活動しております。
私、生まれも育ちも仙台で、それこそ年がばれてしまいますが、宮城県沖地震の時の子なんですが、このぐらい生きていても、実は市役所多分３回ぐらいじゃないかなと。（「10年に１回ぐらい」の声あり）10年に１回、も行ってないかもしれないんですが、それもここ二、三年の間なんです。要は、自分がこういった活動を

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

数えていないのですが、もうすぐ千回になるかと思います。
建物につきましては、仙台市の文化担当者として、仙台文学館を建てるときの準備の担当をしておりました。
そのほか、実は、東日本大震災後、文化庁で文化芸術による復興推進コンソーシアムというものをつくりまして、２年ぐらい前まで、そこの東北センターとしての仕事をしておりました。
それからもう一つ、今日パンフレットをお渡ししましたけれども、吹奏楽連盟、合唱連盟、オペラ協会、そして私どものほうで2000人席規模の音楽ホールと市民会議というものをつくりまして、その事務方もしています。そういう幾つかの仕事をしておりまして、本日はそういった立場からお話をしたいというふうに考えております。
以上で自己紹介、まず終わります。

坂口：
ありがとうございました。では本郷さん、よろしくお願いします。

本郷：
ＳＤＣの本郷です。よろしくお願いします。
僕は２つ会社をやっていて、ＧＵＩＬＤという会社とＳＤＣと呼ばれているせんだいディベロップメントコミッションという会社をやっています。
ＧＵＩＬＤは美容室を仙台で５軒経営していて、仙台の街がかわいくなったらいいなと思って活動しています。僕たちの力で日本一美しい人がたくさんいる街になればいいなと思って、40人ぐらいのスタッフと一緒に街をかわいくしています。
もう一つがコーヒースタンドになります。ＧＵＩＬＤという会社でコーヒー屋さんをやっています。１杯のコーヒーが街を豊かにするという理念でやっています。僕は定禅寺通が好きで、定禅寺通で煎れたてのコーヒーが飲めたら本当に幸せだなということを友達と思いついて、じゃ僕らでやろうということで、自転車で活動を開始して、今、お店になっています。晩翠通にあるお店で、小さいお店を一緒にやっています。
あと、僕は定禅寺通で仙台コーヒーフェスというのを2016年から

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

えますと、百万都市であるとやはり市民が身近に感じるのは区役所でして、日常的にあまり市民が行かないというところが非常に課題ではないかと思います。現状を見ますと、我々のような事業者、専門家は打ち合わせで行ったりはしますが、一般市民がなかなか足を運ばない場所になっていると言えます。だからこそ、基本構想で市民の使う場所を創造していくようなことを仙台市でも書かれていますが、これについて市民も人事だというような意識があるのではないかというところで、市民に当事者意識をいかに持ってもらうかというところが、これからの進め方の中で一番重要だと思います。

そこで、どういう仕組みを作ったらいいかということで、我々建築家協会では、CAVE というイギリスの制度ですが、Commission for Architecture and Built Environment という、建物だけではなくて、その周りの環境も考えた、専門家としての支援・助言をする機構というものがあります。これの日本版を作ろうということで、建築家協会でいろいろ検討して提案しているところです。そういったところで、いろいろな分野の専門家が市民とともに寄り添って最初の段階から、今日はそういう一つの端緒ですけれども、専門家が常に寄り添って市民の意見をうまくまとめていくという過程を繰り返していくということが重要です。専門家が行政と協力して常に寄り添っていくというところが非常に重要なポイントかなと思っているところです。以上です。

渡辺（一）：

松本さん、ありがとうございます。先ほどは僕の言葉足らずでしたが、区役所は行っても、市役所本庁舎には基本行かないですよねと。そういう中で、誰が使うのかの「誰」という主語があまりないままつくられそうな感じもするし、逆に言えば今、市役所の中で働いている人たちの声ってどれだけ入るのかなとも思いました。彼らが使いにくいオフィス空間だったら、離職しちゃいますよね。そういうのも多分なさそうな感じもするなと今お話を伺い感じました市民の声というのは、誰を市民とするのか、誰を計画にどう混ぜていくのかというところもあるのかなと思いました。

では、阿部さんにお回しします。

阿部：

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホール」とは何か」を考える

始めてから、プレスリリースでお願いする時に市役所にお伺いするような形で、それ以外は全く行ってないので、今日、本当に一市民としてお勉強させていただきたく参りましたので、どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

澤口：

澤口司です。会社スイコーと言いまして、新築とリノベーションと不動産の仲介売買を、設計施工、アフターサービスも含めてワンストップサービスを提供して仕事をさせていただいております。泉青年会議所のＯＢで、いろいろとそういう活動もしていたので、この場に来させていただいているのかなと思っています。

市役所につきましては、一番最初は小学校の授業で見学に行った時が初めてだと思いまして、その後飛んで、青年会議所時代に年始に市長への表敬訪問でご挨拶に行くのが年に１回が続いた程度で、青年会議所を卒業してからはもうしばらく行かなくなって、三、四年前に１度行ったきり、あとは行ってないので、トータル 20 回行っているか行ってないかという程度でございます。本日はよろしくお願いいたします。（拍手）

横山：

横山英子でございます。どうぞよろしくお願いいたします。私は、生まれも育ちも仙台でございまして、ここから歩いて 10 分ぐらいのところで生まれ育ちました。そして、５代ぐらい前からこの仙台なので、生粋の仙台っ子って言っていいかなという、非常に少ない、平賀さんもそうだと思いますけれども、その中の一人でございます。

家業が設計事務所で、祖父が 72 年前につくった設計事務所を今兄とやっているんですが、祖父は戦後の復興で公共建築をずっと手がけていましたので、戦争前は、実は今の市役所の前の市役所をつくる時に、一技士というか建築士として、フランク・ロイド・ライトの建物を参考にするというコンセプトが実はあって、帝国ホテルに若手３人の技士が泊まり込んで、ディテールを盗みながら前の建物をつくったということは聞いています。そのぐらい命をかけて庁舎をつくった時代のことを、祖父からは聞いていませんが、父から、それから祖母からは聞いています。結果、その引き受けた工務店さんは、お金をつぎ込み過ぎて破産してしまったという、昔よくありがちなこともあるんですが、そんなことが一つ。それから、私自身は家業の設計事務所のほかに、青年会議所、澤

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

やっています。定禅寺通は、SENDAI 光のページェントと定禅寺ストリートジャズフェスティバルなど開催されていますが、その定禅寺通で、煎れたてのコーヒーを飲めたらいいなと思い、その想いに共感した東北の 16 店舗のコーヒー、コーヒーロースターが集まって、2016 年にコーヒーフェスを開催しました。今では２日で 40 店舗ぐらいのコーヒー・コーヒーロースターと、その他の地元のお菓子屋さんやアクセサリー屋さん等が出店しています。合計 180 のショップが並びます。２日で 1200 万円ぐらいの売り上げがあります。ですので、ちょっとした経済効果は定禅寺通から生み出せているのではないかと思っています。ローカルでお金が回って潤うことは、とても大事だと思っています。僕は、こういうシンボルストリートにローカルの人たちが出てきて、マルシェをしたり日々商いをしたりすることで地域も社会も活性化すると思ってやっています。

仙台コーヒーフェスでは「せんだいヤタイ」という、宮城の杉材を使って露店を出しています。大きな木の下なのでどうしても木のモビリティを使ってやってみたくて、こういったスタイルでやっています。

ＳＤＣでは、勾当台公園で仙台市と一緒に社会実験をしています。公園に文化観光発信としてのカフェがあったほうがいいのではという試みで、実験を１年間、来年の１月末ぐらいまで続けていて、ここでマルシェ等を開催しながら、どうやったら賑わいが生まれるのか考察したり、ストリートファニチャーを置くと人々が憩うのかということを日々考察したりしています。そして、豊かな街仙台になったらいいなと思っています。よろしくお願いします。

坂口：

どうもありがとうございました。山田さん、よろしくお願いします。

山田：

都市デザインという会社におります山田でございます。

私は、もともと仙台市の職員でして、残念ながらここにいらっしゃる方と違ってイベントの直接経験はなく、一市民の立場でイベントに参加するぐらいで、市役所時代はずっと都市計画とまちづく

Table A 【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

こんにちは、阿部でございます。
私も仙台のまちづくりにかかわってもう30年以上ですが、それで今都市プランナーという肩書きになっていますけれども、年齢的にもう70過ぎていますから、肩書きを忘れそうな状況にどんどんなってきております。それで震災以降、今の復興、ご存じのように入口が特区法という規制緩和の中で、何でもありみたいな話になってしまい、計画抜きの出口がひどい。この予算の使い方が全くひどい状況で、このまま仕事を続けてもあまり意味ないなと、仕事をやればやるほど街が悪くなるなという思いがあります。今、復興関係の草の根運動を中心にやっていまして、ようやく参加や協働というのは少しずつわかりかけてきたと。また、若い時には「仙台で参加や協働で頑張っているのは自分だ」みたいなおごり高ぶった気持ちがありましたが、実はそうではなくて、本当はわかっていなかったと。やはり参加とは何か、協働とは何かというのが少しずつ最近わかりかけているということで、こういう場をいただいて、年齢的にも最後の市役所への遺言というような立場で関わっていきたいなと、特に若い方々の意見を聞きながら一緒に勉強していきたいなと思っております。

しかし基本的に、認識としては「参加」という言葉も「協働」という状況も決してよくなっていない。この30年で、確かに関心を持つ人は圧倒的に増えていますが、「協働」という言葉は、当初のNPO法案づくりの段階から発言してきた立場からしますと、本当にひどい状況だと思っています。結局は下請けと言いますか、行政に使われるというか、大きくそういう枠組みに完全にはまっているということで、各自治体もこのような協働から抜け出そうということで、実は議会と市役所と市民、この3つこそがまさに協働なんだという原点に立ち返ってもう一遍やり直そうという自治体もあります。問題意識があるところは、首長が特に張り切っているところはそのような方向になってきています。ですので、今から市役所をつくる中で、初めてピュアになって参加と協働ということをみんなで共有していければ、最も共有するのに相応しいフィールドなのかなと思っています。ぜひ皆さんよろしくお願いします。

渡辺（一）：

Table B 【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

口さんと一緒なんですが、28から40までやっておりまして、その時は政策ですね、観光であるとか文化であるとか経済、それから環境、教育全て施策をいろいろ勝手に考えていたので、市役所には本当にしょっちゅう通っていました。
それから、家業としても、その当時は競争入札でいろいろな小学校とか区役所とかも仕事としてさせていただきましたので、営繕課にはもう本当に夜中とは言いませんけれども、閉館した後まで行ったりとか、そんなことでございましたが、今はどちらかというと、社会活動のほうで市役所には訪れております。いろいろな審議会の委員を今も続けてやっておりますので、それを入れると年に数十回お邪魔しています。それから、非営利のいろいろな団体の方とご一緒しているので、市長、副市長、それから局長、部長、課長いろいろな方にその活動を知っていただくためにお邪魔をするので、一人で行くというよりは団体のみんなと一緒に行くなんていうことを含めますとかなりの数は行きますが、市民として何かのために行くということは今全くなくて、そういう意味では区役所のほうにいっています。どうぞ、今日はよろしくお願い申し上げます。（拍手）

佐藤：
山形大学の佐藤慎也です。私のほうは、大学で建築と都市計画関係を教えております。特に山形に勤務しておりますので、日常的にこちらのほうに来るというのは少ないのですが、実は泉区民で今通っていまして、それで、また大学の仕事をしながら「建築と子どもたち」というのも学生時代からずっと続けていて、かれこれ20年も超えてきましたし、あとその前に「冒険遊び場」という活動で杉山先生なんかにもお世話になっていたんですが、今は海岸公園冒険広場というのが再開園になっているんですが、そちらのＮＰＯ団体の代表のほうもさせていただいております。
そして、市役所との繋がりというふうなところでいえば、景観サポーターを、それもまだこちらにいた時、2005年まで仙台の大学に勤めておりましてやっていたということと、あと先ほどの「建築と子供たち」の代表の細田さんという方がいるのですが、その方がもともと市役所の職員で、そういったことでいろいろな打ち合わせ等々を市役所の方と一緒にやってきたということもあります。現在は、ちょうど10年ぐらいになるのですが、仙台市の男女共同参画の審議会もさせていただいているので、そちらのほうでも仙台市の会議室を使わせていただいている次第です。私のほう

Table C 【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

りをやっていました。昔の話をすると、話題になっている市民広場についてお話ししますと、かつての勾当台通りは今の線形ではありませんでした。古い方はご存じだと思いますけれども、今、東二番丁通りと勾当台通りが直線でつながっていますが、昔はクランクになっていました。その道路を東二番丁通りにつなげるときに、もともと駐車場等に使っていたところが今の広場に形を変えました。もう35年以上前だと思うのですが、そのころ私もその計画づくりに携わっていました。
その後、あすと長町の杜の広場の計画づくりを担当していました。そのころ、広場に対して実現したいことをいろいろ描いていたのですが、残念ながらうまくいかなかったという反省があります。今日は、当時思い描いた課題あるいは解決したいことをお話しし、今後いろいろな形で実現に向かっていければいいなと思っています。
長町で広場をつくるときに、周辺のオーナーさんに広場の一部の占用使用権を与えようなんていうことを考えていました。先ほど勾当台公園の社会実験の話がありましたけれども、イベントがないときも広場に行って少し時間を費やす、単に公園というだけではなくて、うまく公共と民間がタイアップして休める場所なりお店が出るということをできないかというようなことも考えたことがあります。
これから市役所との関わり、本庁舎の建て替えとの関わりを考える際、そういった運営を主体的にできる、それも広場、それから定禅寺通、それから市役所の庁舎内、それらの連携が一元的にできるような仕掛けづくりがあればいいなと思っています。以上です。

坂口：
ありがとうございました。山田さんがおっしゃったように、多分ここのテーブルテーマの裏テーマは公民連携であるとか、本郷さんがおっしゃったように、ローカルでつながって潤っていくということを考えると、広場自体のいろいろな制度も最近変わってきていて、いろいろな事業の緩和も出てきています。実際に市庁舎ができたときに、使い方、ソフトの使い方とか仕組みも含めて、

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

ちなみに、過去の黒歴史なのであまり触れられてほしくないのかもしれないですけれども、先ほど阿部さんが、自分こそが参加とか協働のトップランナーだとご自身が思っていたということは、何かそういうことをされていたりしたのでしょうか。

阿部：
我々の若い時代のころは、知っている人は知っているかもしれませんが、学生運動をやっていないのは学生でないなどと言われた世代でありまして、もちろん認識としては間違っていて、優秀な人がたくさんいますけれども、そういう時代で、何かやはりそれぞれが建築単体よりも都市づいた世代なんですね。このような運動をやってきた気分を引きずっていて、特に地区計画など、まちづくりのルールを実際制度化したということも、ある意味では団塊の世代が中心になってやらせたと。もちろん人前ではそんなことは言えませんよ。「協働」についても、仙台市市民活動支援センターができる前、阪神淡路大震災前から加藤哲夫さんなどと一緒に勉強して来た経緯もあり、「思い」が強いです。

渡辺（一）：
ありがとうございます。本日、一応肩書きとして私はせんだい・みやぎNPOセンター代表として来ておりますが、今年の夏の総会後に拝命をしたばかりでございます。今阿部さんのお話に出てきました、このNPOセンターをつくった加藤さんは故人ですけれども、加藤さんから2世代空いてのバトンをいただいたばかりで、皆様が20年以上前に協働とか参加ということをどう議論したかというのを知らないでここに座らせてもらっているということです。次は青木さんに、せんだい・みやぎNPOセンターをもっと知っている人に、自己紹介とこの観点でお話しをお願いします。

青木：
せんだい・みやぎNPOセンターの青木と申します。よろしくお願いします。
今、渡辺さんからもしかしたら来るかなと思っていたら、案の定マイクが回ってきました。せんだい・みやぎNPOセンターは今年11月1日で21年目に入りました。97年の11月ですかね、任意団体として、それこそ民が支える民の仕組みをつくろうという

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホール」とは何か」を考える

からは以上です。よろしくお願いいたします。（拍手）

榊原：
ありがとうございます。伺っていると、仙台市生まれ仙台市育ちという方と、外からいらっしゃっている方も、仙台にお住まいで外にいる方、あとはもう内田さんのように市外にお住まいで仙台に通ってくる方、舛岡先生は逆に市外だけれども市役所のことを考えていてと、お話があったと思います。
市役所にどのくらい来ているんだろうという話を聞いていたら、市民として来ることはほぼないという、社会見学という中と、あと仕事として何か建築の確認をしたり、打ち合わせだとか委員としてということ、あと団体、何かある時には表敬とか陳情の部分で来るということがあるということで、平均すると何年ぐらいかなと見てみますと、平均を出せないなと思って聞いておりました。そんな中で、それでは「新しい本庁舎建て替えというものはどうあるべきか」「シティホールとしてどうあるべきか」ということなんですが、今日、皆さんのお手元にある「本庁舎建て替え基本構想の概要」というのがＡ３のものがあるかなと思います。新本庁舎のコンセプトということで、コンセプトイメージ図というのがあります。
真ん中の共通理念というところに、「市民中心の市役所の機能強化」と書いていまして、といいつつ、市民の方がほんと訪れない中で、市民中心の市役所に機能強化をするということをうたっています。では、今までの市役所を変えていかないと、この市民中心という部分が本当に机上の空論になりかねないというふうに思いますので、今日はそれを「シティホール」と言い換えて、「シティホールというものは何か」ということをここで議論していきたいなと思います。
正解はないと思いますし、人それぞれ考えるシティホールで構わないと思うので、横文字になると何でも解釈できるかなと思いますので、まず、このＡ４の紙にキーワードで構いませんので、私が考えるシティホールというのはこれだというのを、1枚にワン項目で構いませんので書いていただければなと。それをもって少し皆さんと議論したいなというふうに思います。何でも構いませんので、ちょっと大き目にお願いします。Ａ４の用紙を横に使って、できれば平賀さん、そのボールペンではなくて、ピンク色のマジックを使っていただけると。しかも、太いところがあるので太いほ

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

いろいろなネットワークがうまく実際の動きにつながるといいなということもあると思います。どうもありがとうございました。
平岡さん、お願いします。

平岡：
宮城大学事業構想学群の平岡と申します。私は建築設計が専門でして、いろいろな建物の設計や、復興まちづくり、いわゆるコミュニティデザインのような仕事もやっております。
私の研究室では、環境と人間のよりよい関係をつくるためのデザインをやっています。デザインを中心として、ランドスケープから家具まで、割といろいろなスケールで環境とコミュニティの関係について考え、実践をしています。
仙台市には直接関わったことはないのですが、一時期、地域アートイベントに積極的に関わったことがありました。越後妻有アートトリエンナーレや東鳴子アート湯治祭、あるいは新潟市の水と土の芸術祭など、いろいろな場所へ行って、市民の皆さん方と協働しながら作品をつくる活動をしました。仙台市ですと、せんだいデザインウィークや泉マルシェの実行委員会もやっておりました。
公園は雨が降ったらじめじめする地面、広場はどちらかと言ったら雨が降ったら早く乾いて使えるようになってほしい地面というのが、公園と広場との違いだと思うのですが、建物と広場のような、乾いてほしい地面が公共施設と一緒になっているというのがこのエリアとしては初めてできるのではないかと思っています。
公共空間の使い方は、幾つかパターンがあると思っております。
SENDAI光のページェントや仙台七夕まつりでは、スペクタクルな空間を人々が練り歩くパターンになっています。これは割とＬサイズの空間利用パターンです。あと、青葉まつりでのすずめ踊りのパレードなどですと、見ている人たちはじっとしているのですが、演者の方々が練り歩くような、逆パターンになっており，これもＬサイズの空間利用と言えます。次にMサイズの空間利用パターンです。市民広場で行われるいろいろなイベントや、錦町公園でのビアフェスや定禅寺通りでのコーヒーフェス、マルシェなどMサイズのいろいろなイベントが、このような公園や広場，

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

ことで、官民いろいろな方々が長い議論を重ねながら民設でそういうものをつくっていこうということで、95年の阪神・淡路の震災があったことで全国的にそういった市民の活動、ボランティア、NPOの活動等にも追い風になりながら法律もできていって、今年20年というところで節目が続いているさなか、当センターも代表のバトンタッチということもありまして、一馬さんと一緒に、私も3年前ですか、この役職で運営側のほうに少し関わる時間が多くなりました。設立当初は職員でおりまして、10年間職員でいたのですが、せんだい・みやぎNPOセンターの名前もそうかもしれませんが、仙台市との関係ですと、仙台市の市民活動サポートセンター、そちらのほうが初年度から委託で始まり、今は指定管理者として運営をさせていただいておりますが、そういった事業のところで関わらせていただきました。まさにサポートセンター設立の背景には、本当にいろいろな委員会、整備の委員会であったりとか、いろいろ役割を変えながら、そこにいろいろな方々が参画をしながら検討をし、また一緒に考えるという、そういったプロセスを踏みながらつくられてきたサポートセンターではないかと思います。

あそこは新築ではなく、既存にあるものを活かしていくということと、まさに中にどういった機能があったらいいのかということを、委員会の皆さんが先行しているほかの地域の事例なども視察に行き、最低限こういうことが必要なのではないかと、そういったものを積み上げながら、まず運営をしていくということで当センターもエントリーをして公募で決定をしていただいたというところです。
「市民の声は市民に聞け」、あるいは「地域のことは地域に聞け」というような視点もあり、私どももそうは言ってもどう運営していくかといったところについては、利用者の皆さんの声も聞きながら、またそれで改善をしていくというようなことを積み上げてきております。今は別の拠点になって一番町のところに来ておりますけれども、やはりハードが関わりますと、中の機能としては同じでも運営の仕方の部分では大分工夫が必要だというところがあったりしていますので、そういった意味では計画しているものも実際運営していくと、またそこで検討しなきゃいけないということを日々行ってきているところです。
そういう視点から、今回の市役所を考えますと、中で運営するの

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

うを使って。1枚に1項目で構いませんので、文章でもいいですしキーワードでも構いません。こういう感じでお願いします。
それでは、どなたからいきましょう。先にやったほうが楽だったりしますけれども。どうでしょうか、舛岡さん。

舛岡：
皆さん、これご存じでしょうか。アオーレ長岡、隈研吾さん設計の、ここ5年前ぐらいにできた新潟県の長岡市、私はそこの出身なんですが、きのうまでそこにおって、ここで時間を潰しておりました。後ほど回しますので一応見てください。今までの市役所とは全く違うコンセプトでできておりますので。私は、だからその結果なんですね、用がなくても足を運んでいろいろと過ごしたいところ、過ごせるところ、市民であってよかったなと思えるところ、町民ではまずいぞというように思えるところですね。それから、2番目は、同じですが、市民として活動、ここならこういう活動をしたくなるよね、したいねというような場があること、これを2つ空間の主として期待したいと思います。以上です。

榊原：
ありがとうございます。逆に舛岡さんは、「足を運びたくなる」というと、どういうことで足を運びたくなりますか。

舛岡：
私、被災民で、4年ほど上杉の賃貸に住んでおりました。本を読むかテレビを見るかしかないんですね。狭い賃貸ですから。そうすると外へ出たくなる。そうすると、それほど、夜は割と知っているのですが、昼は余り知らないもんですから行くところがない。それから、空間的にこういう定禅寺通とかいろいろあるのですが、北山のほうもないわけではないけれども、一回散歩すると何か終わってしまうんですね。ところが、こういうアオーレ長岡みたいに広場だと、いろいろな人間が出てくる、その出会いもありますのでね。そういう意味で、だから昔、番町は今はやりませんが、私77歳ですけれども、学生時代は「番ブラ」と言ったっけ。

榊原：
略さず言うと何と言うのですか。

舛岡：

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

定禅寺通りで行われています。
最後、そこかしこ、いろいろなところで発生している動きがあります。僕は、定禅寺ストリートジャズフェスティバルをおもしろいなと思っているのですが、ジャンルとか人の人数によっていろいろな場所でそれぞれいい感じで場をつくっている。それが全体としてジャズフェスのイメージをつくっているということがすごくいいと思っていまして、先日も、せんくらがありましたが、地下鉄の構内で高校生がいきなりコーラスを歌うとか、ものすごいインパクトですよね。そういったスモールスケールの空間が集積して仙台市全体に広がっているというのもおもしろいと思いました。
このようにいろいろなスケールが積み重なって仙台ではいろいろな都市空間を使っている様子が見られ、これはほかの都市ではあまり見ないような仙台としての魅力ではないかなと思っています。
もう一つ論点としては、商業的には駅前に人が集まっている実情に対して、定禅寺通りに建つ市役所および市民広場のセットがどういった役割を果たし得るのか、観光客もこっちまで来るのかというということがあると思います。以上です。

坂口：
ありがとうございました。では石塚さん、よろしくお願いします。

石塚：
みやぎ復興連携センターの石塚と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
私は特にイベントですとかそういったものを主催しているというわけでなくて、連携復興センターという、震災後できた、いわゆる震災復興の主にコミュニティのコーディネートをする組織の代表理事をさせていただいております。仙台市においては、仙台市の協働まちづくり推進委員会の委員を、本年度からさせていただいております。
私は実は、震災以後にこの仙台に来たという人間でして、もともとは新潟県に住んでいたのですが、震災復興の応援で来ました。仙台に居を構えまして大体丸6年がたちました。先ほどの皆さん

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

は職員の方々ですので、私たち市民といっても、ある程度の目的が決まった方が建物にアクセスするため利用者は限定的なのかなと感じてはいます。とはいえ、その市役所がある場所から周辺を見たときに、感じることとか思うことはいろいろあるかなと思っております。先日の説明会、手島さんからご案内をいただいて、ちょうど都合がついたのでお邪魔をしたのですが、そこでJIAの皆さんもおそろいで、いろいろな視点から模型を移動しながら「ここにこうだったらいいんじゃないか」とか、「ああだったらいいんじゃないか」と、そういうお話を伺って、私なりにもちょっと気がついたことといいますか、気になったところ２点のお話をさせて下さい。

一つは、もうここのエリアですよとこの図面にあるように、「あ、ここのあたりなんだな」と思っては見ていたのですが、実はこの本庁舎以外にほかにも市役所で今使っている市所有の建物と、あとは民地を借りているところがあるということで、そのあたりの皆さんがここに来た場合に、「これぐらいのスペースが必要なんですよ」「高さが必要なんですよ」というような話を伺いました。ここだけと思って見ていたのですが、時間差で市所有のいろいろなスペースが、そちらも建替えというものが迫って来るんだなと思ったときに、ここを中心にしたその周辺のエリアを含めて、誰がどこでどのようにそれを調整していくのだろうかと気になっております。今は、この本庁舎のこの場所だけですけれども、少し広く見た場合に、調整はどうなっていくんだろうというところが気になっております。

市民の参加や声というところはありますが、ここの場所はもう職員の方々が働く場所でもあります。少しまた「界隈」という説明会でも言葉が出ていましたけれども、そこを少し見てみると、やはり周辺に住んでいらっしゃる、暮らしの場も隣接しているんだなというところも感じましたので、逆に今見てみるといろいろ駐車場になっているスペースも多い場所もあったときに、ここだけ賑わいがあったとしても、そういったところのバランスというのはどうなっていくんだろうなというのもちょっと気になったところでありましたので、逆にその暮らしの場としてもある方の声とか視点というのは、いつどんなところで活かされていくんだろうなというところがありました。

もう一つは、定禅寺通や、西側のほう、それこそ青葉城址のほう

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホール」とは何か」を考える

一番町をブラブラ歩く。学生も勉強ばかりやっているわけではない、しかし金はない。市街地へ出たいということで一番町を歩いたものなんですね。そういう意味で、ある程度公的な刺激とかなんかがあっての話ですけれどもね。

榊原：
ありがとうございます。次の方、横山さんお願いします。ちなみに、皆さん、さん付けで。横山さんお願いします。

横山：
舛岡さんの意見に賛同。それに、私は、「組織を持たない個人」というのを入れていただきたいと思います。組織を持っていると、どこかでは集えるのですね。ですけど、組織を持っていない人がどうしたらいいか。知的なことを勉強する、それからいろいろな活動をしたいと思ってもというのがあったりして、あと情報を得るのも難しいですね。そういう意味では、組織を持たない市民・個人が集うことができるって、すごく大事なことではないかなと思いました。ですから、賛同です。

それから、市民の課題を解決する機能というのが必要だと思います。結局、区役所に行けばいろいろな手続はできるのですが、その手続をどこですればいいかってわかっている人は行けますけれども、このことはどうすればいい、あのことはどうすればいいというのを、ネットで調べればいいじゃないといっても、市役所の実はホームページを見ると複雑過ぎてたどり着かないんです。それは、ここに来れば最新の手続や情報がわかる、それから、どこに行けばいいかということをきちっとナビゲートしてくれるという機能は、病院とか学校とかいろいろな福祉施設とかも含めて、そういうのが必要だと思います。

榊原：
ちょっと今の点で、窓口、区役所にある手続が本庁舎でもできるというわけではなくて、ここに行けばそういう手続ができますよというのを案内してくれるという意味ですか。

横山：
後ほど出てくると思いますけれども、結局全てを集約するのは私は危険だと思っていまして、ただ、今はそれこそネットがあって、ネットを使えない方も隣にサポートしてくださる方がいればいろ

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

から説明あったようなイベントは私も参加者としてずっと関わらせていただいております。

日ごろ何をしているのかということですが、主にコーディネーターとして、仙台をはじめ宮城県各地におります震災復興の担い手をサポートしています。

また、地域の方々のネットワークづくり、創発による地域づくりを進めようというコンセプトで、いろいろなセクターの方々の場づくりをしています。

仙台では、今ちょうど隣に平岡先生がいらっしゃいますけれども、平岡先生たちと一緒にみやぎボイスという取り組みをこのせんだいメディアテークで実施しておりまして、そこの実行委員会として関っております。

国際センター駅では、復興やまちづくりの経験を共有するような飲み会のようなものを定期的に開催させていただいたりしております。そういった形で、震災復興やまちづくりの一環として仙台のスペースを使わせていただいているところです。

私は新潟県の長岡市というところから来ました。長岡にアオーレという市役所ができておりますが、ここには全天候型のイベントスペースがあります。こういったものも一つ参考になるのではないかということで出させていただきました。

震災復興やまちづくりに関わってきた立場として、２つほど問いを立てております。

一つは、私のように震災復興で来た方々が仙台には結構滞留をしているのですが、一方でそういった災害がまた起きたときに、どういうふうに公共の日常空間を使っていくのかということは実は余り考えられていないのではないかと思っております。そうした事柄と今回の本庁舎建て替えとがどのような関係になっていくのか、ということにすごく関心を持っています。

もう一つは、仙台はいろいろなイベントがあちこちであるのですが、実はどこで情報を見たらわからないというのが一市民としてあります。イベントはいろいろなところでやるべきだと思うのですが、例えば市役所に、ここに行けば非日常の空間利用みたいなものがいろいろとわかるという、ハブのような場所ができるといいのかなと思っております。以上です。

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

までルートというか、線というか、つながっていくところもあると思いますが、そういったところで今いろいろな四季に折々市民が主体になりながら事を起こしたり楽しんだり、また、観光でいらっしゃる方とか、用事や仕事でいらした方が、そういったあたりでも楽しみながら仙台の一面をちょっと味わって帰られるというところもあるんだなと思うと、何かここを起点なのか、終点なのか、途中なのかはわからないですが、そういう見方をしたときに、仙台の「らしさ」みたいなことが何か感じられたり、味わえるような、何かそういったポイントとしてのこのポイントというのもあり、またそこに市民も何か運営ではないかもしれませんが、そういったところでおもてなしなのか何なのか、そういう出番が絡んでいくと楽しいだろうなという感じがしたところでした。

渡辺（一）：
ありがとうございます。こでは三部さんお願いいたします。

三部：
建築住宅センターの三部と言います。
略歴になりますが、大学時代は建築に所属しておりましたが、農村計画をやっておりましたので建築物そのものはほとんどやっておりません。県庁に入りまして、30年弱勤めましたが、半分以上、3分の2ぐらいはいわゆる計画畑というか、県の総合計画に関わりました。先ほど市の総合計画とあったように、自治体はそれぞれ策定します。そういう意味で、今日の基本構想云々のプロセスの話は、総合計画を通じて自分なりにいろいろ経験したということあります。それから分野計画という意味では、総合計画と同じようなことになりますが、例えば農村計画とか、あるいは都市計画があります。今日宮城県全体の都市計画にも関与する機会があり、宮城県第1号だったかと思いますが、全国的にも早い、当時泉市の中心市街地で100ヘクタールの地区計画をやったのも面白かったなと記憶しています。また、農村計画あるいは水産、漁業などにも関わらせて頂き、関与が少なかったのは福祉や医療というところです。ほかにもいろいろ経験しましたが、建築なりの部門にはおらなかったということです。
現在、建築住宅センターという建築確認なり検査というインスペクションの分野になりますので、判断基準は法定要件しかチェッ

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

いろアクセスできると思うので、榊原さんおっしゃるように、ここに来れば手続ができるというのもありだとは思いますけれども、何もかも集約をするのではないという意味ですね。

榊原：
それでは、区役所は区役所として、手続として残る部分ということですね。

横山：
それはもう当然近くには必要なので。

榊原：
わかりました。

横山：
あともう一点ですね、仙台の特徴は、市民以外の方が非常に多いということなので、通常はいいのですが、有事の時にどこに行っていいかわからないということがあるので、市民以外の訪問者も含めて有事には受け入れることができる場所。これは、いろいろなインフラのこともあります。電気がきちっと有事でも繋がっているとか、それはハードですけれども、そういうことも含めて、そこに行けば水が飲めるとか、何かそういった情報も含めて物も含めて、市民じゃない方をも含めて受け入れるということです。外国人や観光や、それからビジネスマンが多いです。東日本大震災の後に、実は駅付近の避難所がすごい人であふれたと聞きました。駅で事故があって締め出されたということもあるのですが、榴岡の小学校とかあの周辺の小学校、中学校が、市民ではなく訪問者の方であふれてしまって、皆さんバッグを持ってきているので、とにかく大変な状況だったと聞いていますので、そんなことも含めてです。以上です。

榊原：
ありがとうございます。続いてどなたかいきますか、佐藤さんお願いします。

佐藤：
今の横山さんの話にも通じると思うのですけれども、私のほうは、「集中と分散」というふうなキーワードを挙げました。実はちょっ

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

坂口：
どうもありがとうございました。清本さん、お願いします。

清本：
宮城県建築士会の仙台支部で副支部長をさせていただいております、清本と申します。
仕事は民間の確認審査機関で検査員をやっておりまして、日々、宮城県内を走り回って建物の検査をさせていただいております。震災からの復興ということで、沿岸部の様子などはずっと日々見ており、いろいろ胸が痛いなと思ったりもしています。
今日は仙臺すずめ踊り連盟という立場での発言をさせていただきたいと思います。
江戸期ですけれども、仙台は仙台祭という祭りがありまして、これは東照宮のお祭りでした。この祭りの行列というのは数千人規模にも及んで、遠くからも見物にいらしたそうです。神輿度御というのは東照宮のお神輿なのですが、その後ろに町人の人たちがつくった度物というものが続きました。すごく豪華なものがたくさんあったそうで、このタコが踊りながら中に火が灯って水を吹き出しているというのが、肴町という町人町でつくられた大漁大蛸踊りという度物だったそうです。こういうお祭りを本当にパワフルに行っていたのが江戸期でした。
戊辰戦争があり、江戸の時代が終わった後すぐに、仙台の人たちは政宗公をまつる青葉神社の創営を請願しました。7年後ぐらいに認められるのですが、そこでできた青葉神社というのが奥州街道、通町筋が北山丘陵にぶつかって東に向きを変えるところ、いわゆる北山五山のところです。そこの東昌寺の敷地の3分の2を使って青葉神社がつくられました。その後、青葉神社の周辺で政宗公の命日、5月24日の春の大祭として青葉まつりを通町周辺で行ってきました。現在の宮司さんは、仙台藩の家老であった片倉家の16代当主の方が務めていらっしゃいます。
通町周辺でずっと行われていたのですが、諸事情により昭和40年後半には途絶えてしまいました。その後、今、行われている仙台・青葉まつりというのは、政宗公の没後350年を迎えた昭和60年に

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

クしません。私としては、理事長時代も含めて、今の顧問の立場を含めて7、8年ぐらいになりますが、問題意識としては、建物の立つところの背景といいますか、周辺のほうにむしろ関心があります。少々PRになりますが、今日の河北新報の朝刊に、今月30日に「建築・まち・環境フォーラム」というのが開催されるという公告があります。そこでは産業の状況が震災後どうなっているかということで、観光なり、商業なり、農業なりの話題をディスカッションしたいなと思っております。もちろんコミュニティの視点もありまして、この辺りが私の関心のポイントになっています。
イントロの部分になりますが、私の経験からすると、このテーブルAのプロセス論は、ここに書かれている資料の中にあります。現状の分析なりをしながら基本構想をつくり、そして基本計画をつくり、私が先ほど担当してきた中で言うと実施計画という話になって、次の事業部門にこの建物であれば設計とか工事というようになりますが、このプロセスは私としては行政的によくやっていたものなのであまり違和感はありません。今までの私の経験からすると、実施計画、ここで言うと設計の段階になって、初めて市民なりあるいは県民から「ちょっと違うんじゃないの」という話が往々にして、プロからあったという経験が沢山あります。そういうことからすると、図で示されている左から右に流れるだけが基本的にいいのですが、フィードバックするようなところがどこかに仕掛けられていないといけないという意味で、このようなラウンドテーブルが開かれたのかなと認識しています。
基本的な話を二つさせて下さい。一つは、仙台市は、行政としての仙台市という話もあるし、区域としての仙台市もあるわけです。いわゆる一般的な「仙台」という表現をされるときに、一体どういうものなのかというのが、基本構想の中間案かと思いますが、あまり書かれていない。政令市などは書いてありますが、どのような政令市になのか、市民はどのような視点でほかの都市と違うのか、計画に対するまちづくりに対する愛着なども書かれていないというのがあり、その辺りの認識がないのだと思います。基本構想の、あるいはその前の基礎検討、事業化決定という段階であまりなかったんじゃないかなという印象を持ったのが一つです。
具体的に言いますと、やはり仙台が置かれている地勢、8万ヘクタールぐらいでしょうか。山形県まで接しているということを含めながら、工業はあまりないけれども、農業がある。水産はあまりな

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホール」とは何か」を考える

復活しました。通町の青葉神社周辺で行われていたものがここの市民広場というか、こちらまで通町から神輿が来て、定禅寺通ですずめを舞ったり、本まつりでは武者行列、稚児行列、そして山鉾巡行で、すずめ踊りの大流しが東二番丁通で行われるという今のお祭りになっております。その中ですずめ踊りは、石工の踊りが継承されたものとして第3回から行われるようになりました。
すずめ踊りを踊っているグループは、祭連（まづら）と呼ばれているのですが、今その数は100を超えていて、その中から年間を通じて活動している人たちが集まっているのが仙臺すずめ踊り連盟ということになります。今年間を通じて活動していて、青葉城址でも当番制で演舞を行っている状況です。
市庁舎との関係で言いますと、市民広場を本当に活用させていただいているということと、あと、政宗公をまつるということをぜひ今後、仙台の街を考えるときに一つ視点として考えたいなと思っています。

坂口：

ありがとうございました。高橋さん、お願いします。

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

高橋（清）：
一般社団法人宮城県建築士事務所協会会長の高橋と申します。
建築士の資格を持って業をやっている人たちの集まりの団体でございまして、今会員が360社、賛助会員さんが190社で活動しております。
建築士法、第２７条の２建築士事務所協会について位置付けがありまして、建築士事務所協会ではいろいろな建物の苦情相談があった場合、苦情を解決しなさいという法律上の団体になっています。行政や消費生活センターにくる建設時のいろいろな苦情相談への対応や解決などを、協会でやっております。
ついこの間、11月の中ごろに、建築士事務所協会で、宮城県内の工業高校の建築科の学生、あとは宮城県内にある建築の専門学校を対象とした設計コンペをやっておりました。国土交通省の地方整備局長賞や宮城県知事賞、仙台市長賞など、行政の方々の協賛をもらいながら今年も開催しました。個人・チーム合わせて26の

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

いけれども、観光はあったりする。そういう地勢的なものなり歴史、これはほかの方からも出るかもしれませんが、ここはこの場所を含めて藩政時代に政宗がつくった。にも関わらず、定禅寺通という話とか、表小路という何か路線名というか街路名ぐらいしかなくて、歴史を感じないなと。一方、やはりケヤキは今落葉していますが、杜の都というのは、確かにこの街路が50年ぐらい前にケヤキを沢山植え、青葉通も含めてでき上がったということで、いろいろなページェントを含めた舞台になっているので認識は高いということですが、やはり歴史もあるんだということが、渡辺さんからもありました。10年後じゃなくて、50年、100年後、200年後のことを考えていったときに、歴史のその重層的な特性、認識がどうやったらできるんだろうかという視点が不足しているのではないか思います。
また、今日は他のテーブルもいないようですが、商業や工業、あるいは文化面の方々との繋がりということの中で、仙台市というのは一体どういうものだったのか、今どうなのか、そしてどうなっていくのかという視点も必要で、やはり突っ込みが足りないなという印象を持ちました。

もう一点は、やはり今日のテーマになると思いますが、松本さんが言われたように、建築まちづくりの視点がやはり足りないなという印象です。コンセプトの中で「まちづくり」と書いてあって、ひらがなで5文字書いてありますが、庁舎建替え、いわゆる建築活動、建築物の話になるわけですが、これをしっかりと意識しなければいけない。次の順番の際に具体的に申し上げますが、やはりほかのコンセプトの災害対応なり、利便性なりは、何となく理解できます。お互いに認識の差がないような内容なので理解できるんだと思います。特に災害対応というのは大体は認識できると思います。仙台市は沿岸部、内陸部も含めてどうだったのか。まちづくりについては、ちょっとやはり数行ずつ文字が書いてはありますが、やはり突っ込みが足りないなというか、まちづくりというものをやはり建築物とその周辺のところ一体となって捉える視点になっているはずなのですが、そのように書いてあるように読めるのですが、具体的にこのまちづくり、賑わい、協働というものに対して、このコンセプトは一般市民なり、専門家を含めて提示されたときに、イメージすると相当ばらばらなものになってしまうんじゃないかなということです。それでどうするかという

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

と私思ったのが、今日このような会が開かれるような場というのが、市役所にあったのはすばらしいなって思ったのです。一番初めはね。それは何かというと、結局こういうふうなお話をしながら、いろいろな市民の人たちがいろいろな視点からお話をできるような機会、これはすごく大切で、前ちょっと海外の事例なんかでも、よく政策をつくっていく時に分科会みたいなものを、8人ぐらいで話せるような単位をつくって話をした後に、今度全体会みたいなものを開いてお互いシェアし合うみたいな、そういった形の、どういうテーマになるかというのは、まだ課題というか考えは十分ではないのですが、何かのテーマで話し合う時に、そういうふうなことの仕掛けをつくることで、先ほど横山さんが言っていたような解決、いろいろ単独とか一人では解決しないところが解決するような、そういうきっかけにもなるのじゃないかなというふうに感じて、まずこれを掲げました。
あともう一つは、私自身、子供関係のかかわりをしていて、あしたも実はここの会場で、立町小学校の子供たちが、西公園の今地下鉄が走っているところの脇がまだ整備されてないのですが、そこの提案をちょうど三次元の模型でする予定になっているのですね。あしたの午後に。そうした時に、子供たちが参画できるような場ということで、一番初めに澤口さんが市役所へ見学に行きましたみたいな話と、プラス子供たちがそういった、こういうふうに20年後、30年後街がこうあったらいいなというふうな話をできる場がすごく大切だなと思っています。
あと、今、七郷小学校でも「未来のまちを考える」というのがちょうど8年目に、震災後からやっていますけれども、そういった場にいろいろな大人の人たちが、「あっ、それはすばらしいアイデアだね」とか、何かその気持ちを酌んでくれるような機会があると、それはまた次への意欲、子供たちの意欲にも繋がっていくかなと。
あと、男女共同参画の話にもありましたけれども、そういったコンセプトみたいなものも、お互いに理解し合うというふうな機会にも使えるかなというふうに思っておりました。以上です。

榊原：
ありがとうございます。そのほかいかがでしょう。澤口さんお願いいたします。

澤口：
もう既に皆様とほとんどかぶってしまいますが、サロンという機

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

作品の応募があり、この間審査が終わり、16日、17日にアエル2階アトリウムで学生たちの発表会がありました。こうした将来に建築士になってもらう若い人たちを育てていくという活動を毎年行っております。
あとは、震災復興では、いろいろなところで組織をつくって活動しております。まだ継続中です。沿岸部のほうでは、自分の家に住めない方も大勢いらっしゃいますので、そういうところの支援活動を行っております。
あわせて、定禅寺ストリートジャズフェスティバルなどのイベント時に、青年部会でごみ拾いなどの陰の支援を毎年行っております。直接自分たちで祭りとかは企画はしておりませんが、仙台市のいろいろな行事のお手伝いをさせていただいています。以上です。

坂口：
高橋さん、ありがとうございました。では、武山さん、よろしくお願いします。

武山：
私は、公益社団法人仙台青年会議所の2019年度理事長をしております、武山と申します。
私の活動ですが、来年度50回目を迎えます、仙台七夕花火祭の実施をしています。その他、仙台・青葉まつりの警備や、本年度より学生に移管した3．11キャンドルナイト、震災の鎮魂や風化防止を目的とした事業を開催しております。市民広場では、本年度、防災意識の啓発のために神戸・熊本の学生を招聘して、防災学生サミットという防災啓発事業を実施しました。
また、地域の発展のために、台湾の青年会議所の方々と交流し、交流人口の増加を目的とした事業等を開催しております。その中で課題と感じたことは、東北のインバウンドは、まだまだ後発になっているところがあります。海外の方々が仙台に何を求めて来ているかということを調査すると、例えば文化や伝統へのニーズがあるのですが、まだまだ発信し切れていなかったり少ないと感じたりすることがありました。ぜひ、本庁舎建て替えの際に、そ

と、後でまた述べたいと思いますが、建築まちづくりというプロジェクトとしてこの「まちづくり」の言葉の中にもっと明確なイメージを込めるべきだったんじゃないかということです。その辺りをしっかりと50年後、100年後を踏まえながら、まちづくりについて議論していくことが大事かなと、それを市民の認識、理解の中で実行するというところを思いました。

渡辺（一）：
ありがとうございます。今、半分以上の方から伺いましたが、やはり今の基本構想の中に都市ビジョンめいたものがないがゆえの、構想の割に構想っぽくない、ぶっちゃけワクワクしないというのが僕の印象です。僕は昔いた大学が事業構想学部という破天荒な名前の学部でしたので、基本的に構想とはワクワクするものだと繰り返し教わったため、何か「いや、これは構想とは言わんだろう」とは思ったのです。それが今、三部さんからも出てきました、仙台をこの後どうしていくのかとかという視点が少し足りなそうだなというところはお話をいただきました。
では、佐藤さんお願いします。

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

佐藤：
佐藤飛鳥と申します。
東北工業大学の中にライフデザイン学部を10年前につくりました。今までは工学系の学びということでしたが、少し文系色を入れていこうということで、経営コミュニケーション学科を10年前につくるときになって、初めて仙台に来て今10年目です。もともとは岐阜県の多治見市というところの出身で、名古屋のベッドタウンみたいなところにいて、それから大学から金沢で、ドクターをとるまでそこにいて、その後文部科学省の仕事で知的クラスター創成事業に携わります。年間に5億円を各地域に渡し、5年間かけてその土地の地域の新産業を発展させて、これからの地域を担うような産業を育成してくださいという事業で、その地域結集という時代から知的クラスター創成事業、それから2期というので、金沢には大体全体で60億ぐらいをかけて新しい産業をつくってくださいというものに携わりました。4年間その文科省の仕事をして、2008年にこの仙台で新しい学科をつくるということで、10年間先生をやってきたわけですが、もともと私の経済学という専門

能ですかね、あと日常的に集まりやすい場としての雰囲気が必要かなと思っていまして、小さなお子さんを急に預けられる場所ってなかなかないということもあったり、あとは保育園だとなかなか、働く女性向けにどんどん今傾きつつありますけれども、専業主婦の人でも何か急な用があった時にちょっと預けられるみたいなのとか、あとは介護している時に子供さんを預けなければいけないという場面があったりもしますので、そういった機能を設けながら、高齢者の方々が集まりやすい状況で、培ってこられた経験とか知識とかを、若い世代または私のような中年にも質問に答えてもらえるような、そんなコミュニティができてくるようなサロンとしての機能がつくられてくると、今までと違う雰囲気ができてくるのかなというふうに思いました。以上です。

榊原：
ありがとうございます。では、続いてどうしますか。どちらから。
では、竹下さんお願いいたします。

竹下：
私は、「共有の場」というふうにしたのですけれども、実は今、さっ

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホール」とは何か」を考える

ういったことを考慮した、街のシンボルになるようなものを実現していただきたいです。以上です。

坂口：
どうもありがとうございました。

２．ジャンル別に現状と課題を具体的に掘り下げる。

坂口：
一巡して、皆さんの非常に多岐にわたる実績や活動をご紹介いただきました。今の一巡だけでも結構意見が出てきたのですが、もう一回お話しいただこうと思います。今度は順番にお聞きするのではなく、いくつかのカテゴリーでもう一巡しようと思います。例えば、武田さんと大澤さんと本郷さんのように、街を使うだけではなく仕掛ける立場の方と、石塚さんや平岡さんのように、全体的を俯瞰して見らっしゃる方、あるいは武山さんや高橋さんのように、都市・仙台としてどういった関わりがあるか、一市民としてどう関わりがあるかを考えている方、あと、清本さんや山田さんのように、歴史的な背景を踏まえて、祭りのあり方や広場を考えている方、というように分けられると思います。まずはわかりやすいところからお話しいただきたいと思います。武田さんと大澤さんと本郷さんに、ご自身の活動や身近な方たちの活動から見えてきた課題についてお話しいただけないでしょうか。勾当台、市民広場だけではなく、定禅寺通や西公園の課題になるかもしれません。仙台中心部だけじゃなくて、もうちょっと広域のことでも良いです。先ほどご説明いただいたことに補足でも構いません。他の方のご意見を聞いて、「そういえばこういったこともあるよ」でも構いませんので、お話しいただけますでしょうか。そこから少し具体的なテーマを整理して、少し突っ込んだ議論を展開していきたいと思っております。
武田さん、大澤さん、本郷さんの順でお話しいただきたいと思います。

武田：

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

は、知らない方から聞くと、どうやったらお金が儲かるとか、ひとり勝ちするにはどうしたらいいかということを学ぶような学問だと勘違いされることが多いんですけれども、もともとは福沢諭吉が訳したと言われていますが、「経世済民」、民を救うにはどのようにお金の配分をしたらいいかということを考えるような学問であって、社会政策とか社会保障というようなものが含まれる学問なんですね。ということは、誰かが起業して儲かるようにということを考えるのではなくて、皆さんから徴収した税金をどんなふうに、何に使ってどう配分したら世の中がより過ごしやすくなったり、働きやすくなったり、未来に希望が持てるかというようなことを考えていく学問が経済なのです。

私自身は、この新しい学科をつくるときに、文科省の審査がいるわけですね。経営の学科なので、必ずマーケティングを専任の教員でやらなくちゃいけないというふうにお達しが出たのですが、経済学ではマーケティングやらないのです。だけれども、私は専任の教員でマーケティングをやるための資格を得るために勉強をし、そして文科省から「あなたはじゃあマーケティングの先生やっていいですよ」というお墨付きを得て、マーケティングも教えているわけですね。

ここではマーケティングの観点か、あるいは労働という観点、私が今までドクターをとるまでその勉強でやってきたことからお話したいと思います。それからここに赴任して10年間ぐらい、学生を巻き込んで地域の中小企業でマーケティングのプロセスをあまり知らない方たちに、新商品とか販路開拓のお手伝いをさせていただくという仕事もしています。そこでは必ず「こんなにいい商品があるのに、売れないのは消費者の見る目がないからだ」というような考え方をされている経営者の方が結構いるんですね。特に日本のような技術力が高かったり、ものづくりにプライドを持っているような人たちというのは、これを知られていないのは消費者が見る目がないんだというような結論に陥りがちなんですが、マーケティングというのは結局最終的には消費者にとってこの商品がいかに生活を豊かにするものなのだということを伝えないと買ってもらえないということがあるので、そのプロセスとして、必ずプロトタイプをつくったり、現状の商品で満足されているかどうかということを消費者から意見を聞いて、それをフィードバックしてもう一度その製品を改良するということをしていか

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

きまでうちの会員さんたちとランチミーティングをやっていたのですね。今日こちらの方でお話しさせていただける機会を頂いたというふうにみんなに言ったところ、「市役所って、ちょっと遠いよね」っていう話が出まして、なおかつ、こういった定禅寺通とか仙台市すばらしい自然があるのに、そこは見たいのだけれども、何かちょっと遠いという話が出ました。なので、変な話、市役所に来たら何かが得られる、例えば講座でもいいですし、ここに来たら何かちょっと面白いことをやっているとか、正直小さいお子さんをお持ちのお母さんが、トイレにだけでも市役所に寄りたくなるような場所であってほしいなと思います。

私、専業主婦時代もあるのですけれども、子供がまだ赤ちゃんのころ、なかなか行くところというとエル･ソーラさんとかエル･パークさんで、ちょっと子供をあやすのに一旦休憩に行ったりはしたんですが、市役所となると、ちょっと違うかなという、なかなか入りづらい、行きづらいというのがありましたし、あとは子供だけに関係なく、お年寄りの方とか市民の方どなたでも、ここに行けば何かがある、何かが得られるような場所であってほしいなと思います。以上です。

榊原：

ありがとうございます。遠い、入りづらいというのも、本当そういう意見だったと思います。では、どうしますか、内田さん、平賀さん、杉山さんという形でいきます。

内田：

今まで出た話とかぶる部分も結構あるのですけれども、最初に「誰でも使える市役所」ということで、職場にお祭りの時とかにいらっしゃるお母さんとかで、「授乳室がちょっと混んでいて」とか「ちょっと子供を休ませる場所が欲しくて」という方ですとか、あとは「だれでもトイレ」がなかなか市内になくて、出てきた時に使う場所がないんだよね」とかというお話もあったり、あとキッズスペースですね、お子さんをちょっと遊ばせるような場所、雨が降っていてちょっと公園だめだったとかという場合とかに行けるような、お父さんだと授乳室とかおむつ交換台とか安心してお子さんの面倒が見られるような、今イクメンの方ふえてきているので、そういう日常的に使える場所であれば、市役所ってもうちょっと敷居が低くなっていくのかななんて。ちょっと遠いところかなというところがあるので、日常的に使える場所があったら

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

ありがとうございます。先ほどパレードの話をしたのですが、羽生選手のパレードは約18億5千万円の経済波及効果があり、仙台国際ハーフマラソンは11億円の経済波及効果がありました。それなりの波及効果は生まれていると思います。それぐらいの人に全国から集まっていただいて、それをどう仕切るかということについては、交通規制と警備計画が重要になります。要は、計画を立てて警察の道路許可をいただき、警備員を配置するということなのですが、その際、公金を使わないでどうやるかということが大事なことです。パレードでは、私たちは実行委員会をつくりました。記念Tシャツを8万枚販売し、協賛もいただきながら資金を集めました。これをやるためには、企業の方々にいろいろ応援をいただかなければなりません。それを理解していただくためのハードルが結構高いです。人が集まるだけ、経済波及効果がある訳ではないということを皆さんにわかっていただきたいと思います。

それと、やはり広場を使っていく、全体を使っていく中では、交通とそのための費用を補うために、どうするかということが最大の課題だと思います。いつ来るかわからないということも、計画を非常に難しくしていると思います。経済波及効果が生まれるのはわかっているのですが、それをどうあらわすかということも、実は私たちの大きな課題だというふうに思っています。

坂口：

今の武田さんのお話は、一つは、広場とか外部空間を使う際、ドライに言うと、運営コストを下げるために、どういったことを最初の段階で考えておけばいいかということをお話しいただきました。もう一つは、例えば道路を占有する場合、ある種の市民の合意形成として、あのイベントだったらここを使ってもいいよというようなことがないと難しい、ということをお話しいただきました。それは逆に言うと、一過性では難しくて、ある種の蓄積のもとで成り立っていくことかも知れませんし、あるいはコンテンツの意味によってかなり変わってくることでもあるので、なかなか外部空間一つとってみても、一筋縄ではいかない、という理解でよろしいですか。

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

ないといけないんですよ、ということを学生と一緒に地域でマーケティングを今まで勉強されていない方に伝えるという活動を今までやってきております。
そうなると、市庁舎ということで考えると、もちろん市役所の方、働く人の労働環境という観点からも市役所を見ることができますし、それから使う側ということで見ると、市役所を何のために使いに来るのかということで考えられます。しかもマーケティングは顧客を開拓していくという意味がありますので、現状、市役所に用があって来る人だけが利用者ではなくて、例えば小学生とか幼稚園児、保育園児のような子供たちは市役所に関係ないのかというようなことを考えていくと、今までのその何か書類を発行しに来るというだけの市役所ではなくて、いろいろな人たちが集えるような場所である、機能やユーザーの話になるかもしれませんけれども、働く場であり、もっと市役所がいろいろな年代層に使われる建物になるということも必要であるし、それから海外から来るような人たち向けにも必要です。例えば今まで私がもともとの研究がアメリカの労働経済学なので、いろいろなところに調査に行くわけですが、いろいろなところに行ったときに、市庁舎が観光資源になっていて、その建物を見に訪れたり、それからその中に入ってご飯をおいしく食べたりとかということができるような市庁舎を今まで見てきたわけですが、今、仙台はどうなっているのかというところも論点になるかなと思います。
それから、今国際交流の担当を大学でしており、いろいろなところに行きますが、よく聞くのが、市役所とかの建物に外国語対応できる人がいなくて使いにくいとか、障害を持っている方が、もちろんバリアフリーにはなっているんでしょうけれども、使いにくいとかということを聞いたりしますので、利用者が誰なのかということをいろいろと裾野を広げて考えて、誰向けにどういう機能を持たせれば市役所がよりよいものになっていくかということを考えるのも必要だと思います。
それから、もう一つ大学の仕事の中で、ブランディングの視点、大学をどういうふうにブランド化していくかということで、大学の中のシーズは何で、それをどういうふうに理解をしてほしいかということにも携わっており、これも市役所に置きかえると、この市役所はどういうことができるものであり、それからどう捉えられたいのかということも考える必要がある。それにはやはり

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

いいなと思いました。
あとオープンスペースみたいな、フリーで団体で使えたりとか個人で使えたりとかということで、エル・パークで勤めていて市民活動支援の仕事をしているのですけれども、仙台市って本当に市民の力がすごいなというところを感じるのですね。なので、ぜひ市役所の中でそうやって集まっていろいろなことを考えたりとか、いろいろな団体が繋がったり、個人でも行ってのんびりできたりとかしながら、市の情報に触れられるような場所があったら素敵だなと思いました。
あと避難できるところ、何かあった時に、これ自分の自戒込みですけれども、震災の時に働いていたんですね。家までが車で１時間くらいの距離だったのですけれども、市民の広場に避難した時に、噂で「市役所にはもう入れないから避難できないらしいよ」みたいな情報が入ってきて、みんなで「あっ、そうなんだ」って。市役所に避難できるのかどうかも私たちわからない状態だったりするので、旅行でいらっしゃっている方とか仙台市にゆかりがない出張されている方とかとなると、行政施設にまず行ってみようかということがあるので、ただ大きいスペースがあればいいということではなくて、きちんと、パーティションがなくて女性たち大変だったですとか、赤ちゃんの粉ミルクが手に入らなかったとか、あとお子さんもですけれども、介護用のおむつもなかったりということがあったので、そういういろいろな人たちのニーズに応えられるようなものを市役所の中に準備されているとなると、安心して行けるかなと思います。
それをまとめて「市民と協働ができる」、何か全然市役所のハードと関係ない話になって恐縮ですけれども、そういう市民の力というものを市役所で中で酌むような機能をつくっていくと、もっと市民の目線でいろいろなことをして、市民が主体になって市民力でやっていける市役所になっていくのかなと思いました。以上です。

榊原：
ありがとうございます。最初のところは、勾当台公園でイベントが結構ある時は行かれる方は多いのですかね。

内田：
そうです、授乳とかおむつ替えでいらっしゃる方は結構いらっしゃいますね。

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

武田：
はい。

坂口：
ありがとうございます。大澤さん、よろしくお願いします。

大澤：
先ほどお話ししたのですが、東日本大震災で沿岸部によく行っておりまして、そういったことも含めてお話しします。
震災後、石巻市で複合文化施設をつくる話がありまして、私ども、文化庁の肝いりの団体のコンソーシアム東北センターとして、担当者の勉強会に講師を２人派遣しました。１人はいわきのアリオスというホールの支配人、それからもう１人は八戸のはっちの館長さんでした。
いわきのアリオスの大石館長は、ホールの専門家なのですが、音響等については専門の人に任せましょうと、話しをしませんでした。むしろ、ホールで、いわゆるパフォーマンスが行われていないときにどう人を呼ぶのかという話を延々とされました。ホールの目の前に公園があるのですが、公園のトイレをなくしてホールのトイレを使ってほしいとか、高校生のデートスポットがどうのとか、いろいろなことをお話しになりました。コンサートに行って帰るだけでなく、いかにホールの中でぐるぐる回遊してもらうか、というようなことを話されました。
はっちのは、ご存じのとおり市街地活性化ということで運営されているのですが、大型文化施設としての公会堂ははっちとは別にもあります。そんな状況で、中に小さなホールを持った、このせんだいメディアテークを小さくしたような施設をつくって、中心部に人集めるようになりました。人と建物を呼び込んだということになります。文化担当ではなくて、まちづくり担当が、ホールというか文化施設を運営しています。サードスポットという言葉もあるのですが、震災後に望まれているものの中には、これまでにはないことが出てきていると思います。
ちょっとこれをご紹介させてください。
今日のテーマに重なってくるのですが、「広場としての音楽ホール」

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

フィードバックの仕組みが必要なので、「予算がこれだけなので、こういう建物が建てられてこういうふうに考えていますけれどもどうですか」というのを、いろいろな人がそれに意見を言えて、しかもそれが実際に実装されていくというか、「意見を言うのはどうぞ言ってください。でも、それお金が足りないからできませんよ」とか、「あなたたちがそう言っても、やはり市役所というのは公共の税金を使っているから、ここまでしかできませんよ」とかというと、遊び心がなかったりとか、一部の数が少ない人の意見が取り入れられないということがあり得るので、どうやってその人たちの意見を吸い上げていくかという仕組みをここのテーブルＡで考えるのがいいのかなというように思います。以上です。

渡辺（一）：
ありがとうございます。門外漢が何人もいると心強いです。今のマーケティングの視点で考えたときに、市役所が顧客を開拓するというのは、日本語上はあり得る話だけれども、よくよく考えるとゲシュタルト崩壊しそうな言葉だと思いました。しかし、よく行政は「市民に参加してほしい」と言っている割にやっていることは変わらないわけですから、顧客を開拓するといったときの市役所のつくり方とか本庁舎のあり方というのはあるのだと、今お話を伺っておりました。
では、続いて小貫さんお願いします。2時過ぎにシンデレラガールになってしまいますので。

小貫：
今日午後に、2年生の最終講評会がありまして、戻らなければいけないのですが、もう皆さんいろいろなことを言われていて、自己紹介もでしょうか。私は東北大学でキャンパスデザイン室という謎の部屋にいますが、基本的にはまず最初は青葉山に新キャンパスをつくるというところから始まりまして、その計画を基本的にはするところとして立ち上がった部屋です。その後、ほかの既存キャンパスについてもいろいろ計画とかを進める部署として、今はキャンパスの仕事をしているのですが、最近は本当に何でも屋さんになりつつありまして、今、東北地方で二つ大きな大学関係のプロジェクトが動いていまして、一つはもうこれは決まっている話で、東北大学の新キャンパスのほうに東北放射光施設という

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

と書かれています。これはこの４つの団体で賛同者を集めたのですが、賛同者に自由記述欄のあるカードを設けました。そうしたら1260名の方に書いていただいて、まとめは大変だったのですが、その中で、タイトルに「広場」というものと「音楽ホールを超える音楽ホール」という言葉を使わせていただきました。このテーブルにあった言葉としてあらわすと、「従来の広場を超える広場」となるかも知れません。たくさんの方からのご意見をいただいています。ぜひご覧になっていただきたいと思います。
そして、その中で、「私は車椅子生活をしています。ボランティアさんのお力をかりて大きなホールで音楽を聞きたい」と明確に言われています。それから「車椅子席も端のほうではない場所にしてください」と言われています。つまりＳ席にしてくださいと、いいところで聞きたいですということです。
編集会議をした時に、皆さん、劇場法は知っていますか、平田オリザさんという方が「新しい広場をつくる」という本を書いていらっしゃるのは知っていますか、と言ったら、誰も知らないと言いました。劇場は広場だと言いわれています、と言ったら、皆さんが口を揃えてそれは常識でしょうと言われました。つまり専門家の間では割と知られた言葉なのですが、震災後の仙台市の音楽団体の人たちは常識だと言います。このような形で、何かしら状況が動いていて、そして被災地でもいろいろな施設ができる中で、これまでのようなものではなくて、何かプラスアルファで交流スペースが欲しいというような要望が出てきているわけでして、そういった意味で震災後の公共施設ないし文化施設を見直してみることも必要ではないかなと思います。以上です。

坂口：
大澤さん、ありがとうございました。本郷さん、よろしくお願いします。

本郷：
実際、広場を使った課題として、インフラがないことが挙げられます。電気設備がないので、いろいろなイベントで、すごく大きな発電機を毎週借りて運営しています。そこに結構コストがかか

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

ものができます。簡単に説明をすると、でっかい顕微鏡だということなんですね。でっかい顕微鏡でいろいろなことが調べられて、産業に利用されるという話です。もう一つが、岩手から宮城の気仙沼あたりまでにかかる国際リニアコライダーという大きな加速器、簡単に言うとヒッグス粒子を見つけるための施設と、私も物理の得意なわけじゃないので、簡単に言うとそういうものらしいです。もっと専門的にはいろいろメリットがある施設らしいのですが、そういったものをつくるか、日本に国際的に誘致するかどうかというのを今検討しているような段階で、そういった大きなプロジェクトというのが今、宮城、仙台では動いています。
直近の東北放射光施設についてお話しする機会があったのですが、あれをつくると、ほかのいろいろな都市のその放射光施設などを持っているところをいろいろ視察させていただいたんですね。そうすると、やはりそれに付随して大きなリサーチパークだとか、そういったものができてくるというようなことを海外の都市では積極的に計画して誘致して産業につなげている。では、仙台のどこでできるかと空き地を探したんですね。空いているような土地を、使えそうな土地を。意外と仙台はないのです。区画整理も仙台港の背後地だとか、荒井だとか、いろいろなところで行われているのですが、使い道がその当時はなくて、背後地みたいに商業施設になっていたりという形で、都市計画の中でやはりその使い方、使いたいという意思を持って都市計画がなされていないというところに問題があるなというように感じています。
今回のこの市役所も、建替えはするのだけれども、ではここで建替えをすることが仙台市の都市計画においてどういう意味を持っているのか、都市デザイン的にどういう意味を持っているのかというあたりの文言が、あまりこの概要を見ても出てきていないというところをちょっと心配しています。皆さんおっしゃられたとおり、やはり「仙台市、これからこうなるよ。こういう街になるよ」というところがすごく今欠けていて、なりたい、それは予算の関係でとかではなくて、あくまで「こうなりたい」と、こうするためにはどうやっていけばいいかというプロセスをやはりつくっていかないと、夢のある話はなかなかつくれないだろうと思います。ですので、今回のこのこういう場をうまく生かして、もうちょっと夢のある話にこの基本計画がなっていく、本当は基本構想のときにやるべき話だったかとは思います。大変そこが気になって、

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホール」とは何か」を考える

榊原：
そういう情報は、何かウェブとかでお母さんたち調べてきているという感じですか。

内田：
日常的に利用されている方がいらしたりします。

榊原：
イベントがあると多くなるのですか。

内田：
ちょっとふえる感じです。

榊原：
わかりました。ありがとうございます。平賀さんお願いします。

平賀：
皆さんのすばらしいご意見ダブるところいっぱいあると思いますが、一番最初に言いたいことは、「東京都庁のようになってほしくない」。無機的な色ですよね。グレーというか石造りというか。入ったらエスカレーターがあったり、全然どこに行ったらいいか訳がわからなくて、それが非常に残念だったなということで、サイン、いわゆる市役所のサイン、それをカラー別、色別ということをぜひ提案したいなと思っております。でないと、黄色で行けばいいんだねとか、緑で行けばいいんだねとか、そういうふうな、色がたくさんあるとあれですけれども、何かそういうものになったらいいなと思って。
それから、市役所のソムリエをつくってほしい。ソムリエです。というのは、2年ごとに皆さんおかわりあそばすので、行ったと思ったら、「えっ、今どこにいるの？」って「水道局」、「えっ、その次はどこに行ったの？」「交通局」とかって言っているので、そういうことのないように、ソムリエというか市役所のことを全てわかるＯＢでもいいので、そういう方がいたらいいなと思います。ですから、非常にもったいない人材がたくさんいらっしゃるので、それを捨てるのではなくて、そういう方にそういうことでボランティアでないんですけれども、70歳という年長になりましたから、それをぜひ何でもわかるそういう人を育ててほしいなと思いまし

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

るのですが、それを備えた広場にしてしまえば、いろいろな人が参入しやすくなるのではないかと思います。あと、給排水もあるようでないです。実際、公園課に「排水捨てていいですか」と言っても「だめだ」と言われます。僕らは捨てないで持って帰るのですが、捨てる方もいます。電源や給排水を整えた広場としないと、非日常な観光やイベント活用の際、使いづらいと思います。
市庁舎の敷地も広場化したほうがいいのでは、ということを議論していると思うのですが、市庁舎の敷地と市民広場との間に道路があることによって、市民広場での活動の方が主になると思います。市庁舎と市民広場を一緒に使うことを考えると、車のための道路ではヒューマンスケールにならなくて、市庁舎の敷地を広場にしても使いづらいように思います。もう少しこの道路を車というより歩行者、ヒューマンスケールに戻していくランドスケープをみんなで考えていった方がいいと思います。市庁舎の敷地と市民広場をつなげろと言っているわけではないのですが、ここの道路の問題が一つ課題かだと思います。

坂口：
少し補足しますと、今、市役所の建て替えというのが敷地の南側を想定されています。なので、多分将来、南側に市役所ができて、北側が空きます。市民広場の役割として、こっちの市庁舎にダイレクトにつながるつながり方があります。
もう一つは、こちらの定禅寺通のこの辺の抜けに対して、市庁舎ができてくると、ある意味、定禅寺を抜けた先にこういった場所があるというようなことになると思います。今、本郷さんがおっしゃったように、確かに道路と広場の関係というのがすごくフィジカルな課題なのですが、今ここで行っているアクティビティのようなものが、将来的な市役所の建て方は別として、もうちょっと、こう発展するということはありませんか。さっき言ったかわいい街仙台のようになってくるあたりでいくとどういった可能性や課題がありそうですか。

本郷：
僕は、定禅寺通でもイベントをやっていて、７万人ぐらい集客が

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

何もその市民参加のこういった場が設けられていなくて、ちょっと危機感を持ってほかのテーブルでファシリテーターをやっている都市デザインワークスとかを焚きつけて「何かやりなさい」という形で、今まで３回ほどイベントを開催しています。ですが、やはりそういったことをもっと本当はこの基礎検討のあたりからやっておく必要があるんだろうなと、このテーマに沿った話でいくと思います。本当のその夢の部分というのはなかなかこのスケジュールに、事業化が決定して、もう何かスケジュールがどんどんと進んでいる中では、なかなか議論する時間もない。だけれども、もうちょっとやはり前の段階からやっておけると、もっといろいろなことができるのではないかなと思います。
それからもう一つ、本庁舎はなかなか普通の市民に接点がないと言われるのですが、それは本当にそうなのかなと。逆に言うと、本当は市民に関することのはずですよね。市役所を建てるとかということも。そこにきちんと市民が関わっていないから、本庁舎に用がないという状況が今あると思うのです。もうちょっと海外なんかを見ると、すごく今の市の計画だとかがビジュアルできちんと見せられていて、きちんと意見を言うようなツール、手段もあって、そういったものをうまく吸い取りながら計画をまとめていくというプロセスがつくられていると思うのですが、それが今はなくて、役所イコール何か書類を発行してもらうところという感じになってしまうと、市民はやはり区役所しか行かないですよね。しかし、人口も減ってきている中で、いろいろなプロセスにマンパワーも必要になってくるので、そこにきちんと市民を関わらせるというか、マーケティングの話がありましたが、うまくそのマーケティングとして市民を引きつけるような話をどうつくっていくかというところがすごく大事なんだろうなと思っています。

渡辺（一）：
ありがとうございます。ちなみに、シンデレラの馬車はあと何分待てますか。あと５分？でしたら、先ほど何人かの方から、そのフィードバック、長期的に実際できた後にフィードバックをしていく、その為のキャンパスデザイン室がある。先ほどのお話では、青葉山はつくって終わりではなくて、その後もいろいろな施設をやっていくというお話だったのですが、ではその東北大学というあの巨大なところが、どのように使っている人たちがフィードバッ

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

た。広いだけでなくて、わかりやすくて行きやすくて、皆さんがおっしゃったとおり「いいね」と言われる市役所にぜひいってほしいと思います。
それから、インフラとの接点、いわゆる一番大事だと思うので、ここでおりたら何番線、どこに行けばいいというその道案内、さっきも言いましたけれども、サインをぜひはっきりしてほしいというのは、外国人の方が仙台駅に来て、定禅寺へ行きたいといっても全然わからないんですって。松島もわからない。そういうサインが非常に不明確な、そういうのではなくて、市役所自体が何でもわかる、そういうサインをぜひしてほしい。ありがとうございました。

榊原：
ありがとうございました。ソムリエって、コンシェルジュみたいな感じですかね。ホテルにいるコシェルジュみたいな感じですか。わかりました。杉山さんお願いします。

杉山：
これまでに多くの市役所が作られてきましたが、どこの市役所も「市民に開かれた市役所にしましょう」とスローガンを掲げながらも、やっていることは、ブラックボックスのオフィス機能と大変立派な石張りのエントランスと「開かれた」市民ロビーがあるだけで、（洒落たレストランがある場合もありますが）、行政機能と関係のないところに市民はやって来て座っていれば良いという、おまけ的な市民開放型の市役所が、（宮城県庁もそうですけど）、ほとんどなのではないでしょうか。
しかし私は、「市政と市民の関係」を形にすることが一番重要だと思っています。例えば先日市役所に行った際に、この一大イベントである市役所建て替えに関する展示パネルが全くないことに驚きました。何一つ情報が発信されていない。市政情報センターに行って探してみてやっと建替え検討委員会の議事ファイルが出てくるだけ、といった世界なんですね。そうではなく、仙台市は「市役所」や「音楽ホール」などについてどのように考えているのか、そしてそれはどのような将来像を目指したまちづくり計画によるものなのか、ということを、みどりの基本計画なども含め、分かりやすく展示して市民の意見を募るのが本当の「市民に開かれた市役所」なのではないでしょうか。
さらに言えば、「脱スパイクタイヤ運動」に代表されるような輝か

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

あります。錦町公園や西公園も使って、グリーンループという、公園と公園を人々が回遊するというイベントをやっています。街を回遊させないと経済効果を生めないと思っているので、定禅寺通だけではだめだと思っていて、路地にしみ出していく仕掛けとかを今年からやっています。イベントをやっていて思うのは、ここは車がメーンで通っていくのですが、ここを歩行空間にすると定禅寺通とつながっていきます。ここがすごい重要なんじゃないかと思っています。七夕のときはここが道路封鎖されて、歩行になっていて、すごくいいなと思って見ていました。

坂口：
どうもありがとうございました。山田さん、広場を実際に整備された経験からでもいいですし、今の本郷さんなり武田さん、大澤さんの意見を受けても構いませんし、もう少し歴史的な経緯としてそもそもここの場所はどんな意味があってどんな可能性があるかというレクチャーでも構いませんので、少しコメントいただけますか。

山田：
何かお答えになるかわからないのですが、最初に一巡したときに話が出たと思うのですが、公園と広場は違うという言い方をされていましたが、都市計画なり公共施設の位置づけからすると、市民広場はあくまでも公園です。厳密な意味で広場という形での計画スタートはしていないです。実はここがいろいろな取り組みをする上で一つのハードルになっていると思います。公園の中の単にペーブメントをした広場空間と、イベントなりそういった仕掛けを前提とした広場というのはおのずと性格が違うはずだと思います。そういう意味では勾当台の市民広場、名前は広場ですけれども、本質的には実は広場機能を備えていないと思います。そんな反省もあって、先ほど本郷さんが言われたようなことは勾当台公園ではなかなか難しかったので、長町の広場で給排水、電源というのを考えたのですが、なかなか維持管理とかいろいろな意味での障害といいますか、越えなければいけないハードルも高くて実はできませんでした。その反省から言うと、通常の公園の管理

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

クをキャンパスデザイン室にしているのですか。それとも、実はあまりできていないとか。市役所をつくって終わりでは多分なくて、使いながらその構想に合った形で使えているかどうかということをやったり、若しくは青葉山もあのようにやると構想が決まって、つくっていく中で若干変えていったりとか、こういうようにするみたいなフィードバックがあったと思うのですが、それは東北大ではどのようにやっているのですか。

小貫：
なかなかそこはうまくいっていない部分が多々あって、本当はやはり東北大学だけじゃなくて、ほかの大学のキャンパスの先生方の話を聞くと、やはりユーザーからいろいろ意見を徴収して、それをフィードバックしたりとか、そういったことをやっているところもあると伺っているんですが、なかなか東北大学そこまでできていない部分があります。それから放射光のように降って湧いたような話もありまして、なかなかそこの調整というのはできないんですね。しかし、例えば新キャンパスの話でいきますと、新キャンパスをつくって、ある程度余裕を持っておく。全部を最初に建ててしまわないことで、いろいろな次の世代の可能性というものを受け入れられる状態をつくっておくというところが一つ大事かなとは思います。

渡辺（一）：
ありがとうございます。
今のお話を聞いていて、市役所が今までほとんどの市民とかかわりがなかったところを、かかわりがある場所にどう変えていくかということだったりですとか、それでは基本構想はどうやったら覆せるんですか、という視点もあります。それは、今までのお話を踏まえてでも、覆すことは「どうやらだめっぽい」とみんなが話している状況だったら（議論を）やめたらいいじゃないですか、とも思います。一方、それはどうやったらできるんですかということ思います。では、別にだめっぽいということを総括していただくわけではありませんが、小野田先生お願いします。

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホール」とは何か」を考える

しい市民運動の歴史など、過去から未来に繋がる市政の展示ギャラリーがあり、市民はそれが面白いから、それが見たくて市役所に来る、という流れができるくらいの「市役所ならではのコンテンツ」を揃えることができれば、それが町に賑わいを産むことにも繋がるでしょう。そして、展示機能に付随して、市民が質問をしたり議論をする場所をも併せ持たせ、そこでの市民の動きが議会に届くことも含め、市民参加型の市政に転換していく場になっていく必要があると思います。
ですから、市役所の行政機能とは別に、市民広場に沿ってレストランを置くなどして賑わいの場を作ることもできるとは思うのですが、そうではなく、本丸の市役所をいかに市民中心の市役所にできるか、ということが求められているのではないかと思っています。
分かり易く言うと「まちづくりセンター」や「まちづくりギャラリー」というような機能があると良い。シンガポールでもそういった場所が実現しており、それが観光資源となり、市民や子供にも親しまれているので、是非仙台市でもそのような取り組みをして欲しい。

具体的に言うと、継続的な賑わいコンテンツとしての「まちづくりセンター」や「シティギャラリー」といった機能が市役所の中心にあるべきだと思います。例えば、シンガポールには国の施設として「シティギャラリー」があり、シンガポールという国がどのように未来を考えているのかということを巨大な模型や分かりやすいパネルや動画などをフル活用してプレゼンされています。また、子供たちもまちづくりに参加できるまちづくりシュミレーションゲームまであり、それらが魅力的な観光資源となって、市民だけでなく、多くの観光客もやって来ていますので、ぜひ仙台市でもそれに負けないぐらいの取り組みをしていただきたいと思っています。以上です。

榊原：
ありがとうございます。先ほど内田さんがおっしゃった市民の力とか協働ができるというのも、単なるスペースだけではなくて、スペースはもちろんなのですが、さらにもう一歩先を踏み込んでいく機能というか、実際に政策にもかかわれてということですよね。シティーギャラリー、まちづくりセンターというようなキーワードを杉山さんからいただきました。

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

という範疇からもっと踏み込んだ広場を主体的に運営する、管理ではなく運営をするというような主体が、広場の機能や設備をきちんと提供することが必要かと思います。そういう意味では、新しい庁舎ができて、新しい庁舎と広場の関係あるいは定禅寺通との関係というものを改めてこの機会に検討するのが必要かと思います。
もう一つは、道路の話が出ましたけれども、実は仙台市内の自動車交通量は減っています。それはやはり情報化の流れで、いろいろな取引なり情報伝達がＩＴを使ってできるようになったということもあると思うのですが、全体的に今後を考えれば、必ずしも自動車のための道路をそのまま維持するという時代ではなくなるだろうと思います。そういうことからすると、先ほど言われたような市民広場、定禅寺通をつなぐ道路を、日によって、あるいはイベント対応で歩行者専用にするとか、そういった可能性は十分出てくると思います。定禅寺通の今後のあり方で、自動車をある程度通さないような使い方も考えようという話もありますけれども、必ずしも定禅寺通だけではなくて、いろいろな道路空間のあり方というものをやはりもっと考えるべきですし、それを前提にした使い方といいますか、広場空間なり街の場の使い方を考えたほうがいいかなと思います。以上です。

坂口：
どうもありがとうございました。今、山田さんがおっしゃったことでは、例えば仙台市も一部事業化を始めましたけれども、パークＰＦＩや公園を事業的に考えるということと、もう一つ、先ほど本郷さんがおっしゃった社会実験的にとりあえず、そうなるかどうかはわからないけれども、一回試しにやってみて、どんな問題がありそうだというトライ＆エラーを繰り返して、場の使い方とか場所の整備そのものもやるということも重要でしょうか。

山田：
なぜ社会実験かというところになるのですが、私、直接担当していなかったので状況はわからないですが、経験で言うと、公園だからというところが前提です。広場だったらそれを賑やかにする

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

小野田：
ご苦労様です。今皆さんがいる場所は、今から20年くらい前に「公共圏」という概念があって、それでみんなで公共のことを考える、ハバーマスという人が言っておりますが、そういう公共圏をつくり出す装置として公共施設を考えようというので、強引につくったんですね。私はその企画者の一人だったのですが、その時にいろいろな人に呼び出されまして、「お前は何考えているんだ」と、１階のこの一番大事な場所を、普通は図書館とかギャラリーにすべきであろうと、関係者の人に呼ばれたことがあります。
困ったなと思い、こういうことをやろうというか、そのときには公共圏とか何かそういう話もなくて、こういうのを空けておいてもだめでしょうという話だったのですが、最初はだんだんイベントで使われるようになり、最終的に、特に発災以降ですね。発災以降はみんながしゃべる場所として、ここをこういうように使っているというのは、本当にすばらしいことだよなと重います。ここは伊東豊雄さんが設計しておりますが、一番すばらしかったのは、当時の文化課長、生涯学習課長のお２人で、生涯学習課長は前の市長ですが、この方がもう腹が据わっていて、どんどんやろうというスタンスでした。一方、やれないところはやれませんみたいな話でその仕切りをしっかりされていた。やはり市役所も変わっていかないといけないと感じます。20年前の彼女がその時に言っていたのは、市役所も変わらなきゃいけないということ。市民活動や市民が自主的にいろいろ頑張ってやるところは全部やる。市役所など通さないで、そこがやったほうがいいと。そういう人たちの秘密基地にここはなればいいと、公式見解ではないですがということをおっしゃっていて、それが、どれができたかわからないけれども、半分か３分の１か、出来つつあるのはすばらしいなと思います。同時に、それを企画して形になっていくまで20年かかっているというのは、やはり物事というのはすごい時間がかかるよねという話かと思います。
それで、市役所というのは、今までの皆さんのお話のとおり、まずやはり一般市民が公共のことを考えるということだと思います。世界で一番有名なストックホルム市役所、あそこはノーベル賞の授与式をやりますが、シティホールというのはそういう意味であって、いろいろ舞踏会で使ったり、市のことを考えたり、それを楽

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

今１周それぞれお話しいただいて、皆さんのすばらしい時間を平等的に使っていただき、あと休憩するまで20分ぐらいお時間あるのですが、どうでしょうか、もう一巡皆さんのお話を聞いて、何となく皆さんの話をもうちょっと補足したいとか、新しい視点がここあるとか、ここはもっと「私もこの意見に賛同だ」みたいなことがありましたら、ぜひお願いいたします。

舛岡：
アオーレ長岡にはいろいろな施設が入っています、それがみんなガラス張りなのですね。議場もガラス張り、それから体育館みたいなものもガラス張り、だからどんなところか見てわかるし、何しているか全部わかる。それと案内は総合案内所というのがあって、そこにベテランがいる。実は市役所は１カ所ではない、あちこちに点在しています。ちょうど今の仙台市と一緒。ところが、そこで、全部総合案内所で市民の用件を聞いて、どこに行けば全て解決するかというのを案内する。比較的若い女性が案内してくれるのです。だから、そのように人間を使ってうまくやれば、私は超高層のビルである必要はないと。水平分散型の建物でも十分いけると思う。自治研の要望書は後ほど皆さんにお配りしますが、もう少し柔軟に市役所のあり方を考えてもいいのではないかというように思っています。
市民の空間を、居心地のいい空間をいかに拡大するかという発想で、あと施策とか計画というのは集中的にまとまってたてていきますよね。だから、必ずしもこのど真ん中でなくてもいいかもしれませんよね。市民との関係で市の中心地に必要なのであって、市の役人同士の議論だけならば、集中したオフィスでいいわけで、ホールである必要はないですよね。だから、バスの案内は英語で、仙台はシティホールで、県庁はプリフェクチャーオフィスと言っていますね。そういうふうに区分けしていますよね。だから、市民との付き合いを重視している結果が、きっとその英語のシティホールになっているのだろうなと勝手に解釈しています。

榊原：
ありがとうございます。市民とのかかわり方を、まずここに視点を置くべきではないかというご意見だったと思うのですが、どうでしょうか、そのほか。杉山さんお願いします

杉山：

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

ような機能のある建物が建っても別におかしくはないです。ところが公園ということなので、少し広場寄りの機能を入れるときには、従来の公園の法律の中で本当にいいのかどうなのかということを実験しているのではないかなと勝手に思っています。ですからスタートのスタンスといいますか、そこが多分大きな違いになってくると思います。

坂口：
ありがとうございました。
続いて平岡先生ですが、今、４名の方のお話があって、それを踏まえてということでも構いませんので、お話しいただけますでしょうか。仙台市の中心部の定禅寺通を中心とした場のあり方とそこで行われているソフトの展開のような関係から見てみると、こんな整理がある、というお話をされていたと思います。今の４名の方の話で出てきたような、いわゆる定禅寺通と市役所本体とのつながりのような、通りに対する使い方だけではなくて面的な広がりもあると思います。先ほど紹介していたジャズフェスは、どちらかというと、いろいろな場所が点に変わって場に変わるという話しをされていました。平岡先生は、仙台で行われているいろいろなアクティビティだけではなく、いろいろなところでアートの場のあり方について考えおり、他都市のいろいろ事例なんかもご存じだと思います。面的に市役所を中心としたイベントのあり方についての話やアクティビティを誘発するときにはこんなアイデアがありそうだとかという話があれば、何かコメントいただけないでしょうか。今お話があった中で、そういえばこういう切り口があるよということでも構いません。ちょっとお話しいただけますか。

平岡：
わかりました。今の問いかけに直接関わるかわかりませんが、今までのお話を聞いていて、山田さんがおっしゃった広場となったときに、そこを管理，運営する主体をどう考えるのかということは割と大きいと思います。本郷さんがおっしゃっていた広場のインフラをどう整備するか。当然庁舎と合わせてどういうふうに機

しく考えるという、一緒にワインを飲みながらやるというような、そういう場所として使っているのです。ですから、やはり新しい市役所も、公共とは何かということを気取らずに、気取らずにというか堅くならずにみんなで考えるということでしょうか。逆に言えば、一時的に公共の仕事を委託されている官僚の人たちから、そういうのを取り上げるという、そういうかなり革命的な場所であるべきで、それをどうやって担保するかというのがまずやはり大きく一つあります。

もう一つは、やはり市役所はそれこそ3,000人が働くわけです。みんなほぼすばらしい大学を出ていて、エリートなわけですね。エリートの人たちが数千人集まってかなり高度なことを考える場所とは一体何なのか。それこそ書類業務やるだけではなくて、この市をどう経営していったらいいのか、もしくは21世紀は、先ほど佐藤さんのご説明にもありましたけれども、もう都市間競争の時代で、国家乗り越えて都市同士でビジネスのやりとりをするようになっているから、そういう中でどうやって仙台を売り込んでいくか。百万都市仙台を売り込んでいくかというようなことを本気でやり始めると、書類業務を粛々と腕当てをしてやっているのでは全然だめで、アドホックにいろいろな取り組みをしたり、パートナーシップでNPOの人たちと一緒に取り組んだり、NPOの人たちがどんどん内部に入ってきたりなどで、そういうようにオフィス環境も変わらなきゃいけないんですね。その一方で、やはり住民のプライバシーを扱うから、セキュリティを相当厳しくしなければいけなくて、これはかなり高度な織物でもあります。みんなが「これやりたい」と言っても「ああそうですか、お願いします」というものではありません。

そういう難しさがあり、一方そういう夢もあり、しかしなぜこうなっているのかというと、やはり最近の行政に対する厳しい目というか、特に今二つの目があります。一つは人口も減って税金の収納も減っているから、無駄遣いはするなという視点。できるだけ普通のものをつくれというすごい圧力があって、我々は「華美問題」と呼んでいますが、華美というのはカビの「かび」じゃなくて、花かんむりの美しい豪華の「華美」のことです。この場にいらっしゃる方々のお力も頂きながら、復興公営住宅などをいろいろなところでつくりましたが、少々しっかりとつくると、すぐ「華美だ」と指摘されます。「自力再建する人は大変なんだから、立派

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

議会については余り話題に登らないようですが、議会をこそ「市民のための」住民参加型の議会に変革していく必要があると常々思っています。例えばイギリスのウィンチェスター市議会だと、まず担当職員が説明して、議員が質問をして職員が答弁するという普通のやり方の後に、職員が退場して議員だけで議論をし、最後は傍聴に来ている市民に議長が意見を聞く手順で進められているようです。このぐらいの対話、討議が行われると、市民も議会に関心を持つようになり、よりアクセスしやすい場所、別棟とか最上階とかではなく、市役所1階のロビーに接してガラス張りで置かれることが望ましいと思うようになるでしょう。議会の構造も雛段状にしないでフラットな床とし、議会以外の多目的な用途に使えるぐらいの設計にしておかないと、せっかく大金をかけて建て直す意味が無いとさえ思います。もう少しそのあたりのこと、つまり、新しい市役所の新しい議会、仙台発の試みをぜひ検討いただきたいと思います。

榊原：
なるほど。逆に、議会に傍聴へ行くというのも本当限られますよ。私も逆に言うと行ったことないなって、今伺って。（「障害者はア

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホール」とは何か」を考える

能、インフラを分担するのかという話もあると思いますが、使おうとしている人たちがどういうふうに考えるのかといったことがやっぱり関係してくるだろうなと思います。

先ほど本郷さんから「せんだいヤタイ」をご紹介いただきましたが、あれはうちの学生たちもよくお借りしていて、いろいろなところで屋台を建てて実験をしています。そういった場が少しでも増えてくると、いろいろなことをやりたいと実験してくれる人たちもいるでしょうし、こちらの音楽ホールのご紹介でもあったとおり、いろいろな意見が出てくると思いますので、そういったところがうまく吸い上げられるといいかなというふうに感じていました。

もう一つ、広域・面的にということでいきますと、例えばせんだいメディアテークですと、ここのオープンスクエアは定禅寺通と直接的につながった公開空地になっていて、ダイレクトに人通りのあるところとつながっています。今度の庁舎は間にオープンスペース、市民広場を挟んでの定禅寺通に対して奥まったところにあります。そういったところでは使い方も当然違ってくるでしょうし、周辺の関係のつけ方、影響の及ぼし方も大分違ってくるの

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

過ぎてはいけない」と言われます。立派などの考えではなく、きちんとコミュニティのことを考えて、しっかりつくっていただいているのです。お力を頂いた方々は皆さん設計が上手でしたので、結果立派に見えてしまった部分はあります。すると、「そんな立派なものは求めていない」という指摘を頂く。コミュニティ等を勘案しないでつくった結果、結局はほかに転用できずに、そこに住んでいる人がいなくなれば不良債権となってしまうようなものが沢山出来てしまいました。住民に愛され、コミュニティにも活用されて、例えば瓦屋根で、空き部屋になったら宿舎としても貸し出せるように、冗長性あるように設定していたのですが、なかなか実現はしませんでしたできるだけ普通につくりましょう、できるだけお金を掛けずにたくさんの部屋が確保できればいいですよねというようになってしまいました。
もう一つは、私は現在、幾つかの自治体で市役所なり区役所のお手伝いをさせていただいておりますが、出だしはいいのですが、だんだんと話が進んでいくといろいろな解釈が入り、いろいろな立場の方の影が見え隠れし、なかなかやるべき本筋の議論に向かい難いようにも感じます。そのような中で物事をやろうとしたら、誰からも文句を言われないような凜としたものにならざるを得ないと思います。
では何がこれを展開できるかというと、信頼なのだと思います。これはベタな気持ちで絆みたいな感じで言っているのではなくて、これは社会学者のルーマンがはっきりと「社会の中の間接コストを減らして創造性を発揮させるためには、やはり信頼が鍵なんだ」というのを言っています。やはり信頼を獲得して、こういう議論を重ねていき、また信頼を獲得していく。公共性とは何かという実態を、こういう議論を積み重ねていくこと、また、我々も勉強して、新しい働き方とは何か、オフィスはどうなったらいいのかというのを一生懸命勉強し知恵をつけて、次のステージに向かう。例えば、土地を節約して高層化したビルの仮想設計をしているかと思いますが、そうすると土地代も安いし、床もいっぱいとれるし、一見得なんのですが、フロアが小割になりエレベーターで皆さんは移動しなければいけなくなります。すると、昼休憩のためにずっとエレベーター待ちをするようになってしまう、某都庁は実際そうなっています。市役所は機能替えも多いので、本当に機能のことを言えば、ワンフロアをできるだけ大きくしたほうがいいとい

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

クセスできないので」の声あり）そもそもアクセスが、障害をお持ちの方とかアクセスが厳しいということですか。
横山さんお願いします。

横山：
今の杉山さんの意見に、先ほどの意見でも私賛同しているところがあるのですけれども、その市民ギャラリー、シティギャラリー、要は組織を持たない個人、私が何をこだわっているかというと、組織の中で埋もれている意見てたくさんある。今日ここにいらっしゃる、ほかのテーブルも含めてお話しになっている方は、発言力のある人、影響力のある人だったりするのですけれども、そうではなくて、一個人として本当にいろいろな課題をお持ちでいて、実はアイデアも持っている方とかいっぱいいらっしゃると思う。ですから、同じ場所で同じ時間にこうやってミーティングする、会議に参画するということが苦手な方も含めて、でも、やっぱりきちっと意見を伝えて、それを活用するって大事だと思うのです。なので、今のような、自分で行って、舛岡さんのお話もそうですけれども、行って、何かその問題点を「あっ、なるほど」と。まず、市が考えていることであるとか、そういったものを見ながら、もっとさかのぼると国が考えていることをそこで知って、なるほどと。自分の課題を、こうやれば解決できるかもしれないというアイデアをそこで落とし込んでくることができて、その後、専門家の方とか議員さんも含めて、それをきちっと読み取って反映できるということ、これ要するに声が大きい人の声ばかり拾うのはよくない、それから多数決も私はよくないと思っていて、そうではない、本当にいろいろな考えを持っていらっしゃる方、それで自分の意見を持っていらっしゃる方の小さい声でも拾えるような場所になるとすごくいいと思います。
歴史に学ぶことも大事ですけれども、伝統とか歴史に固執しないで、いろいろなことが変わっているので、それに柔軟に対応するというのは、そういういろいろな人の声をきちっと聞くということだと思うので、そんな場所としてのスペースなり、あとソフトも含めて、ただメモで置いてきましたではなく、それはきちっと意見書になるような、何かプログラムに入れるとそれっぽく見えるとかってあると思うのです。そういう機能と場所をぜひ必要だと思いました。

榊原：

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

だろうなと思います。例えばせんだいメディアテークですと、ここを中心にして周りに小さいギャラリーができたりいろいろなお店ができたり、文化的な「城下町」のような動きがあります。例えば市庁舎ができて多様なオープンスペースができたときに、その周りに対して城下町といいますか、いろいろな動きが張りついてくる。それが具体的にどういう動きになるか僕はわかりません。ただ、そういったことがあるのかなというふうには思いました。せんだいメディアテークの図書館やギャラリーへ日常的にいらっしゃる方と、庁舎にいらっしゃる方とは違うかと思うのですが、イベントのときには市役所，県民会館，メディアテークと，定禅寺通の東と西で、回遊するということも出てくるかもしれません。

坂口：
ありがとうございました。せんだいメディアテークは今１日来場者が大体 3000 人から 4000 人ぐらいで、年間でいくと 100 万人ぐらいの数になって、それが 2001 年開館なので、17 年目になると思うのですが、トータルでいくと一千何百万人の人が延べで来ていることになります。それぐらい日常的に人が来る場所ができると、今、平岡さんがおっしゃったように、カフェも出店できるのですが、出展する際、何となくせんだいメディアテークに人が来て、こういう人が来るからこんなカフェを開店しようかということが考えられると思います。単に人の数だけでなくて、そこにどういった人がどういった形で集まるかによって多分周辺の場への波及効果も違うように思います。その辺はいかがですか。

平岡：
そもそも、せんだいメディアテーク周辺の都市環境といいますか、割と小さいビルがあったり、家賃が安く借りられたりとか、チャレンジできるような環境が周りにあると思います。庁舎の場合は、周りに勾当台公園のようなオープンスペースがありますので、そういった公園のいろいろな場を使う方々が見て選んで使えるような動きが出てくると、先ほど定禅寺ストリートジャズフェスティバルでもありましたとおり、波及効果といいますか、周りに広がっていくかなとは思いました。

うことはみんな知っているのですが、表面上の額面は高層化し建てたほうが容積当たりの表面積が減り安くつくれると。あまり中高層にすると今度は竪動線などのコアが増え高くはなるのですが、高層で建てたほうが分棟にするよりは表面積が少なく済み安いため、そちらに行ってしまいます。しかし、実際は昼休みなどの渋滞が発生し、たくさんの人の有効な時間が削られ、10年後ぐらいにはそちらの運用ロスのほうが大きいのが目に見えるのにも関わらず、目先の問題で議論をしてしまう。
前市長は、当時の生涯学習課長の立場で、新しいものをしなければいけないが、お金もかけられない、構造的に手も縛られている、「何とかならないか」と相談されました。「何とかならないか」というのは、いかにも漠とした質問だと思いましたが、あの方らしいとも思います。そのようなご縁もありましたので、大学の課題にしようと思い立ちました。大学院生1年生は通年この課題、市役所の問題を解くことにしました。ただし、学生さん自由でいいよね、では話になりませんので、事務当局から本物の情報をもらい、外に漏らさないように守秘義務契約を交わし、それで1年かけて都市計画上のチェックから、ベーシックなコストから、何からかんからを一通りやりました。
学生の一つの提案としては、定禅寺通の市民会館のところ、県民会館のところ、メディアテークとを改装して、あと小さいボリュームを向こうの定禅寺通の勾当台公園につくれば、何か四つぐらい分棟で、定禅寺通が廊下になって、市民局がどこにあったか、ここ（メディアテーク）が文化局か何かなのですが、アイデアとしてはこれが一番よかったのですが、さすがに現実味がないなと。その次は、市民広場を全部利用し建物を建てるという提案です。市民広場はあまり長期占有させてはいけないというのでこれも亜現実味は無いですが、それでも、市民がみんなで「あそこ、いいよ」「新しい市役所をつくるのに、ここ5年ぐらい使えなくてもいいよ」と言えば、それも不可能ではない。実現するにはちょっとハードルが高いけれども、それでも結構おもしろい案は幾つかできており、ホームページでいろいろ見ることが出来ます。
さらにより現実的になると、最初に議会と周辺の機能だけを噴水のところに建て、後で議会を引っ越し、旧議会棟と手前の会議室を解体する。分棟になりますが、別の棟に建ててやると、自由度も上がりおもしろいものはできなくもない。しかし、さらにもっ

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

ありがとうございます。今の話はちょっと竹下さんに聞いてみたいのですけれども、Venus
Club、さっき女性20歳代から60歳代の方々が、100人会員がいるということで、今の声の小さな意見というような話というのは、どうですか、Venus　Clubの中ではやっぱりありますか。

竹下：
ありますね。私なんか活動していて、先ほど横山さんがおっしゃったように、こうやって積極的な方とお会いする機会が多いけれども、今日お会いした方々は、専業主婦の方と、あと個人事業主の方3名とお会いしたのですが、会員さんの悩みを聞くと、それが私の中で、ちょっとお仕事の話になりますけれども、ビジネスのヒントになることがすごくある。なので、私、「悩み相談は宝の宝庫」というふうにいつも言っているのです。そういったぜひ、例えば別な話をすると、私よく自分のことを、何かやることを考える時に、5歳児の自分と過去の自分とプロデューサーの自分と今の自分で、4人で判断するようにしているのですが、特にこういった新しいものをやる時って、5歳児ぐらいのお子さんの考えをぜひ取り入れてほしいなと思うのです。私たち大人になってしまうと、夢とか、何か現実的に考えてしまって、ワクワク感がすごくなくなってしまって、結構、私、今子供もうすぐ8歳なのですが、子供のほうがああそれって面白いねって思うことを結構話すのですね。なので、そういった盛り込んでいただいた、「市民に一番近いシティホール」であったらいいなってすごく思います。

榊原：
悩み相談がビジネスに繋がるという話でした。行政側からすると、政策に繋がる可能性もあるということですよね。さっきオフィス棟にこもっているだけでは多分政策がつくれなくて、5歳児という話を聞いて、うちの娘もちょうど今5歳児で、その5歳って何か一つキーワードあるのかなと今思って聞いておりました。
澤口さんも、泉青年会議所とかでありましたけれども、組織の中に入って、そこで埋もれてしまう少数の声というのは、どうですか、そういう件に関しては。

澤口：
それはもう青年会議所に入ってきている人ですら、それはもう強い意見に流されることが起きていますから、一市民となるとなか

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホール」とは何か」を考える

坂口：
ありがとうございました。武山さんにお伺いします。今回観光というテーマもあるのですが、市庁舎そのものではないと思うのですが、仙台市として外から人を吸引するような場を考えるときには、都市・仙台としてどういう場所がいいでしょうか。もう一つは、例えば山形と仙台、あるいは東北における仙台とか、多分そういった観点から青年会議所さんのほうでもいろいろな考えとか取り組みがあると思うのですが、行政とは違うスタンスとして都市・仙台にそういったインバウンドの効果を考えた場合、全体としてどういったことが今求められていると思いますか。少し具体化して、この辺の定禅寺通周辺や仙台市中心部ではどういった部分が必要とされている、あるいはこういった意見があるよ、というところがもしあれば少しご紹介いただけますか。
武山：私も余り専門家ではないので、踏み入ったところの意見というのはちょっと難しいのかなと思うのですが、やはり東北に来る外国の方というのは仙台を軸に来る方が非常に多いというのはお聞きしております。実際、全国の中で東北に来られる外国人旅行者数というのが0.1％程度に過ぎないというので、インバウンドに関しては東北自体、震災で出遅れたこともありますが、一丸となってやっていかなければだめなのかなと考えています。やはり外国の方が何を目指して来るかというと、仙台では、本年度は文化横丁だったのですが、サブカルチャーであったりします。そういった、地元の方々に親しまれているようなところを海外に発信していくということをやっていきました。その中で海外の方も文化横丁や、例えばこの定禅寺通の風景や勾当台界隈の居酒屋さんやカフェ、そういった地場の方々のふだんの何気ないものに対して非常に興味を持たれていたというのがありました。先ほど本郷さんがカフェとかそういった観点で街を賑わせていきたいと仰っていました。勾当台公園の大きな広場は海外の方や観光客の方に発信する上では非常に有効なスペースであると僕は思っています。そういったところを使った上で地域の復興のために何かしらやっていかなければだめなのかなと考えております。

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

とストイックな案として、市役所、議会も壊さず、噴水広場だけの範囲にぎりぎり頑張って高層を建てたらどうなるか。どうして先に議会棟を壊してはいけないのかというと、分棟になると少し建設費が高めに出るからです。ちょっとの差ですが、そのちょっとの差をどういうようにみんなで考えるかということです。ですので、大きい志を持ちながら物事を具体的に考えるということをどのぐらい頑張ってできるかということが多分勝負だと思います。どうしてもみんな好きなことを言いたいけれども、あまり勉強はしたくないから、「いや、こういう夢のあるのが、もっと夢のあるのがいいよ」と、「じゃ、それどうやってやるの」と、「どうやってやるかどうかは専門家の仕事だろう」とみんな言いがちですが、そうなると何も進まないので、専門家もない頭を絞って、法律のこととか、政治のこととか、建築のことを勉強しながら一緒に考えるから、皆さんも一緒にやりましょうねと、みんなで一歩を踏み出しましょうというのがこの会の趣旨と伺っています。
そういう意味では、大学で始めたときには随分学校内でも議論がありました。商工会や市役所の若手のスタッフにも随分手伝ってもらいましたが、最初のころはやはり大学の企画ということで、みなさん来るのを怖がっていました。しかし、一昨年ですが、1年間やり続けたことにより、「あ、このことを話してもいいんだ」「かなり突っ込んでもいいんだ」ということになりました。都市デザインワークスが主催するいろいろなトークイベントもあり、それからまたここに引き継がれどんどん大きくなり、拡張していろいろな議論が広がっていることはすごくいいことなんじゃないかなと思います。これをどうやって今後進めていき、ちゃんとした議論にするのかというのは、ぜひ皆さんも汗をかきながら、私もお役に立てるところでお役に立ちたいというところです。

渡辺（一）：
ありがとうございます。まさに今、ある意味論点を少しまとめていただいたと思ってお話を聞いておりましたが、その都市ビジョンとか、本庁舎をどう考えるかということは、私たち市民が公共ガバナンスをどうやって取り戻すか、自治をどう取り戻していくかということでもありますし、それというのは、「じゃ、もっといいものをつくってくださいよ」と簡単に言うのではなく、これぐらいコストは増えても、こうしたほうが長期的にいいので、我々

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

なか、それは本当に起きるのだろうなと思いますし、また、先ほど杉山さんのお話を聞いていて「なるほどな」と思いつつ、ガラス張りも構造的に行っていく必要性もあると同時に、先ほど私がお話ししたようなサロンとかに、強制的に職員の方とか議員の方がいて、話を聞いて市民からの質問に対応していく、それによって何か創発されていくみたいなのが起きてくる必要性もあるのかなって、皆さんのお話を聞いていて非常に感じました。

榊原：
ありがとうございます。それでは、平賀さんお願いします。

平賀：
まさにそのとおりだと思います。私が今回予算を取ることができましたのは、一般市民がたくさんいたということですね。その方のおかげで、そのお声がなければ区役所も動かなかった。やっぱり市民の声が大きかったので、そういうことが一番大事だと思いました。
何も言えない方々の意見を取り上げるということ、私は大賛成です。それとともに、今言ったように、一部の人しか知らない、いろいろなことをね。これもっと知ってほしい、どうしたらいいのだろうなと今思っていまして、メディアが少し取り上げていただいたらいいのですけれども。
あと、予算の取り方が非常に難しくって、いろいろな意味で制限があり、行く段階がいっぱいあったのです、今回の会議は、私の場合はですけれども、市役所の方が積極的に全員参加してきた。その部門に携わる人が。それと市民と一緒になって、「やっぱりいいよね」「じゃあ、やろうか」というふうにまでいったのですね。ですから、「ぜひみんなで言うことをやめないでくれ、そうでないと市役所は動けません」と言われたのですよ。ですから、市民が一緒になってやれば、区役所が予算も取って動くということが今回わかりましたので、ぜひみんなでそういうふうな、みんなで言える、参加できる、そういう表現のできる場所、本当に一般市民のおじいちゃん、おばあちゃんと、横町のおばちゃんたちなのですけれども、ぜひ皆さんもやってみたらいいと思います。言うだけでなくて実行あるのみです。言い続けることです。ぜひよろしくお願いします。

榊原：

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

坂口：
ありがとうございました。もう一つは、さっきお話があったように、インバウンドで効果を考える、例えば仙台空港からここまでのモビリティや、あるいは海外の人が来たときに、さっきワンストップという話があったと思いますが、ここに行くと仙台のいろいろな文化的なアクティビティがわかるような窓口機能といいますか、何かしらそういったアイデアもあったように感じます。その辺もし何かコメントがあればいかがですか。
武山：アイデアというのは今ぱっとは浮かんでこなかったのですが、例えば昨年度、私、台湾に行った時、1カ所に行くことで台湾全土の風土や文化・伝統が感じられるところであれば、そこがくさびとなって人が呼べるのかなと思いました。1カ所で全ての機能を賄えるような、ぜいたくを言えばですけれども、そういったものを考えていってもいいのかなと考えていました。

坂口：
ありがとうございました。
清本さんにお伺いします。さきほど仙台祭や仙台・青葉まつりに始まって仙台の歴史的な経緯から、現在の祭りでも、それは実はそんなに古い話ではなくて、いい意味でつくられてきている部分が結構あると仰っていました。今お話があった観光について、あるいは、外から見たときにそういったお祭りのおもしろさがどのあたりにあるのか。2つあると思います。一つは、単におもしろいだけではなくて、それがある種歴史的な経緯を踏まえてこうあるべきではないかという祭りの主催側の話があると思います。もう一つは、それが継続していくためには、例えば外国の方におもしろいと思われることがいいかもしれないし、すずめ踊りを子どもたちに教育・普及していく試みをされていますが、そういった場が持続していくためには、ソフトとしてこんなことをやっているということもあると思います。この辺の定禅寺通界隈や、少なくとも仙台市中心部で今そういったイベントを継続していくための課題になっている部分と、逆に言うと、これらが続いていくときには、必ずしも観光じゃなくていいと思うのですけれども、街としてプラスがあるのではないか、ということもあると思います。

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

はそれは織り込みますということを市民側がきちんと言えるかどうか。それこそ、市民広場を５年間使えなくても、我々はそれでもいい市役所ができることを望みますという方々がちゃんと出れば、ああいう、多分オフィスビルっぽいのが建って、「こんなもんか」というようになってしまうそれが今の市役所だともっと狭いところに高層化として入れるということになれば、よりタコつぼに入っていくことを我々が助長することになる。少しでも安くしようとするだけで、我々の社会的コストが上がるかもしれないということは、わざわざ市役所は書かないと思います。そういうことを言ったら、炎上するからなのですが、それをこういう中で少し表に出していければ何かが変わるかもしれないなとも思いました。

＜休憩＞

渡辺（一）：
今日は本当に筋書きのない会をしていて、何か皆さんに問いかけて、それがまたこちらに戻ってくるという感じでしょうか。前半戦、幾つか論点というか、「こういうところなのかもね」というお話はあったかなと思っています。
一つは、「基本コンセプトがイケてないらしい」ということと言いましたが、それは我々が市役所などの公的事業に枷をしているのではないかと。普通でいろ、華美ではあるな、安くしろなど。それを我々がやっているがゆえに、なるたけ行政は隠したがる。取り付く島も無いと言ったほうがいいのか。
一方、つまらないものになってしまうものを覆すための幾つかの方策みたいなのがあるのではないかという視点を、先ほど小野田先生から頂きました。例えば、市民側が「よりコストを負っても、こうしていいよ」というように言えるような何か。現状で言えば、基本構想が決まったら、一応パブコメのようなものはあり、次の基本計画が決まったら、もう一度パブコメのようなものがあると。基本的に決まってからではないと、我々は意見が申し上げられないのですが、決まる前にはどうやれば我々は参画できるのかということと、それともう一つが、A 案、B 案、C 案のような案を並べ、初期コストは低いけれども、中身としてはいまいちです。しかし、280 億で済みます。こちらの案は 350 億かかるけれども、多分中長

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホール」とは何か」を考える

せっかくここで言ったことを実現させるために、ずっと言い続けるというのがよかったようですね。

平賀：
そうですね、言い続けてほしい。その中の一つが、今度スポーツミュージアムをつくらないかという意見が出まして、仙台市で、これで活躍する人がたがいらっしゃるのですね。例えば羽生結弦にしたって荒川静香にしたってそうですけれども、あとダルビッシュもそうですしマー君もそうですし、それからゴルフの松山英樹とか卓球の愛ちゃんもそうですし、高松ペアのバドミントン、それから卓球の張本もそうですし、非常に世界で活躍している人たちが忘れられてしまうことが非常にもったいなくて、一時期終われば終わってしまうと思う。そういうものをやりたいという声も市民の中に出てきましたので、そんなの市役所でつくれるかどうかわからないのですけれども、何かそういったものをぜひやりたいなと思っています。
誰でしたっけ、西公園を新しくつくるって言ったの。あそこはなぜいいかというと、あそこから青葉通に山車、青葉まつりの山車が出ると青葉通に出られるのですよ。なぜかというと陸橋がないから。広瀬通には入れないのですよ、陸橋があるから。だから、あそこにつくっていただいたら、お祭り会館つくって、それからマルシェをつくったり、そこぜひよかったら。

榊原：
佐藤さんちょっと振られたので、その先にぜひ。

佐藤：
先ほど竹下さんからも５歳のお話が出ましたですね。それで、今、自分がすごく感じているのは、「声」という言葉は、一つは音声の言葉ですよね。ですが、子供たちって音声だけではなく、形をつくったりするのが特に得意で、だから、よくまちづくりをやる時に、実は三次元で表現したほうが先にいろいろなことを表現できてしまうみたいなところがあって、それを説明する時にどんどんどんどん言葉が出てくるみたいな、そういうふうなところがあるので、何かそういう多様なボディワークもそうでしょうし、あと音声で伝えるということもそうでしょうし、あと言葉で伝えたり、あと絵で伝えたりとか、いろいろな多様な表現を受容するような、何かそういった試みというのですか、それが特に子供たちには重要

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

さきほどお話があった、歴史的にこうやって続いてきたということの延長線上に、少なくとも仙台の祭りの意味みたいなものの理解が進むのかなと思います。そういったことに対して、実際にやっていらっしゃる活動もあると思いますし、考えていらっしゃることもあるかと思いますけれども、少しお話しいただけますか。

清本：
先ほど通行止めになっていてよかったとおっしゃったところ、多分おかげ横丁と呼んでいるのではないかと思います。仙台・青葉まつりのときもおかげ横丁は歩行者が通れなくなって、そこで独自のイベントをいつもやっていて、とても楽しいです。定禅寺通を通行止めにして定禅寺通で踊らせていただくのですが、それはもう本当に一度皆さん踊ってみていただきたいと思います。プレーヤーとしては本当に、とても楽しいというか素晴らしい経験です。宵まつりの最後は、観客の人も一緒に入って踊れるようにしていて、そんなに大人数ではないのですが、毎年少しずつ人が増えて一緒に踊るということをやっております。
仙台・青葉まつりもこれから本当に歴史を深めていくと思うんのですが、ほかの何百年も続いているお祭りとは違うお祭りです。今度、青葉山の公園も整備されると思いますが、その公園の手前、片倉小十郎邸跡のところに公園センターができると思います。そこに行けば観光のことが何でもわかるセンターにしようという試みもあるようですので、定禅寺通から西公園、大橋を渡って青葉城という、そういうつながり、全体の中での街の活用というものも考えていったらいいのでは、と思っております。
それと、仙台の子供というのは皆すずめ踊りを踊るように徐々になってきていて、仙台らしさにつながっているように思います。低学年はすずめ踊り、高学年になるとよさこいになる学校が多いらしいのですが、でもやはりみんな共通のものとして、このメロディを聞けばお祭りのことを思って仙台がふるさとだと思えるように、子供たちがすずめ踊りをやるというふうに、なってきております。それが今後とも継続していけて、なおかつ、仙臺すずめ踊り連盟で考えているのは、学校と家だけじゃないつながり、地域のつながりで子供たちを育成していこうということも考えてお

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

期的であったらこちらのほうが優れていると思います。折衷案として、300億ちょっとぐらいでおさまると思いますが、どっちつかずかと思います、というようなものしか選べない。また、多分我々のまなざしがそれも生んでしまっていると思いますが、ビジョンをつくれない人にビジョンをつくれと言っているのがそもそも間違っている気がすると。市役所の中の方々に、都市ビジョン、先ほどの50年後とか100年後とか、世界に通用するみたいなことを考えてくださいと言うのは酷な話であって、それを決めるとか、形づくるということがない中だから、結果、こういう当たり前の計画が出てくるのだろうと。
では、その都市ビジョンとか、都市構想みたいなものは、どうやれば我々市民がこしらえることができるのか。つくったほうがいいよねと皆さんおっしゃるけれども、どうやったらつくれるのかという内容を、1時間では終わらない話かと思いますが、アイデアでも結構ですので、お出しいただきたいと思います。もしかするとこの場が何回か続いていくことがそういうことになるのかもしれないし、それ以外のこともちろんあるんだろうし、何かそういうのが後半話せればねと思っておりました。

では、三部さんが、言いたいけれども後回しにする仰っていたかと思いますのでお願いします。

三部：
先ほど私が中間報告、5月の案を見たときの印象をハードソフト面で話したわけですが、これからは今ファシリテーターからあったような部分ですね。実はパブコメの中で、7月から8月には300件近い件数が出て、この中に重要な視点が盛り込まれているなというのが私の理解です。それを私なりに3つの視点でまとめたいと思います。
大きなテーマでいきますと、1つ目は市役所の外から見たときの話、これは物理的な話です。市民広場などです。2つ目が市役所とは一体何だろうかというハード、ソフトを含めた話、3つ目が建物の計画のあり方のような部分で、建築的な話です。
1つ目の空間的な視点というのは、あまり出ていませんけれども、このメディアテークのある定禅寺通なりで、特に直接的には南側の市民広場、これに対する意見が多くありました。私が再集計すると市民広場と名指ししたのが11件、勾当台公園が7件、定禅寺

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

かなと思いますので、ぜひそういったところも含めて見てほしいなと思います。

榊原：
先ほど杉山さんのほうから、まちづくりセンターみたいな、模型とかもやっぱり飾ってあるのですか。

杉山：
やはり分かりやすさから言うと模型が中心になりますが、その模型やパネルの前には市の方がいて、自分たちの計画を詳しく説明し、それを聞いた市民からの質問を受けるとか、職員の方が難しければ、まちづくりＮＰＯの方に委託するとか、弾力的な体制で、大きな模型と分かりやすいパネルと楽しい映像とコーディネートする人がいる場所ができると、ちょっと行ってみようかという気になると思うのです。やはり市政に関わる「市民中心の市役所」を本気でつくるには、ちゃんとお金かける必要がありますが、結果として市政への市民参画や協働が活性化し、さらには「魅力的な観光資源」と呼ばれうるところまで持っていければ、極めて効果的なお金の使い方だと思います。

榊原：
あれですね、市民の声を獲得するためのツールみたいな、もうツールなのか、ツールとして今声だけ、声というのも表現の仕方もいろいろあるので、模型というものがすごく、5歳児から多分大人まで理解がしやすいという共通のツールとしては、そういうものが必要なのではないかなということだったと理解しました。
今までの議論を伺ってどうでしょうか。

内田：
一番「5歳児でも」というところがすごくあれだなと思って、子供たちの参画というところで、前に市役所をつくるワークショップみたいなのに参加させていただいた時に、高校生の方と一緒で、「でも、私たちの年代は市役所関係ないし」みたいな話になって、それでは「どうしたら来るのだろう」って言ったら、インスタ映えする市役所、「インスタ映えしたら絶対みんな来る」って言って、「なるほどね、ビッグ・ベンとかあるね」みたいな話になって、いろいろな視点でいろいろな人が来るとなると、そういういろいろな方法を使って来るというのがあるのだなと思って、子供の、高

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

りまして、そういう活動も今後ともやっていきたいと思っております。

坂口：
ちなみに、武田さん、定禅寺通の道路が止まるというのは、仙台のイベントとしては仙台国際ハーフマラソンとSENDAI光のページェントと、仙台七夕まつりと定禅寺ストリートジャズフェスティバルも止まりますよね。ほかは何が止まるのでしょうか。

武田：
あとは、片側車線だけ規制のかかる実業団対抗女子駅伝。

坂口：
クイーンズ駅伝。

武田：
あと、杜の都全日本大学女子駅伝が一部止まります。

お話ししましたように、仙台国際ハーフマラソンは750メーター全部、両側止まります。それとスポーツでは、昨日行われたクイーンズ駅伝 in 宮城は片方だけ止まります。それから杜の都全日本大学女子駅伝は行ってきて戻ってですから、同じところを2回程ずっと閉鎖しています。パレードは人を集客できないので、定禅寺通を使っていないです。

坂口：
定禅寺ストリートジャズフェスティバルは実行委員会形式ですよね。自治体主催のイベントではないけれども、実行委員会形式で、歴史的にもいろいろな実績もあり、市民の合意といいますか認知といいますか、そういったものも結構ありますね。でも、定禅寺ストリートジャズフェスティバルで道路を止めたのは、そんなに昔からではないです。大澤さん、このことに関してご存じでしょうか。10年ぐらい前ですか。スタートはそうですよね。でも最初は本当に西公園で、いわゆる公園とか広場で行われたものが、ある時期になったときに1車線道路から止めて開催されるようにな

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

通が4件、それからこのメディアテークなり県民会館なり二日町云々と広くやったものが10件、トータル30件ぐらいあるわけです。これは一般市民が、パブコメに参加された方が、市役所と一緒に認識する空間イメージなわけですよね。ここがやはり市民の目線だなというところの認識が大事だと思うのです。そういう意味で、これからいろいろ議論されていくわけですが、その市民広場のフェスティバルです。いろいろな物産市とか、かなり盛況にやっていて儲かっているという話も聞きます。一方、別な項目に市民の庁舎利用というのがあって、特に低層階、1階とか2階に対する意見だと思われますが、具体的に言うとギャラリー、カフェ、ホール、休憩室、そういったものが欲しいという意味でしょう。一般市民から見ると、そういうたまりの空間というのが不十分ないしないという話なのかなと。これと市民広場なり定禅寺通を抱き合わせていくような話が大事かなというのが1点目です。

それから、この1点目に対してもう一つ、専門家と思われる方々のパブコメを見ると、これも沢山出ていますが、専門家だけじゃないと思いますが、官庁街の中で、国の庁舎、県の庁舎、そして市役所、区役所、さまざまな官庁街の中でどうするんだと。あるいは、先ほど言いましたように、二日町から国分町三丁目までを全部一帯と考える。言ってみれば、最新の立地適正化計画を作成しろという具体的な提案もなされているわけです。それから、これは私も一部検討すべきだなと思いますが、民地に対して、民間の土地については全く触れていないのがこの基本構想であったと思いますが、民間の土地を買収するなり、あるいは一緒に再開発するなりの意見も出ているわけです。具体的に言うと、ちょっと近くにあるうなぎ屋さんなどです。私からすれば底面利用だと思います。これはやはり立体的に考えるべきだなということです。

ここからこのラウンドテーブルが市役所をどのように考えていくかわかりませんが、建替え計画と同時に、ここがポイントですが、同時に市民広場の計画、定禅寺通の計画、あるいは周辺部の民間の土地でもあるけれどもそういったところの話、まちづくりのビジョンを難しいながらに同時に今つくり提案していく中で、この市役所だという認識をすることを、お互いにするということが大事かなと思います。

私も役所におりましたので、パブコメの回答コメントの中に「担当部局に伝えます」というのが結構多いのです。当然それは公園

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

校生を子供と言うかわからないのですけれども、そういう視点て、いろいろなものがあると面白と思ったのを思い出しました。

榊原：

ちょっとこの場はインスタ映えしなさそうですけれども。ありがとうございます。

大体ちょっと今スケジュール的に1時間ちょっとお話し今させていただいて、何となく論点が少しフワフワしてきているので、ちょっとこっちで相談させてください。この後10分ぐらい休憩をして、ほかのところを見てもいいですし、我々まとめる論点整理のところに参画していただいてもいいですので、ちょうど14時半から後半戦にいきたいなというふうに思います。ちょっとその間に我々のほうで論点整理して、後半どういった議論をするか議論したいと思います。では、あと10分休憩ということでよろしくお願いいたします。

＜休憩＞

榊原：

あと1時間ほどお時間いただきます。

最初に、後半ちょっと論点を整理する前に、舛岡さんのほうから、これ市に出した物ですかね、ちょっと今配ります。

舛岡：

実は、私ここの席にいるのは、仙台市庁舎の建て替え構想が出た段階で、2回ほど宮城地域自治研究所という名前で市に要請書を出しました。その2番目の文書をお配りしました。これは、議論を徹底したわけではなくて、各自治研の理事のメンバーがいろいろ期待したいことを羅列したものです。今日出た話と、そう矛盾することはここには出ておりません。以上です。念のためお配りしました。

榊原：

今まで出て、ここの場で議論してきたものも、幾つかご意見として出てきておりますよね。ありがとうございます。

後半は、前半で皆さんから議論をいただいたものを、ちょっと時間が短かったのですけれども、これ仮置きです。何となく皆さん

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

りました。そういったいろいろな経緯があったことで警察を動かしたという理解でいいでしょうか。なるほど、わかりました。

では、高橋さんにお伺いします。先ほど事務所協会としていろいろな活動されているというお話がありました。多分、高橋さんご自身も宮城のいろいろな街の変遷をいろいろ見ていらっしゃると思います。山田さんからもお話がありましたが、定禅寺通や二番丁通の変化を見てみると、あそこの公園とか広場には実はこんな意味があるということがあるかも知れません。もう一つは、最終的には何らかの形で市庁舎ができると思うのですが、そのときに具体的に建築としてもうちょっとこういう部分もあるのでは、という話しはないでしょうか。特に屋外空間と内部空間のつながりや、このテーブルで話されたようないろいろな市民のお祭りやイベントを考えてみていかがでしょうか。事務所協会というよりは高橋さんご自身の提案でも構いません。少しコメントいただけますか。

高橋（清）：

141ビルが定禅寺通に完成したときに、仙台市は徳島市と姉妹都市になっていました。清本さんがすずめ踊りのお話をされましたが、事務所協会の中に阿波踊りの会があります。141ビルが完成したときに、徳島からいらした方たちだけではなかなか人数が少なくて様にならないということで、やっと連という連が仙台にできました。事務所協会の前会長の栗原というのが関わってつくったのですが、今その連から独立したみやじ連が一つ事務所協会にあります。協会の会員や賛助会員、あとは賛助会員の友達がいて40人ぐらいの連があります。そういう活動をしていまして、何かイベントがあると踊ることになっています。

私も仙台に住み始めて46年になりました。イベント広場の前に三菱の大きい事務所があるのですが、あそこはもともと4階建てとか3階建てぐらいの建物がいっぱい連なっていました。市役所ができて8年ぐらいしたときに、そこを区画整理で三菱地所の建物にかわりました。私が就職した当時は、仙台駅から市役所までの通りの中で大きい建物といえば、黒ビルと言われている第一生命ビルが一つ、あとは二番丁の東北電力ビルぐらいで、ほとんど3

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

部局だったり、あるいは別の局だったりするわけですが、これはこれでわかりやすのですが、市民が、我々が求めているのはそうではなくて、一体的にそういうイメージを認識した上で、決定事項でなくてもこれを提案するというのが大事かなということです。ここから先に結論を言いますと、このテーブルでほかの５テーブルも含め、その他も含めて出された項目についての検討をすぐさまやらなくてはいけないということです。
2つ目のポイントは、庁舎規模についてのパブコメが多くありました。「無駄が多いのではないか、無駄がないように」という話や、今の市職員の置かれている環境、居住性、効率性、あるいはユニバーサルデザインの話などが合計27件出ています。それから、建物そのものについて、先ほど広場に関係する話もしましたが、最上階のほうに、要するに建物の上のほうなりのイメージも多く、展望レストランが欲しい、図書室が欲しい、NPOのスペースが欲しいというような意見が37件で、かなり多いんです。
基本構想での規模が、漠然とした設定になっているというのもあります。パブコメの中ではあまり出ていないこともありますが、11の分庁舎がある中で、どう集約しなければいけないのかの分析も足りない。恐らく市の職員がやっているのだと思いますが、この中には別に悪者扱いするわけではなく、外郭団体も入っています。具体的に言うと建設公社などですが、これが職員数も多く、占有している。これも一般的な市民感覚からすると、なぜ本庁舎に外郭団体を入れなくてはいけないのかと、この整理が必要ではないかと思います。
それから、改めて市役所の活動というのは一体何かということですが、建物の中でいろいろなサービスなりをやっていくに際して、その活動をもう少し整理しなくてはいけないのではないかなと。これから将来に向かって人口が減少していく。50年、80年後、100年後、今の百万人を超えていたものが90万、80万などになっていき、税収も落ちていく。恐らくは外国の方、東南アジアを含めてかなり来るようになる。あるいはインバウンドが多くて、あるいは東北各地から含めて、政令市なり小都市、大都市の中での活動、市民活動のことをしっかりと踏まえたイメージを持つ必要があるのではないか、その中での市役所の機能です。
私は３つあるのかなと思いますが、小野田先生が先ほど言われたことと同じところですが、市民への直接のサービスをするのは区

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

の話を聞いていて、何か仙台のまちをつくっていく、基地みたいなイメージかなと。何か子供のころ秘密基地みたいなものもあったし、サロンというよりは、何かあそこに行くとガキ大将みたいなのがいて、何かいる基地。これが一つに集まらなくても、幾つかの基地があってもいいじゃないかなというような感じがしました。これ仮置きです。
今、杉山先生おっしゃっていたように、まちづくりセンターとかシティギャラリーというのもあるかなと思いますが、その中で、何となく皆さん出てきたのが空間的な話と、何か仕組みというかハードとソフトな話と、あとそれ誰がというか主体の話が３つの視点として出てきたかなというふうに思っています。
主体の中で、「市民、市民」という話がありましたが、節々に、いやいや市民だけではなくて職員と議員さん、市役所の現在の縦割りでいくと、職員の方はオフィスとしての市役所を持っています、議員さんは議場としては市役所本庁舎にあります、それではシティホールってなった時に、市民の居場所という言葉がありましたし、行きたくなるみたいな話があったのですけれども、シティホールって今の本庁舎にはないですよね。市民の居場所って、言い方は失礼ですけれども、入り口を入ったところに部屋がありますけれども。市民の居場所にはなっていない、実際問題、これからのシティホールになった時に、下の、職員、議員さん以外の空間的なものというのは、何があるのかなというのを何となく皆さんの節々から感じました。
職員、議員さんとしては政策とか予算を市役所本庁舎が決めていて、そのもとになるのは、さっき悩みという話がありましたし、強い思いというものがあって、そこは何か空間的にも仕組み的にも、主体のこういうものがひとつ合わさるようなものというのが一つの方向性としてあるのかなというのが、前半聞いていての私の感想です。これにまとめろという話ではないので、幾つかの論点があるのですが、私のこの取りまとめでどうか。皆さんの話を聞いた私の整理の仕方でどうかという話と、あと、ここの部分についてもう少し議論したいというのがあれば、それを踏まえて議論していきたいなというふうに思います。どうでしょうか。

横山：
こういう仕組みとか、どっちかというとソフト的なことってすごく大事ですけれども、ひょっとすると違うセッションでやっているかもしれないのですが、ハードね、やっぱり庁舎、要するに建

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

～４階ぐらいの建物しかない状況でした。
先ほどから表小路という市役所の前の通りが話題になっていますが、そこは伊達藩の学校、養賢堂がもともとありました。その養賢堂が行政の建物にかわり、その前の通りを表小路と言いました。ですから県庁の前から市役所の前のあたりがその建物の南側にあって、表通りにあるから表小路と言っています。表小路については、市庁舎を現在地に建てた場合に、やっぱりイベント広場とのつながりがどうしてもあそこの道路で遮られてしまって利用しにくいです。イベントするときには行政のほうで、あそこを歩行者天国みたいな形で止められるような、ふだん何もないときには車は通れるけれども、イベントをやるときには止められるように整備すると、一番利用価値が上がると思っております。
今考えている庁舎というのは５万5,000平米ぐらいの面積があります。二番丁の通りでいくと、大きさ的には三越の２つ南側にあるタワービルが22階建てで、５万5,000平米ぐらいです。あれくらいのボリュームのものが今の市役所の前に建つと、今までのイメージとは全然違う圧迫感があそこに出てきます。あそこに機能だけ考えて箱物の建物を建てられると、やっぱり50年、100年間それをあそこで我慢しながら使うことになる。公園の前にそういう大きな建物をつくるのは、私はちょっと反対です。例えば建物を２つに分け、大きく残る北側の土地に対して、南側からの公園や広場からのつながりを考えていけるようなつくりにしていただきたいと思っています。
今、建物としては、噴水のところに大きい建物を建てるか、あるいは西側に建てるか、あるいは２棟にして建てるか、３案ぐらいあると思うのですが、圧迫感を与えるような大きな建物は、今までの公園周りのボリューム感としてはちょっとどうかなと思っています。

坂口：
ありがとうございました。
では最後、石塚さんにお話ししてもらってちょっと休憩に入ろうと思います。これまでいろいろ出てきたご意見を踏まえて石塚さんなりのコメントがあればお願いします。もう一つ、多分お話し

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

物をこれから建てるってすごく大変なことで、私はほかのまちで減築というか再配置のことをやっているのですけれども、これから少なくなっていく人口の中で、今あるインフラでさえ維持していくのが大変だという議論がある中で、これからつくるものを本当にどうするって、これは市民一人一人にとっても大変なことなのですね。だから、これはひょっとすると市だけでつくるのではない、民間のものも活用するという、今当たり前にやっていることですけれども、ちょっと計画書を見るとどうもそうではないみたいなので、そこのところも本当はちょっと意見を言いたいというか、皆さんもどういうふうに思っているのか聞いてみたいというところではあります。ひょっとすると、その街をつくる基地の中で、そういうこともつくる前にやるべきだというふうに思うのですけれども。

榊原：
市民の居場所だけでなく、企業もそこで何か事業ができているというか、そういうイメージですか。

横山：
公共サービスは税金でやるべきだという基本がある中で、実はもうそれが耐え切れなくなっているのは誰もがわかっているので、その公共サービスの質を下げないように、場合によってはいろいろな方々のためにはもっともっと必要なサービスがあると思う。それはやっぱり民間の力ってすごく大事だというふうに思うのですけれども、そこのところももう議論しておかないと、これからのいわゆる経営は成り立っていかないのかなというふうに感じているということです。

榊原：
今の話は、もう「公共サービスが市職員だけでやる話ではないですよね」というところを、「これからの時代を象徴する意味でも」という感じですかね。ありがとうございます。

平賀：
舛岡先生のこの読ませていただいた中に、「コンペの審査員の選定は一部で決めるな」という、やっぱりもう少し開かれたものにしてほしいということと、それと、これ「今日の会議をやったから終わりね」というのではなくて、「だからどうなるの」というとこ

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホール」とは何か」を考える

になった中では、災害における広場のあり方として、結果的に日常的な使い方が逆に言うと災害時も生きるというお話がさっきあったと思います。災害時において、中心部に大きな広場の空間を持つ意味もありますし、それが結果的に日常的にどういう意味がありそうかということもあると思います。あるいはもう一つは、今日はまだあまり議論できていないのですが、市庁舎ができたときに、さっきの公園のように、公民連携といいますか、そういったソフトの使い方を公と民で一緒に考えていくと、結果的にそれは、石塚さんがご専門のような災害時の対応としてすごく意味があると思います。でもそれは日常･非日常という分け方ではなくて、日常的な連携ができてくることが結果的に災害時における選択肢も増やすということなのかなとは思うので、もしそういった部分のコメントもあれば言っていただけますでしょうか。休憩に入った後に出てきた意見を少し整理して、後半、各論に移ろうと思っております。よろしくお願いします。

石塚：
ありがとうございます。まず、ここまでの感想ですが、それぞれの活動は素晴らしくて、私もそれの参加者として楽しませてもらっています。ただ、本当に庁舎ができるから、そこに広場ができるから、そこの広場スペースを拡張したらそれぞれの活動がよくなるのかどうかというのがちょっとわからないなというか、聞いていて、むしろ広さというよりは質というか、設備面の話なのかなと思いました。
最近、新聞にも出ていましたけれども、仙台市でも人口が減少する中で、そういう大きなスペースができるという機会なのですが、今までのような拡大路線で何か大きな広場をつくればいいという話でもなさそうだなというふうな気はしています。具体的にどうしていったらいいのかなということを、聞きながら考えていました。
災害時の広場のあり方に関しては、設備としてはいろいろ必要だと思うのですが、いきなり災害時に何か使うとかそこのメンバーで使おうというのもやっぱり難しいと思います。いかに日常的にそこを使いながら、またいろいろな人が関わりながら、何か起き

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

役所ですが、直接区役所にない機能があって本庁舎である今の市役所に行かなければいけない。これは一体どのような将来なるのかということが一つ。それから、市民協働というのが大事な話になってくると思いますが、これは区役所にないなというのもあるだろうし、本庁のほうが割とほかの区役所を含めて全市的にやったほうがいいなという効率性なりです。そのレベルのものがあるのだと思います。これが2つ目。そういう意味で、市民協働というのはパブコメにも多く出ているからですが、その2点目の機能をどうするか。それから、私が一番思うのは、本庁舎として最低限持っているのは議会を含めた政策決定機能です。財務管理などはやはり市民直結ではない。ないけれども、これをやはり基本的に入れなくてはいけない。この中には世界との交流も含めていろいろな情報発信も含めて、これは今回のパブコメじゃないけれども、市民団体のアンケートの中でも随分出ているんですよね。3月に行った。こういったところをしっかりと捉えていって、市役所の機能を3万5,000平米でしょうか、簡単に決めずに、1人当たり8平米なんて決めずに、もう少し機能を整理した中で現状と将来のあり方をプラスマイナスしながら設定していかないと、床面積、同時に建物の高さ、ボリュームなどが決まらないのではないかと思いますが、今から求めてもしようがないのかどうかわかりませんが、市役所の方に汗をかいてもらいたいなとは思います。
それから、3つ目ですけれども、建物の視点です。これは恐らくプロの方が多いのですが、デザイン、形について24件。言葉だけで言いますと、「景観大切にしろ」「シンプルに」「未来東北へのメッセージ」「仙台らしさを出せ」「象徴」「品格あるものに」などなどです。具体的に「三日月型の窓もつくりなさい」なんていう政宗をイメージするものもありますしが、アトリウムという話も出ていますが、これもかなり多い。それから整備パターンです。この前、JIAのワークショップのときに、「なぜ二日町の庁舎は入れないんだ」というのもあって、提案があるんですよ。こういった部分で「整備パターン」というふうに私くくりますけれども、建物が置かれる場所、建てる場所ですね。それから、棟数、あるいは階数、形態などについて47件。この辺が一番多いかな。ということで、そういう場所を含めた整備パターンというのは、基本構想の中の中間案でA、B、Cの3つやり最終案で一つになったわけですけが、それ以外の市民提案のパブコメの中の案も丁寧に整理して比較し

Table B
【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

ろまでが欲しい。つまり、今日やったことがこれで終わりというのだけはやめてほしいなと思うわけです。以上です。

榊原：
やりっ放しで終わらないでということですね。後半戦、今議論したいことを皆さんから伺いたいなと思ったのですが、なければ僕のほうで設定してしまいます。

佐藤：
市民の考え方みたいな意識でお話もさせていただいていたのですけれども、職員さん方はどう思っているのかなというところが全く見えていなくて、市民サービスのことも考え、優秀な職員の方々が多い中で、実際に開かれた仙台市役所であり、未来を担って行く部分で、どのように行政の立場で働いていく場所としての機能が欲しいと思っているのかというのは、ちょっとわからないなと思っていました。

榊原：
小島さん、今、「市職員の方はどんなことを考えて」という話だったのですけれども、自己紹介も兼ねてお話しいただければと。

小島：
3年前まで仙台市職員でございまして、今、民間企業にいますけれども、どちらかというと、定禅寺通とか今ある空間とか、資産を活用して活発な街をつくっていこうという「せんだいリノベーションまちづくり」というのがありまして、そこの実行委員会の委員長をしております小島と申します。
市職員の立場ということですけれども、例えば政令市ですので区役所と本庁舎がございます。区役所のほうが市民に接する機会は多いというのですかね、職員もそうなのですけれども、市役所はどっちかというとヘッドクオーター的なことろがあるので、市民というよりも業界とか、あるいは今日みたいな各種団体の代表の方とかのお付き合いというのが多いというところがございます。例えば市民という目線で見た時に、どっちも、区役所も本庁舎も、パラレルの関係はないですね。ないというか、そういうふうなつくられ方もしてないし、市民もそう思ってないと。いわゆる手続をするとか、私は建築ですけれども建築の相談に行くとか、どっちかというと下からお伺いを立てるみたいな感じですよね。

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

たときに対応できるようにする、ということが強みだろうなと思っています。仙台は市民協働の土壌がすごくあると思っているところです。
最後、公民連携で言えば、先ほど広場を運営する主体が必要という話があって、これはまさにそうだなと思ったのですが、運営するのは広場だけかというところをもう少し議論したいなというふうに思います。広場をスペースとして持っていることが日常的にどういう活動をしたりどういう運動をしていくと、仙台がよりよい街になっていったり、より安全・安心な街になっていったり、そういう可能性が高められるのかなと思いました。まさに公民連携や、先ほど武田さんが話された合意形成というところが、すごく必要になってくるような気がしていました。スペースの話はもちろん、運営ですとか仕組みの話がキーなのかなと思っていたところです。以上です。

坂口：
ありがとうございました。
では、45分過ぎあたりから後半スタートしようと思います。前半で大体2巡していろいろな課題が出てきたと思います。幾つかこちらのほうで整理をして、それに基づいて少しご意見いただいていこうかなと思います。

＜休憩＞

坂口：
では後半戦ということで、あと50分ぐらいです。前半でいろいろな課題や具体的なアイデアも幾つか出てきましたので、ここで頭の整理をする意味で、企画の高橋さんのほうから現状、市庁舎の建て替え計画がそもそも今どこまで進んでいて、どんな自由度があるかということを「3～4分でわかる市庁舎建て替え」みたいな形で説明をしていただきます。
もう一つは、ここにいらっしゃらないテーブル以外の方でもいろいろなアイデアがありそうなので、少しお話しいただければと思

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

て、これがやはりいいんだみたいな、これはこんなところで課題があるなというところをしっかりと示すべきだと、それを市民に出してほしいと思います。
それで、松本さんらと。建築まちづくり基本法というのをまとめていますが、その第4条に、建築まちづくり、特に建物に対する評価の仕方を10項目挙げています。地域の歴史・風土・文化等の重視、建築場所の役割の認識、安全性、周辺景観、環境、健康、素材、技術、造形性、地域住民の意思尊重、長期保全の配慮。割と全体を網羅していると思いますが、こういった観点で、先ほど言いましたような整備パターンをわかりやすく一覧表をつくっていく必要があるんじゃないかと。そのためには、先ほどの市役所の人に頑張ってもらうと同時に、そういう提案をパブコメに応募された方をメンバーに入れて、早急に今言った観点から評価の尺度を理解しながら、お金も含めてですが、やるべきではないかなと。これが大事かなと思います。400億円ほどかかるという話ですけれども、途中で実施設計入って見直しをやったらもっと高くなったとか、あるいはいろいろな状況が出てきて附帯工事がふえたとかとあったりすると、市民から見れば「何だ」となっちゃうので、やはり財政シミュレーションも一緒に財政局から出してもらわなくちゃいけない。そうすると、先ほど言いましたように、建てている最中はまた起債だけれども、返済していく中で人口減少で財政が縮小していく中で大変でないかなということも含めてです。
大きく3つお話ししたと思いますが、次の発言がないかと思い先に言いますと、今は基本計画の期間に入っています。今このテーブルを含めて出されたものに対する課題整理をすぐやらなくてはいけないと思いますが、私からの提案は市民参加・市民協働の視点からなので、市とその受注企業だけではなくて、その中にこのラウンドテーブルの中で、あるいはパブリックコメント出された方を分科会なり部会、ワークショップに専門家を入れて、基本計画の作業の中で、ある意味で先行しながら、ざっといっても3カ月、4カ月くらいかかると思いますが、スケジューリングを見直しながらやっていき、基本計画の決定を来年夏ぐらいに設定する、ということを提案したいと思います。

渡辺（一）：
ありがとうございます。確かにやりようでしょうか。建築計画を

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホール」とは何か」を考える

だけれども、恐らく新しいシティホールと言っていますので、市民と対等な立場でいくという接点が市役所にあるということを考えた時に、簡単に言えば、しつらえ方になってくるのでしょうけれども、職員として今の市役所というのは壁があって、組織的にも縦割りですけれども、物理的にも縦割りみたいな感じで、壁が邪魔しているところがありますよね。仕方ないところはありますけれども、それをなるべくなくすように間仕切りを省いてやっていますけれども、間仕切りを省いている理由というのは、実は庶務機能を一元化しようという別な発想なのです。市民との接点を見出すためにオープン教室みたいにするとか、そういう発想はないです。
逆に、市民との接点を考えるのであれば、間仕切りをなくしてオープンにしていくということが非常に大事。いわゆる物理的にも横の連絡とかそういうものが職員同士でもできるということと、例えば市民の方が、あるAという課に行った時に、Aだけで済まない、最近は総合行政ですから済まないので、BとかCとか大声出して、例えば「おう、榊原君ちょっと」とか、そんな関係のような空間というのがいいのだろうなというふうに思います。
接点としては、いわゆる市民が土足というわけではないですけれども、ずかずか入っていけるような空間のしつらえというのですかね、そういうのがいいのだと思う。そういう意味では、杉山先生が恐らくおっしゃったと思いますけれども、シティプラザというか低層階の部分について、市民との接点、市民が行きやすいとか、あと市役所の職員も1階、2階、低層部とかそういったところで自由に接する、自然で接するような空間があるということがいいと思いますね。

榊原：
ありがとうございます。

杉山：
教えてほしいのですけれども、オフィスゾーンに市民の方が来ると、多くは善良な方だと思いますが、何人かに1人はクレーマーのような方だったりしますよね。それを考えると、市民がオフィスに入ってゆくよりも、行政職員が低層部に出て行ったほうが対応しやすいというような面はありますかね。

小島：

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

います。
高橋さん、よろしくお願いします。

高橋（直）：
わかりました。私は基本計画検討委員会だったので、その時点の前提のところだけざっとご説明します。今、市役所の高層棟が北側にあって、手前に議会棟と低層棟があります。基本的に現地建て替えということに決まりました。あっちに写真がありますけれども、あれは今の市庁舎と手前に前の市庁舎が建っている写真です。昔の市庁舎が今の噴水のところに建っていて、北側に建てて移って壊したという。今回もそれとすっかり同じという手法になります。というところまでは決まりました。
それで、その議論の中で、表小路を封鎖して市民広場を広げる状態にして、広がりを持たせる案というのが出ました。しかし、やはりここの道路は非常に重要だということで常時閉鎖をするのは非常に難しいということと、駐車場とインフラ、下水管なり何なりというものが通っているということで、ここの地下を掘るということがなかなか難しいということで、この間の時点では、表小路の封鎖はなしということになっています。ただ、委員会のメンバーの中には、例えばここをペデストリアンデッキでつないだらどうかとか、そういった意見も出ているのですが、基本的に何案かあるという話が先ほどありましたけれども、今、案はまだありません。これから進めていくところです。建物が何万平米という具体的な面積は、今現状でいろいろ分庁舎があったりするものを市のほうで一応まとめて、これだけこういうものが必要ですよ、というのが前提条件になっての面積です。その面積をここの建物の高さ、80メートルだったかと思いますが、県庁のメーンの真ん中の建物と同じぐらいの高さまでしか建てられないという条件のもとにいくと、この噴水のところに高層棟を建てるか、この議会棟と低層棟を壊して、こちら側に高層棟とここに低層棟を建てるかとか、そういった案が3つあって、それはホームページにも載っていますので、それを見ていただければわかるのですが、前提条件としてはそういうことになっています。
ということで、委員の中でもここと定禅寺通のここをつないでい

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

余りないと思いますね。逆に、1階に行って1対1でやってしまうと職員負けてしまいますので、大勢いる中で「まあまあまあまあ」というほうがいいですかね。クレーマーといっても、初めクレーマーの対処の仕方も市の研修で、職員の研修というのがあるけれども、赤くなってカッカカッカ来ますよね、落ち着かせるということが大事ですよね。ですから、とにかく何を言いたいのかしゃべってもらって、そこをじっと待っているとか、なかなか職員も短気な人間も、私もそうですけれども短気な人間がいるので、「何を言いたいのですか」なんて言っちゃうとまずいですよね。そうすると、それは周りの職員が「まあまあまあまあ」とか「小島君ちょっと落ち着け」とか、職員に対しても、そういう環境の中でいるというのがいいのかな、なんて個人的には思いますけれども。

榊原：
ありがとうございます。佐藤さんお願いします。

佐藤：
今のお話で、理事長をやっていた大村先生が利府のほうで庁舎をやった時に、そういう考え方でつくっているようです。そこにメーンストリートみたいなものをつくって、そこに職員の方が出ていけると。しかも、そこは「こどものまち」というのも年に1回やるのですけれども、その利府の庁舎を使って「こどものまち」をやるみたいな形で、そういうふうなオープンな考え方というのは非常にとられている庁舎。規模は全然違うけれども。だけれども、そういった考え方ですよね、子供も使えるし、あとそういうふうな職員の人たちとか一般市民の人たちが気軽に行ける場というのはすごく可能性があるし、それができるかなと思いますよね。

榊原：
今、空間的なオープンな話があったのですけれども、仕組みとしてオープン、仕組みというのか何というかあれですけれども、運用上オープンに、この垣根を越えさせるということはできるのですかね。何かアイデアありますか。空間的なオープンではなく、仕組みで。

佐藤：
私は共同参画の時に、今、若林区長をしている白川さんに連れられて、市の研修の現場に連れていかれて、渡辺一馬さんがファシ

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

くことは、非常によく話し合われていたということをお伝えしたいと思います。地下駐車場もそろそろボロになってきているので、何とかしなければいけないという時期もそのうち来るよということにもなっています。
先ほど先生から話しがあったのですが、そのとき私と同じ委員会のメンバーの中にいた伊藤さんが福祉関係の代表でいらしていて、とっておきの音楽祭など主催されています。今日はたまたまお見えになったので、その辺のイベントのことも紹介していただきたいと思います。よろしくお願いします。

伊藤：
突然の発言で申しわけございません。伊藤清市と申します。よろしくお願いします。ＮＰＯ法人の仙台バリアフリーツアーセンターという団体を主宰しています。あと、今ご紹介いただきましたように、とっておきの音楽祭という、市民広場を中心として定禅寺ストリートジャズフェスティバルのようなイベントを開催しております。

私も高橋さんと一緒に基本構想の策定委員を仰せつかりまして、会議を経て、私は来月上旬から始まります基本計画委員としても参加します。私は専門がバリアフリーですので、基本構想のときはどちらかというと全体的なものでしたので、なかなか発言するところも限られていたのですが、基本計画はバリアフリーということも結構入ってくると思いますので、自分が発言できるところを発言していきたいなと思っています。
こちらのテーブルではイベントとかそういったことを話されていますが、私たちのとっておきの音楽祭は、例えば定禅寺ストリートジャズフェスティバルですと街のちょっとしたスペースがあればそこで演奏ができるのですが、障害のある人もない人も参加するということをうたっておりますので、例えば車椅子の方が街中で演奏しやすいステージはどこかというステージ選定から行います。定禅寺通もグリーンロードができて車椅子でも行けるようになって、とてもステージがつくりやすくなりました。ただ、いろいろな障害のある方が多いので、例えば急に走り出してしまう方にとってはある意味グリーンロードというのは少し気をつけなけ

やる会社が一応決まり、その委託内容にこういうこともというのを、後出しでやるとただのブラック発注になってしまうかも知れませんが、そういうことをやって反映させ得ることはできるかもしれないと。パブコメも有効活用し、かつ手戻りも減らすことが出来るある意味では現実的解決法の一つとしてお話を頂きました。ここで、青木さんに伺いたいのですが、市役所の本庁舎が市民と協働というのは、やりやすいのでしょうか。市民協働を進めようとすると、窓口は1個しかなく、ほかのところでもてやっていいのではないかなと思ってはいますが、今仙台市役所と市民とはどのように協働しているのでしょうか。

青木：
漠然としたところかと思いますが、いろいろ部局があり、どうしても縦構造になるので、市民側からするといろいろなことは横断的に起こっています。そういうときにテーブルをつくり、話をそこで重ねていこうとするときに、調整の部分をどこかが担っていただかなければいけないということなのですが、そうはいっても縦構造にならざるを得ないという状況があります。何か事を進めようとしたときに、そういった機構構造的なものを市役所の方がやりやすいような状況にどう設定できるのかというのはいつも感じます。この市役所の本庁舎の中で、まさに会議室で事が起こるというよりは、現場でいろいろ地域の中に関係者の方がいたりするので、そういう意味で、とはいえその市役所の方々が何か調整しやすいようなそういう職場環境としての市役所のスペースのとり方とか、あるいは市民との対話が持ちやすいような環境や、あるいは日常的なところから何か声をキャッチアップできるようなコミュニケーションがとれるような市役所の環境、あるいはこちらもアクセスしやすいような、声が届きやすいようなそういった場とでもいうのでしょうか。そういったものが何かデザインというところに盛り込まれるのだとしたら、大変バリアが低くなるというか、いろいろな方の参加という点であれば、情報保障の問題もあり、言語の問題というのもこれを機に改善し、市民協働という面でもっとアクセスしやすい環境になれば、新たな本庁舎を通じての新しい仙台の特徴として見てもいいではないかと思いました。

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

リテーターでやっていたのですが。ここ10年間のうちにすごく、仙台市もそうですし、あといろいろな自治体もそうですけれども、そういう研修がすごくふえて、市役所の職員の方がこういうふうなワークショップをしたりとか、私のほうは新庄市のほうでもかかわっていますけれども、そういうふうなワークショップを市役所の職員の人がファシリテーターをやったりとか、そういうのがどんどんどんどん出てきている。そうした時に、何か市役所の職員の性質というか、その人たちの組織のあり方も変わってきていますし、あと市役所の職員で私のいつも頼りにしている方が、またあっちの海岸公園とかあっちのほうのいろいろなワークショップをしたり、職員としても参加しているし、あと市民としても参加するというふうな、何かいろいろなタレントを持った人たちがどんどんどんどんふえてきているので、その人たちがお互いに寄り添っているみたいな関係ですかね。それが、今見えてきているというふうに現状でも思います。

榊原：
市民と職員、こことここの垣根ってどんどんなくなってきているという話ですかね。実際そうですかね。この中の垣根は、職員同士の垣根、さっき縦割りという話があったのですけれども。

小島：
まちづくりをやっている立場として、大きく言って、一緒にまちを豊かにしようとか賑わいを持とうとか、それみんな賛成ですよ、市の職員も。そういう意味では同じです。だけど、例えば区役所って管理をします。道路の管理、公園の管理とかします。そうすると、制度というのがあって、その制度の枠組みを超えるというのはなかなか難しいというところがあって、簡単にいうと、勉強はしているけれども、その枠内で判断したほうが楽ですよね。そういう意味では、職員同士で、区役所が悪いというわけではないですけれども、いわゆる管理する者と企画するというのですかね、前に行こうとする者での問題の意識の違いでぶつかるということはあります。
面白いのは、市民側に立つ職員と市民側に立たない職員と、これは俺嫌だということではなくて、自分が受け持っている役割というのですか業務、これに縛られる、本当はそこを越えることは幾らでもできるはずなのですけれども、まだ今ちょうど端境期というのですかね、もうちょっと数年たつとボンといくというのが恐

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

ればならないです。今後、市役所を中心とした市民広場、定禅寺通のつながりの中で、定禅寺ストリートジャズフェスティバルのように歩行者天国というところまではいかないかもしれませんが、例えば市役所を休憩スペースに変えるとか、今でも市民広場はメーンステージなのですが、駐車場としてもなかなか使えなかったり、お手洗いに行きたくても市役所庁舎に行けなかったりします。もう少しイベントのときに市役所庁舎がレスパイト的なこととか一時休憩的なところで使えればいいかなと思っています。
まだ私もこれから会議が始まってどのような形になっていくかわからないのですが、今日、高橋さんとか清本さんにお話ししたのは、こういうイベントの中に障害のある人たちの意見もぜひ取り入れてほしいというところです。女性、子供、高齢者の方々の意見は結構出るのですが、やっぱり今日もいろいろなテーブルを見ていますと、障害のある人の意見はなかなか出にくいというところがあります。ユニバーサルデザイン・バリアフリーは大前提として、そこからもう一歩どうブラッシュアップ、使いやすくしていくかというのは、ぜひ当事者の人たちに、いろいろな人がいますから、意見を聞いていただきたいです。会議で一回発言しただけでは、採用されるのも難しいですし、こういうテーブルで何回かやりとりをしていただくと、いいものができると私たちは思っていますので、ぜひ今後ともよろしくお願いします。高橋さん、ありがとうございました。

高橋（直）：
ありがとうございました。

坂口：
せっかくなので、とっておきの音楽祭というのを、僕は見たことあるのですが、ご存じがない方が結構いらっしゃるかもしれないので、どういうイベントで、これからこうやっていきたいということがあればご紹介いただけないでしょうか。

伊藤：
とっておきの音楽祭はもともと2001年にスタートしました。2001

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

渡辺（一）：
ありがとうございます。市役所の本庁舎とは何かのような議論が少し置き去りになっている中で、今最低必要な床面積はこうだから、その床面積を満たすのであれば18階建て、というだけの話でしかない。その市民参加とか市民協働として使いやすいような、言い方を変えるとほかの市民からすると無駄な場所をどうつくるかという視点なのかも知れません。先ほど小野田先生がいみじくもここの場所、その1丁目1番地のいい場所をこういう場所にするというのは、当時で言えばあり得ないお話だった。超絶無駄ですよね。その機能で言ったら。「図書館入れときゃいいじゃないか」「ギャラリーにしたほうが客入るよ」と思うところに、何が使えるかわからないけれどもとりあえず空けておけというのは大変な冒険だったはずで、一方こういった場所がないと、今この場がこのように使われていないし、そこを通った人が「何かあるな」と思って来ることがないわけです。
以前ここで、市長選か県知事選かどちらか忘れましたけれども、公開討論会をさせていただいたことがありました。やはりここだと呼んでいない人が来るのです。密室でやると呼んだ人しか来ませんので、公開討論会と言いつつ公開になっていない。ここでやると本当の意味での公開になり、隣がカフェですのでで、主催者自ら酒を飲みながらワイワイとやっていたらすごく怒られて、「酒を飲んでやるな」と、「いやいや、酒を飲んでやらないと言ってないじゃないですか」みたいなことになり、候補者に逆ギレをするということをしたことがありましたけれども、こういった場所は一見非常に無駄に見えます。先ほどの小野田先生のお話を伺うと、当時の関係者の肝が据わっていたのでできたという話かと思いますが、今の人が肝が据わっているかどうかはいったん置いておき、どうすれば20年ぐらい経たないとわからないような価値を生み出せるというところを我々市民はやれるようになるのでしょうか。佐藤さん、お願いします。

佐藤：
小野田先生からあった大学院生の提案や、私もそのプロジェクトで学生に参加させているというのがありますが、なぜ学生なのかというのは、もちろん課題を与えるという意味もありますが、彼ら自身に考えてもらったことが将来実現するといいなと思っている。これを見て思ったのは、先ほどから言っている組織に入ってない個人、この個人の意見を伝えるのに、匿名でいろいろ意見を言ったりするのもありますが、でもやっぱり責任を持つという意味では、きちっと意見として通るような論理的なことを言うとか書くとか、何か仕上げて差し上げるというのは必要だと思う。
先ほど杉山さんのお話について、シティセンターの中にそういう、今ソフトとして子供が言葉とか絵でもいいです、それが何か専門家がきちっと書くのと同じように、転換というか変換するという機能があればと思いましたが、これほかの方も同じで、要は個人としてもきちっと組織のように公で職員の方に会えるとか、意見を聞いてもらうという仮想の場所でもいいですけれども、それが何かプラスになればいいかなって、この例を見て思いました。

榊原：
もう何かフリーで話、これに限らずでもいいですけれども、何かどうでしょうか、どんどん話していただいていいですし。なければ問いかけますが、よろしいですか。竹下さんどうですか。

竹下：

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

らく仙台市、そこはもう期待していますし、そのぐらいの実力を仙台市は持っていると思っています。というのは、スパイクタイヤの運動とか、それって仙台ですよね。市民活動の、言ってみれば先導を走っている、そこで市民に職員は育てられていますので大いに期待していただければと。今、私は職員ではないけれども。

榊原：
横山さんお願いします。

横山：
先ほどの仕組みと空間のところで、市民が仕事をされているところに何かを言いに行くとかという話ですけれども、面白い例が一つあって、八戸のブックセンターっていうのが開館されてですね。この前行ってまいりました。あれは八戸市が経営していて、本を選ぶのは本を選ぶプロが選んで、そこの中に「八戸市民作家」の部屋というのがあって、要は市民が登録すると、著述業の方でなくても登録ができ、そこの中のクローズのお部屋でいろいろな機械とか編集のあれとか、パソコンにしても何にしても使え、本当の市民作家が生まれたというところまで、この短い期間にできて

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

年は、皆さん記憶にあると思いますけれども、新世紀・みやぎ国体が開かれた年で、新世紀・みやぎ国体の後に全国障害者スポーツ大会というのがありました。オリンピックで言うパラリンピックのような位置づけです。その宮城県の大会の前年までは、身体障害と知的障害の大会は別々の場所で行われていました。それを宮城県が統合して第1回全国障害者スポーツ大会という、いわゆる記念の大会になりまして、そのときに、スポーツで参加できる方はいいけれども、スポーツ以外で何か宮城県でイベントできないかということで、定禅寺ストリートジャズフェスティバルのメンバーの方が中心となって始めました。ですから定禅寺ストリートジャズフェスティバルは、お互いに言っていますけれども、兄貴分、弟分のような関係です。
そこからあっという間に今年18回目を今年迎えまして、ちょうど2020年、東京オリンピック・パラリンピックの年に私たちも20回目を迎えます。定禅寺ストリートジャズフェスティバルもそのときは30回目となり、お互い節目の年になります。
先ほど申しましたが、街の中のいろいろなところをステージにして演奏していただくようなイベントで、定禅寺ストリートジャズフェスティバルよりも少し広い場所を必要とする方がいたり、近くにお手洗いがあるところがいいという方がいたり、そういった配慮が必要な方々が多いです。おかげさまで、今年も参加グループ数が330ぐらいになります。総演奏者が2500人ぐらい、お客様も13万人ぐらい会場にいらしていまして、それなりに続けていられるかなと思います。
私たちの理念が全国に広がりまして、北は盛岡から南は鹿児島まで、全国18カ所で今開催しております。来年の3月には東京都世田谷区でも音楽祭を開催して、地元ではなかなか大きくはできないけれども、全国にこの理念を広めていこうということで、東京オリンピック・パラリンピックの公認プログラムも我々のほうでさせていただいています。そういった仙台発のイベントをやはり全国に発信していきたい。来年は2019年6月2日、毎年6月第1日曜日に開催しておりますので、ぜひよろしくお願いします。

坂口：

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

ます。今の仙台市や宮城県の現状というのは、人口減少と言われていますけれども、大学生の滞留人口は大変多く、大学に入るために流入してきますが、卒業とともに地元に帰ったり、東京に就職するということがあって減っているので、彼らにとって仙台や宮城がいいところで未来があると思えば滞留していき、人口減少を食いとめられるはずなんですね。
そうなると、市庁舎をどういうように使いたいかということを学生に考えさせる、あるいはもっと若い世代に考えさせて、それが実現できるような何にでも組み替えられるフロアを幾つか用意しておくと良いと思います。それこそ先ほどの華美問題ではないですが、税金を投入しているのだからあまり変わったことをしてくれるなという人が多くて、何にも使えない、しようもないフロアができてしまいがちです。そうではなくて、もっと拡張性を考えて、ここは電力がもっと必要で、夜になったらバーになるとかカフェになるとか、そのようなことができるような電力供給仕様にするとか、配線配管を用意しておくとか、そういうことを配備したようなスペースを提供する。そうすると、使えないところを安いお金で建てているよりも、回転率などの面で見れば、そのオポチュニティーコスト(機会費用)が減るわけです。使われているのであれば、お金をかけておいても問題ないという理屈が通るはずですので、やはりそのためには20年後にそこを使う主体である若い人たちがどういうことをこの場でやりたいかというような提案をしてもらい、それが実現できるような建物を確保してください、スペースを確保してくださいというやり方がいいんじゃないかなと思います。

渡辺（一）：
ありがとうございます。確かにその手はあるかと思います。それでは、小野田先生に伺いますが、先ほどの課題をやった学生さんたちは、市役所の建替えプロジェクトを1年間かけて、今どうなっているのですか。「つらい課題が終わったなあ」で終わりというぐらいでしょうか。

小野田：
そういうことはないですが、普通に課題を終えて、普通に就職活動をやって、いろいろなところに就職してお終いというか、学生

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホール」とは何か」を考える

市民と職員は、まだいろいろ業務というか手続とかがあって若干近いような気がするのですけれども、市民と議員はすごく遠いなと思う。私、一回だけ議員の方に、自分が議会で質問するから聞きに来ないかと言われて行ったことがありますが、その時も何かテレビの画面を通して国会の中継を見ている感じ、国会ではないですが、仙台市議会を見ているかのようで、すごくほんと遠いというか、こういうことが行われているのだと。もちろんニュースなんかでは見ているのですが、「へぇー」という感じだった。
議員の方というのは、一生懸命頑張っている方は、それこそ地域の活動に一緒に参加したりとか、そういう小学校の運動会とか老人ホームに訪問に行ったりということで、様々な意見を聞かれている方が多いと思うのですが、でも、せっかく市役所のシティホール化するのであれば、その場で議員の方が市民の声を聞くみたいな場があってもいいじゃないかなと思います。それこそ子供からお年寄りの方まで一緒に聞くと、今度職員の方も巻き込んで考えることができるかなと思う。そうすると、もうみんな全員が市民として一つのことに取り組めるのかな、と思って聞いていました。

榊原：
どうですか、議員の立場として。

沼沢：
沼沢と申します。市議会議員やっています。
今のお話の中で、確かに私たちも全ての市民の皆さんの声を聞くのって現実問題として難しいことなのです。なので、いろいろな地区からそうやって選出されて、自分の手の届く範囲の皆さんの声はできるだけたくさん集めようと思っているというのがあります。けれども一つ話の内容としては、私はとても面白いことだと思っていて、要するに、私たちも話を聞く人を選んで聞いている部分が、大なり小なりやっぱりあるというふうに思います。これ、そういう言い方していいものかどうだかわからないですけれども。そういう意味では、ある種、役割ではないですけれども、全く自分が関係ないといいますか、そういう方からお話を聞かせてもらったりするということはすごく有意義で、そういう機会をどうやってつくるかというのは私たちも結構考えながらやっているところで、例えばこういうところに来てこういう話を聞いてみたりとかということをしているというのがあるので、形はいろいろあるとは思いますが、市役所の役割の中に、議会の役割の中にそういっ

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

ありがとうございました。
では、前半は結構たくさんの課題が出ましたが、今回はラウンドテーブルなので、最後のほうに石塚さんが提案されていた「広場を超える運営の主体のあり方」について少し考えてみようと思います。それは僕なりに整理をすると、一つは、そんなに大きな主体はないので、当然いろいろな人たちが関わっていかなければいけない、ある種連携をしていかなければいけない。さっきの伊藤さんの話もそうかもしれませんけれども、いろいろな活動の団体とか主体がいるのですが、個々の活動は結構素晴らしいけれども、それがもうちょっと全体としてつながっていくような話にしないと、結果的に、広場はできた、活動は頑張っている、でも何となく溝ができた感じになってしまうと思います。このラウンドテーブルもそういった主旨が一つあると思います。そういった「広場を超える主体」、この場合の主体というのは運営するだけじゃなくて、実際に本郷さんたちのようにそこで仕掛けていく人もいるかもしれませんし、本当に清本さんたちのようなアクターであるかもしれないのですが、もうちょっと個々の活動みたいなものが日常的にわかるような場所の仕組み、それはひょっとすると市役所の中にそんな機能が必要なのかもしれないし、あるいはせんだいメディアテークかもしれないのですが、それが少し具体的なイメージが幾つかおぼろげでも出ないかなと思っています。そこを一つ突っ込んで話していきたいです。
もう一つは、僕自身は劇場の計画に関わることが多く、イベントのこういった話にも出ることもあります。宿命的とでも言いましょうか、イベントというのは参加した人にしか伝わらないです。つまり定禅寺通でのイベント、とっておきの音楽祭でこんなことがあった、ということが伝わらない。次の日になると道路に変わっているので仕方がないのですが。パネルや映像など何かしら伝達できると思うのですが、もうちょっと広場や屋外空間で行われているアクティビティが、そこに参加しなかった人に対しても、別の日に行ってもわかるようになると、そこの場所を自分ならこう使ってみようとか、私たちならこんなことができるというような新しいアイデアを発見することができると思います。それはアーカイブかもしれないし、あるいは常時そこにワンストップの窓口

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

というのはそういうようにどんどん動くものですからね、それでお終いです。
学生は確かに未来でもあるし、クリエイティブでもありますが、やはり所詮素人だから、建築の学生でもです。建築の学生で相当トレーニングされていても、やはり業務としてやっているわけではないので、やはり素人なのです。建替えは業務ですが、みんなが好きに言いながら、ではそれをどうやって現実化するかという話は、JIA の人を前にして言うのかというもありますが、業務独占資格といって、国家資格である業務独占資格というと、一番有名なのは医師、弁護士で、その次に建築家を入れたいのですが、一般的には会計士というのがあり建築士と。しかし４種の中には入っており、この資格を持たずに業務をやると法律で捕まるという非常に重い業務ではあるんですね。それはなぜそういう権利が与えられているかというと、国民の生命や財産に直結するからです。ですので、業者ではありまあすがそのことは重く考えて、リスペクトはして頂きたいと思うのです。
「こんなの思いついたんだけれども、やれる？」みたいなものでそんなに簡単に差し替えられるものでもなく、やはりそれは相当精査しなければいけないので、例えば医者が「朝思いついたんだけど、こういう薬出してみようかな」などとは、絶対に言わないと思いませんか。そんな医者がいたら怖くて行かないですよね。それと同じように、それなりに重いものなので、議論するところと、業務としてきっちり仕上げていくところは、ある程度緊張関係を持ちながら整理はして頂きたいとは思います。
彼らのスケジュールでいくと、かなり余裕がないので、どこまでスケジュールに乗るかどうか。市民広場などはもう少し盛り上がればいけるとは踏んではいますが、もう答申出してしまったので、もしかしたら戻っても、分棟型はやりたくないと言っている議会ですが、僕としては分棟型ぐらいまでは戻してもいいかなとは思っていますが、もっとみんながやる気があるのであれば、市民広場を使いながら、先程佐藤さんがおっしゃったようなことだって、やろうと思えばやれると思います。しかし、それをやるのであれば、口を出すだけではなくて、本気でソフトを市役所の人たちと考えるというような覚悟はやはりいるとは思います。「俺は口だけ言って格好いいことやろう」「リスクみんなおまえとれよ」となれば、市役所の人はとりたくてもとれないと思います。先程青木さ

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

た形のものが、新たな庁舎で例えばガラス張りのところとかでやったら面白いのじゃないかな、というふうに今ふっと思ってしまいましたけれども、私の一存で決めるわけにはいかないのですが、一議員の意見としてということでよろしくお願いします。

榊原：
ありがとうございます。杉山さん。

杉山：
議会にお願いがあります。新しい議会をどうするかということを特別委員会などで議論されていると思うのですが、その内容を議会の中だけで閉じずに、ある程度まとまったところでホームページなどで公開し、「議会としてはこのような新しい議会をつくろうと考えているけれども、市民はどう思いますか」と問いかけていただきたい。そして、様々に出された市民の意見を特別委員会できちんととり上げ、それを議会はどのように扱うのかということまで公開し、そこに市民の意見を巻き込むアクションを起こしていただきたいと思います。さらに言えば、統一の意見としてまとまる前の、会派ごとの議論が見えている段階のほうがより市民の関心が集まるかもしれません。議員の皆さんがどのように議会を変えようとしているのか、あるいは今のままで良いと思っているのか、ということをぜひ公にして、市役所建て替えにおける議会のあり方についての議論を深めていただければと思います。ぜひご検討下さい。

沼沢：
ありがとうございます。実は 13 時から、その本庁舎建て替えの議会棟の部分の調査特別委員会を開会していて、多分終わったところだと思うんですけれども、その委員になっていないと、私たちも正直どういう議論が行われているのかというのは、出席している議員から聞き取りはしますが、その委員会はそれぞれみんな違うので、それぞれその会派の中で共有しながらやっていくという形になっているわけです。
そういう意味では、議事録としては数カ月後にはホームページ上にアップされますけれども、確かに言われてみれば、これだけオープンな場所で市役所の本庁舎建て替えの議論をやっている時に、議会棟だけはクローズでやりますということにはいかないのではないかなと私は思っていましたので、それは提案を含めて、とて

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

んが仰っていましたが、市役所と我々が協働するときには、やはりある一定のルールみたいなのがあります。よく僕も、「もうちょっと威勢いいこと言えよ」と言われます。しかし、無理難題な威勢いいことを言うと、市の人から信用されなくなりますから、それは業務としては言えないのです。しかし、市役所の会議では相当僕厳しいことを言ってしまいましたが。
飲み込まれないようにしながらも、あるルールを守りながらやらなければと協働できないので、そのような作法もあるのだと思いますし、もっとみんなに共有していかなければとも思います。
ただ共有をさせようとすると、今は自由な時代だから好きに発信すれば良いという方もいます。しかし、一人よがりな考え方では絶対にこの大きな企てはうまくいかない。ですから、内なる技術的問題も、三部さんからご指摘いただいたような問題も当然解いていかなければいけないのですが、そういう解く人たちが安心して解けるように、外もそれなりに整理をしていただく必要があります。外と内を整理していかないと、なかなか難しい。今は、仙台市役所を攻めるフェーズなので、もっと「いけいけどんどん」でいいのかもしれないけれども、実際これが始まると、もう少しお互いデマケーションしながら粛々とやることになります。このプロセスは正直つまらなくて大変な部分ではありますが、皆さんも同じかと思いますが、つらいプロジェクトほど、できた後の成果は美しいですね。ですから、そういうつらいことにどのぐらいの人を巻き込めるか、あと10年、それをやれるかどうかではないかと思います。

渡辺（一）：
今、いみじくもそのいわゆる「作法」をほとんどの人が知らない。そもそも作法があることも知らないと思いますが

小野田：
そうと言うと偉そうになってしまいますが、知らないというわけではなく、やはりそういう社会になってしまったのだと思います。喧々諤々とやるべきところはやり、それで風通しは一瞬よくなってはいるかも知れないけれども、一方本当に大事な何かをもしかしたら失っているかもしれない、そこでではどうやってもう一度関係を紡いでいけるのかという大きな実験なのかもしれません。

Table B
【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホール」とは何か」を考える

も僕らの中で落ちていた視点だったなというふうに思いましたので、預からせていただきます。

平賀：
すばらしい。

榊原：
動きそうな感じがします。

平賀：
私は、国会をまねた議会棟はつくってほしくない。つまり、上からぐっと下がって上に入る、ああいうのは嫌だ。少し仕切りは要るけれども、もう少し対等に、市民の代表として、我々が選んだ方々なので、もう少し市民と対等にお話しできるような場所であってほしい。というふうに議会棟をご検討いただきたいということです。

榊原：
ありがとうございます。何となく話を聞いていると、今主体と言っていて、市民、職員、議員と言っているのですが、それぞれもう一枚岩ではないなというのが何となく、市民の中には多様な市民もいるので、その中でこの主体をそれぞれ、まずそれぞれのセクターの中でも、統一する必要はないと思うのですが、いろいろな接点をお互いに持ちながらやっていくんだろうなと、今話を聞いていました。市民側にもオフェンス・ディフェンスいるし、小島さんがおっしゃったようにオフェンス・ディフェンスがいて、議員の中にもいるんだろうなというのが少しずつ、何かそれぞれの立場が何となく垣間見ることができたかな、というふうに思います。
折角なので、そのほかどうでしょうか。何かもうちょっとこういう話を聞いてみたい、あるいはどうですか、今議論を聞いていて、私もこんなことを言ってみたいという方がいらっしゃれば、どうでしょうか。舛岡さん。

舛岡：
議会棟の話ですけれども、ついでに、執行部と議員とのやりとりもすごく重要だと思うんですね。もちろん執行責任もあるし、それからそれをチェックする仕事とか。ただ、提案を議員同士で高

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

があって、その方が紹介するのかもしれません。あるいは本当に日常的にそういったところでエキシビションされているのかもしれません。イベントをどうする、どうやるだけではなくて、イベントに関わらなかった人も何かしら痕跡が実感できるようになると、仙台で人口が減っていく中で、大体みんな行ったことはないけれども知っているぐらいの形になってくるといいなと思います。せんだいメディアテークは確かに1日3000人とか4000人来ていて、年間100万人来ているのですが、恐らく100万人都市の仙台でもせんだいメディアテークに行ったことのない人は結構いると思います。なので、同じ人がリピーターで来ていることが少なくないので、そういったリピーターを継続しつつも、新しい人がそこに参加できるような仕組みを考える意味でも、何かしらそこのイベントに関わらなかった、あるいは場のつくりに関わらなかった人もちょっと痕跡がわかるようなことができないかなと思っていました。なので、その２つを、特に前半ですね、「広場を超える主体のあり方」についてディスカッションを深めていこうと思うのですが、大澤さん、切り口としてお話しいただけますか。

大澤：
私たち、大震災の２週間後に最初のコンサートをしました。その２日前に非常に乱暴なやり方で、音楽の力による復興センターという主体を立ち上げて、音楽マーケットで生きる仙台フィルハーモニー管弦楽団とは違う非営利な団体をつくろうとしました。３年間ほどはいただく寄附で賄いました。今100人ぐらいの音楽家が参加していますので、100人ぐらいの音楽家とお金があって、最近では仙台市、宮城県、岩手県からもお金をいただいています。それを仮設の集会所とか今の復興公営住宅なんかにお届けしています。そういうお世話をする人たちとも一緒にやっています。そういう意味では、事業ではなく一種の社会包摂の仕組みができたのではないかなというふうに思っています。それで、熊本にも実は同じような組織、くまもと音楽復興支援100人委員会というものができて、電話がありまして、「何て挨拶した？」「何分間演奏会開いた？」「終わったときに何てご挨拶した？」というのを全部聞かれたりしてお手伝いしています。そういった意味で言うと、

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

渡辺（一）：
ありがとうございます。パブコメでは、独占業務たる建築の方以外の人も多分発信し、もちろん建築系の方も発信し、先ほどのまとめみたいなところの最後のほうに、「優秀なチームをつくって、そういう声とかもちゃんと聞いてやったらいい」というようなことが書いてあったように見えたのですが、我々が「こうやったらいいじゃないか」と声を上げたとしても、やるのは人間ですから、ただ責められているだけだったら、ただ仕事が増えるだけだとも思います。
先日、建替えの準備室にお邪魔しましたが、メンバーとして4、5人しかいないわけです。それで今言っているようなことを全部勘案しろというのは非常に難しい。だけれども、多分世間的まなざしは、そんなに人数いるならそれでやれよということなのだろうなと思い、それを我々はどうやったら、今ここにいらっしゃる方以外のような、建築や建設に全然関係がない方々にどうやったらそれが伝わるんだろうかと。計画にお金をかけるのはとてもいいことだと思います。後からでは大変になります。そういうことをきちんとやっておかないといけないのではと思います。次に、渡辺さんお願いします。

渡邉：
きょうのテーマは計画プロセスということだけれども、やはり皆さんいろいろな今までの経過に対して、私もそうだけれども、「ちょっと違うよね」「こうしたいよね」という意見をほとんどの皆さんが持っている。それはなぜかというと、やはり計画プロセスをつくるための目的とか、あるべき姿とか、それを実現するための手続、戦略とか、あるいはそれを誰がやるか、誰がやるのかという主体がないのかと思います。あるいは、あるけれども何となく見えているけれども、出てこない。例えば市役所の本庁舎の機能を考えると、多分地元の大手企業、例えばアイリスオーヤマさんの本社ビルをあそこにつくったって、ほとんど建築の形態は変わらないような気がする。だけれども、皆さんこれだけ熱っぽく語るというのは、庁舎建築というのは確かに行政の機能的な建物でいい。お金のこともあるし、忖度の話もあるし、ならざるを得ないけれども、でもほとんどの人たち、ここにいる人たちが集っ

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

めるような場が私のまちにはないんですね。議員は大変すぐれた能力をお持ちですから、議員同士でも高めてアウフヘーベンして、いい結論を得るような、そういう構成にあってほしいなと。座席の構成から含めてね。

榊原：
ありがとうございます。内田さん、今議論を聞いていて何かどうですか。

内田：
市民活動していると、結構、仙台市の職員だけど市民活動されている方とか、議員さんだけど市民活動の出身で議員されている方とお会いすることがあって、イベントとかで会うと「元気・・」とかと言って、「うちの活動でこういうところ困っていて何とかならないかな」とか「どういうシステムあるかな」とかということを相談できたりして、すごくフラットな関係だなって、協働でやっているのかなというところがあったりとかする一方で職員や議員としての立場で同じ方とお話をするとなると立場で難しい部分もある。普段会うと同じ市民として一緒に仙台市でやっているのだなというところと、立場が違うと難しいなというところがあったりします。

榊原：
やっぱり立場の違いがあるということを、多分お互い理解しなければいけないのでしょうね。多分お互いのセクターの中でも、すごくご苦労なりしているのだろうなというのを思っておりました。あと30分ぐらいあるのですが、何となく今聞いていると、仕組みも含めてオープンな空間、オープンな形というのが少し出てくるかなと思っています。そのほか何かキーワードとして、シティホールをつくる上で、これが大切でないか、というのがあれば言っていただきたいのと、もう一つは、横山さんのほうから問題提起のあった、公共サービスがそもそも市役所だけで担う時代ではないよね、という問いに対して、それでは行政だけでは担い切れないものを市民が担う、企業が担っていくということになった時に、それではシティホールのあり方というのはどうなのかというのをちょっと議論できるといいかなというふうに思いました。多分その議論をしていく間に、もしかしたら新たな形のシティホールのキーワード的なものが出てくるかなというふうに思っております。

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

この仙台市役所新庁舎ないし周辺のスペースは何を目的にしていくのかなと思います。そこのところはもう少し明確に、社会的にこういうことだよということを言わないといけないと思います。確かに本郷さんおっしゃるとおり、いろいろなインフラが足りないということは聞くのですが、それは何をそこに仙台の社会が打ち立てようとするのかということがもう少し明確になっていかなければならないと思います。

坂口：
今、大澤さんおっしゃったもう一つの観点としては、いわゆる中間支援組織があります。大澤さんたちがやられている活動は、そこに活動したいアーティストがいて、そういった仮設住宅や災害公営住宅の集会室などに音楽のニーズがあると。それをマッチングしていくことがあると思うのです、広場を超える運営の主体でいくと、ここにいらっしゃる方はもちろん、何となくそういう個々の、活動する人はいるけれど、それを全体的につなげていくようなものがいると思います。それは協議会なのか、ある種中間支援組織なのか、あるいは全く別のなかなかここでは発想できないようなものなのか。あるいは本当に、それがなくてもいろいろなツールがたくさん増えてくると勝手にマッチングができてやれることなのか、わからないのですが、そのあたりはいかがでしょうか。

大澤：
私たちは自分たちのことを中間支援組織と呼んでいます。それは何かというと、当初被災者に対して特に何かをしたいという人がたくさんいました。例えば音楽でしたいという人もたくさんいました。でも、一方で避難所ないし仮設にいる人たちは、そんなの必要ないのではないかという意見があった。そういう中で私たちの仙台フィルハーモニー管弦楽団から細胞分裂みたいにしてできました。音楽はいいものだよとか、どういう音楽を聞きたいとか、私たちが行っていろいろ聞く中で、信頼関係ができていきました。被災地のことは広くて遠いのでわからない支援者と、音楽が本当に被災生活にとって必要かどうかわからない被災者の間に立って、それをつないできたというのが私たちの組織です。今坂口先生が

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

たのは、そうではないということでしょう。今回の庁舎の整備をきっかけにあの辺のエリア全体の価値が上がるよね、上げたいよね。そういうことでしょう。それが50年、100年先に、今ここにいる人たちができる贈り物ですよ。そのための議論をしているわけでしょう。

ですから、トップを含めて市の方で普通の行政庁舎をつくればいいのだというのだったら、こんなミーティングをする必要はなくて、やはり何とかしたいと思っているからこういうことになるわけですよ。あるいは、ある程度それを期待しているからこうなってくるわけで、そうすると、３つ方法があるかなと思います。一つは、ここまで基本構想が出来上がり、この次の基本計画でそれを担当する建築家も決まった。その人たちが、市民や、ここにいる人たちの意見を建築にできる条件なり思いなり覚悟なりをいかに伝えられるかということなのでしょう。もう一つは、仙台市のこのエリアにとって本当に重要な公共建築なんだということだったら、やはりこれは選挙の争点です、そういうものだと思います。３つ目の方法は、庁舎の中の機能的なところは専門家にやってもらう。しかし、その周りのエリア、定禅寺通、商業施設、事業所もあるし、住宅もある。その辺りは自分たちが考えられるという仕組みをつくる。そちらのほうが重要じゃないのかなと思います。そういう周りからの話を計画にぶつけること。まさに建築というのは、建築と中はかなり所有される空間だけれども、建築の建築たる理由というのは、その接点のつくり方なのです。ですから、その接点をいかにつくるか。そうなってくると、市民広場はどうする、定禅寺通との関係をどうするということが見えてきます。

先週、博多に行っていて、博多は２年に１回ぐらい定点観測ぐらいで行っておりますが、仙台よりは規模が大きく、しかしあそこは仙台と似ているんです。博多は九州全体のハブになっていると。仙台は、まあそこまでいかないけれども東北のハブになっているわけでしょう。けれども、人口は向こう多いし、活気はあるし、インフラだってすごく便利です。だから、次から次へと新しい事業が生まれてくる。もう日本なんかで仕事できないから、韓国、中国、台湾に行こうというところでしょう。やはりそういう環境を、博多とは違う形でここにいかに実現するかと。そのために、今先ほど三つの方法があるのでないかという、そういうことで計画プロセスを考えたらどうでしょうかと思います。

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホール」とは何か」を考える

どうでしょうか、佐藤さん。

佐藤：

私が一番初めに言ったこともそうですし、あともう一つ、このメディアテークができた時に書いたことがあったのですけれども、果たしてメディアテークの未来って、こういうふうな施設でいいのかって当時思ったのですよね。メディアだからいろいろなところと繋がることができるのじゃないかと当時考えて、そうした時に、市役所も、区役所とか市民センターとかいろいろな場があって、そこと。私は今山形大学で、山形大学は分散キャンパスで、米沢とか、鶴岡とかと会議しなければならないのですが、そうした時にいろいろな人たちの考え方とかそういったものを議論する場というのは、今、メディアも使えるわけですよね。そうした時に、なかなか移動が困難な方、あるいは分散的にある時に、例えばここの画面で大写しになっていて話ができたりできるのじゃないかなと思います。メディアテークが25年ぐらいの時に市役所が建つことを考えると、開かれた場が、伊勢神宮ではないですけれども、こっちが25年を迎えて、今度市役所がそういう役割を今度担って、また50年たつとメディアテークが進化しなければならない時が来て。何か２つこういう場があって構わなくて、それがどんどんどんどんお互いに進化し合っていくみたいな、そういうのがあっていいのかなというふうに思っていました。

榊原：

ありがとうございます。時間があと30分なので、この論点でいきますか。行政では担い切れない公共サービスというのがあって、それはいろいろな主体がこれからいると思うのですけれども、そういう時代にある中で、シティホールというのがどうあるべきかという議論をしたいなと思います。横山さんの投げかけがすごく気になるなと思っていました。どうですか、事業をされている澤口さんから見て、今のこの行政では担い切れない公共サービスというのが、民間の視点から今後どうなるべきか、というふうに思いますかね。逆に言うと、ビジネスチャンスではあると思うのですけれども。

澤口：

公共サービスというところとちょっと外れますけれども、当社も建築事務所をやっておりまして、協会には入っておりませんが、

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

おっしゃったとおりです。そういった意味では、さまざまにやりたいこともあれば、受け取りたいものもある。支援と受援がある中で、それの真ん中でどういう仕組みをつくっていくのかということで、私たち今は公益財団になりました。何らかの仕組みというのがあって、そこで何かを動かしていくのが市民協働だったなと思います。組織論とか制度論ではなくて、さっきお話ししたように、大きな意味で何かが、概念があって、それに集まってくる人たちをつないでいく人がいて、という形でできていくのであれば、自分たちが経験したようなやり方がある一分野ではないかと思います。私たちは音楽による弱者救済ということをもとにしてそういう仕組みをつくったのですが、似たようなことはできるのではないかなと思います。私たちも仙台市民の豊かな音楽精神に助けられてできたので、当然、市役所でも何らかの形がつくれるのではないかと思います。

坂口：

平岡先生、いかがですか。

平岡：

私も先ほどの坂口先生の投げかけから２つぐらい考えたことがあります．一つは、いろいろなアクターあるいはプレーヤーとして活動される団体がいっぱいあると思いました。やっぱり広場といいますか、庁舎も含めてのマネジメントを民間ができるのかということだと思います。それは庁舎の中に例えばカフェがあったとしても、そことあわせて広場と一緒に民間がやれるのかということです。仙台市でも仙台市公園マネジメント方針が出されています。それにはちゃんと榴岡公園、今回事業者が決まりましたけれども、勾当台公園、西公園も入っています。ただ、今回、庁舎と広場のセットになった場合、一般的な公園とはちょっと違うのかなと思います。公園でもイベントはありますが、基本的には市民個々人が行って楽しむイベントが中心でしょう。例えばデモをやりたい人がでてきたときなど、広場って時に政治的になったりします。いざ広場、プラザとかフォーラムとかそういったものを、民間がマネジメントするとなったときに、もし政治的な集会が行

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

渡辺（一）：
ありがとうございます。では阿部さんお願いします。

阿部：
今、渡辺さんから計画プロセスという話が出ましたけれども、確かに今までずっとお話を伺っていて、私は自己紹介して課題を何も言わないで帰るような立場になるので少し課題的な話をしたいと思いますが、まさに今の計画プロセスだと思うんですよね。ここで伺っている話と現実の基本構想との乖離というのは歴然としていて、その間をどう埋めるかという話が多分あると思います。それはこの基本構想と同時に、市のほうで配置プランを２つつくっていますよね。この配置プランと設計事務所が出しているプランは全然発想が違う。設計事務所が出しているのは、もうかなり思い切ったイメージというか、基本構想を持っていると思います。恐らくこのまま基本計画に入ったら、設計事務所の構想を一つ一つ潰していくような話になりかねないということで、ただ、設計事務所で提案している中身も、実際は場の使い方としては相当習熟したマネジメントが必要になると思います。新しい要素をだいぶ入れていますけれども、相当詰めていくと、やはり使いながら研究していくというような、そういったエリアマネジメントも一方で必要になってきてる。ですから、そのプロセスプランニング自体、機械的に基本構想、基本計画分けるのではなくて、三部さんが仰ったように、いつか課題別にフィードバックを行う話もあると思います。ですから、大きなその骨格になる部分とそうでもない部分、いろいろ使いながら、マーケティングも含めてやっていく部分、その辺りの仕分けをしながら、渡辺さんの言ったようなプロセスプランニングをやる中で、まさに小野田先生が言うように公共権の獲得を通して我々の活動を確立するというか、その辺のプロセスのリアリティーについて詰める必要があると思います。それがないとここで発言している意味があるのか、来ても無駄なんじゃないかという懸念も生まれてしまうのではないかと思います。
また、やはり問題は議会が見えないというか、行政は見えているのですが、議会でも取り組んでいるという話は伺ってはいるものの全然見えない。ぜひ議会の当事者の方もやはり市民の前に出て

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

今回この主体で建築士事務所協会、建築家協会さんが行われているということはとてもすごいことだなって、アウトサイダーみたいになっている立場からすると思っていまして、もうこの庁舎建築に関して、どこか大手ゼネコンさんがバンとやってしまったら、それはそれでおしまいだなと思います。そういうところを含めると、建築三会さんの産と、あと学の方々も結構来られている中で、産学連携で、それではフロアごとに違う形を、色の話も先ほどありましたけれども、デザインからオフィスレイアウトも含めて考えていくのを分けてやっていくとか、そこから次へ何か継続していくものが生まれてくるような、学生もそこに刺さっていって学んでいけるチャンスがあるとか、今までの公共施設を単純につくっていくプロセスではないものがあることによって、次に何か生まれてくるものもあるんじゃないかなというふうに思いました。

榊原：
プロセスからそういうことをチャレンジする場にしていったらどうかという形のご意見、チャンレジ基地ですね、平賀さんどうでしょう。

平賀：
ご存じのように仙台は支店経済です。今、大震災があると東京が言われていますけれども、それに対して、支社のデータを集める基地があってもいいのかなと思いました。いわゆる東京がだめになった時に、ここにはこういうデータがあるよという支店が、慌てなくて済むような支店経済をきちっと、本社にかわるようなことができるそういう基地に、基地があったらいいかなと。全くシティホールとは違うことかもしれませんけれども、今言ったように、公共サービスを何やるんでも、こうやったらここだ、電気はどこだ、電話はどうなんだという、それは全く公共ですが、それがどうなったらいいのか、そういうのができたら、とも思います。そういう支店経済のやり方、それから東北大も山形大もそうなんですけれども、学生さんは卒業したらここに勤めないと。東京にほとんど行ってしまうと。いい頭脳が逃げていっちゃう。でも、「ここではこういうのがあるから、ここでやりなさいよ」というそういうものが、何も大型の会社とかそういうのではなくて、そういうふうな頭脳を使えるような、あるいは役に立つような、そういうプロジェクトがあってもいいのじゃないかなって思いました。

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

われたりする場合など、どうするのかといったところで、市公園マネジメント方針という話とは若干違う色味を帯びるのかなというふうに思っていました。
あと、２つ目の話としては、税金を使うだけの施設ではなくて、稼ぐ施設としてどう考えるのかといったところで、公民連携という話が出てくるかと思うのですが、施設を管理運営する主体、サービスを提供する主体、様々なイベントを行う主体など、様々なプレーヤーをどう関係づけていくかということが大切だと思います。

坂口：
いかがですか。ちなみに武田さんにお聞きすると、羽生選手のパレードは、当然市役所だけではできないので、相当いろいろな関係者が関わっていると思います。広場を超える主体というものが、最初にそういう組織的なことから考えることもあると思うのですが、もう一方で、例えば仙台七夕まつりのような、仙台にいろいろある非常に大きなイベントは、いろいろな関係者が関わって物事を進めていきます。そういったものから発展していって、何かしら単なる実行委員会ではないような組織のあり方を考えていく道筋も、それは結果的にその主体が、主体なのかはわからないですが、何か組織のようなものが場所の運営に関与していくということもあると思います。実態が形式をつくっていようなこともあると思います。そのあたりの可能性は何かありそうですか。

武田：
楽天の 2013 年のパレードは、楽天を支援する楽天イーグルス・マイチーム協議会という組織の事務局が商工会議所にあります。要はそこが音頭取りをしないと始まらない。あれは税金を使うわけでもないので、羽生選手のパレードもそうですけれども、基本は協賛をいただく、何かを売って資金を集めて実行に移すということをやっています。だから球団の協力は絶対マストですけれども、そこに県と市は人的な応援をします。ボランティアに参加することもあります。そうした組織をつくるために、実はもともとの受け持ちがあるということが大事だと思います。羽生選手のパレードは２回、荒川選手のパレードも含めると、３回やりました。そ

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

頂き、こういう場で議会の立場を明確に示していただきたいなと思いますし、それがまさに議員の役割なんじゃないかと思います。

渡辺（一）：
ありがとうございます。先ほど議員さんらしき方もいたようですが。では松本さんお願いします。

松本：
先ほど小野田先生からこのメディアテークの話がありましたけれども、そのときに一般市民が公共を考える、公共とは何かということを考える大きな機会だったということでしたが、今度の市役所建替えも、そういう大きな公共建築であり、そういう機会であると思います。みんなで大きな志を持って、みんなで本気でやると、小野田先生そうおっしゃいましたけれども、そのメディアテークをやったときの話を奥山前市長に聞いたことがありまして、「二度とやりたくない」と、「こんな苦労はしたくない」と、二度とあまり、しばらくやりたくないというかな、そんなことがありました。
行政だけにこういうことを担わせるというのは、あまりにも重すぎる。ですから、我々のような専門家が、先ほどお話ししたCABEのような仕組みの組織のようなものをつくり、それをサポートしていくということが、非常に重要なポイントになるというように思います。ですから、こういう機会をきっかけにして、これを継続していく。専門家がワークショップをしながら、なおかつ市民のワークショップに参加、それを繰り返していくというような、フィードバックしながら、そういう仕組みをつくっていけたらどうかなと思います。
今、「シャレットワークショップ」というのが割と日本でも普及してきていまして、まちづくりとか、組織計画なんかに使われていますけれども、それはやはり専門家のワークショップと市民に開かれたワークショップ、それを繰り返しながら、具体的な提案を市民にぶつける。市民は自由な意見を言ってもらう。あるいは、それに市庁舎にかかわる事業者でしょうか、いろいろな方が市庁舎にかかわってくる。そういった事業者の意見も取り入れて、それをフィードバックしながら計画を進めていくというシステムなのですが、そういうことも取り入れるということも重要だと思います。

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホール」とは何か」を考える

榊原：
ありがとうございます。どうでしょう、横山さん。

横山：
なぜ先ほど「公共サービスを行政だけではなく」と申し上げたかというと、今後つくる、随分先の話とは言いながらも、計画したらあっという間に来ると思うんですけれども、人口の問題、それからいろいろな経済の状態ですね、オリンピックがあってもの凄い大変なことが起きるとか、でも万博と言いながらも絶対いい方向には行かないと思うのですね。そういう時に維持できるかどうかっていうことって、本当に真剣に考えなければいけないと思うんです。だから、今のマックスの人口に対してとか、マックスのいろいろな経済状況の中での公共サービスのために必要な人員とか施設とかをつくるというよりは、私はその後のことも含めて、規模を逆に小さくするぐらいでもいいじゃないかということですね。
要は、今11棟に分散してあるというのを、どこかでは統合したいというお話のようですけれども、先ほど佐藤さんがおっしゃっていたように、築何年だとか、機能はここが一番いいとかいろいろなことが、建物の性格もあると思うのですけれども、それを上手に使って分散するというのはすごく大事だというふうに思っていて、集約というのは、情報は集約するけれども、機能を全て集約してしまうと、こちらにある計画のとおりに十数階建てで、面積も倍以上のものをつくらなければいけない、建築費もすごくかかわるわけです。
私も常に思っているのは、公共建築というのは、予算がついたらその予算を使い切ってランニングコストを考えない。これが一番問題で、要するにいろいろな自治体で苦しんでいて、与えられた建築物やインフラを維持できないのが現状だとすれば、最初からそういうことも含めて考えて、民間の力も含めて、「いや、いいよ」と。市が小さくなるのだったら、その分を民間で受け入れるからということを最初から覚悟して一緒にやっていくということをやらないと、本当に大変だと思います。要は、自治体ごとに人口の取り合い、今もやっていますけれども、それは余りよくなくて、今予想されるであろうところを、きちっとランニングコストも含めて考えてやっていかなければいけないと。これは、公共サービスってお金ではないですか、そういうことなんですね。結論は出ないと思いますけれども、そういう視点をぜひ入れていただきた

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

れはなかなか難しいです。組織をつくっておくことが難しいので、決まったら急にやるわけですね。主に市役所が音頭を取り、県を呼び込んで、種目で言えば県・市のスケート連盟なりを巻き込みながら実行委員会をつくるということで組織化を図る。ですから、パレードのときはものすごく少ないです。楽天は逆に、マイチームという組織があるので多いです。ですから今の広場を運営するということから考えると、失礼な言い方だけれども、きちっとした母体がないと物事が始まらないような気がします。市民が利用したいから市民の方も当然ですけれども、役所が何かきちっとしたものを決めていかないと母体も生まれないと、私は思います。

坂口：
清本さんたちのすずめ踊りや青葉まつりの視点からはいかがですか。歴史的な経緯があるので、賛同しやすいですが、一過性のイベントではないので、来年、再来年続けていかなければいけないです。そういった意味では、当然お金もかかることだと思うのですが、いろいろな関係者との関係をつくっていくために、どういった形でやっていたのでしょうか。

清本：
まず、先生の質問とちょっと違う観点で、今お話を聞いていて思ったことを一つだけ言わせてください。私、鶴ケ谷なのですが、鶴ケ谷も高齢化が進んでいて、みんなどんと祭に行けなくなってすごく困っています。正月飾りを燃やすこともできないし。市営住宅が老朽化したところ解体して、新しく公園ができました。そこで、どんと祭とは言わないのですが、火祭りというのができるようになりました。震災のときのサバイバルのことを考えても公園で火を焚けるというのはすごく重要ですが、普通はできませんよね。それが今度できた公園は許されていました。ただ、火祭りの母体は町内会です。町内会で全部管理して火の始末もして、そこでどんと焼きができるようになりました。だから、そういう町内の公園のことを今のお話を聞いていて思い出しました。
すずめ踊りや青葉まつりですが、青葉祭り協賛会が動いています。なるべく市民を巻き込んでということでやっていきたいと思うの

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

それから、子供さんの意見、小学校もそうですし、中学校、高校、いろいろな世代がありますけれども、子供たちの意見、大学生だけじゃなくて、そういった子供たちの意見をどう取り入れていくかということも重要です。そういったところは、例えば既存の町内会もそうですし、小学校、中学校、高校のPTAとかいろいろな組織があると思います。それらに専門家もかかわるような、進めていくというような仕組みというのも必要ではないかと思います。
最初、ファシリテーターが趣旨説明で言われた事例とかというお話があったので、今日本で設計中のものを少しお話ししますと、例えば日立市庁舎というのは、妹島さんという方がやられているんですけれども、大きな屋根、大屋根をつくって、市民の自由な活動の場として、それに付随してコンビニとか銀行などを入れたような、非常にフレキシブルな場所をつくっているとか、あるいは千葉学さんという方が府中市庁舎で、本来の市役所の機能は母屋というふうな捉え方をして、離れというものをまたつくり、そこは市民の活動に自由に使えるような、市民のアイデアを生かして使われる。それは時代とともに変わるということにも対応できるような「離れ」というものをつくって、その間に通り際をつくって街とつなげながら、活性化した外部空間をつくっていくという、中と外が連続するようなそういった新しい、あまりシンボリックではないのですが、市民のための市民の広場というものをつくっているというような、そういった事例もあります。
そういったことで、やはり都市ビジョンを考えると、なかなか市民の方々のみでは難しいところがあると思いますので、専門家が所々でかかわっていくようなシステムをつくることで、それもかなり具体的な意見として取り入れていけるような感じがしています。

渡辺（一）：
ありがとうございます。今のお話の中では、市民が、専門家以外の市民がワークショップをすることと、専門家がそれを取りまとめていくこと、それもシャレットワークショップといういろいろな専門家の方がぐっと集まってまとめる手法で、まさに今日はそのような会だと思います。そういうのをもっとやってみたらどうかというご提案だったと思いますが、普通の市民はどのようにこういうのにかかわっていければいいのか。市本庁舎を建てる、建

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

いということです。

榊原：
前半戦で内田さんから市民力という話もありましたけれども、今、横山さんから民間の力、企業の力というものも、うまくかかわらせていく必要があるのではないかというご意見だったかなというふうに思います。
どうでしょうか、周りでずっと聞いていた方、途中から聞いている方でもよいのですけれども、何か聞いていて、これ言ってみたいという方がもしいらっしゃれば。ここの中で議論していただければ。どうですか。辻さんぜひ。
辻：　最初から議論を聞いていないので的を射ているかどうかわからないですけれども、久しぶりに戻ってきたら、榊原君の前に紙芝居ができてたり、小島さんがいつの間にかコメンテーターになっているということで、驚いてお話を聞いていたのですが、まず一つ、皆さんに教えていただきたいというか、ここの場で日常的な市民の利用の視点から、市民のためのシティホールということで提起されているではないですか。シティホールというと、最近だと葬祭会館なんかもシティホールなんていう言われ方なんかしていて、このテーブルBでお話しされているシティホールの位置づけというのを皆さんどんな感じで解釈されて、このキーワードを使っているのかというイメージだけでも結構なのでちょっとだけお聞きしたいというふうに思いました。

榊原：
前半戦で出ていたのは、まちづくりセンターとかシティギャラリーで、それは市民がかかわるまちづくりについて、仙台のまちについて何か意見を言える場というものができるように、まず情報がそこに集まって、できればそれが模型であったり3Dであったり、5歳児でも理解できるものがあって、まず自分の意見が言える場、そこには職員も議員さんもいて何かディスカッションできる、そこは多分悩みだとか市民の思いというものが政策に繋がる種であろうという議論は少し前半で出ておりました。
そんな話を聞いていてちょっと飛躍してしまったのですけれども、仙台のまちをつくるための秘密基地的な、秘密でなくてもいろいろな基地があるじゃないかなと勝手に僕は思って、「仙台のまちをつくる基地」というのをまずつくってみたいのです。ただ、いろいろなキーワードが出ておりまして、サロンみたいな話もありま

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

ですが、もっと市民参加型にしていきたいと思いつつ、現時点では青葉祭り協賛会で枠組みをつくって、毎年やっているような状態です。

坂口：
質問の意図としては、大曲の花火大会がありますよね。あれは100年ぐらい続いているのですが、競技花火なので、花火の時は全国から花火師が集まってきます。人口数万人のところに80万人ぐらい来るので、まちはパニックになります。僕はポジティブなパニックと呼んでいるのですが、でもあれが100年間続くと、まちは結構鍛えられると思います。しかも花火師の大会なのでやっているレベルも相当高いです。単に持続するということだけではなくて、青葉まつりのように、これから100年続いていくようなお祭りは、コンテンツのおもしろさなのか何かわからないのですが、そういう部分によってそこに吸引される人も多分違うと思います。それは広場も同じだと思います。おもしろい広場なのかどうかによってそこに集まっている人の質も違えば、結果的に、そこで起きてくるアクティビティの確率も変わってくるので、そういった意味では、多分広場のあり方って重要だと思います。何となく祭りというのは人の集まりだけじゃなくてまちを鍛えていく。それは実行委員会のつくり方も影響しているのかなと思ったんですね。
石塚さん、今までお話を聞いていて、広場を超える主体という切り口は幾つかあると思います。少しコメントいただけますか。

石塚：
先ほどの広場を運営する主体が必要というところは、私も同感です。実際には実行委員会をその都度その都度つくっていくということは、その力が一番重要というか、マネジメントする主体はもちろん必要なのかもしれないのですが、そこで何かをやろうとする人たちがちゃんとやりたいようにというか、参画というか、実施ができる環境がすごく必要なのかなと思います。そうすると、運営する主体が全部やるというよりは、先ほどからも出ていましたけれども、そういった活動を誘発するような母体のようなものが必要なんじゃないかなとちょっと思っていました。

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

替えるというのは、108万人市民のうち100万人ぐらいは関係ないと思っているかと思います。「あ、建替わるんだ」ぐらいまで含めたって数十万人ぐらいじゃないかと思うんです。何となく肌感覚としてですが。では、その方々にどうやってこのことに関わってもらえるのか。もしくは、別にそこまでやらなくていいのではないか、なのか。
残り間もなくですので、もう今日はまとめません。まとまらないので、言いたいことを言っていただいて、第2回、第3回へつなげていこうと思いますがいかがでしょうか。

小野田：
せっかくですから、周りの人にも話を聞いては如何でしょう。

渡辺（一）：
そうですね、我々は2周しましたので、周りの方でずっとお話を聞いて頂いて「俺にも言わせろ」みたいな方がいれば、是非お願いします。

小野田：
誰も出ないかもしれませんが、この企画は、このようにオープンになるセッティングだし、そういう空間ですから、色々と取っ払って、専門家とか何とかというのも取っ払っていろいろ議論してもいいんじゃないかなと思います。

渡辺（一）：
どなたでも。そうそう、勝手に今、小野田先生がマイクを渡すという。目が合いましたね。では、お名前をいただいて、お願いします。

会場1：
すみません、コンサルタントをやっています安本と申します、よろしくお願いします。
今回、市民参加・市民協働の視点からその計画プロセスを考えるというテーマだったと思いますが、先ほど渡邉さんからもありましたが、やはり議論する核がない気がしています。108万の人口で市民参加・市民協働をワークショップでやりましょうって、「ばか

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

したし、そもそも市役所を何十年ぶりにこの間行ったとか、そんな議論だったので、まず、どう市民が行きやすい、敷居を低くするかみたいな議論も前半にありまして、その中で「オープン」というキーワードが出てきましたというところです。
辻：ありがとうございます。一生懸命説明していただいてありがとうございます。そうですね、市役所となると、今ちょっとお話の中で何十年ぶりに市役所に行かれたという方もいらっしゃるというようなお話を聞いたのですけれども、普通の市民に対する行政のサービスは区役所が主導になっていて、市役所があそこのところで建て替えられて、その市役所の内部の機能というのはオープンなところも必要でしょうけれども、プロフェッショナルの方たちが行くクローズされた部分もあると思うので、そこの関係性もよく考えながら、オープンというキーワードに基づいて議論を深めてほしいというふうに思いました。以上です。本当ありがとうございます。

榊原：
済みません、突然振って。何となくまだフワフワしていて、市役所の担い切れない公共サービスというものを民間なり市民のほうでも、市民が担うかどうかはちょっと置いといて、今後、行政だけでは公共サービスが担い切れなくなるだろうという問題提起でして、そういうことを今回新しくつくるシティホールの中で何か体現していくものが必要ではないかなというのが、意見を聞いてこういうふうに個人的に思っていたのですが、澤口さんからは、産学にある若い人たちが、プロセスにもいろいろな形でかかわる必要性があるのではないかという話も伺いました。民間の力を、プロセスもそうですが、できた後ですよね、できた後、シティホールとして機能させていくというものも多分相当必要になってくるのではないかなというふうにお話として伺ってきております。
あと20分ぐらいありますが、最後、論点をどういうふうに整理しようか悩んでいるところですが。

佐藤：
ここの行政サービスが、担い手が、というふうな話があったのですけれども、自分がすごく感じているのは、どんどんどんどん稼げることを民営化というふうなことにして、市役所は苦しくなっていくというふうな図式が、全国どこでも今進んでいると思うのですよね。その時に、稼げるところが縮小してしまうとどうなの

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

主体の機能として僕が必要だと思うのは、情報発信や情報共有かなというふうに思います。話かちょっとずれるかもしれないですが、ドイツの哲学者のマルクス・ガブリエルさんという人が、民主主義はつまるところ情報処理だという話をしています。最近そういったことを考えながら、私も日々活動しているのですが、やっぱりまずは情報が集まっている主体なり拠点なりというところがあることで、大分それぞれの主体の活動が促進されるのではないかと今お話を聞きながら思っていたところです。なので、主体の法人をつくればそれでいいというわけでは全然なくて、主体が何をするかということをもう少し議論していけたらなと思いました。以上です。

坂口：
ありがとうございました。高橋さん、お願いします。

高橋（清）：
祭りとかそういうものも当然大切なことですが、行政の庁舎というのは、災害が起きたときの対応もあると思います。3．11災害の翌日に応急危険度判定といいまして、建物が使えるか使えないか、緑の紙を貼ったり、黄色の紙を貼ったり、赤い紙を貼ったりします。これは震度5強、6弱ぐらいになると、自動的に国交省のボランティア団体として活動を始めます。大きい災害が起きると、ほとんど電話がつながらない。メールも震災直後はつながるのですが、ほとんど連絡のとりようがなくなってしまいます。そうすると、どうやってそういう活動を始めるかということで、県庁にまず翌日の朝一番に行きました。もう階段からホールまで全部被災者でごった返している中で、エレベーターは止まっていて、階段上って9階まで行って、今後どういう対応をするのか聞きました。そうしたら、建築宅地課の課長さんが、行政も各市町村と全く連絡がとれないと言われました。市町村からの応援要請も全くない状態でした。金曜日の地震で、土曜日の朝に行って、次の日が日曜日なので、月曜日の朝にもう一度来てくれと言われて帰りました。今回たまたま津波が大きい災害を起こしていまして、その時点で宮城県では建物の被害調査よりもひつぎを幾つ用意す

Table A
【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

言うな」と多分言うと思います。では、その中で全市民に対してどういう情報を発信して、どういう意見をもらうのかといった観点からすると、
このコンセプトですと、意見はもらえないんですよね。こういうことがしたいという明確なビジョンを打ち出して、それに対して意見をもらう。例えば、これは私の意見ですけれども、市民ホールというのであれば、「知の集積」とか、そういったところを考えていきたい。何かこういう空間をつくりたいんだというぐらいのビジョンを出さないとなかなか意見は聞けないのかなと思います。

渡辺（一）：
ありがとうございます。確かに問いが立っていないと集まらないですよね。

小野田：
じゃ、どんどんいきましょう。はい。どんどんいきましょう。はい、はい。

会場２：
及川と申します。
きょうは大変興味深くお話を聞きました。先ほどありました、いろいろな市民の意見を拾う場というのはもっとあっていいと思います。私は障害者ですが、バリアフリーでも計画が大体でき上がってから意見を求められる場合が多いんです。そうなってしまうと、本当に利用する側が求める機能が全然入らないものになってくる。そういう意味でも、いろいろな対象の市民が意見を計画段階から発信できる場をもっと設けてほしいと思います。以上です。

渡辺（一）：
ありがとうございます。

小野田：
はい、そのほか、いかがでしょうか。はい、はい。

会場３：
第２部でも登場しますが、中央復建コンサルタンツ（株）の末と

Table B
【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

かなと思って、一番自分の念頭にあるのは、ヨーロッパで一番大きな設計事務所ってわかりますか。ヘルシンキ市役所だそうです。それが400人いて、そこでは市の色々な物を管理して、土地を売ったりとか建物を建てたりとか、そこで事業がどんどん回っているというふうな仕掛けがあります。だから、このところで市民参加の何か面白い、先ほどの竹下さんのお話ではないけれども、何かどんどんどんどん仕事が生まれて何かになっていくような、そういうふうなものがこの仙台のまちをつくっていく基地になるといいなと思います。
さっき平賀さんが言ったスポーツミュージアムもそうでしょうし、いろいろな発想が市民を豊かにするような、俺たち稼ごうかというふうなところもあっていいのかなというふうな気がするので、何かそういうふうな仕掛けもあわせてというふうなところをちょっと感じたところです。

榊原：
ありがとうございます。どうでしょうか、そのほか。竹下さんどうでしょうか。

竹下：
市役所の場に、「市民が稼げる場」というのにすごく共感できるんですね。ほかの市の例を挙げさせていただくと、富谷市さんなんかは、屋上でたしか「はちみつプロジェクト」とかって、あれも市役所さんと市民の方たちが協働でやられているんですよね。それも何か前に市長にお話を聞いたところ、当番を決めてみんなが順番に世話をしに来る。そうすると、必ず市民の人たちが世話をするために市役所に訪れる、そういうのがあって、面白いなとお話を聞いたことがありました。
あと同じ富谷市さんで、ギャラリーというか窓口の１階の外れのほうですかね、ホールがあるのですね。そこで、今、月に１回、不定期かわからないのですけれども、イベントをやって、マルシェみたいなやつを、それが富谷市民の方とか店舗を経営されている方でも出られるんですけれども、市役所でお店を開いて稼ぐというのが面白いなと思って一回見に行ったことがあったんですが、それを市役所の方が見ていらっしゃったし、市長さんとか、某国会議員さんとかも普通の格好で見に来られたりしていたのですね。何かそれを見た時に、「あっ、ここって、議員さんとか市民とか職員の方とかが協働でみんな」、もちろん委託されているところはあ

Table C
【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

るかということが言われていました。土曜日の朝でもう5000ぐらい用意しなければいけないと。そういう話を聞いて、仙台市役所に行きましたら仙台市役所も全く同じような状況で、８階の大ホールまで避難民でごった返していました。この平穏なとき、祭りとか楽しいこともいろいろあるのですが、行政に市民が頼るというのは、災害が起きたときに、ここに行けば何か助けてくれるのではないかということで、皆駆けつけてくるわけですね。そういう機能が庁舎の中に必要だし、市民広場の中にも当然必要になってくるのではないでしょうか。
今いろいろなところで、公園の中にトイレを簡易に設置できるように排水パイプを張りめぐらせておく公園があちこちにでき始めています。私ども協会の活動として、災害が起きるとこういうことに次々と対応しなくてはいけないということを、熊本や震災が心配されている東南海とか四国とかそういうところに行っていろいろ話をします。行政で大事なところというのは、そういう災害に対応してまず建物自体が安全であるということですね。市民が安心してその場に駆けつけられる、そういう建物を広場とともにつくっていかなくてはいけないと思っています。

坂口：
ありがとうございました。災害を想定した屋外空間のあり方は基本中の基本だと思います。加えて、災害が起きないときの広場の使い方を両面で考えようというところだと思います。
大澤さん、いかがでしょうか。

大澤：
音楽ホールをつくってくださいと言っている市民団体の事務方として一つ言いますと、もし仙台市が音楽ホールを建設するとすれば、仙台市が大震災後に建設する大型施設として文化施設を建てるという大変大きな選択・決断ということになるかと思います。市庁舎はマストな施設なわけですけれども、これもまた大きいです。私たちは、音楽ホールはぜひ都心部にと言っております。どこにどういうものが建つのかわからないのに言っているので迫力はないのですが、もしこの仙台市役所と音楽ホールが都心部のそ

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

るのでしょうけれども、何か場が一つとなっていてすごくワクワクしたというか、こういうのも仙台市にあったらいいなと思って帰ってきたことを思い出しました。

榊原：
マルシェみたいなやつ。稼げる場になるのだったらみんな行きますよね。

竹下：
その時は、野菜を売っている方もいれば、あと手づくりのアクセサリーを売っている方もいらっしゃいましたし、お店でいつも出しているハンバーグをお弁当にして出しているという方もいたのですけれども、とにかくいろいろな方がいて、こういうのを富谷市でやっている方がいるのだ、というのと、富谷市でそれを一緒にやっているというのが、何か一緒になってやっているのがすごく面白く感じて帰ってきたんですね。

榊原：
そうですね、役所庁舎の中でやられているということですよね。

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

ありがとうございます。何か起業支援とかにも繋がるのかもしれないですね。何かやりたいというチャンレジしたい人たちの場にもなるのかもしれません。
そのほかどうでしょうか、今、稼げるという部分が、最初の前半の部分では市民が情報を得たり意見を言える場みたいな形でありましたし、もしかしたら政策を検討する場みたいなところもあったと思います。何か少しずつふえてきました。それをオープンな形でつくってみてはどうかということと、もしかしたら、これから行政だけでは担えない公共サービスが新たな仕事になっていく可能性もあるし、できれば市民、企業が稼げる部分が空間的にあってもいいのではないかというのが、何とか後半の方で話が出てきたところです。
あと15分というふうに言われたので、ちょうど1人2分言って、それで締めてもよろしいですか。何かもう、皆さん言われたことは何となくここに大体出切ったかなというふうに思いますので、今日の感想でもいいですし、まだ言い足りないところでもいいですので、最後一言ずつお話を伺って締めたいなというふうに思います。

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

れぞれのところに位置してできれば、まちづくりに大変大きな役割を果たすことになるなと思います。回遊や交流など非常に大きな概念として、そういったものが浮かび上がってくるのではないかと思います。先ほどお話ししたように、そういう意味でも市庁舎と広場、あるいは音楽ホールと広場、それは一体仙台市で何を実現していくことになるのかということを決めながら、どういうところが運営していくのかということも、そういったところの流れではないのかと思います。ホールができますと、東京や東北全域をつなぐことになります。東京のアーティストは、もしかしたら最終の新幹線で帰れるようになるかもしれないわけですね。そういった話も含めて、ぜひそこのところで市役所とホールの2つがまちづくりの起爆剤になればばと思います。以上です。

坂口：
ありがとうございました。音楽ホールも市役所の建て替えと遅れてといいますか、それが終わってからの話も結構あるのですが、多分今後の大きな議論のポイントに確かになると思います。

本郷さんに1点お伺いしたいのですが、実は広場の主体を考えるときに、大きな主体を考えるということよりは、前半のプレゼンテーションにありましたように、ローカルでつながってちょっともうけていくというか、多分いろいろな小さな主体が、結果的には大きくはないんだけれども、ちゃんと確実に、しかも魅力的なコンテンツをつくり出すチームといいますか主体としてつながっていくことが多分これからのまちづくりの基本だと思います。市庁舎は結構大きなプロジェクトだし、音楽ホールも大きいので、それに対抗する主体というと結構大きくなるのですが、実際に今やられているような活動は多分そういった部分のカウンターではないですが、でも実はそこが人のインターフェースにとっては重要な場所なのではと思います。先ほどの1杯のコーヒーでおもしろくなるというのは、そういったことが相当ないがしろにされている背景があると思います。多分市庁舎の経過はそういったことがよりないがしろにされやすくなる傾向にあると思うので、そのあたりで、コメントをいただけますか。今日のこれまでの議論でもいいですし、今ローカルでつながっているけれど、もうちょっ

言います。

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

この市民参加というのは、計画のプロセスという意味で言うと、専門家側からすると、今後のその基本計画とか設計が進んでいく中に、どういう機能とか仕様を入れていくのか、あるいはどういう役割を与えるのかというようなところを今集める場がないというようなことだと思うので、こういう議論をされている内容というのが、どのように今後の基本計画とか設計業務とつながっていくのかというところが、今日のこの場の立て方の中でも決まっていないのかなと。はっきりさせていないのかなというのを感じます。だから、この場を続けていくのか、あるいは別の場を立てるのかというのはわからないですけれども、発注者側の人たちがこの場で議論されている内容を聞いて、次の業務をどのようにつくっていくのかということを考えるということを、正式にオーソライズしておくというようなところなんかが一番大事な話じゃないかなと思っております。

渡辺（一）：
ありがとうございます。

三部：
３回目で恐縮ですが、今お話しなさった方々を含めて、また私が提案した分を含めてですが、パブコメに対する回答です。皆さん方ごらんになっていると思いますが、基本計画において「検討します」「各部局に伝えます」というのが多いのです。中身がないのです。ですから、整備パターンにしろ、今のお話にあったユニバーサルデザインにしろ、具体的に基本計画で「こんな検討をします」とか、いつごろとか、そのお知らせ、メッセージを常に出していって、マスコミにもまたそれを報道していただくような場なり含めてしっかりやるべきじゃないかなと思います。

渡辺（一）：
ありがとうございます。今日こうやって話したことは、今その基本計画をつくる会社の方がいるのかどうかわかりませんけれども、お伝えをすることになるわけでしょうし、後ほどご挨拶があると思いますけれども、市役所の担当している方にもこの話は伝わるわけではあります。

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

佐藤：
私は、非常に皆さんとお話しできていろいろなアイデアが出てきたし、あと触発されることで自分の考えていたアイデアって繋がるなというのをすごく感じられたので、すごく良かったです。皆さん本当にどうもありがとうございます。

横山：
私は、やっぱり市民の力って大きいとは思うのですが、市民でも勉強をする、ちゃんと仕組みの中にきちっと対応できる方に関しては、その稼げる市民として公共サービスを担うとかそういうところに入っていくとよろしいんじゃないかと思います。
さっきの八戸の例は、図書館ではなくて本屋さんなんですね。市役所が経営している。そこの中で、登録した市民作家が、そこから本当になった人もいたりして、またそこで稼いでいるわけですね。だから、こういうのをいろいろ置き換えていくと、個人でもいいですし、資本力がない、でも力がある人がまちにコミットできるというのが、物すごくまちとしての大きな力になると思うので、そういったことを実現できるようにしていきたいとも思うし、してもらいたいなというふうにも思いました。本当に今日は機会をいただきましてありがとうございました。

杉山：
街中に賑わいをつくろうとする時に、お金を落としてくれる人々を集める商業イベントをイメージをすることが多いのですが、それって、市民を消費者としてしか見ていないのですよね。新しい仙台市役所が目指す賑わいはそうではなく、まちづくりや福祉などに関する情報を得たいとか、質問をしたいとか、議論をしたい、あるいは悩みがあるとか、楽しいイベントを立ち上げたいとか、そういった市民生活を改善したい、暮らしやすいまちにしたい、など様々な想いを持った市民が集まれる場作りが大切なのだと思います。それが市民と市政を繋げ、新たな市民活動に繋がることにもなるのではないでしょうか。ちょうど、ギリシャ時代のアゴラやローマ時代のフォーラムのような場に、市役所の１階がなったら良いなと思っています。今日はどうもありがとうございました。

平賀：
お疲れさまでございました。私、「エン（縁）ターネット」という

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

と違う展開を考えていらっしゃるところがあればその辺の展望も含めてお願いします。

本郷：
僕がイベントをやっているのは、イベントをやりたくてやっているわけではなくて、そういった風景が毎日ある街に住みたいからやっています。でも、毎日はできないです。公民連携しない限りは毎日できなくて、僕のプロジェクトは全部公民連携で実はやっているのですが、民間だけで、１日だけでもいいから僕らの力で実現させようよという 100 人くらいのメンバーがいて、その中には公務員もいて学生もいて大人もいます。それで仙台コーヒーフェスだったり仙台パンフェスだったりグリーンループ仙台というのをやってきました。この活動が本当の公民連携に発展して、広場や公園でもいいですし定禅寺通でもいいのですが、毎日何万人も来てと言っているわけじゃなくて、こういう街になったらいいなというのを真剣に考えている市民が、日本で一番過ごしやすいような風景をつくれたらいいなと思って会社にしてやってきました。一つおもしろいなと思った事例が、この間、ポートランドに行ったときにある広場で、そこの広場は市民広場と同じぐらいの広さなのですが、床が全部レンガでできていました。そのレンガをよく見ると名前が書いてありました。多分何万個というレンガを市民がクラウドファンディング的に１万円で１個買うことができて、１万円を寄附すると名前が入ります。何万人もの市民でつくった広場がポートランドには存在していて、そういった広場が、今議論していた「広場を超える主体」というのにつながるきざしになるのではと思いました。結構自分事に感じているローカルファーストな市民が多いです。
今、仙台って日本でも一番ローカルファーストな人が増えつつあるフェーズに入っているような気がしています。だって僕みたいな奴が言った「コーヒー、ここで飲めたらいいよね」というのに何万人もの人が反応して来てくれたというのがびっくりで、だからそういう小さな動きだけど、それを実は公務員も一緒にやっていたり、民間でも僕らの仲間はパークＰＦＩということを勉強していて、仙台のローカル企業が榴岡公園の公募に受かったりして

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

ほぼ時間になってしまいましたが、論点出しや、幾つかの「こうやったらできるかもしれないね」という可能性をいただいたかと思います。三部さんからは「これ基本計画とったところがこういうことを業務としてやるというのは一つ手だね」というお話もありましたし、渡邉さんからは、それこそ選挙などの争点にもなり得るんじゃないかとか、むしろ本庁舎をつくることは市役所がやるかもしれないけれども、エリアをどう考えるかは多分ほかの市民がつくり、それをぶつけてみるというようなこととか、小野田先生からは、計画をつくるというところを我々市民も応分に負って提案をするとか、一緒につくるということを本質的にやらない限りこの話は進まないのではないか、などのお話をいただいたかと思います。

渡辺（一）：
この市役所の建替えというお話が何となくしっくりこないというのは、都市ビジョンがないというところの話は共通かとは思いましたが、まさにその都市ビジョンを今つくろうとしている総合計画の策定というのも同時並行で行われようとしています。我々のまなざしができるだけ普通にお金をかけずにやれというまなざしで続いてしまえば、基本構想にしても都市ビジョンにしてもつまらないものを我々は多分つくってしまう。もしくは、そのつくったことに対して異議申し立てしないまま終わってしまう。そうすると、渡邉さんが定点観測されている福岡のように、一応の都市ビジョンがあり、地政学的にもいいポジションもあったからあそこまで頭一つ抜き出る存在になったと、では仙台は、近い立ち位置のようでも「ほどほどの街」をつくり続けるということを我々は選んでしまうのか、もしくは何かまたもう一段おもしろい街とか、住みやすい街をつくるということをやるのか。そうすると、僕はこの市役所本庁舎を建替えるということだけではなくて、街のビジョンというのを誰がどうつくっていくのかという話までやらないと、オフィスビル１つつくる話ではないということが分かります。それを本庁舎の建替えという、せっかくこういうおもしろいわかりやすいトピックがあるので、そこでやってもいいし、片一方では30年後の都市ビジョンを定めて10年間の計画をつくるというのが今仙台市で行われているので、そこに我々が何かものを申していくとか、一緒に計画をつくっていくということがも

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホール」とは何か」を考える

言葉が好きで、インターネットではないのです、「縁」なんですね、皆様の縁を使って、それをどうやっていくか。私はお金はないんですけれども、人財産はあるよという方がいると思うんですね。人のネットワークをすごく持っていらっしゃる方、そういう方を主に使っていくということと、縦割りをなくして、道路をつくってよくわかったんですよ。水道局も必要だしガス局も必要なんですよ。電気、電話、全部必要なんですよ。だから、全てに横割りの平らになるような、非常に難しいと思いますけれども、そういった行政の部分が徐々にでき上がっていけたらいいなと思います。

舛岡：
ちょっと唐突なんですが、このプリントの一番後ろに、これまでの市役所の建物の写真が載っています。私は一番上は知りません。けれども、２番目、３番目は知っているわけです。今度は、新しいのをここに付け加える。そんなにも建築というのは短寿命だったのかと。ヨーロッパの例えばシティホールというのは、何百年とか存在価値を示しているわけです。ですから、建築の集団が今日は主体ですから、ぜひとも長寿命の仙台市役所、新しい市役所を考えていただきたいのが一つです。そういう技術はもうお持ちだと思うんですね。
それから、もう一つ、先ほど今のメディアの話がありましたが、こういう分散型も悪くはないと私は思っているんですね。垂直集中型というのは、１カ所参ったらアウトですけれども、だからそういう意味では新しい技術を使いながら、適当に仮庁舎も生かして無理しない計画のほうが、先ほど横山さんがおっしゃったように、借金づけにはならないで済むのではないかと。

内田：
今日は、とても楽しい時間でありがとうございました。私は、ＮＰＯの視点からということになるかとは思うのですけれども、今お話を聞いていて、「あっ、そうか、市役所を使うのって職員さんとか議員さんも」って。わかってはいたけれども、自分の中ではアウトプットできていなかったというところがあったので、「そうか」って。その特性ってそれぞれあると思うし、市民としてどうなのかとか、団体としてどうなのか、個人として職員として議員としてというところをどうフラットに、それぞれのできること、できないこととかやりたいこととか、「ああ、じゃあこうすると……」とかというところを、話をできるような市役所になっていっ

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

います。例えばこの広場をマネジメントできるのかという議論が出たのですが、民間だけでは確かにちょっと難しいのですが、例えばそこにパブリックマインドのある公務員が出向してくるとできるのではないかと思います。ポートランドは民間と公務員が出向し合って組織をつくっていきました。そういう新しい働き方をやっていけば実現可能なんじゃないかなと思います。ただ、そういったところはまだ、もう少し時間をかけないと、現状、日本では難しいのではと感じています。

坂口：
今の話しは、運営の仕方だけではなくて、広場のつくり方から、きちっとしたオーソライズしたプロセスではないけれど、関われるところに関わることによって結果的にできたというか、多分できるプロセスもずっとアンダーコンストラクションでという話に聞こえました。そういったことも大事だということですか。

本郷：
そうですね。やっぱり巻き込んでいったほうがみんな自分事になるかなと思います。やりたいと思っている人は実はいっぱいいるかなと思います。

坂口：
あと数分ですけれども、ぜひこの一言は言っておきたいみたいなところがもしあれば、山田さん、お願いします。

山田：
「広場を超えた」という言葉の意味を私もよく理解していないのですが、多分、イベントをやる主体としての運営主体と、広場を運営するあるいは広場を含めた複数機能を運営する主体とは意味が違うと思います。例えばここのせんだいメディアテークでこういう形でやっているのは、イベントをやる主体はいろいろ大変でしょうけれども、この建物の管理運営をする主体はサポートするための諸機能がある。それを広場プラス市庁舎、あるいは別の機能を含めて貸し館事業と自主事業をちゃんとやれるような、そういう

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】計画プロセスと運営を考える

しかするとできるかもしれないね、ということかと思います。

ただ、この2時間半、皆さんと話していて本当に思いましたが、まちづくりの専門家のような人がちゃんと話に入ってもらわないでやらないと、いわゆる一般市民のみでは、きのうもワークショップをやったのですが、国際センターで100何十人集まって仙台の未来を考えようという話をやったのですが、中身は何かというと、「もっと金よこせ」なんですよね。「私、30年後死にますので、今すぐ高齢者福祉を厚くしてください」「私はここに住んでいるのでバス路線をふやしてください」という話になるわけです。そうなると、ただのぶんどり合戦になりますので、そうではないもっと先を見たときにどういう道筋でこの街をどうしていくのかというのは、そういう長期的視点を持っている方であったり、そういうことをやったことがある皆さんと市民がどういうふうに一緒につくっていくのかということが本当に必要だなというように感じました。
つたない司会といいますか、きょうは本当に僕が建築とか建設とかの皆さんからまちづくりのこういうプロセスのことを学ぶという機会を頂き、ありがとうございました。

小野田：
ちょっと最後に。あまりきれいにまとめないほうがいいと思います。これ、みんなが何も言わなかったらそのままビルが建つだけなので、そうではなくて、「こういうふうにやれるぞ」というようにおもしろく、本気で自分事としてやれるかどうかだと思うんですよね。僕が仙台に来た30年前から25年前は、仙台ってすごいおもしろかったんですよ。定禅寺通にいろいろな芝居小屋とかあって。だんだん何か普通の街になってきて、メディアテークはつくれたんだけれども、何かすごく普通の街になってきたような、それは多分8割方僕が年とったからだと思うんですけれども、しかいもう一度、このお金のない中でこういう市役所をつくるということをみんなのこととして考えて、「俺たちは仙台に何ができるのか」と徹底してやったらいいんじゃないですか。それを逆にサラリーマンの大手企業の大手設計事務所の人たちがまとめる。彼らが言ったことをなんとなく承認するんじゃなくて、みんなが言ったことを専門家がどうやって落とし込むか。ただ、「言うけれども

Table B

【日常的な市民利用の視点から】市民のための「シティホールとは何か」を考える

たらいいのかなと思っています。このお話をいただいた時に、どういう市役所と思っていたら、「あっ、そうだ、市役所へ行こう」って思えるような市役所がいいなって、何かあった時にと思ったので、何かそういうフラットな場所ができるような市役所になったらいいななんて思いました。ありがとうございます。

竹下：
今日、皆さんのお話を聞いて、仙台市が全国の行政の方やもちろん議員さんの方から、「仙台のようなシティホールをつくると、市民、職員、議員一体化となっていろいろなことに取り組めるよ」というような、そういったロールモデル的なものになれるといいなと思って、すごくお聞きしていました。
今日、偶然にもＯＢの方ですか、市役所の方と、議員さんの方のお話を聞けて、こういう場、本当に多分市民の方で関心ある方、求めている方いらっしゃると思うんですね。ぜひ開かれた市役所であってほしいと思うので、こういう場をまた続けてほしいなと思います。今日はどうもありがとうございました。

澤口：
今日なぜ自分なのかというのを考えつつ、余り準備もせずにここに参加させていただきましたが、皆様のお話を聞いて非常に勉強になりましたし、直接すぐ仕事に繋がるかというと、そこは結び付かないところばかりですけれども、でも、考え方がいろいろある、多様性を持つということが面白かったことと、その立場立場の役柄に基づいての話の部分と、特に行政の職員の方と議員、先生と呼ばれている方々のあり方の中の話というのは非常に面白かったなと思うと同時に、ただ、それを外した時には、内田さんのお話で、共有できるのは一気に近づいてくるというところも興味深かったですし、そして何よりも仙台市ということを考えた時に、いろいろな発展可能なアイデアがあるのだなというところが非常に興味深くて、ワクワクした仙台になっていける可能性に満ちあふれていると思ったのが、本当に今日はよかったと思っています。ありがとうございました。

榊原：
皆さんのご協力で何とか時間どおりに進めました。最初の話にもありましたけれども、何かまとめるという方向ではなかったと思うのですが、何か皆さんの話を聞いていると、こういうことかな

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】市役所を考える

運営主体が大事だと思います。その議論はなかなか難しいのですが、ただ、市民の方も含めてこれだけ個別にイベントをやる主体がいろいろ出てくると、多分場の運営主体は非常にやりやすくなるし、それらのイベントを実際にやるところの調整なりあるいは発掘なり、そういうことができるという状況になりつつあると思います。その点をすごく期待をしたいと思います。

坂口：
貴重な意見ありがとうございました。せんだいメディアテークで言うと、あそこの大開口があくのですが、定禅寺通でのイベントとこっちのイベントがもし、同じ主体がやれればいいのですが、違う場合でも、開口をちゃんとあけることにすると両方にプラスがあるかもしれないということですね。境界線は引かれるのですが、境界線が引かれることによって結果的にボールのやりとりがなかなかできないことがあるのですが、さきほど石塚さんから提案があった広場主体というのはそこだと思うのですが、大きな主体をつくるというよりは、何かしらどこかで引かれた境界線が出てきています。それは、山田さんおっしゃったような貸し館や管理だってすると思います。引かれた境界線をちょっと緩やかにするような、それは大きな権力かもしれないし、小さい活動かもわからないのですが、そこができてこないとなかなか場が生きてこないかなと思いました。ありがとうございました。
今回は前半戦でいろいろな課題を提示させてもらいましたし、後半、意図的に皆さんに議論してもらった「広場と広場をつなぐ」だったり「超える主体」というのは、これから市庁舎が議論されている一つのテーマの部分もあるかと思います。
このラウンドテーブルの後半に、佐藤さんがファシリテーターをやられるテーブルＥで定禅寺通の界隈の議論もあります。そこも含めていろいろ意見が出てくると、これからの仙台のいろいろな、特に屋外空間を中心としたアクティビティのつながりにも少し可能性があるように感じました。いろいろな人たちがちゃんと参加できるアクティビティがやはりこれからも重要だということも伊藤さんから貴重な意見として述べていただきました。
長時間にわたりましたが、本当にどうもありがとうございました。

責任もとるぞ」というのを皆さんがちゃんと言えば、世の中は捨てたもんじゃないから結構変わると思うんだよね。それができるかどうか。でも、「そんな面倒くさいことはしたくないな」と思うのか、「いや、でもおもしろいんだったらいいじゃん、やろうよ」というようにやれるかということだと思うので、僕はおもしろいほうに行こうかなという気がしましたので、ぜひ一所懸命雑巾がけはしますので、一緒にやりましょうという、そういう感じじゃないですか。

渡辺（一）：
ありがとうございます。最後よほどきれいにまとめていただきました。楽しい街はみんなでつくれますので、皆さん一緒につくってまいりましょう。ありがとうございました。

Table A

【市民参加・市民協働の視点から】
計画プロセスと運営を考える

というのがぼんやりと見えてきております。ただ、最後、内田さん言った「そうだ、市役所に行こう」、それが「シティホールに行こう」というふうになるのが理想かもしれませんね。なので、誰かがおっしゃっていました「責任ある市民」という話もちょっとあって、ちゃんと我々市民側も責任を持って、この市役所の本庁舎建て替えなりシティホールをつくるということを見続けて、その後もかかわり続けるということが大切なのかなというふうに思いました。
それでは、今日はどうも皆さんありがとうございました。

以上

Table B

【日常的な市民利用の視点から】
市民のための「シティホールとは何か」を考える

お疲れさまでした。
以上

Table C

【市民イベントや観光など非日常的な利用の視線から】
市役所を考える

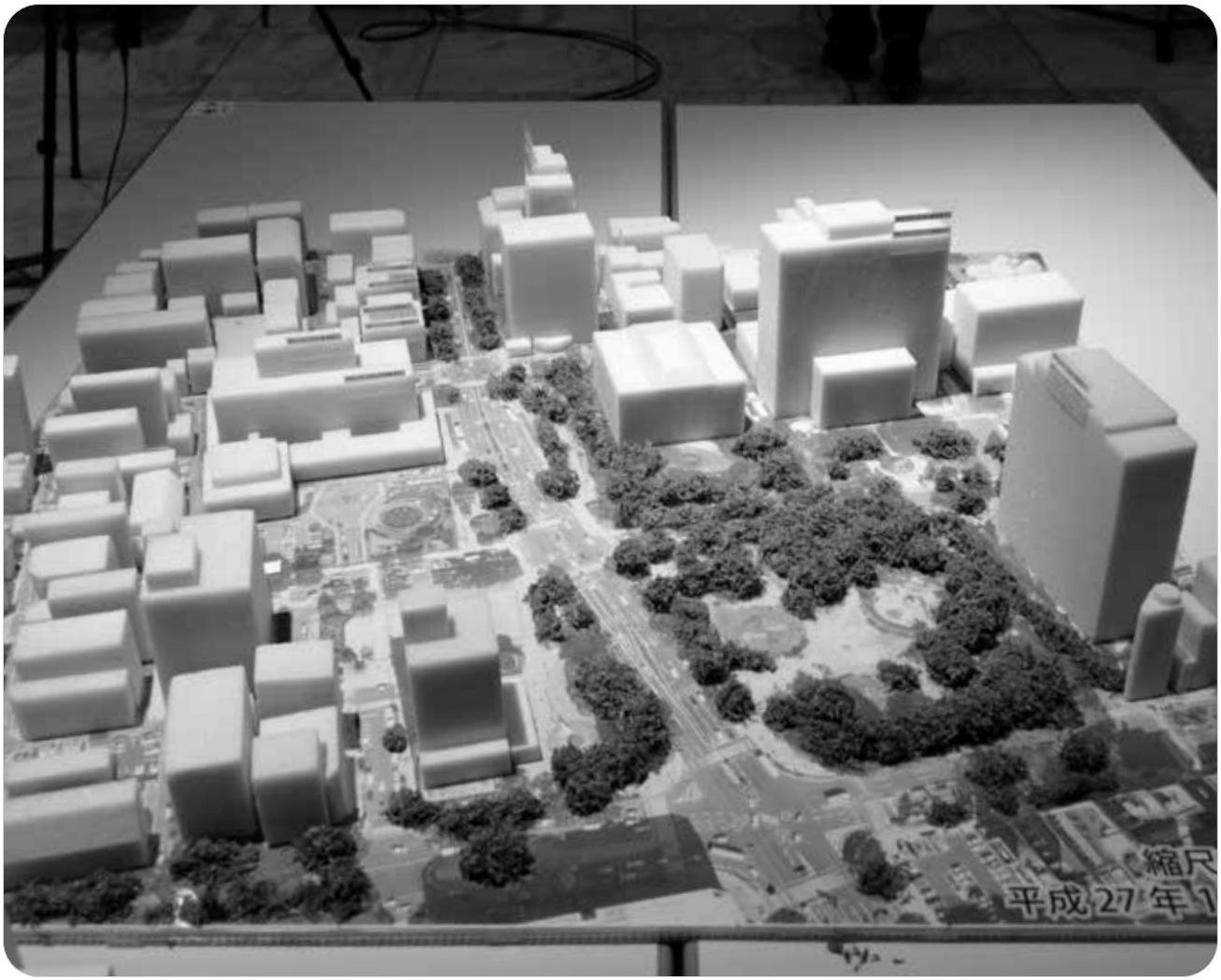
第１回仙台ラウンドテーブル
市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替シンポジウム

「市役所（シティホール）を考える」

市役所建替えプロジェクトの意味と意義についてみんなで考える

せんだいメディアテーク　１Ｆオープンスクエア
2018 年 11 月 26 日［月］

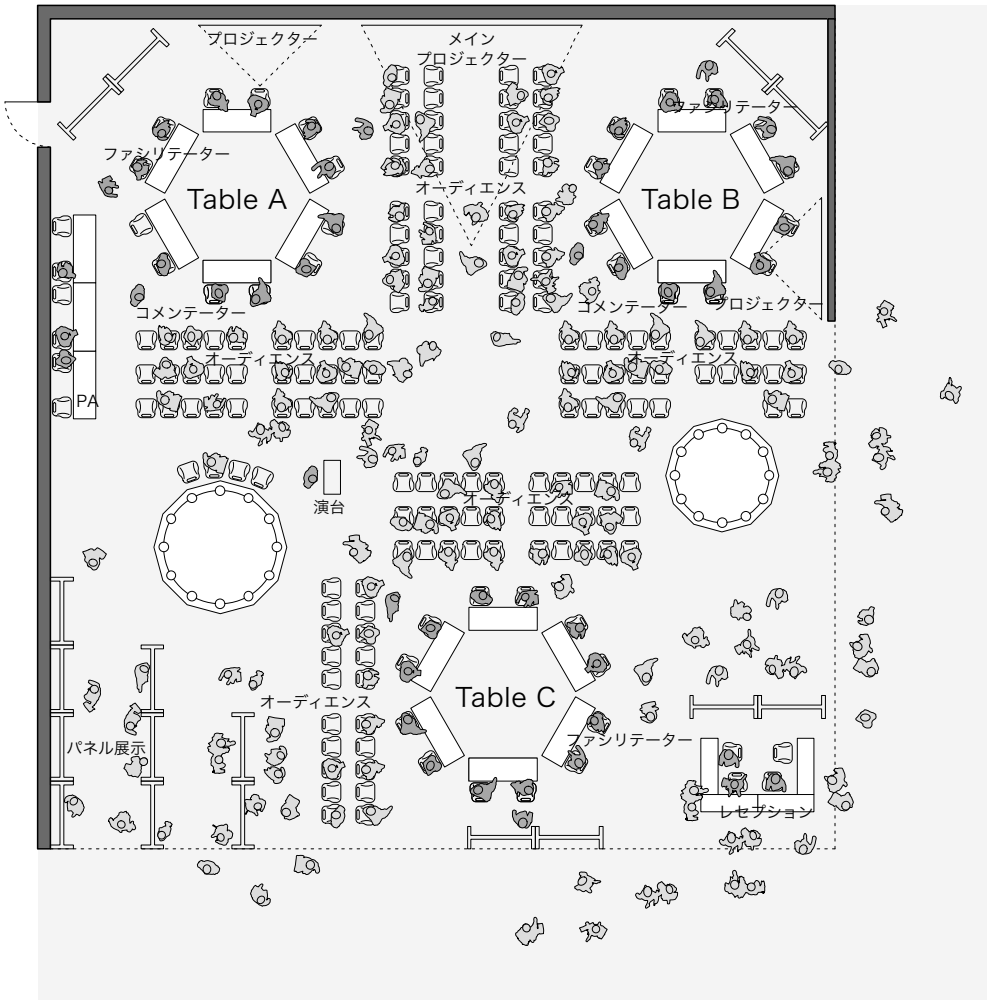
13：00	挨拶・趣旨説明
13：10	前半　ラウンドテーブル
15：40	休憩
16：00	後半　ラウンドテーブル
18：30	閉会挨拶
18：45	閉会



2.0 後半ラウンドテーブル

後半ラウンドテーブルテーマ

都市・まちづくりの側から見た意味と意義／場所の価値づくり



せんだいメディアテーク１F ／オープンスクエア

Table D
【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

2.1 Table D
【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

文責：　JIA 宮城地域会
　　手島浩之

かつて、町には風土や産業、歴史、社会構成によってそれぞれ固有の風景があり、それが規模の大小に係らない魅力を放っていたのではないかと思います。現在の仙台には固有の風景・個性・魅力はあるのでしょうか？他の都市では都市らしさの獲得のためにどういった取り組みをしているのでしょうか？他都市からの視点を踏まえ、都市の個性の視点から本庁舎建替えプロジェクトの意味を考えます。

Table E
【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

2.2 Table E
【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

文責：　宮城県建築士事務所協会

この市役所建替えプロジェクトは、周囲の勾当台エリア・定禅寺通の在り方に大きな影響を与えることが予想されます。このテーブルでは周辺地域のまちづくりへの波及効果を取り上げ、何をどうするべきかなどを議論します。

Table F
【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

2.3 Table F
【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

文責：　宮城県建築士会
　　清本多恵子

『仙台市役所本庁舎建替基本構想』では、新本庁舎の理念として、「“仙台らしさ”を市民が感じることができる環境を整備する」ことや「過去の伝統、経験を未来へつなぐ」ことが掲げられています。現在仙台市の中心部には、歴史を伝える建物は少ない一方で、町割りや公園・緑地、あるいは歴史的町名が残り、近年はそこを歩くことを通して、都市の記憶を辿る取り組みも注目を集めています。このテーブルでは、「過去の経験、伝統を未来につなぐ」という視点から、「仙台らしさ」や「場所の価値」を高めていくためのアイデアを考えます。

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

キーワード

□歴史を踏まえて次の提案をすることで横浜らしさをつくって来た。
□都市が持っている一番訴求力の高い要素がその都市らしさ形づくる。
□都市らしさとは「住む人が自覚してまちづくりのあらゆる場面に貫くかどうか」
□「仙台らしさ」という見えないものを見えるようにし共有するプロセスが重要。
□市民が誇りを持って「らしさ」を言えるべき。
□仙台市庁舎が「未来の仙台とはどういったものか」を示すことが大事。
□仙台の未来像が必要だが、担当部署と受注者だけで考えられるのか。
□アメリカのシティホールは、民主主義の象徴としての建物である。
□これからの市役所は、多様な主体が担う現代の民主主義の象徴であるべき。
□震災復興の現場での、合意の厚みや正当性の重要性。

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

キーワード

□市役所の機能が沁みだすことでの界隈性や波及効果
□イベントやにぎわいが日常となるまちづくり
□行政の言葉、民間の言葉も理解できるＰＰＰエージェントがカギ
□グランドレベルの市民主体の運営
□サルベージする市民活動

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

キーワード

□“仙台らしさ”を市民が感じられることができる環境
□顔になり歴史的に残したくなるものをつくる
□古いものを活かしながら、新しいものと統合して行く
□時間軸の中で整理して、生かせるところを生かしていく
□緑と水を大事にするコンセプトで新しい施設をつくる
□まちづくり・再整備と、共に考える
□群としての建築という価値
□防災センターとしての機能を持つ

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

企画
手島浩之
JIA 宮城地域会

ファシリテータ補佐
佐伯裕武
JIA 宮城地域会

ファシリテータ補佐
阿部元希
JIA 宮城地域会

ファシリテータ補佐
吉田和人
JIA 宮城地域会

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

企画
川口裕子
宮城県建築士事務所協会

企画・ファシリテータ補佐
奥山和典
宮城県建築士事務所協会

企画・ファシリテータ補佐
栗原將光
宮城県建築士事務所協会

企画・ファシリテータ補佐
今野純子
宮城県建築士事務所協会

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

企画
清本多恵子
宮城県建築士会

ファシリテータ補佐
星ひとみ
宮城県建築士会

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

ファシリテータ
手島浩之
JIA 宮城地域会

登壇
姥浦道生
東北大学工学部建築・社会環境工学科

登壇
遠州尋美
元大阪経済大学教授

登壇
鈴木伸治
横浜市立大学国際都市学系まちづくりコース

登壇
高森義憲
札幌市まちづくり政策局 都心まちづくり推進室室長

登壇
紅邑晶子
一社）SDGs とうほく代表理事

登壇
宮本愛
つながりデザインセンター事務局長・理事

登壇
佐藤勝幸
ﾊﾟｼﾌｨｯｸｺﾝｻﾙﾀﾝﾂ 社会イノベーション事業部

登壇
桂有生
横浜市役所　都市デザイン室

登壇
末祐介
中央復建コンサルタンツ（株）

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

ファシリテータ
佐藤芳治
NPO 法人 都市デザインワークス

登壇
増田聡
東北大学経済学部

登壇
小島博仁
(株)UR リンケージ

登壇
桃生和成
THE6 ディレクター

登壇
田邊いづみ
コピーライター

登壇
伊藤強
珈琲　珈巣多夢

登壇
工藤浩由
一番町四丁目商店街振興組合専務理事

登壇
小林淑子
宮城県建築士会 (まちづくり委員会)

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

ファシリテータ
内山隆弘
東北大学キャンパスデザイン室

登壇
佐藤健
東北大学災害科学国際研究所教授

登壇
大沼正寛
東北工業大学ライフデザイン学部教授

登壇
二郷精
「atelier NIGO」主宰・環境カウンセラー

登壇
木村浩二
せんだいコンセキ発掘塾塾長

登壇
田澤紘子
せんだい 3.11 メモリアル交流館

登壇
伊藤宣之
(株) 仙台経済界会長

登壇
針生承一
JIA 宮城地域会

登壇
高橋直子
宮城県建築士会

登壇
石原修治
宮城県建築士事務所協会

Table D
【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

手島：
日本建築家協会の手島です。よろしくお願いします。
先ほどテーブルＤの主旨を櫻井君から説明していただきましたが、仙台市役所本庁舎の建て替えに際して、このテーブルではその都市らしさ、つまり、個性ということに関して考えたいと思います。「個性というものはどういったことからつくられるのか」という問い掛けが重要だと思いますが、「歴史を軸に都市の個性を考える」というテーブルも別に設定されています。このテーブルでは「ほかの都市からの視点を踏まえて考える」ことに取り組みたいと思います。要は、「自分たちらしさを自分たちの視点から考える」のではなくて、ほかの都市と比較して、或は、他の都市の人たちが自分たちらしさをどう考えているのかということから考えて、仙台らしさ、あるいは都市の個性ということについて、考えてみましょうということです。
今日は、札幌、横浜の事例を持ってきていただいたので、まずは自己紹介をしていただきながら、事例の説明をしていただき、順番にお話しいただくということで進めたいと思います。まず横浜の事例について、鈴木先生にお願いいたします。

鈴木：
横浜市立大学の鈴木といいます。後ほど桂さんもお話しされるので、私の話はなるべくコンパクトにしたいとは思いますが、しゃべりたいことはいっぱいあります。
横浜は、現庁舎がここにあって、新庁舎を今ここに建てています。候補地としては、みなとみらいとここと現庁舎と３カ所あり、それを選定するときは私も関わりました。その中では割といい場所に決まったのではないかと思います。
時間がないので飛ばしますが、横浜というまちは、関東大震災や空襲で壊滅的な被害をたびたび受けていまして、そのたびに都市計画が書き換えられてきた歴史があります。その中で考えると、新市庁舎の場所性が非常に大事なのですが、元々の横浜の玄関としては、ここに関所があって、そういう訳でこの地区を関内と呼びます。こちらが海の玄関ですね。象の鼻というところに港ができて、ここが玄関になるわけです。「じゃあ、新市庁舎の予定地はどんな場所なんだ」と市民の方は割と思っていらっしゃるのですが、実はここは陸の玄関のような位置づけであった場所です。明治５年に鉄道ができますと現在の桜木町駅の近くに駅舎ができて、ここがある種、陸の入り口になっていきます。それから関東大震災の後の復興でもこの場所は非常に重要視された場所です。戦後の復興でも、「防火建築帯」というものをつくってまちの復興を考えようとするのですが、その中でも非常に重要な位置を占めてきたわけです。
そういった中で、1965 年に飛鳥田一雄さんという方が横浜市長になられて、田村明さんと浅田孝さんという建築家が横浜の将来像を提案する中で、「みなとみらい 21」の提案につながる都心部強化事業というものを提案するわけです。そのときには、その強化事業の一番端っこの位置にこの新市庁舎の位置があります。その後も新市庁舎の位置は常に意識されて、横浜の玄関口として考えら

Table E
【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

佐藤：
それでは、「界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える」をテーマに、進行する。そもそも、市役所がまちに対してどの程度のインパクトを与えるか、私もよく分かっていない部分がある。今回のテーマは、まちづくりである。市役所単体、市役所とまち、さらには仙台市全体との関係性がポイントになる。
本日の議論を終えた時点で少しでもアイデアを抽出できれば良い。初めに自己紹介も含め、市役所とまちの関係、市役所エリア、勾当台エリアとまち、或いは仙台と勾当台エリアの関係について、ふだん感じていることを話して欲しい。その後に、この建替えを通じてエリアとしてどの様なことができるとまちとの関係性が深まっていくのかを話し合いたい。
最初に、資料について小島さんからどうぞ。

小島：
私は３年前まで仙台市の職員だった。退職後、公民連携などを行っている（株）ＵＲリンケージ（以下ＵＲＬ）に勤務している。ＵＲＬは、定禅寺通も含め、公共空間や遊休不動産などを活用しながら新しいまちを創造している企業である。そういう意味では、行政と民間の思いや接点を見出しながら、良いまちを創っていこ

Table F
【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

内山：
仙台市庁舎建替基本構想の中では、「“仙台らしさ”を市民が感じられることができる環境を整備する」こととともに、「過去の伝統や経験を未来につなぐ」というのが理念の１つになっています。このテーブルでは過去の伝統や経験を未来につなぐことを通して、「どうやって仙台らしさ、仙台らしい庁舎ができるのか」と、いうことを議論していきたいと思います。今日は大きく２部構成で考えたいと思います。前半に過去の伝統や経験として、具体的にはどんなものがあるか、語り継ぐべき伝統にはどういったものがあるか、というところを皆さんで具体的にしていく作業をしたいと思っています。休憩を挟みまして、後半には、そういった過去の伝統を未来に語り継いでいくためのアイデア出しをしたいと思います。
それではまず、前半は語り継ぐべき過去、経験といったものはどういったものがあるのかという、その具体的なイメージについて皆さんに知見を提供していただいて、共有したいと考えています。その中で、視点として考えられるものを挙げると、例えば「この勾当台エリアというのはどういった場所だったのか」又は、「そもそも勾当台って、どうしてこういう名前なのだろうか」と言ったことが疑問に浮かびます。養賢堂が置かれた場所であるこの場所は、「学都仙台」と言われる仙台の「学都」の発祥の地だったのかもしれないなどと想像してしまいます。
あるいは、仙台全体で見たときに青葉城址があり、今は学都の中心と呼ばれている片平キャンパスがあります。そういった都市構造の中で「勾当台エリアというのはどういった意味を持っているのか」「これまでどういった意味を持ってきたのか」と、いうこともお話しいただけたら、と思っています。
具体的な建物として市役所があるわけですが、これは今３代目のもので、最初は明治 18 年、仙台区役所としてつくられました。それから、昭和４年に２代目ができて、今は３代目で昭和 40 年に建てられています。「こういった歴代の市役所が市民の目にどう映っていたのか」とか、「それらの建物がどういった意味を持っていたのか」というようなところもお話しいただけたらと思います。
また、語り継ぐべき経験の１つに災害の経験があると思います。今日登壇いただいた皆様には、災害を語り継ぐ活動をされている方もいらっしゃいますので、そういった活動の中で実際の経験を共有していただけたらと思っております。それが前半の主な内容と考えておりまして、まずは自己紹介を兼ねて一巡しながら、お話をしていただければと思います。
後半は、前半で共有したような経験や伝統を未来に語り継いでい

れてきました。やはり、そういう場所性を考えた整備をすべきだ、と言っていきました。
これはみなとみらいの初期の絵ですけれども、このとき初めて関内とみなとみらいを繋ぐ道が提案されました。これは大高建築設計事務所が提案したプランなのですが、そう見ると、横浜とみなとみらいを繋ぐ一つの軸と、初代横浜駅から関内に続く軸と、大岡川（今横浜は水辺の活動が活発に進んでいます）、この３つに囲まれた非常に象徴的な場所に新市庁舎が建とうとしているわけです。
横浜六大事業（戦後の接収によって遅れた都心部の戦災からの復興と郊外部の急激な都市化によって引き起こされる様々な課題を解決する大規模な都市計画）が提案されてから、古い港があった場所がみなとみらい21に変わり、まちは大きく変わってきました。基本的なまちづくりの方向性としては、元々関内と横浜駅周辺に２つの都心が出来てしまっていましたが、それを一つにしましょうというのが大きな戦略であり、水辺を市民に開放していこう、というのがもう一つの戦略だったわけです。そういう観点からすると、この新しい市庁舎というのは、関内という古い都心とみなとみらいをどう繋ぐかということが基本的に与えられた命題なわけです。それともう一つの命題は、水辺をいかにオープンにするかということです。
その後の横浜のまちづくりは、（みなとみらいの計画もそうなのですが）実は関内地区で様々な都市デザインが実験的に行われました。後ほどお話しされる桂さんの居る「都市デザイン室」が中心になってこのプロジェクトを進めるわけです。

Table D
【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

横浜の都市デザインには、いろいろな方針があります。これは新市庁舎の近くの馬車道商店街の例ですが、歩行者空間の再生として、車だらけだったところを今ではこういうふうに道路空間の再配分を行いながら歩行者中心のまちに変えてきました。それから古い建物を残すことも重視してきました。旧第一銀行とタワーがあり、その向こう側に新市庁舎が新しくできるわけで、こういった古い建物との調和も求められます。
その後、横浜では都市デザインの蓄積を活かして、「文化芸術と都市計画をいかにオーバーラップさせていくか」を目指して、「創造都市横浜」という目標が掲げられ、現在に至っています。このあたりは細かく説明はしませんが、こういった文化芸術の振興の中にも、「歴史や水辺を活かそう」というような、空間性を非常に意識した計画になっていて、水辺を中心に、ウォーターフロントを活性化していこうという取り組みがここ10年ぐらいずっと行われてきました。
横浜で私が市庁舎についてお話しする場合に常に言っているのは、新市庁舎がまちにどういうインパクトを与えるかということで、大きくは３つあると思っています。一つは、これは実は十分に議論がされていない部分なのですが、大量の空きオフィス空間の供給です。実は横浜は20カ所くらい周辺のビルを借りています。それが新市庁舎に１カ所に集まるということは相当大きな変化が出てきます。もう一つは人の流れの変化です。横浜というまちは観光などで目立っているように思われますが、実はこの関内地区の

うと考えている。
テーブルテーマは、市役所の建替えと定禅寺通への波及効果であるが、これまでの定禅寺通りにおける活動や歴史的な背景を紹介したい。
こちらの絵をご覧下さい。現在二番丁通は直線の道路となっているが、地下鉄が開業するまでＳ字になっていた。こちらが定禅寺通である。
昭和４８年にデベロッパー委員会が設立され、百万都市構想などが討議され、産官学が一緒になって将来のまちやデザインを考えようと取り組んでいた。定禅寺通りは、絵にグリーンモール化と記載しているが、基本的には西公園と連続的にグリーンモール化を目指し、その接点として市役所界隈にあるという位置づけである。

Table E
【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

当時から市役所も定禅寺通と切っても切れない関係だった。グリーンモール化という言葉を記憶して下さい。グリーンモール化というよりも市民活動の場である。その違いが１つ切り口であると思いる。
最初の絵に戻して下さい。上が基盤整備を表している。真ん中が市民活動を表している。下は県民会館を表している。市役所は昭和４０年に完成した。その後、市民会館と定禅寺通の突き当たり

くためには、どういったアイデアがあるか、それは空間的なアイデアもありますし、建築的なアイデアもあります。あるいは活動とかソフト的なアイデアもあるかと思います。前半の議論がこういったものについてのアイデア出しにつながればと思います。
まず、前半を始めるにあたり、各時代にこの勾当台エリアがどういった姿をしていたのかという映像を企画担当の方に集めていただいたので、清本さんから紹介していただきたいと思います。

清本：
こんにちは。清本と申します。今日のテーブルＦでこの勾当台エリアについてまず皆さんと共通の認識を持たせていただきたいということで、ちょっとパワーポイントをつくってまいりました。
まず、仙台平野というのは、石器時代から人が住み続けてきました。河岸段丘に政宗公が仙台のまちを開いた城下町をつくったという1,600年から、語られることが多いのですが、その前から歴史がありました。歴史を伝える建物は少ない一方で、町割や歴史的な町名は残っているというのが仙台のまちだと思います。これが文久２年の仙台城の絵図です。
この位置が恐らく勾当台と言われるエリアだと思います。これが大橋です。ここが芭蕉の辻で、ここが養賢堂があった場所ではないかと思います。この地図でも、大橋を渡って、ここが芭蕉の辻で、養賢堂のある場所。これが養賢堂で、これが配置図です。これは馬車が入っていくところの油絵です。これが明治26年で、ちょっとわかりにくいのですけれども、この辺が勾当台のエリアではないかと思われます。

Table F
【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

明治18年にできた仙台区役所、これが、初代になります。これが２代目の市庁舎の落成式のときの写真です。これが２代目の市庁舎です。鉄筋コンクリートの３階建てのルネサンス様式でした。
これが空襲の後の写真になります。ここに市役所があって、前の広場でいろいろな儀式が行われているところの写真です。市制70周年の式典が行われているところの写真です。こちらが古い２代目の庁舎で、この後ろに今の庁舎が建てられて、ここが壊されて今の噴水広場になったというところの写真です。私は以上です。補足する形で二郷さんに作っていただいております。

二郷：
二郷でございます。私は仙台城の復元について、いろいろ動き回っています。そんな関係で昔の絵図とかが手元にありまして、市役所の昔の姿等を皆さんと共有しながら、進めたいと資料をつくってまいりました。

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

一番の産業は「役所」なんです。県庁であり市役所です。単純な話、市庁舎が超高層になったら公務員の方がお昼ご飯を食べに街に出なくなるのが目に見えています。単純な話ですが、そうなると周辺に与えるインパクトは非常に大きいのです。もう一方で、先ほどお話した「水辺のポテンシャルの向上」がありますが、これについては、後ほど桂さんからお話があると思います。

端的に数字だけで言うと、現在の横浜の空室率は2.96％とものすごく低いのですけが、現在市庁舎として使われている部屋が全てオフィスマーケットに供給されると12.27％になります。つまり10％上がることになり、ものすごく影響が大きい。これについては市役所でも余り議論されていないかもしれません。では問題は、オフィスの需要があるかということなのですが、過去10年に新規オフィスビルの建設は１棟だけなんです。過去20年を振り返っても、実は関内での新規オフィスの建設は多分トータルで５棟ぐらいです。ということは「マーケットはこの関内という古い都心にオフィスは必要ない」「需要がない」と思っているわけです。そこの部分を見誤ってしまうと大変なことになるのではないかと思っています。

実は、2004年に14.59％という最高の空室率の高まりを見せたのですが、その後、何が起こったかというと、高層マンションが都心に建ち始めました。これは「マンション街化」の可能性というのを秘めていて、そこを非常に気にしています。バブル以降の関内地区はオフィス街からマンション街へ変わってきており、どうも横浜の都心の性格は「横浜の中心から東京の郊外」に変わってきているのではないかと考えています。「横浜都心のタワーマンションから東京に通う人が増えてしまい、働く人が減ると商業も衰退する」という負の連鎖を経て今の都心部がある。「では、古いビルは問題か」ということです。「再開発などをやれば街は活性化するか」です。私はずっとノーだと言い続けています。新しい産業の可能性を見ていく必要があると思います。

時間がないので飛ばしますが、働く人はバブル後の10年ぐらいで3.5万人減りました。バブル後の10年間で年間の商品販売額が8000億減っています。超大型のデパート８軒分のセールスが吹っ飛んだわけです。こういう見えない数字をちゃんと市庁舎の検討のときに捉えておかなければいけない。中心市街地活性化の議論では「古いビルが多いから活力が失われている」ということになりましたが、この結論に私は大いに疑問を持っていろいろ調べました。調べてみると、実は関内を中心に新しい産業が集中的に分布していることが分かりました。「古いビルが多いから新しい産業がそこに来ないわけではない」ということです。新しい市庁舎はここで、現市庁舎はここです。この間の、多くの人が飲み屋街だと思っている場所に、実はクリエーターやデザイナーのオフィスが非常に多いということが2006～2007年ぐらいの調査でわかってきて、それ以降、こういったところをクリエイティブな街へ変えていくべきだとずっと言い続けています。

新市庁舎がここに建つことは大いに結構なのですが、空いたところをどう使うかによってクリエイティブな街の生死が掛かっているとも思っています。古い庁舎の使い方も含めてしっかりと考え

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及
効果・相乗効果を考える

にＵＲの住宅が完成し、昭和６２年に１４１が完成した。メディアテークはこの時期だ。

基盤整備は、定禅寺通を３つの棒にしているが、戦災で焼けたので、定禅寺通も含めて都心は区画整理をして基盤を造って行った。先ほどのデベロッパー委員会が昭和４８年である。定禅寺通は、グリーンモール、プロムナード、静的な関係で整備を進めた。ここで定禅寺通はちょっと段差があるが、彫刻のあるまちづくりで彫刻を何体か展示した。

次に、昭和６２年の地下鉄開業とともに、勾当台公園の再整備を行って道路を真っ直ぐにし、現在の地下に駐車場がある市民広場が整備された。この頃から、仙台市にまちづくりを依存するのではなく、「自分たちで面白いまちを創っていこう」という動きが始まった。ハロー定禅寺村が発展し、光のページェントやジャズフェスへと変遷した。今ではなくてはならない風物詩に成長した。

定禅寺通は、中央分離帯を再整備し、幅員１２メートルの緑地空間となった。現在は行政窓口が一本化され、まちづくりをする市民活動の方々にとってはやりやすくなった。イベントやにぎわいというキーワードは同じでも、非日常的なものが多く、今後は日常の風景にとなるまちづくりにしていきたい。

日常においてジャズフェスの様に人が溢れる状況を作り出すのは

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

これが二つの絵図から抜き出したものです。これは、仙台城の江戸幕府に提出した絵図で、丸表示がある部分を、左側のものを拡大して右側に落としてあります。ここは侍屋敷になっています。このときは江戸幕府への届け出のために侍屋敷の名前が書いてありません。これが1640年代のものです。次が1664年、寛文の絵図です。このときになりますと侍屋敷が２つに分割されて、又、細かく分割されて名前が書いてあるのですが、私の手元にあります資料ではちょっとこれ読み切れませんでした。ちょうど、今の丸印の部分が1664年の仙台市役所のあったところです。

1611年に慶長の地震、1616年に元和の地震とつづき、正保の絵図が描かれたちょうどその年の前後、1646年に正保の大地震があって、仙台城の櫓全体が崩れました。今、ごらんになっていただいている仙台城下絵図、これは寛文４年です。1664年。この後に、寛文の大地震が1668年にあります。次が1690年、元禄時代につくられた仙台城下五釐卦絵図の中から抜き出しました。ここでちょっと注意して見ていただきたいのは、まちづくりです。仙台市役所のあった前の通りの幅を見てください。真っすぐの細い道になっています。先ほどの絵図にありましたのも同じような細い道路です。ちょうどこの時代、1690年の後に二度、地震があります。享保の地震、元文の地震、1717年、1736年、この後に養賢堂が建築されております。

これが江戸期、この間に先ほどの天保の地震が1835年にもあります。安政補正改革仙府絵図は安政元年1854年につくられた絵図です。丸印がありますところが養賢堂の御用地になっています。２つ向かい合わせて今の公園の部分が同じようにあります。向かい側に養賢堂があります。ここで注意して見ていただきたいのは、道路の幅が一部幅広くなっています。

江戸期には記録されている大きな地震が８回ほどありました。

侍屋敷が大きな屋敷から小さな屋敷に変わって、養賢堂の用地に変わっています。道路そのものは変わらないのですが、屋敷を、まちをつくり直すというのは、余程のこと、地震のようなものがない限りつくり直すことはできなかったのではないかと思います。一挙につくり直したということは地震によって相当の被害があった後その後始末をかねて、まちを分割していったのではないでしょうか。

そんな視点で仙台城下というのはどのように変わっていったのかというところを見ていただきたいと思います。ちょうど仙台市役所があるあたり、ここの部分が「表小路」という名前で呼ばれておりました。これはもう明治の絵図になります。陸軍病院とか警察署、県庁があって、その向かいに仙台市役所があります。

ておく必要があるのではないかと思っています。
ということで私からの話は終わり、桂さんの新庁舎のお話に移っていただければと思います。

手島：
はい、ありがとうございます。では桂さん、お願いします。簡単な自己紹介から。

桂　：
結構やりにくいパスが来ましたね。横浜市役所から来ました、都市デザイン室の桂と申します。よろしくお願いいたします。簡単な自己紹介はそこに書いてあるとおり、もともと設計をやっていたのですが、今は市の都市デザイン室におりまして、まちづくりをやっています。
さきほど鈴木先生からお話がありましたが、横浜の「らしさ」みたいなものを探っていくと、都心部と呼ばれている関内やその周辺では、やはり「開港」に始まります。実は「開港に始まる」と言うと怒る市民もいて、「吉田新田（現在の神奈川県横浜市中区および南区に跨る地域で開墾された新田。江戸時代前期に吉田勘兵衛によって開墾された）があっただろう」とか、「350年前からあった」とか言う方もいるのですが、とはいえ基本的には160年前の開港で諸外国の文化を受け入れるようになって、今の横浜の個性が生まれてきたと僕は考えています。
鈴木先生からもお話がありましたが、1960年代の都市問題を解決するために横浜市は３つの基本戦略を立てていまして、そのうちの一つが都市デザインということで、今も横浜市では、その都市デザインという手法を大切に、まちづくりを進めています。その中で「歴史を大切にする」ということと、「新しくつくるときにはきちんとデザインを考える」という両方を大事にしていることをご理解いただければと思います。
都市デザイン室の前身である専門チームが市役所の中にできたのは1971年で、「魅力と個性ある人間的な都市の実現」をテーマにしています。「人間的な」というところが大事で、「車のためでも経済のためでもなくて、やはり都市の主役は人間」「その人間が生き生きするために、どうやったらいい街をつくれるか」ということがテーマになっています。例えば、「歩行者にやさしい街をつくる」ということや「歴史や水辺を大切にしましょう」ということを当時から言ってきています。今考えるとごくごく当たり前のことが書いてあるのですが、50年前にそれを言い始めたというところが先進的だったと、（僕も元々外の人間だったので）外から見ていたときはそう思っていました。都市を人々の活動のベースとして、多角的・横断的・長期的にデザインしていくということが、役所の中にある都市デザインでは大事だと考えて、日々仕事をしています。
横浜も今まさに新市庁舎を建設中なのですが、2020年に完成するということで、そのためのデザインコンセプトを都市デザイン室でつくりました。そのご紹介をすれば、仙台の今後に多少でも役立つのではないかと思っています。

Table D
【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

Table E
【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

これが仙台市役所が、区役所から市役所に変わったときの図面で、先ほどの写真と同じ写真だと思います。これが大正15年、大正年間の最後まで存在し、次の市庁舎に変わりました。それで、この建物が何年間もったかというと、約30年間です。

清本：
私がつくったパワーポイントを補完してもらうような形で二郷さんにやっていただきました。
では、ここでファシリテーターの内山先生にお渡しいたします。

内山：
過去のイメージを見て、いろいろな歴史があるのだなというのが非常によくわかりました。市役所の建物も初代、２代とイメージの全く違うものがあって今のものになっているというのもわかりましたし、それから、表小路ですか、ちょっと広場的な道路だったということもありました。これがどんな使われ方をしていたのかなとか、いろいろ疑問も湧いてきますし、そういった歴史を継承するにはどうしたらいいのかということも、それは後半の議論としてあるかと思います。
ここからはテーブル順に、前半の問いかけについて話題を提供していただくのと、併せて自己紹介をお願いできればと思います。

高橋：
こんにちは。宮城県建築士会から出ております高橋と申します。よろしくお願いいたします。
普段は伝統建築研究所という設計事務所をやっておりまして、お寺とか神社の設計と、あと文化財の修理関係の設計を主に行っております。今日、私は検討委員会と前、去年の今頃から８月にかけて仙台市役所建て替え基本構想検討委員会の委員として参画しておりました。そのときに決まったものを経て、今後基本計画検討委員会となるのですが、基本構想検討委員会では、市役所を建て替えなければいけないというのはわかったけれども、その土地に関して言えば、やはり市役所がよりよくなるとか、市民のために、仙台市の顔となるような建物というものをぜひやはりある程度のお金をかけてつくってはどうかというお話をしていました。
配置に関しては、現地建て替えということで、先ほどの昭和の40年のときに前にあったものを後ろに建てて、移ってから前を壊すというようなやり方を市のほうでは進めたいというお話だったのですけれども、もう１回立ち返って、どこにあるべきかという話をしようじゃないかということで私のほうは議論をさせていただ

Table F
【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

先ほどの鈴木先生のお話にもあった初代横浜駅の入り口だった北仲地区という地区があるのですが、新市庁舎はそこに建ちます。延べ床面積が14万平米、高さは155メートル32階建てという高層ビルです。今までは8階建ての地に足のついた市役所だったのですが、今回は敷地が狭いということもあり、高層ビルになることが当初から分かっていました。
2012年の基本計画がまとまったころに、新庁舎の整備基本方針として「こういった5つの方針で新市庁舎をつくりましょう」というものが出されました。読んでいただくと分かるのですが、ごく普通というか、どの市庁舎でもそれはやるでしょう、ということだけが書いてあり、まさに今日のテーマである「横浜らしさって何なの」という話がほとんど入っていないと感じました。その後、都市デザインの視点で新市庁舎プロジェクトに関わろうと、僕らから庁内で営業して検討に入れてもらっているのですが、新市庁舎チームに入ったときに感じたのもそのことでした。そういう経緯があって「横浜市新市庁舎デザインコンセプトブック」というものをつくりました。これは何かというと、横浜市の発注方式として「基本設計を含んだデザインビルド方式」を採用していまして、設計と施工とがセットで発注されています。しかも通常のデザインビルドは、基本設計、つまりどんな市庁舎が欲しいかという計画はつくり終わってから、実施設計と施工を発注するのですが、今回の場合は、その基本設計も含んでいました。つまり、金額や部屋面積等の諸室の基本条件は決めてあったものの、どのような市庁舎が横浜らしい市庁舎なのかが表明されていない状況で発注されることになっていました。ですので、このままつくったのでは横浜らしさには繋がらないだろうという懸念がありました。「新市庁舎をどういう方向でつくっていくか」は、市民の方々とも共有しなければならないし、提案をしていただく、デザインビルドに手を挙げていただく事業者の方たちにも、「3万円あるから何かうまいもの食わしてくれ」みたいな発注の仕方じゃなくて、寿司が食べたいのか、いやそうじゃなくてイタリアンなのか、ちゃんと方向性は示しておいたほうがいいだろうと考えました。市民向けに「横浜市が大切に思っている市役所のあり方というのはこういうことですよ」ということを端的にまとめて、事業者の方たちにはそれを専門的に読み込んでいただいて提案をしてくださいということで急遽つくって、発注にぎりぎり間に合わせて発表したものが「コンセプトブック」になります。
中身ですがまず、地区を読み解いた3つの特性を説明しています。先ほどの鈴木先生の話にもありましたが、「北仲地区」がいろいろな地域の結節点になるということ。次いで、地区にかなり多くの歴史的資産が残されていて、開港のころの歴史や、その後、産業が発展していって埋め立てが進んだ、そういった痕跡が多く残っているので、それをきちんと活用して後世に伝えることが大事ですよ、と。さらにもう一つ、港町である横浜が水辺、しかも河口のほとんど港と言ってもいいようなところに「自分たちの居」を構えるということなので、「市役所が来たことによってあそこつまらない場所になったね」と言うのではまずくて、そこの価値を最大化するために市役所を役立てようということです。

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

無理でも、風景として、パリのシャンゼリゼのカフェ、マルシェ等ができる空間として定禅寺通を育てていきたい。
仙台市は制度を変えてきた実績がある。スパイクタイヤの粉塵問題から声を上げ、現在のスタッドレスタイヤが開発された。仙台駅周辺の開発の動きやそれに伴う人の流れは、駅周辺に集中しているが、定禅寺通は、仙台人としてのアイデンティティーを表出する場であると考えている。その延長に市役所があると考えるべきだ。グランドレベルの在り方は街づくりを考えて活動している市民にとって関心が高い場である。
その一部として市役所も定禅寺通界隈に含まれ切っても切れない関係にある。また、現在は定禅寺通りの中央緑地帯はプロムナードではなく市民活動の場へと移り替わっている。ここが一つの切り口であると考える。

佐藤：
定禅寺通から市役所のエリアも見たらという話であった。伊藤さんどうぞ。

伊藤：
戦災後の復興記念道路として定禅寺通は建設された。現在は光の

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

きました。やはり、いろいろな諸問題もありますし、この前のテーブルCのとき、前半のほうでイベント関係の方のお話とかも伺って、やはり市民広場の重要性ということを考えるとやはり、今の現地で建て替えをするということが望ましいということになり、それは前提条件として、今回はあります。
建物の規模自体が、今の宮城県の県庁の真ん中にある建物と同じような規模のものがあそこのところに建つというイメージをその時点で思っていたのは、建築関係者だけだったのではないかなと、今思います。ボリューム感とかが今のものと当然違うものができるということをなかなかほかの委員の方がイメージできたかというところは非常に疑問であります。
もちろん市は模型を作ったり、いろいろ「こういうボリュームのものが出ます」ということではあったのですけれども、やはりイメージしにくいかなと私は思っていました。又、前回の建て替えでできた今回のものに顔がないかというとそういうことでもなくて、今の市役所を建てた設計事務所に昔勤めていたことがあって、そこの書庫にその当時の図面がありました。それを拝見すると非常に今とレベルが格段に違う図面をかいていた時代だったのです。そのディテールにしても、非常にものすごくよく考えている部分もある。ただ、時代に合わなくなった部分がある。ただ、それは今後も同じようなことが言えるのじゃないかと。時代に合わなくなったから、50年たった、60年たったから取り替えるというようなことの発想は1回やめて、残すべき部分は残すと。残さなくていい部分というものをつくれというような考え方がないかなということを、歴史的な観点からすればやはり市民とすれば、顔になるものをやはり歴史的に残したいものというものをつくるべきじゃないかというようなことをよく聞きますので、私も非常にそういうふうに思っております。
歴史が中断することではなくて、継続していった今があるということを盛り込んだ形でいけば、よりいいものを、お金がないからこういうふうになりましたということの議論はやめてというようなことをぜひやりたいなというふうにはその当時話していました。なので、一応今回も自己紹介ということで、そういうことで話をさせていただきました。

石原：
宮城県建築士事務所協会から来ました石原と申します。ちょっと私このテーブルは場違いかなというふうにちょっと思う次第なのですけれども、私は名古屋生まれ名古屋育ちで、ちょうど今から46年ほど前に大学を出てすぐ仙台に来て、仙台支店勤務という形

Table D
【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

ミッションは、「～開港の街から持続可能で豊かな国際都市へ～人、自然、街がつながる開かれた市庁舎を具現化し、市民と共にＯＰＥＮ　ＹＯＫＯＨＡＭＡを創出する。」です。開港以来、港がエンジンだった横浜も、今は、全てが横浜の港から入っていた時代は終わっているので、きちんとそれを踏まえた上で、今の横浜の最大の資源は373万人を数える市民の力だろうと僕は思っていまして、その市民の人たちに開かれた場所をつくって、人間のための都市の延長として、人々が活躍するベースとしての市役所をつくり上げることが大事だということをテーマにしました。ですので、低層部は、街のように開かれたさまざまなスケールや機能が混在する場所にしてほしいと書いたり、「屋根付き広場」が非常に大きな活動を支えるスペースになるので、ここを人々の活動の中心としてきちんと考えてほしいといったこと。さらにここでは「水辺“を”開く」という言い方をしているのですが、「水辺の活動と市役所の活動が相互浸食するような建物のあり方」を提案してほしいと謳いました。そして、地区計画の中で屋根付き広場は水辺から離れた場所につくると書かれてしまっていたので、その２つをつなげる関係性も大事ですよと言っています。
まとめると「結節点であるという敷地の利点」と、「水辺であること」「横浜らしい歴史が残っていること」を活かして「新しい」建物をつくって欲しいと。そういった要素をデザインとして昇華した、或は、豊かな市民生活や活動が行われる、その下地となるような市役所をきちんと建築のデザインで示して欲しいということをコンセプトブックで謳って結論にしました。

最終的には、竹中工務店と槇文彦さんがタッグを組んで、この絵のような市役所が提案され、現在、高層棟が130メートルぐらいまで建ち上がっていて、2020年の６月にオープンする予定です。
我々のほうでも、市民とのワークショップをやったのですが、初回からこんなに盛り上がっている仙台がうらやましいと思います。僕らは、基本設計がほぼまとまってからようやく、市民の人たちとワークショップをやったり、使い方の話などが出来たという状態でしたので、「まだまだ間に合うんじゃないですか、仙台」と思っているというか、「いいタイミングですね！」というふうに思っていて、僕らもこれに刺激を受けてきちんとやっていかないといけないなと思っています。ワークショップは、この写真のような形でやっているのですが、うまくいくところといかないところがあるので、この後の話で少しさせていただければなと思います。
現庁舎の１階が「市民広間」というホールになっているのですが、ここは市民の人に開かれた場所になっていて、「議会や市役所の人たちが公的に市民と接触する場をつくる」というのが当時の建築のコンセプトになっていて、「その発展型をつくらないと、50年前につくった市庁舎に負けてしまうよね」という思いがモチベーションになりました。実際、先ほど出てきた飛鳥田市長は、呼ばれれば市民の方たちに直接回答していたと聞いていますので、そんな場所をつくっていきたいなと思っています。
僕からは以上です。

手島：

Table E
【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

ページェントやジャズフェスも仙台市の公園課の協力を得てスムーズに実施できている。震災後３０回／年のペースでチャリティーコンサートとチャリティーコーヒーを開催している。この活動を介して被災地民とつながっていけることが最高だと思っている。このような活動が継続できるのも、定禅寺通りがあるからこそ。

佐藤：
定禅寺通がその様な活動を介した対話の場になっているということが分かる。それでは、まちと市役所エリアの関係、あるいは定禅寺通との関係について工藤さんどうぞ。

工藤：
一番町四丁目商店街専務理事、一番町四丁目商店街まちづくり委員長を拝命している。
四丁目商店街にとって市役所はそこにないと困る位置づけ。商店街のイベントは市役所の時計を見ながら進める。市役所、定禅寺通、国分町、三越と連携し、３５年経ったアーケードの建替え又は新築を昨年から考え始め、ショッピングエリアとしてのゾーンをどう考えるかという段階に入ってきた。周囲の協議会と歩調を合わ

Table F
【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

で仙台の設計事務所でかれこれ46年建築の設計、特に公共の建物の設計を多くやってきました。
私はある意味では仙台からいいますと外様といいますか、他から来まして、ただ、名古屋から仙台へ来て、本当に田舎だなと思った半面、杜の都というイメージですか、当然来た頃は仙台駅も古い木造みたいな建物でありましたし、先ほどの写真を懐かしく見せていただきましたけれども、市電も走っていました。
ただ、名古屋の100メートル道路と比べると何でこんなに豊かなのだろうという定禅寺通や青葉通の並木道、歩いていて楽しい道がまちの中に走っているのだと。名古屋の100メートル道路というのは、戦後の焼け野原から都市計画課が100メートル道路をどんどんとつくって、それが名古屋の発展に寄与したと言われていますけれども、本当に無味乾燥な100メートル道路であります。仙台に来たら本当に緑豊かな、歩いていて楽しい道とか、あるいは、山や、都市の大きさが非常に人間的なスケールに合っていたということもありまして、そのまま46年仙台に住み着いて今を迎えているということです。仙台の歴史というものを余りひもといたわけではないのですけれども、このテーブルに興味があったのはこれから過去から未来へという未来への部分で、私は子ども会育成会連合会というところにずっと所属して、夏には子供とキャンプに行ったり、あるいは紙相撲大会をやったり、いろいろな子ども会に関するイベントをやっていまして、子供たちがこれから生きていく上で市役所をどういうふうに、どんな市役所だったらいいのかなというふうな視点で参加したいなと、思っております。私、木村さんの講演を二、三回聞いて古いものを発掘して昔、あるいは何百年前の歴史に触れるというのは非常にわくわくすることだと気がつかされまして、多分木村さんがそういう視点から未来へというつながりをどうやって次の世代につなげていけるかなということに非常に興味があって、それについて今日このテーブルでいろいろな人の意見を聞きながら考えていきたいなと、思っています。

針生：
建築家の針生です。突然呼ばれて、この間も話に出たのですけれども、なかなかこの問題は難しくて、何か最初に大手組織設計事務所とか、あるいは設計施工とか、あるいはデザインビルとか、そういうことを前提にして建て替えというのを最初に考えたのですかね。その辺がちょっと気になります。
基本的には二郷さんの歴史的なこととか、皆さんの話を聞いて大変に勉強になりました。私はちょうど養賢堂が図書館のとき使っ

Table D
【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

ありがとうございます。済みません、ちょっと私が失念しておりました。発表していただいた後にできれば一言でも二言でもいいのですが、「都市の個性とは何か」「どうやってできるか」について、触れていただきたいと思います。それは「横浜の事例から、横浜だとこうだ」というのでも構わないですし、或はもっと一般的な話でもいいです。桂さん、鈴木先生から、それについての意見を頂いて、次に、札幌の高森さんの話に移りたいと思います。

桂　：
横浜の場合は「歴史が非常に浅い」という話をしたのですが、しかも戦災や関東大震災で都市としては何度も破壊されていて、痕跡というものは、実はほとんど残っていないというのが現状なんです。ただ、残されたものについては、都市デザインの活動の中できちんと大切にしていこうということを言っていますし、実際に新しくつくる街について、歴史をベースにしつつも、単純に歴史をなぞるだけではなくて、それを踏まえて次の提案をするというような、デザインと僕らが呼んでいるところが肝だと思っています。その２つ、新しさと歴史による「横浜らしさ」というものをここ数十年でつくってきた。それが今の浜っ子と呼ばれる人たち――よく言いますよね、横浜の人たちは「神奈川県から来ました」と言わないで「横浜から来ました」って必ず言います、みたいな。その浜っ子気質のいくらかでも、まちづくりが担ってきたという自負があります。

鈴木：
「都市の個性とは？」と言っても非常に難しいのですが、やはり私は、基本的には「都市とは人の記憶の集合みたいなところ」だと思っているので、歴史は非常に重要なことだと思っています。戦災でぼろぼろになって残っている部分は少ない新しい都市だからといって、それをネグレクト（無視）しちゃいけないなと思っています。ですから、そういったまちづくりが70年代からも行われてきたということは誇るべきことだと思っていて、「一から絵を描き直すのではなく、既に描かれている絵をいかに読み込んで現状をどう理解して次の一手を考えていくか」だと思います。長期的にはまちは絶対変わっていくし、文化財にでもならない限り、絶対建物は建て替わるんですよね。そのときに「よい循環をつくれるか、つくれないか」が「個性を活かせるか活かせないか」のターニングポイントになるんじゃないかと思います。

手島：
ありがとうございます。続きまして、札幌の事例のご紹介をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

高森：
札幌市都心まちづくり推進室から来ました高森と申します。私は、いわゆる単なる事務屋職員なのですが、再開発10年、都市計画４年、都心まちづくり14年ということで、ほぼまちづくりで市役所人生を過ごしてきたという経歴です。今現在、都心まちづくり推

Table E
【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

せながら、自分たちの段取りを考えている。三越は大店舗で北の入り口を守っている。市庁舎単体ではなく、市民広場や勾当台公園も含めて重要な施設群という認識がある。このエリアを活用したイベントによって商店街の人出にも顕著な影響が出ている。ページェントが１週間短縮したことで、人出が減る懸念が商店街で議論されている。イベントの有無が人通りを変える大きな要因につながる。同じ場所で市役所が建替えられることは、ありがたいと感じている。

佐藤：

桃生さんどうぞ。

桃生：
春日町でシェア型複合施設ＴＨＥ６のディレクターをしている。ＴＨＥ６は、フリーランスのクリエイターやスタートアップ企業などが利用するシェアオフィス兼コワーキングスペースである。一部イベントスペースとして貸し出しており、多様な人が出入りしている。個人的に長く公共施設の運営に携わり、NPOの中間支援を目的とした施設でスタッフを務めていた。このテーブルのテーマは役所の機能を内部に留めるのではなく、外に沁みだしていく

Table F
【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

たことがありまして、よく知っていましたが、市役所が建ったときは私が何年生かな、そう、学院中学時代でした。それで、前の市役所は何で壊したのですかね。ネオルネサンス様式の優雅な建築でした。その辺のことが、当時どの様に検討されたか、興味があるのです。
それから、県庁も評価の低い計画だと思います。大手組織事務所３社が議会、行政、警察棟の３つに分けて、それも並列的に建てて、いかつい権威的なものになって、県民に親しまれる庁舎のたたずまいになっていない。
仙台は、近世から近代にかけて、建物保存に関しての意識が大変低いと思われます。
何故こんな話をするかというと、旧県庁は、佐藤功一が設計しました。あれと同じものが私の家内の実家の旧群馬県庁舎です。旧庁舎を巧く残しながら、建てられました。こっちは壊しました。上の塔だけ前庭にとんと置いて、何かいつの間にかなくなりました。こういうことをやる文化行政って、一体何なのかということなのです。
私は基本的にはそういった二の舞はすべきじゃないと、思っています。仙台らしさとかなんかいろいろ言うけれども、継続される中で文化とか景観とか、そういったものを考えることが大事なのです。
私は七ヶ浜の国際村を設計したときに、七ヶ浜の姉妹都市になっているアメリカのプリマスというまちに行ったことがあるのですが、プリマスというのは日本での奈良、京都みたいなところなのです。1600年代にメイフラワー号でイギリスから渡ってきた人々の初めての町です。メイフラワーⅡ世号をつくっていますし、まち全体に1600年代のものを多数残しているのです。その残し方が、日本だと国とか自治体頼りですが、向こうは民間のトラストですから、10人ぐらいの人たちが金を出して、例えば、200坪ぐらいの商館とか、その頃のものを守っているわけです。「見せてくれ」と、言ったら、金を取られます。僕はその頃、歴史の浅いアメリカに行って「ああ、アメリカって、歴史の国だな」と、感動しました。アメリカのここ400年の歴史保存に対する金のかけ方は尋常じゃないです。コンプレックスがものすごくあるから余計やっているのです。
ところが、我が日本、特に仙台はどうも伊達文化というのは保存に関してすこぶる怪しいのです。伊達氏というのはもともと鎌倉武士です。二郷さんはよく知っていると思うのだけれども、阿津賀志山の戦いで、平泉を滅ぼした後に、伊達郡茂庭村という飯坂温泉の奥に領地をもらったわけです。それから攻め上って、米沢、

Table D

【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

進室14年目ということで、かなりレアケースなのです。私の立場は市の部長職になるのですが、6年連続ということで他にはそういう人はなかなかいないということで、自慢にも何もなっていませんけれども、そういう経歴でございます。

札幌市でございますが、今年でちょうど創建150年ということで、内地府県の都市や、皆さんのまちから見ると歴史性はものすごく浅くて、加えて札幌の今の市街地の街並みの形成と言いますか、まちの骨格ができたと言われるのが1972年札幌冬季オリンピックです。これに向けたまちづくりで特に都心部は市街地の骨格ができたと言われています。ちょうど1972年の前年に札幌市は政令指定都市に移行し、人口も100万を超えました。その後、毎年3万人を超える人口増の時代が20年ほど続きました。1990年代、20世紀後半に入りますと、さすがにそういう人口の増加傾向も緩やかになり、将来的な人口の減少が予見されたという状況になります。それまで増え続けている人口を市街地を外縁的に拡大することでまちに収容してきた、そういうまちづくりを中心に進めてきたのですが、さすがにそのような人口の減少傾向が見える中で既存の資源の価値をもう一度見直そうということで、都心というエリアがまた脚光を浴びました。

2000年に札幌市の長期ビジョンである「第4次札幌市長期総合まちづくり計画」というのがあるのですが、それまで予算的にも人的にもオリンピック以降は全然手薄だった都心部に力を入れて、その魅力や活力を高めて都市魅力を高めていこうという取り組みに転換しました。そんな中で、平成14年に都心まちづくりのマスタープランとなる「都心まちづくり計画」と関連諸計画の計画体系を整理しまして、同時にその実施部隊として都心まちづくり推進室ができたということでございます。

都心まちづくり推進の事務分掌は、「都心まちづくりに関する総合調整に関すること」というだけで、その他は何もございません。実際、その名のとおり、都心エリアにおけるハード・ソフト、公共事業・民間事業全てに口を挟む立場で、市民、地元組織、事業者、庁内、関係機関など、こういう方々との調整に日々時間をとっております。今はエリアマネジメントから再開発、開発調整、環境エネルギー、こういった分野を中心に担ってきています。そのために職種も、事務、建築、土木に加えて造園、機械、電気という6種類の職種の混合部隊で取り組みを進めています。

これは、札幌の都心の都心まちづくりとはということで、札幌駅の駅北口一帯から中島公園の入り口まで、これが南北でございます。それから西は大通公園の西端の13丁目で、東はその大通の延長部分と豊平川が交差する部分です。これを結ぶとこのようなひし形になりまして、非常にコンパクトな中に都心という位置づけをしています。

札幌の都心部は、先ほど申し上げましたとおり1972年の札幌オリンピックに向けて建て替わった建物が多く、時代的に耐震性の問題もありますし、加えて2030年に、遅まきながらようやく北海道新幹線が札幌まで伸びてきて開業になるということ。さらにはそれに加えて2度目の札幌オリンピック・パラリンピックの2030年開催の招致活動を行おうという取り組みが進められており、これ

Table E

【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

という視点が重要であると考えている。地域活性化のためのイベントは増えてきているが、イベントはエネルギーが求められるので、継続できず単発で消えていくものも多い。また、助成金・補助金に頼りすぎることで活動の足枷になることがある。それをあてにして活動していると予算がなくなった瞬間に何もできなくなる。支援する側の制度も見直すべき点があるのではないか。行政と民間の新たな関係性を構築するためには、言語や組織のシステムが異なる部分を翻訳できる人材が必要である。地域のキーマンをつなぎ直し、継続的に収益を上げられるような仕組みや視点、方向性を検討しないといけない。

佐藤：
田邊さんどうぞ。

田邊：
地元よりも他県やナショナルブランドにかかわる仕事が多く、常に外からみた仙台を意識してきた。仙台らしさはどこにあるのか？定禅寺通は杜の都の代名詞であり、市民活動の賜物でハードもソフトも充実している。新庁舎と定禅寺通の新しい関係は、界隈だけで終わるものではなく、現存する歴史的な建物、西公園や広瀬

Table F

【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

岩出山と勢力を拡大した訳です。仙台開府まで戦いの歴史でした。だから、スクラップ・アンド・ビルドの傾向が強いのです。伊達の文化は古いものをどうも大事にすることが含まれていない、と思われます。

私は小さい頃、1950年、一番町にあった高松小児科に2カ月ぐらい入院したことがあるのですが、そのとき明治生命の古いれんが造りの建物が一番町にありました。それもいつの間にか壊されてしまっているし、そういう点で、今回は何はともあれ、国際的に評価の高いＢＣＳ賞をもらった市庁舎を免震を含めてレトロフィットして残して活用すべきだと思います。

それで、足りない分を新設すべきだと思います。つくり方はいろいろありますが、古いものを活かしながら、新しいものと統合して行く方法であり、一つの大きい豆腐みたいなものをつくるのではなくて、広場を構成するとか、横丁の様な界隈ができるようなつくり方をするのが仙台らしさかなとか思っているのです。

ですから、今の建物は何としてでも、レトロフィットして残すように考えるべきだし、多分市民もそう思うのではないでしょうか。誰もどこにでもあるようなタワーをつくりたいとは思わないと私は思います。

木村：
木村でございます。今大分、目が覚めるような辛口の御意見をいただきました。

私も実は長く文化財に関わる仕事を市役所の中でさせていただいて、所属は教育委員会の文化財課で、専門は古代の遺跡の調査をする専門調査員、大学も考古学を専攻して、そのまま仕事になったので、「あなた、学校でやったことがそのまま仕事になって幸せだね」と、言われました。しかし、決してそんな幸せな人生ではなくて、1年の大半は外におりまして遺跡の調査に従事しておりました。冬場になると「野外の調査がなくなって暇でいいね」なんて、とんでもないことで、季節のいい頃の3倍ぐらい忙しい冬場の地獄のような生活がありまして、毎年毎年春から秋にかけて掘ったものを全部まとめて、遺跡の調査報告書というものを出して刊行していかないと追いつかないことになります。

市内にはそういう遺跡が今、年々少しずつ増えて、780カ所ぐらいありまして、それを常時、発掘調査をしております。文化財課に職員が二十数名おりますが、大半みんな外に出っ放しで、なかなか庁舎の中にはいられない、そんな状況、そういう生活をちょうど今年で仙台に戻ってきてから、ちょうど40年になります。大学を終わってからちょっとだけ福島に行って別な遺跡の調査をした

Table D

【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

らのことを踏まえると、2020 ～ 2030 年という 10 年間が市街地の建物の更新のピークになってくるだろうと考えています。私どもが平成 10 年にまとめた都心まちづくり計画を改め、第２次都心まちづくり計画を策定し、そして 2050 年を見通した都心の環境エネルギーの取り組みとして「都心エネルギーマスタープラン」というものを策定しまして、まちづくりと環境エネルギーを一体的に取り組むということを今試行しています。これは、これまでの低炭素・省エネルギー化という流れに加え、東北大震災の教訓などを踏まえた「強靱」という考え方を取り入れ、これらを踏まえて都市の売りとしていこうという考え方です。

都心ですが、大きく４つのエリアに分けてエリアマネジメント活動を推進しています。この４つのエリア、団子状になっている駅前通地区、大通地区、すすきの地区、それから右側に楕円形で示している創成東地区です。すすきの地区を除く３つの地区ではそれぞれまちづくり会社が立ち上がっていまして、それぞれエリアの特徴を生かした住民・事業者みずからのまちづくりをそれぞれ進めているということをまずお話ししたいと思います。

この中で最も特徴的な取り組みを行っています駅前通地区のエリアマネジメント活動についてですが、駅前通は、札幌の玄関口であります札幌駅から開拓期からの資源である大通公園までの間の 10 街区を対象としてエリアマネジメント活動を展開しています。その取り組みのきっかけは、昭和 62 年に、ここに立地する企業さんが、（商店街ではないのですが）企業間の振興会という組織を組織いたしました。これには、56 社が加入していますが、街路灯の設置、美化、環境整備というような取り組みを、札幌のメインストリートで行ってきました。

ご存じかと思いますが、このような中、平成 17 年に、札幌駅前通で札幌駅と大通の区間を結ぶ地下歩行空間「チ・カ・ホ」の整備にあわせて、地上部と地下を一体的に整備しようということで 2005 年にスタートしています。この駅前通に関しまして、地権者の皆さんが「まちづくりをどうするんだ」ということで、そのデザインを含めて検討する母体として札幌駅通協議会を立ち上げまして、それらの議論を取りまとめて、2020 年に札幌市に地区計画の都市計画提案を行いました。その都市計画提案を受けて地区計画を決定し、地下歩行空間や地上部の整備が並行して行われる中で、整備されるチ・カ・ホの指定管理者をそもそも担ってもらう組織として駅前通のまちづくり会社を発足させました。

平成 22 年に駅前通まちづくり会社が設立されたわけですが、ちょうど平成 23 年３月 12 日にチ・カ・ホが全面オープンいたしまして今に至っています。仙台市さんはその前日に、大変なことになっていましたが。

加えて、エリアマネジメントという観点では、平成 26 年に都市再生特別地区の民間事業者の取り組みで既存道路を廃道にしまして、（ちょうど道庁赤レンガ前のイチョウ並木の部分ですが）道路１丁間を都市計画広場という形で種別替えをして、通行を排して広場化しました。これらが、まちづくり会社が今担っているエリアマネジメントの母体となる都市空間となっています。

チ・カ・ホですけれども、道路幅員は全体で 36 メートルで、地下

Table E

【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

川青葉山まで取り込んで、歴史の香りがする景観も含めて考える必要がある。歴史を踏まえた景観が見落とされているように感じる。

佐藤：
小林さんどうぞ。

小林：
宮城県建築士会のまちづくり委員会に所属している。まちづくり委員会は防災、歴史、景観、空き家対策及び福祉の５つをキーワードに活動している。また、ヘリテージマネジャーとして、地域に埋もれた文化的価値のある歴史的建造物を発掘し、その価値を判定し、建造物の保全活用に関して、市町村や建築物所有者から相談を受け、提案できる建築家を育てる活動に関わっている。北山五山、東口、新寺などにボランティアガイドの案内によるまちあるきを企画し、街づくりのベースを勉強している。現在の街づくりはスクラップ＆ビルドからソフトに移行している。仙台人の気質として、こだわりはあるが古いものに対する意識が低い。東京や大阪をもしのぐ「格好いいものを造るぞ」という気概の方が強いように感じる。多賀城に国府がある時代から地域の顔になるも

Table F

【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

のですが、その後、40 年ずっと仙台市の文化財の仕事をさせていただきました。なかなか歯がゆい部分もありまして、すばらしい遺跡に掘り当たってもなかなか残せないということで、大分、目の前で重機に遺跡がばっと壊されていくのを目の当たりにしておりまして、悔しい思いを何度もしております。

最近、この 15 年、20 年ぐらいでしょうか、江戸時代の遺跡にちょっと関わったこともあって、具体的には仙台城の本丸の石垣の修復調査に、直接ではないのですが、広報担当として関わって、いろいろ勉強させていただきました。それをきっかけにちょっと江戸時代のいろいろな遺跡にも目が向きまして、江戸時代の研究は文献の研究をされている方々も、たくさんいらっしゃいますが、私はちょっと違うアプローチでやってみようとしています。仙台市の旧城下のエリアを全部遺跡に見立てて、その中にある遺跡でいったら痕跡をどれぐらい拾い集められるかということで、今いろいろとやっております。

その一環として見つけた痕跡を御紹介しながらまち歩きをしたり、テレビでも取り上げられたりしていただいて、最近とみにちょっとやかましいというか、忙しくなってしまいました。その仕事をする中で、いろいろな絵図を今見せていただいて、今ちょっと画面にも出しておりますが、先ほど二郷さんのところでも詳しくお話をいただいたのですけれども、これは元禄年間にかかれた五釐卦絵図という絵図でございます。

この中の今ちょうど市役所の部分だけ拡大しております。おわかりいただけますでしょうか。ここが二日町の通りの奥州街道。先ほど二郷さんの話にもありました。表小路がちょうどこれに当たります。これが勾当台通ですので、この６人分の侍の屋敷地がちょうど市役所の敷地に当たります。ちょっと拡大してまいります。

この入江さんというお宅、それから秋保さん、猪苗代さん、あとこれは逆立ちしていますけれども３人。背中合わせの６人の侍屋敷、ちょうどこれが市役所の今の敷地にぴったりです。隣のパネルに白地図で現在の市役所が入ってございます。このブロックがここです。この二日町の通りに面する町屋と書いてある細長いブロックが、通りに面した文字どおり商人の町屋です。そこのバックに６人分の屋敷がありまして、これがちょうど市役所の敷地で、今御紹介した３人分が今実際に建物が建っておるところで、こちらが今噴水広場になっているところです。

これが後に少し道路が拡幅されて表小路になってまいりますが、これは養賢堂ができる前の絵図ですので、これにはまだ表小路の片鱗がございません。ただ、先ほど二郷さんに御紹介いただいた安政、幕末の頃の絵図を見ますと確実にここの道路が拡幅されて、

Table D

【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

の部分については、通路として使っている部分はセンター部分の12メートルでして、残りの両側の４メートルが条例広場という形をとって、道路管理者と広場管理者との間での兼用工作物協定によって広場にしまして、道交法の適用を受けない範囲という整理をしました。それからさらに、沿道の残り片側８メートル・８メートルについてですが、これらを沿道のビルが建て替えるときに合わせて接続してもらうという「接続空間」というものを用意しまして、センター12メートル、残りを広場という形で、エリアマネジメント活動、住民活動、こういったものに使っていただくということで供用しているところでございます。

これは駅前通の地上部でして、札幌駅から大通方向を望んだものです。これはもともと片側３車線の道路だったのですが、基本、２車線化いたしまして、１車線は沿道の荷捌き帯といいますか、そういうものにしまして、歩道空間を広くいたしました。これはハードの部分ですね。

次に、先ほど都市計画提案によって地区計画を決定したというお話をしましたが、左側の図で地区計画を決定した範囲があるのですが、途中、ここが北三条広場に当たる部分で、ここが三井さんとＪＰさんの共同事業、こちらがニッセイさんの事業で、都市再生特別地区を導入して開発を行った。三井・ＪＰ共同事業が北三条広場を整備したという建てつけで、沿道の地区計画の区域から外れているのはそういう事情でございます。

これが地区計画を活用して建て替わった最初の事例のビルでございます。これはフコク生命さんと地場の越山さんという方の共同事業で、優建事業（優良建築物等整備事業）を適用いたしまして、三井・ＪＰさんが地下にエネルギーセンターを導入していただきましたので、そこでつくられた熱をこのビルも引き込んでいると。先ほどチ・カ・ホのところで申し上げるのを忘れたんですけれども、チ・カ・ホの整備の際に熱導管ピットをあらかじめつくっておきました。熱導管をそこに通して、沿道ビルのネットワーク化を図っていこうという考えを持っています。これは都心エネルギーマスタープランのほうで今実践に移しています。

札幌駅通の取り組みについては以上ですが、今回、市役所本庁舎を建て替えるということで、横浜市さんとは違って札幌はまだ本庁舎が建て替わる年齢には至ってございません。ちょうど2030年、先ほど申し上げました時期でおよそ満60歳ぐらいになります。ですから、いろいろなイベント等が終わりましてから建て替えが実際には行われるんだろうと思いますが、その議論というのはもう間もなく開始していかないとならないんだろうと思っています。

札幌市では、仙台市さんの取り組みとは違いまして、本庁舎を所管する、あるいは営繕部隊が構想を検討するのではなくて、私ども都心まちづくり推進室が建て替える場所、空間の考え方、それから質、機能、こういったものの検討を進めまして、与条件を整理して担当部署に引き渡すというような流れで検討を進める考えです。先行する横浜市さんや仙台市さんの取り組みをこれから注目させていただいて、いろいろ勉強したいと思っています。私からは以上でございます。

Table E

【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

のを造るという気質が綿々と根っこにあるのではないか。街は発信するところに出来上がる。発信するものは何か、人、物である。学生街、商店街、オフィス街として住み分けを考えると市役所が街になりえるか。市民の多くは区役所で事足りるので行く機会は非常に少ない。よって魅力がない。市役所も発信する場所になるべき。

市役所の２階から商店街はまっすぐ伸びてとても格好が良い。商店街関係者にはこの視点に立ったアーケードの在り方も考えてほしい。上から見ると広場の桜や樹木は非常に美しい。このロケーションを市民に開放すべきだと感じる。

佐藤：

増田先生どうぞ。

増田：

テーマがたくさんあり、基本構想検討委員会でも論点をまとめ切れず先送りしている部分もある。定禅寺通界隈は市役所、県庁、国の出先機関が構成し、一般の市民の方が訪れるのは、広場でイベントが開催されている時のみ。残念ながら古い県庁舎も解体され、四角いビルに建替えた。副都心構想が持ち上がった２０年程

Table F

【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

文字どおり養賢堂の正門を意識するように広がった道路になっておりまして、これは今でも市役所の前を歩いていただければあそこだけちょっと広がっているのがおわかりいただけます。

その二日町の通りに通じるところだけ元の通り幅に戻って少し細身になってまいりますが、ああいう痕跡を私は探して歩くのが大好きで、それを御紹介しながら歩いているわけです。この様に侍の屋敷に全部比較して検討していくことが可能ですので、ぜひこれから市役所の建て替えか、それから半分ぐらい現状維持も含めていろいろな方法があるかもしれませんけれども、こういうものをどこかできちんと表現しながらあの敷地の活用をしていかないと、まさしく単なる過去は抹殺されるということになってしまいます。こんなこともどこか頭の片隅に入れていただいて設計なりなんなり考えていただいたらまた違う方向になってくるのかなと思います。

それから、この辺を案内していてよくよくこの頃がっかりしたりするのですけれども、定禅寺通は仙台市民で知らない人はいないのですが、「定禅寺通の定禅寺ってどこなの」と、聞くと、大半の方は「うん？」と頭をかしげてしまうのです。ここにあります。今、目の前に。文字どおり定禅寺。これが今の勾当台公園にすっぽりはまっております。ここが東二番丁の北詰めになりますので、今はこれが道路を突き抜けて市役所のほうまでこういうふうに斜めに伸びておりますが、かつては市電が廃止されるまでは二番丁もここでぽちっと切れて、市電の通ってきたルートがここでこういうふうに90度に曲がって、先ほどこれまた二郷さんの写真にありましたが、ぐっと急カーブで曲がる市電の路線がありました。

ここが今ちょうど地下鉄の出入り口になっているところで、かつての定禅寺はここから斜めに参道が延びていまして、ここに杉の木立がございますが、この北東側に定禅寺の境内地が広がっております。後ろのこの斜めの通りは、これまた大分分断されましたが、外記丁の通りになります。ここに大分広い定禅寺、それから、隣にこれまた歓喜院という、寺院が１つ並んでおります。

この杉並木のところが今どうなっているかというと、私が肩書きのところの御紹介にあります仙台段差学会と何か不思議な名前がついておりますが、これは仙台の街中の段差や崖を楽しむ会合で、決して難しいことをする会合ではないのですが、その段差学会大好物の広瀬川がつくった河岸段丘の崖です。そこにこの杉の並木がずっと入っておりますので、恐らくこれは崖の上の端か、崖の下の端か、ちょっとこれだけではよくわかりませんが、定禅寺というお寺に登っていく参道の石段のところにこの杉の木立がずっと広がっていた。これがちょうど今、勾当台公園のあの階段にそっ

Table D

【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

手島：
札幌から見た、都市らしさについてもお願い致します。

高森：
都市らしさ。都市らしさということですが、先ほど申し上げましたように、札幌市は創建150年、それから今の骨格ができたのは1972年と申し上げましたけれども、いわゆる明治の開拓期以降、新しい事柄、物に対する取り組みに常にチャレンジを続けてまいりました。開拓精神と申しますか、「できるできないじゃなくて、チャレンジする、手を挙げる」その姿勢が札幌市らしいのかなと僕は勝手に思っていました。
いわゆる一般的に言う都市らしさということでは、北国における都市と自然の近接性が他の都市にはない札幌の都市らしさを表現しているかなと考えています。以上でございます。

手島：
ありがとうございました。
それでは、２つ事例を紹介していただきました。ここからは有識者の立場から都市らしさについてお話をいただきたいと思います。遠州先生にはパワポを準備していただき今朝送っていただいたので、それを使って説明していただき、その後、姥浦先生にバトンタッチしたいと思います。よろしくお願いします。

遠州：
どうも、遠州です。簡単に自己紹介させていただきます。私は、仙台市の生まれで、東北大学の建築学科を1972年に卒業して、その後トータル13年大学にいました。1984年に神戸大学の助手になって移って、だから34まで仙台にいて、その後の34年間よそにいて、去年の10月に仙台に戻ってきたという格好です。
震災が起きたときは、たまたま私、内地留学の最中でして、内地留学がちょうど半分終わったときに震災になり、留学先の先生に「仙台で復興に関わることが可能であれば後半は仙台に行ってきます」と断りを入れて、仙台に戻ってきまして、４月の末から９月半ばぐらいまで仙台にいました。そのときには残念ながら、私が学生時代に一緒にやっていた仲間がみんな被災者なので、とても復興のための取り組みを始めるどころの騒ぎじゃなかったものですから、専ら被災現場を見て回ることと、宮城県の復興計画にパブコメで文句をつけるということをやって過ごしていたにとどまるのですが、退職を機に震災の問題に私の余生を捧げたいということで仙台に戻ってきました。
仙台市としては、もうそろそろ復興事業から足を洗って（といいますか、復興を卒業して）もっと先に進みたいという、スタンスでいるような気がしていまして、私としては被災者目線で考えたときに「復興はまだまだだよ」とに思っているので、それなりに緊張感がある関係を続けています。
手島さんからこの話をいただいたときに、最初「時間あいていますか」という話でお聞きして、「26日は午前中会議があって１時半というのは不可能じゃないけれども苦しいな」と言ったら、「じゃ

Table E

【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

前であればドラスティックに副都心に市役所が移転する議論もあったかもしれないが、現在は歴史的な蓄積を活かし、既存敷地内での建替えが前提になっている。
定禅寺通、一番町エリアの話もあったが、北四番丁エリアにまだ幾つか市有建物もあり、東北大学農学部跡地で新しい計画が動き始め、市役所は北の玄関口という位置付けもある。地域の景観保存や古い民間ビル建替えなど今後の議論のきっかけにこの活動が影響するのであれば、市もこの界隈をにらんだ建替えで波及効果はあると思う。この建替えが１つのモデルとなって、周辺エリアにも波及すればいいと思う。小林さんの話は、市役所から定禅寺通、一番町エリアを見た場合の視線であったが、一般市民はそういう視線では見てないように感じる。

佐藤：
「景観」、「時計を意識していること」、「市庁舎からアーケードをつなぐ軸線が開けていること」、「視点が変わると違って見えること」などが議題に上がりました。
定禅寺通の議題でスタートし、まち側から見た市役所、市役所から見たまちと進んできたが、市役所と定禅寺通りの関係には、ワンクッション市民広場という空間がある。一番町以外にも、元奥

Table F

【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

第２部からね」という話をされて、どこにはまるのかということも全然知らないでおりました。昨日になって論点整理の資料が送られてきたので、「ええっ」という感じです。どういう話ができるのかという点で言いますと、せっかくご紹介いただいた横浜や札幌の話にうまくかみ合った話ができるかというと、どうもそうならないなと思いつつ、あるいは本質的には関わるのかなとも思いながらお聞きしておりました。
今日用意したパワポは、昨日の昼過ぎぐらいからウンウン言って用意したやっつけ仕事ですので、こんなところで、私が考える都市らしさとはどういうことかについてお話をしたい。
私がイチ押しで挙げるのはフライブルクですが、本当は日本国内で考えたいと思っていました。一番惚れているのは実は水俣です。水俣に惚れているのですが、その話をすると長くなるのと、都市規模が余りに違い過ぎるので、フライブルクを挙げます。フライブルクについても世界中の都市の中で一番だと言っているわけではなくて、これはあくまでも私が多少関わりを持ったことのある都市の中でフライブルクがイチ押しだということを言っているに過ぎないので、そこのところはご理解をいただきたいと思っています。
大学を出て、その後、神戸大学に行きましたので、住まいは京都、奈良に住んでおりましたから、その間、私が関わったまちというと、京都、奈良、神戸、大阪、名古屋です。名古屋は、神戸の震災が起きる８カ月前に日本福祉大学に移ることになって、それから７年間名古屋にいて大阪に戻ってくると、そういうことでしたので、この４つの大都市圏に関わっておりました。
「それぞれの都市の都市らしさって何なのかな」と考えて、私の頭の中に思い浮かんだものをずらずらっとここに並べてみます。そうしてみると、それぞれの都市に共通する都市尺度といいますか、何かの尺度があって、決定要素があって、それで都市らしさを語ることができるのかというと、どうもそうではないと思います。それぞれの都市が持っている一番「訴求力の高い要素」が都市の都市らしさということを印象づけ、形づくっていると思います。それはその都市らしさというときに必ずしもいいことばかりではなくて、例えば私、名古屋に住む前に一度だけ名古屋に訪れたことがあって、それは万博の年だったのですが、名古屋に行ってみて一番最初にびっくりしたのは地上に全く人がいないことでした。しかし、名古屋の駅から地下街に下りた途端にとんでもない数の人がいるという状況で、これびっくりしました。そういう意味で言うと今は大分変わって、地上にも人が行き来するような状況に変わったと思っていますが、そのときの第一印象は、とにかく車に占領されて人々の暮らしが押し潰されているような街だなという印象を持ちました。その後、名古屋に住んでいろいろな人と付き合って、とてもいい人たちがいっぱいいて、それなりにいいところもたくさんあったのですが、しかし、だだっ広い道路と、お年寄りが渡ろうと思うと途中で信号がかわっちゃって向こうに渡り切れないという街のあり方には最後までなじめないまま名古屋を去ることになりました。
そうしたことを踏まえた上で、では「仙台らしさって何なんだろ

Table D
【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

州街道と市役所が接している都市計画は全国的に珍しいと思う。
多くの政令指定都市の官庁街は大きなブロックで公園があり、市庁舎、県庁舎、県警が近接してあるイメージが強い。元奥州街道との距離がすごく近く、界隈というと、一番町側もあるが、西側にしみ出してくるというものも、ファシリテーターを受けた時に考えていた。
春日町界隈から見た勾当台エリアはどの様に映るのか。桃生さんいかがか。

桃生：

ＴＨＥ６で春日町エリアのみに限定したMAPを作成した。狭いエリアだが５０軒ほどの店舗が路地裏に点在している。現在は仙台駅前がもっとも集客が高まっているが、駅前とは異なる価値を一番町側では提供すべきだと考えている。駅前はごみごみしている印象だが、定禅寺通界隈は、ゆっくり過ごせる印象があるので、それを活かしたい。人は多くなくても消費単価を上げる仕組みや１日そこに滞在できるコンテンツを提供するといった視点があってもいい。回遊できるものを提供できると、仙台駅前との差別化も図れるのではないか。

Table E
【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及
効果・相乗効果を考える

くりそのまま当てはまるかと思います。
こんな様子で、この定禅寺にお城のほうから通じる通りという意味で、その目の前のケヤキの通りが定禅寺通というネーミングになっていることとか、あとは、先ほどちょっとお話ありましたが、勾当台公園の勾当って何という話も、これまた勾当台公園を知らない人はいないのですが、聞くと「ええ？」と皆さん頭をかしげられます。
江戸時代の初め頃にここに花村勾当政一という人が屋敷を構えたというふうに記録があります。慶長の年間に城下町ができて間もない頃、政宗公がおおよそでき上がったまちを巡検して歩いているときに、この辺を通りかかったら、道端で殿様の行列でひれ伏す盲人がいたということで、「名は何と申す」とやりとりをしたら、有名なざれ歌を詠んで「な(名)に一字ちがいありとてことごとし、君は政宗われは政一」と答えて、政宗公はいたく感心して「よし、そちに屋敷をとらす」とこの後につくられたこの一角にお屋敷をもらったらしいということで、勾当台公園の高いほうの台のところに屋敷をもらったので勾当台という名前がついて今に至っているということです。
それから、養賢堂の話も、これにはもちろん養賢堂は出ておりませんが、養賢堂は江戸も中期以降、後期に当たる宝暦年間、1760年代に養賢堂がここに移ってきて、その前は別なところにありました。そして、大きな講堂が建築されたのは1817年の文化年間だそうですから、先ほど二郷さんに見せていただいた絵図や何かは、やはり江戸の後期の養賢堂ができてから表小路が意識されて道が広がっていくという歴史です。
だから、江戸時代も270年間いろいろな変遷がありますので、その辺はきちんと時間軸の中で整理して、使えるもの、拾えるものを拾って、これからのここの地区の開発なり建築なりに生かせるところを生かしていったらいいのかなと考えております。
大分長々しゃべりました。また後段、別なお話をいたします。

田澤：
せんだい3.11メモリアル交流館の田澤と申します。私の所属は「公益財団法人仙台市市民文化事業団」で、本日の会場であるせんだいメディアテークについても私どもの文化事業団で管理運営をさせていただいております。今、仙台市内に９カ所管理運営を任せていただいている施設がございまして、せんだい3.11メモリアル交流館についても、仙台市から管理運営を受託しています。
せんだい3.11メモリアル交流館は、地下鉄東西線の東の終点の荒井駅の中にございます。間もなく、来月、2018年12月で開館して

Table F
【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

うか」ということを思うのですが、残念ながら今の瞬間は、仙台らしさについてピンとくるものがないんですね。私は東北大学の建築学科の出身であって、先輩も後輩も仙台市役所や宮城県庁に就職して活躍された方がたくさんおられますし、学生時代に都市計画に関わる調査に駆り出されたこともあったりするわけですので、私自身の責任がないわけではなくて、私も責任の一端を担っていると思うのですが、やはり仙台が持っていた仙台らしさというものを、この間、どんどんどんどん自ら放逐してしまったなという印象を持ちます。
かつて私が子どもの時代から大学生になるまでの間というのは、仙台といえば杜の都というように言われておりました。じゃあ「そのときイメージしていた杜の都って一体何だろう」ということなのですが、（その時代にも既に相当程度失われていたわけですが）思い返してみると大年寺山が一番南の外れにあって、そこから八木山、青葉山、北山というふうに続く丘陵がスカイラインとしてどこからでも見えるんですね。その懐に広瀬川の河岸段丘がずっと発展しており、そこに旧市街地が広がっているのですが、特に広瀬川から今の駅前に至るあたりというのは大身の武家屋敷が結構あって、その中に屋敷林がずっと残っていました。広瀬川の川岸も崖になっていて武家屋敷があるのですが、そこから庭木がオーバーハングして広瀬川の上に掛かり、それに秋になって紅葉するという、そういうのが要するに杜の都の一番大きな要素を形つくっていたと思うのですが、ところが戦後、復興区画整理から1960年代以降に近代都市を目指すという動きの中で、それが失われてきてしまったと思わざるを得ないのです。青葉通とか定禅寺通のケヤキ並木というのは、よく杜の都のシンボルとして紹介されることがあるのですが、もともとの杜の都と言われていたものの基盤はそういうものではなかったと思っています。ただ、いずれにしても決定要素というのは様々なのですが、大事なことは、「そこに住んでいる人々がそれを自覚して、まちづくりのあらゆる場面に貫いているかどうか」ということが決定要素だと私は思っています。
その中で、私としてはフライブルクを評価していますが、今一言で、フライブルクはどういうまちかと言うと、中世のまちを骨格とする都市の基盤の上に、その弱点をカバーする形で公共交通システムを発展させてきたまちです。それがヨーロッパの環境首都と言われるフライブルクの最も重要な基礎になっていて、いまだにまちづくりのあらゆる場面を貫くコンセプトとしてそれが生きています。
それがどういうプロセスの中ででき上がってきたのかというと、実は戦争が終わったとき、（横浜でもそうだったという話がありましたが）既成市街地の中心部は、80％が瓦礫となるほどの非常に大きな被害を受けます。その後「まちをどう復興していくのか」についてまちを二分する大論争をやり、例えばドイツで今フランクフルトがそうであるように、近代的なまちとして生まれ変わっていくのか、そうではなくて、依然として中世の骨格をもう一度再建して、その上にまた新しい歩みを始めていくのかということで非常に大きな議論をやった上に、結局その中世の都市の骨格を

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及
効果・相乗効果を考える

佐藤：
ゆっくり過ごすという価値観は定禅寺通にはあると思う。例えば歴史的な建物など、このエリアに気になる建物は存在するか。

小林：
春日町エリアに、歴史的な建物は少ない。建物自体ではなく店舗の設えに魅力があると感じる。

田邊：
春日町には、ちょっと古い昭和の香りがする建物がある。これからはリノベーションの時代である。建替えには多額の資金が必要。古いビルをリノベーションして再生していけるかが問われる。このような建物を活用しようとすると、点在する小さなスポットに人がどんどん集まって、回遊するという観点が発生する。
歴史的建造物は定禅寺通界隈には少ない。回遊性を考えた時、非日常的なイベントに参加した観光客が西公園まで足を運ぶことは考えにくい。定禅寺通は杜の都のシンボルストリートなので、回遊しながら、路地を楽しんだり、足を延ばして西公園に行ったり、手つかずの自然が残る広瀬川、青葉山、仙台城、藩政時代を彷彿とさせる雰囲気がまだ残っている。

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

丸３年を迎えます。但し、開館して３年を迎えるのですが、こちらの施設に足を運んだことがないという方もいらっしゃると思いますので、私の自己紹介も兼ねまして、メモリアル交流館について御紹介させていただきたいと思ってスライドを準備しました。
東日本大震災を受けて設立した施設ですけれども、果たすべき役割ということが３つございます。１つ目が「震災の被害や復興の状況を知り、その経験や教訓を学ぶ場」です。これについては、真っ当な震災メモリアル施設の役割だと思うのですけれども、私が個人的にやはりオリジナルというか、変わっているなと思うのはこの後に続く２番目と３番目です。
２つ目が、「東部沿岸地域の記憶を残し、継続的に地域再生の力を形成していく場」です。ここで言っている東部沿岸地域というのは、皆さん御存じのとおり仙台市内でも東日本大震災によって津波の被害が甚大だった地域を指しています。そこの地域の記憶を残して、さらにその先です。過去から未来へという部分ではつながると思うのですけれども、「継続的に地域再生の力を形成していく」。ただ見ているだけではなくて、その力を育む場としての役割を担うべきであると掲げています。
３つ目の役割は「東部沿岸地域への案内所発着点」です。震災前の暮らし、風景を知らないと、今だと震災から８年目ですけれども、８年目の状況というのはやはりよくわからないのです。私は震災前、津波が襲った地域に実は一度も足を運んだことがなかったので、そういった人間がいきなりそういう地域に行ってしまうと初めからこういう淋しい地域だったのじゃないかとちょっと勘違いしてしまいます。しかし、ここにはちゃんと暮らしがあって、街並みがあって、人々の歴史、風土というものがしっかりあったということをわかった上で目の前の景色と対峙しないと、やはりいろいろ抜け落ちてしまいます。
さらに、地域の情報、魅力の発信ということで、ここはいわゆる農村エリアだったわけですけれども、こういった仙台の中心部から離れているからこそ独特の地域文化が残っていた地域だったのじゃないかなと思っています。その魅力というのが、こういう言い方は適切ではないかもしれないですけれども、震災を機に見直されるきっかけになったのではないかと思っています。
そういったところも含めてメモリアル交流館が果たすべき役割と認識して発信していこうという施設す。
その、「真っ当なメモリアル施設」の役割から少し離れているという点でご紹介させていただきたいのが、現在開催中の企画展「竹で遊ぶ」です。これは仙台東部沿岸地域、津波で大きな被害を負った地域で見られる景観変化の１つに着目した展示になります。と

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

もう一度復活して、それの上にまちを再建していくということを決めるんですね。そこが出発点になるわけです。その結果、必然的に、都心部は、非常に狭い道路が密集している状態の中で都心を再建していきますから、大量交通をさばくために必要な空間を確保できないということになるのは目に見えていました。結果として、1970年代に至るまでの間、もともとあそこは市電が発達したまちだったのですが、市電をどんどん廃止していって、車交通の利便性を高めるということをやっていくのですが、いよいよにっちもさっちもいかない状況になる。

1973年だったと思いますが、都心から車両を締め出すということを決めるんです。これはトランジットモールと書いてありますが、最初からトランジットモールだったわけではなくて、都心から車両を締め出すことをまず決めました。とすると同時に、都心への交通アクセスをどう保障するのかが必要になってくるので、これまでの歩みを全く逆転させて、廃止していったトラムを復活させ、トラムのネットワークを整備し直します。中心部については、「車は入れず、トラムだけが進入できる場所」にしていきます。それは徹底していて、自転車もだめです。それから商店に物を運ぶトラックも、朝9時まではいいのですが、それ以降はだめです。そういうものは一切入れないという状況をつくるのですが、じゃあそこにどうやって人々をアクセスさせるか、です。トラムを復活するだけでなく、レギオカルテ（「地域環境定期券」と日本語に訳している人が多いですが）を1991年に導入する。東西70キロ、南北60キロの範囲を、1枚の定期券でほとんど全ての公共交通機関に乗れるという状況になります。17の旅客運送会社の115路線をカバーしています。無記名で持参人通用ですので、家族の中で共用できます。休日には1枚で大人2人、子供4人が利用できて、だんだん値上がりしてきましたが、1カ月の料金は今60ユーロですので8000円弱ぐらいですかね。もともとはもっと安かったそうです。それで東西70キロ南北60キロの路線が全て乗れるというシステムをつくり上げました。

同時に、その中でそれぞれの交通機関がシームレスに連携する、つまりストレスなく乗り継げる仕組みをつくります。象徴的な場所として、フライブルクの中央駅の写真が上がっていますが、陸橋になっているところに市電のＬＲＴが入ってきます。そこで止まると、そこからエスカレーターで、そのまま鉄道のホームに下りていける。国鉄にも乗れる、近郊鉄道にも乗れます。それから円形のものは自転車の駐輪場です。そこに置けるということになっています。

一番衝撃を受けたのが市電からバスへの乗り換えでした。これはホームの左右にバスとトラムが来ていますけれども、場所によっては軌道敷にバスが来ます。だからトラムから下りてバス停を探すという必要がない。下りたらそこにバスが来るので、そこで待っていてすぐ乗り換えればいいので、乗り換えに対するストレスが全然ありません。

この結果、中心部は自動車に押されて逼塞していたのですが、逆に、人々がたくさん集まって、しかも大手を振って安全に歩ける状態になっていくわけです。なおかつ、それは都心部はそうなのですが、

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及
効果・相乗効果を考える

回遊するという考え方を大事にしたい。現在、西公園の歴史の話を皆さんに知ってもらう活動をしている。

日常に回遊性の高い景観や風景を落とし込むことが重要。伊達家の武家屋敷、F.L.ライトの一番弟子の遠藤新の常盤木学園の白亜の校舎。文明開化に貢献した料亭挹翠館やアインシュタインも訪れた公会堂、宮沢賢治も参加した大博覧会など。面白い内容が、回遊した時にイメージできたらとても楽しいと思う。ガイド用のサイト、案内板、実際のガイドなどの仕組みが必要。

佐藤：

一番町四丁目に回遊や歴史的なポイントは存在するか。

工藤：

食の名物はあるが、歴史的な建造物は思い付かない。駅前との差別化をどう考えるかは議論に上がる。現在6つの商店街が存在するが、らしさは徐々に消えつつある。四丁目商店街だけは全蓋型ではなく、緑と光があふれる商店街である。天気に左右される商店街で、今後の展開が議論になっている。市役所の建替えに合わせ、同じスピード感で動こうという機運が高まってきている。

この界隈のロケーションは最高だと思う。観光資源は結構あるが、

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

いうのも、皆さん言葉では聞いたことあると思うのですが、居久根（いぐね）という呼び方で仙台平野だと屋敷林、防風・防雪・防砂の役割を果たした屋敷林のことを居久根と、呼んでいましたけれども、そういった居久根として植えられていた高い木、杉だったり松、ケヤキというのが東日本大震災の津波で軒並みだめになってしまって、公費伐採によって約8,000本切られたという記録が残っています。

そういった背の高い木を切って見えてきたのが実は竹やぶなんです。竹も震災後にだめになったというお話聞くのですけれども、半年、1年後たつとまたぼうぼう生えてきて、今ではもう手に負えなくなってきているという話がもう本当にいろいろなところで聞かれるようになりました。

そういった竹のこれからの活用法だけではなくて、なぜ竹を植えていたのかという、やはりかつての暮らしがあるわけです。今これ展示させていただいていますけれども、上に載っている鳥かごは昔の少年たち、今70代、80代の方たちがかつて竹やぶ、それも自分のうちの竹やぶだったり勝手に人の家の竹やぶに入っていたりするのですけれども、そういった竹やぶを勝手に切ってつくった鳥かごというものを御高齢の方々に教わりながら展示させていただいている一部になっています。

そういったかつて竹を存分に使っていた世代にいろいろ教えていただきながら、では今どういう活用方法ができるのかなというのを考えるきっかけになるといいなということで、今展示させていただいております。

展示台にしているのは若林区の三本塚というところでとれた孟宗竹から切り出した竹ひご約2,100本使って展示台を組み立てています。こういった竹ひごをつくるということについても、もう私のような世代はできないわけです。でも、80代の方はもうさくさくと竹ひごをつくれたりして、やはりこの失われた手わざだったり景観を見るという、もう目がなくなっていたりというところで、やはり過去に学ぶものってすごくたくさんあるなというのは今回の展示を通してすごく考えさせられたところです。

こういった形で、やはりその地域に近づいていくためには地域の文脈を知らないといけない。地域の文脈を読み解くためには、この仙台東部沿岸地域というところでいくと、やはりまちを歩くことも今難しくなっているわけですし、神社仏閣も流されたままという中で、何を頼りにしたらいいのかとなると、1つはやはり地域住民の方々の存在です。今回の竹で遊ぶという展示に関しても、地域住民の方々の御協力なくしては成立しなかった展示だったと考えています。

Table D
【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

日常的な生活の範囲の中で常に徒歩圏内で日常の生活が営まれるように商店の配置についても考えていきますので、全体としてはトラフィックの必要性ということがずっと縮小しつつ、都心に全ての公共交通機関でアクセスできる。なので要するに「中世のまちと今後ずっと付き合って生きていくんだ」ということを柱に据えて、「それを維持するために何が必要か」が全てのまちづくりの基本に置かれているということです。やはりそういうものがフライブルクらしさを形づくっているのではないかと私は思っています。
やはりドイツの人たちって、ある意味ですごいと思うんです。市庁舎の話ということで、フライブルクの建設中の新市庁舎の話を持って来ました。
本当は忘れてしまいたい、目をつぶりたい負の歴史というものを決して忘れないで、正面から向き合い続けるということについて、やはり徹底しているなと思います。これはフライブルクではなくてベルリンなのですが、左側の写真が、虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑と言われるもので、石柱がうわっと建っているものがベルリンの中心部につくられています。それから右側の上のほうはゲシュタポの本部跡地なのですが、そこにナチスが加害を繰り返した歴史がずっと展示されて、それを見れるようになっている。一番衝撃的なのは、「つまずきの石」と言うのですが、歩道のところだったり場所によっては建物の壁だったりするのですが、真鍮のプレートが埋め込んであって、ナチスの犠牲になった人たちのこと、「この場所で誰々さんが拉致されてどこどこに連れて行かれて、何年後にどこどこの場所で亡くなった」というような記録が刻まれたプレートが、ベルリンだけではなくドイツのまちの至るところに埋められています。だから、そういう負の歴史であっても、それをまちの中に刻み込んで「忘れないよ」という事を表明する覚悟ですね。この覚悟を私たちは本当に持っているのだろうかと。そういう覚悟なしに「その都市らしさ」なんていうものが築けるのだろうかと思っています。終わります。

手島：
ありがとうございます。最後に重要な指摘をいただいたと思います。では姥浦先生お願いします。

姥浦：
東北大学の姥浦と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
仙台市役所本庁舎の基本構想を考える委員会に入れさせていただいておりまして、そこでも議論になったのが、「仙台らしさをどう構想の中に入れていくのか」という話でございまして、最終的には「なかなか難しい」ということになりました。何が難しいかというと、やっぱり「その都市らしさ」は絶対あるんです。（都市らしさはどこだという逆説的な質問も書いてございましたけれども）「その都市らしさ」は100％あるのですが、「じゃあ、それをどうハードにつなげていくのか」について、明確にどこまで書くのかという部分において、なかなか難しいなと、特にこの市庁舎については感じておりました。

Table E
【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

それを生かし切れてないのが、商店街やエリアだと思う。せっかく県庁、市役所があるのに、使っているのは市民広場、勾当台公園のみ。ジャズフェスも市役所は閉庁しているので会場になっていない。庁舎も会場として一緒に盛り上がることを考えなければならない。

佐藤：
伊藤さん、珈巣多夢はいつ開店したのか。定禅寺通界隈で、回遊するポイントは存在するか。

伊藤：
珈琲屋を始めて４３年目に入った。今の場所に移店したのは昭和５７年である。当時、店舗の２階から光のページェントの豆電球に触ることができた。ケヤキの木は年間３０センチから５０センチ伸びると言われている。光のページェントは３３年目だから、１５、６メートル伸びた。現在はメディアテークと同じ位の高さになっている。
だから、高くなっている分、根も同じぐらい張っているはずだ。定禅寺と共にケヤキをどう守っていくのかが、心配事の一つだ。
定禅寺通りの車線数の減少、歩行者天国化またはケヤキの保存か

Table F
【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

メモリアル交流館では、先ほど冒頭で御紹介したようなこの津波の被害を大きく受けた仙台東部沿岸地域の記憶、経験も後世に伝えていくという役割を負っていますので、一見関係ないこと、例えば、ずんだ餅をつくったりだとか、食べられる生き物を探しにいこうということでイナゴとかドジョウを捕まえたり、あとは収穫した稲わらを干すときの作業をちょっと教えていただいたりというようなことで、こういったことは現地だからできると思うのです。こういった現地で開催するからこそメモリアル交流館という施設で完結せずに、しっかり現場である東日本大震災で被害を受けた現場への関心を持っていくということを強く意識してプログラムを組み立てています。
今回、私がこちらのテーブルに呼ばれたのは過去の伝統、経験を共有するという意味で、その過去の１つが東日本大震災であって、それを今どう実践しているのかという部分と、この市役所建て替えに絡めて、どう共有して伝えていくのかというところだとは思うのですけれど、今御紹介させていただいたようにメモリアル交流館という現場により近いからこそできることってたくさんあるという実感を私自身は非常に強く持っています。
だからこそ、私は中心部ならではの被害状況や、街場の大変さがもちろんあったと思います。これは東北学院大学の植田今日子先生が『街からの伝言板』（2017年、ハーベスト社）という書籍にまとめられているのでそちらに詳しいのですが、そのとき商店街がどう動いたのかとか、仙台市役所がどう動いたのかという経験はすごく大事なことだと思いますし、例えば、より俯瞰的な視点で震災を伝えていくということも必要なのかなと思うと、今、私が御紹介したようなメモリアル交流館とはまた違う役割、立場での伝え方ってあるのだろうなとは思っています。
ただ、一方で、この仙台市における震災メモリアル施設の役割というのは、中心部と沿岸部の２拠点化で今、構想が進んでいて、中心部はどこにどういう形でつくるのかというのはまさに議論の最中なので、そういったものができる中で、では市役所で発信することというのは何なのかなということも少し考えていかないといけないのかなというのは個人的な意見として持っていました。

佐藤：
東北大学災害科学国際研究所の佐藤です。
私は今までお話のあったような歴史のお話は非常に大変好きでありまして、内山さんがやっておられるフットパスの会の今年も鹿除土手での巡見にも参加させていただいたり、木村先生のお話も何回もお話を伺ったりして、歴史は大変興味深いものです。今日

Table D
【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

私は、仙台に来て10年ちょっとになる人間でございます。出身は富山という地方都市で、東京に10年ほど住んでおりまして、その後、大阪と豊橋に行きまして、そのあと、こちらに来た人間なのですが、仙台には、いろいろな観点でいいところや、もしくは「仙台らしさ」というものがあります。例えば一番良いところは「バランスのよさ」だと思っていまして、「何でもあるし、何でも手に入る」というところにあると思います。東京はもっといろいろあるんですが、それを手に入れるためには、すごい時間とコストと体力が掛かるんですが、仙台はそんなことしなくてもすぐに全部手に入るわけです。他には、遠州先生は先ほど「これじゃだめだ」と仰いましたけれども、定禅寺通なんていうのもなかなかない通りだと私は思っていまして。

遠州：
定禅寺通を否定している訳ではないです。

姥浦：
あ。否定していない、そうですか。失礼しました。
はい。あれはやっぱり素晴らしい、「あれ」というか、すぐ外にありますが、本当に素晴らしい仙台が誇るべき通りだなと思います。なかなかあそこまでのケヤキ並木は、日本全国を見ても、世界を見てもなかなかないぐらいだと思っていまして、「やっぱりああいうのは素晴らしいな」と思います。それからハード面だけじゃなくて、例えばソフトで言いますと、非常にイベントが多いですよね。何かあると、定禅寺通を止めてすずめ踊りだとか何とかパレードだとか、（昨日もマラソンをやっていましたけれども）マラソンをやったり、いろいろなイベントをやっています。特に市民が参加するイベントといいますか、市民の人と近いイベントが多いですね。ジャズフェスなんかもそうですが、単純にお客さんとして行くんじゃなくて、市民の人も参加できるようなイベントが多いと思います。
「仙台らしさ」については、いろいろな要素があると思うんですけれども、結論としては、遠州先生がここにまさにお書きになっている「パワポの２枚目の一番下のところ」が私は一番大切だと思っています。「住む人がそれを自覚してまちづくりのあらゆる場面に貫くかどうか」ということですね。これが本当に一番重要だと思っていまして、ですので、「このが考え方をどう共有していくのか」「この価値観をどういうふうに共有してゆくのか」が重要だと思っています。まずは、（仙台らしさ）という見えないものを見えるようにした上で、それをどう共有していくのかというところ、このプロセスが非常に重要なんじゃないかと思っています。
そういう意味では、市役所の建替え基本構想検討委員会のときに、「（仙台らしさとは）こうだ」と言うこともできたんですけれども、果たしてそこまでの熟度が高まっているかなというと、なかなかそこまで言い切るのは難しいということもありました。とはいうものの、やっぱり「ここだけは『仙台らしい』だろう」というのが実は定禅寺通でして、定禅寺通というか「杜の都」ですよね。杜の都の「核」にはなれないですけれども、でもこれを積み重ね

Table E
【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

伐採して植え替えることも含めて討論が必要。メディアテーク、県民会館及び市民会館の利用者はイベントが終わればぞろぞろと足早に帰途に就く。気持ちにゆとりをもち短い時間でもこの良い空間に滞在したいと思えるような空間づくりをしてほしい。

佐藤：
元市職員の小島さん。歴史的なストーリーをご存じないか。

小島：
１つは歴史的に保存することと同時に、新たに創造することも大事。市役所を起点に考えた場合、定禅寺通だけではなく、北も西も波及効果はあると思う。空間構成も多様な視点が必要。職員の立場からみると、皆さん方は市民に該当する。市民の市役所との関係性は区役所である。市役所はヘッドクォーターなので、直接市民との仕事上の付き合いは余りない。区役所と市民の付き合いは、申請手続、町内会、イベントの補助金申請及び要望活動など、日常生活の延長として区役所を見ているのではない。対等ではないと思う。
そう考えると、市民との関係性、現在の区役所と市民の関係性ではなく、対等な市役所と市民の関係性を構築すべきだ。田邊さん

Table F
【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

の私の立場は恐らく災害とか防災とかの観点からの期待で声をかけていただいていると思います。災害科学国際研究所にも所属しておりますので、そういった側面からお話をさせていただきます。基本構想の段階の基本コンセプトの四本柱の１つに災害対応・危機管理というものを掲げていただいております。やはり東日本大震災の経験というものが大きいかと思っております。しかし、先ほど二郷さんからも江戸時代、藩政時代の繰り返し経験している地震の話もありましたように、マグニチュード７クラスの宮城県沖地震でこれまでも、これからも恐らく30年か40年ぐらいの比較的短いインターバルで続きます。ですから、仙台市の行政機能を地震災害時も維持するということでは、これまでも繰り返し起きている宮城県沖地震などで試されてきましたし、東日本大震災でもそうだったと思います。これからも試され続ける災害時の行政機能の維持をどうやって仙台市役所が実現していくのかというのはずっと試され続けるし、それが比較的短いインターバルで検証されるので、ほかの都市から仙台市はそういう意味で注目されているところではないかなと思っています。
先ほど針生さんからのお話の中では免震でのレトロフィットというお話もありました。免震でも制震でも、何らか建物の機能維持性能を高める地震応答を低減する技術を新しい庁舎では、黙っていても採用されるのではないかと思います。繰り返し経験してきた東日本大震災を含む宮城県沖地震のこれまでの経験というものを新市庁舎建物の防災性ですとか機能維持というところの高度化というところに生かしていく重要性を歴史と災害と防災というところの接点でお話をさせていただきました。

内山：
次に伊藤さんのほうからお願いしたいと思います。

伊藤：
私は仙台で足かけ37年になりますでしょうか、雑誌を発行しております。2018年10月株式会社仙台経済界の会長になりまして、後進に道を譲りました。フリーでお話しできます。
会社設立当初、どうしたら食べていけるだろうということで悩みました。
それで、仙台経済は、宮城等はまず第１次産業、第２次産業、第３次産業、その中で第一に農業のほうをやりました。全く売れませんでした。第２次産業をやりました。これもだめでした。第３次産業、何とか反応ありました。第３次産業というのは卸、小売、今盛んな観光もです。それをベースに私どもは今日に至っており

Table D
【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

ていくことによって新しい杜の都がつくられると思っていて、例えば仙台の駅前には「杜の都の玄関口」みたいなものがあって然るべきでしょうし、こっち（定禅寺通界隈）にはもうちょっと「奥座敷のような杜の都」があってしかるべきでしょうし、「杜の都の玄関口と奥座敷のような杜の都」をつなげるような市役所って一体どういうものだろう」という、その「問い掛け」だけはあるのかなという気がしています。それで、特に市役所の基本計画検討委員会のときには「定禅寺通と一体となったまちづくり」と、もしくは「定禅寺通と一体となった市役所をどう計画していくのか」というところが非常に大切だと申し上げておりましたので、実はあっちのテーブルに着くのかなと思っていたら、「こっちだよ」って言われて、「あらっ」と思い、この「論点整理メモ（事前にテーブル企画者からお送りした資料）」も昨日拝見して「おおっ」と思っていたところでございます。ですので仙台の、他にもいろいろと「これが個性だ、これがいいところだ」というのを挙げれば、キリがなく出てくると思っていまして、そういうものを「どう一つ一つ拾い上げていきながら共有していくのか」ということと、それと、市役所をつくる場面だけではなくて、いろいろな場面で、駅前をつくる場面でもそうでしょうし、いま駅前はひどいことになっていますので、駅前をこれから多分つくっていかないといけないと思うんですが（新幹線を下りられてびっくり、つぶれた百貨店とつぶしているビルと、「何じゃこの駅前は！」みたいな状態になっていますけれども）、仙台駅前もこれから再構成していく中で、「杜の都」だとかいろいろなキーワードが多分入ってこないといけないですね。そういうものをいろいろなことに散りばめていった上で最終的な「都市の個性」というものが出来上がると思っていまして、ですから「都市の個性」というものは、「現在あるもの」もそうですし、まさに桂さんが仰ったように、「都市の個性をどうつくっていくのか、デザインしていくのか」という側面でも重要だと思われます。ですので、「都市の個性をいろいろな場面で出していく」ことが非常に重要なんじゃないかという気がいたしております。

手島：
ありがとうございました。有識者のお二人からお話をいただきましたけれども、「住む人が自覚して、それにちゃんと取り組むかどうか」が一番重要なんじゃないかというお話をいただきました。
レジュメには書かせていただきましたけれども、実はこのシンポジウムの裏のテーマは、「地域の専門家が業務受託以外でどう専門的事項に取り組んでいくか」だと思っています。僕らの世界では今まで、職業倫理上と言って良いのか、他人が受注した仕事に文句つけるというのはなかなかできないんですね。やっぱりケチをつけるような話になってしまうことを嫌って、誰もがみんな口をつぐんでしまう。実際、「この建築は良くない」ってみんなわかっていても、それがそのまま進んでしまう大きな原因の一つになっています。そこのところを何とかしよう。専門家が、業務受託とはもう少し違う立場で、社会参加と言いますか、専門知識を持った地域住民の立場として、きちんとコメントしていくことがすご

Table E
【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

が先ほど一生懸命市民活動をしても対処し切れないものがあると言った。実は、行政においても対処し切れない問題が山積している。例えば、従来の基盤整備におけるまちづくりは、国から予算を執行してもらい、定禅寺通をつくるなど一生懸命やってきた。そこに市民との関係性は余り築かなかった。
ところが、ケヤキの社会問題によって青葉通りも再整備したが、市民は歩いていない。なぜか。これ市役所が悪いわけではない。どの様に使うかを議論しなかったことが悪い。行政の限界。何でもつくればにぎわいが創出されるという考え方は、右肩上がりの時代だったから成立した。現在は市民と行政が対等な立場で取り組まないと成立しない。
定禅寺通と市民広場は、市民活動のメッカである。駅前は玄関口であるが市民の潤いや、満足感は定禅寺通や青葉通であるべき。あるいは一番町や西公園の界隈、そういう界隈性をどの様に創出できるか求められている。そこで公民連携が出てくる。そういう視点で市役所を見ると、対等な立場。グランドレベル。市民広場はまさしくその通り。市役所の建物の立体構成に関する問題はあるが、１・２階、あるいは３階は、市民活動が自由にできる、あるいはのんびりとくつろげる。そういう視点で市役所を見る必要がある。それがある面では日常生活も風景の延長としてのまちづ

Table F
【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

ます。
それはまちづくりと非常に関係しております。市役所の本庁舎といいますか、先ほど二郷先生からお話ありましたけれど、大きく関係しています。それでは、高度成長期の頃のお話をいたします。仙台駅があって、仙台駅から中央通、一番町通、そしてここ市役所ですね。このＴ字路でうまくつながっています。10年程前までは毎年、仙台の中心部の方々は夏場頃になりますと、新聞報道が「今年はお米がとれます、豊作ですね」と。この一番町の方々は「ああ、今年の年末年始と初売りはうまくいきそうだし、売り出しもうまくいきそうだ」と、「年が明けると農機具も売れそうだ」ということで皆さん喜んでいました。そういう商店街のまちづくりに非常に関係していたということです。
さて、この市役所の本庁舎の建物がある所は、やはりまつりごと、初売りにしても、あるいは七夕にしても、とにかく市役所です。ということで、大きな役目がある市役所の本庁舎を建て替えるということは市民の大事業です。昔、西公園のほうへ移転するようなお話がありました。市役所をあちらこちらと移転するのはへそを移転するようなもので、人間の体のへそがあっちへ行ったりこっちへ行ったりするのはおかしいのではないかと思います。
実は今回も市役所の本庁舎を建て替えるに当たって、建て替えるかそのままでいくか、それで検討すべきだというような本来文言を入れてほしかった。もう建て替えますという文言なのです。その理由としては、一番は安心・安全な建物。建物は劣化しているということで、やむを得ないですと。
市役所として、今、経済団体、建物所有者など市民の方々には建て替えないでリノベーションをやりなさいと勧めているのです。しかし、本庁舎は劣化して建て替える、市民にはリノベーションをと。さて、400億もかけてやるのはおかしい。もう少し検討すべきではないですかと。先ほど、どなたかおっしゃっていました。建て替える案と耐震補強し、そのまま生かしたらどうでしょう。
もう１つ、後でまたお話ししますけれども、まちづくりの話です。都市を拡大してきました。その関係で中心部が衰退し、周辺に住宅地もでき、たくさんのお店もできてしまいました。それで中心部の通行量が減りましたという議論になるわけです。御存じのように郊外もたくさん住宅地ができ高齢化社会になり、どうしようもないということも現実です。
私はここから北のほうの45キロほどの大崎市の出身です。東京で出版活動を学び仙台に戻ってきました。仙台らしさ、仙台らしさって、先ほどもどなたかお話しする方がいましたが、仙台らしさというのは、若干自虐的で申しわけないのですが、曖昧で何もしな

Table D

【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

く重要なんだと思っています。
そういった意味で、次に４人の方にお話しいただきますけれども、市民の立場からと専門家の立場からということで、まず紅邑さんからお話をいただきたいと思います。

紅邑：
紅邑です。私は市民の側ということで、長く市民活動団体の活動支援に関わらせていただいてきました。そういった立場で今日はここにいるのかと思います。今は「ＳＤＧｓとうほく」という団体を立ち上げていて、（いわゆる市民の人たちというのは一体誰なんだというところもあるのですが）多分企業も、行政の人も、市民活動や大学の人も、そういう人たちが専門分野を超えてまちづくりとかそういったことにどんどん関わっていくことを私は今、ＳＤＧｓということを活用してつないでいきたいと思っています。
今回ここのテーマが「他都市との比較の視点から」ということで、横浜、札幌の話を伺い、それから今、フライブルクの話を伺いましたが、私も数少ない海外に行った中で、サンフランシスコに行ったときにサンフランシスコの市庁舎に行って、そこでやっぱりすごく驚いたことがありました。そこはまず市役所ツアーというのがあって、そこで結婚式を挙げたりみたいなこともできたりとか、本当にまちの中の中心部という形で、単に役所の事務仕事をする場所ではなくて、いわゆるシティホールが「本当に市民の人たちも使える場所」になっていたりしました。それから今日は、別なところでも議会の話がありましたけれども、向こうは議会が夜開催されていたりするので、そういう意味では市民の人たちも議会に立ち会って、傍聴することも普通にできていたりします。あと、夜中にテレビを見ていたら、（英語はよくわかりませんでしたけれども）市議会の様子がケーブルテレビか何かでずっと上映されていて、ある意味市民がちゃんと参加する機会ができているということかなと思い、非常におもしろいなと思いながら帰ってきたことがあります。
一方で、今、仙台市の市役所はどうなんだろうって思います。これは別に仙台市に限った話ではないと思うんですけれども、よく「市民の人たちに開かれた」と言いますけれども、「開かれた市役所って何なんだろうか」と考えると、「いろいろな多様な方たちが今日みたいなこういった話をするというところから生まれていくんじゃないか」と思いました。先ほど桂さんから横浜の話を聞くと、「横浜はもうほぼほぼでき上がってきているけれども、まだそこに市民が参加する機会をつくっていく」ということでしたし、横浜と違って札幌市はこれから「そういうことをしてゆく」ということですけれども、仙台市の場合は担当がハードの方からスタートしていますけれども、札幌市さんはどうもソフトの方というか、まちづくりの方から入っていくというところはそれぞれ違うなというふうに思いました。
そういった中で、もうすこしシンボリックな市役所にしてほしいなというところもあって、今日ちょっと別なところで「インスタ映えする市役所」という話があったのですが、多分そういうことも大事なんじゃないかなと思うんですね。「うちの市役所、カッコ

Table E

【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

くりにつながっていくのではないか。
まちを一緒に育む、そういう視点で市役所を見ていく。市役所と市民広場と定禅寺通は、連続性があると見ていくべき。だから、４階以上は執務空間で、グランドレベルが市民としてはしっかりと見られる。

佐藤：
界隈や回遊性の流れから、国分町、市役所エリアも含めて歴史を巡る、ゆったり過ごせるなど機能面につながってきた。それでは、回遊する、グランドレベルにどういった機能があったらいいのかについて増田先生の考えを聞かせてほしい。

増田：
公共施設は、これまで機能別に建設してきた。定禅寺通の西から、市民会館、メディアテーク、県民会館、市役所となる。このエリア全体をどの様に整理することができるか、大きなテーマだ。市役所のグランドレベルだけで考えれば、１８時以降もグランドフロアが突き抜けられる計画にすることが重要。あっという間に設計・建設時期になるので、市民の広場や市政報告センター、姉妹都市のギャラリーなども含め、今からトライアルしていかないと

Table F

【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

い個性を出さない自己主張はしないというのが仙台らしさと思います。
杜の都と言いますが、杜の都ではないです。緑が少なく何にもないのです。よその都市に行ってもたくさん緑が仙台よりもあります。曖昧なのです。役所が先陣を切って緑を切っています。もうどんどんです。よその国に行きましたら、緑を切るのは規制がかかっています。仙台は規制がかかっていない。どんどん緑を切っていきます。伐採できます。こんなこと言うとまた市役所さんに出入りできなくなって、怒られますけれども。
つまり非常に曖昧らしさが仙台らしさです。個性を出さないということです。私ども食べていくために、私も社員がいますから、社員が食べるために実は曖昧な表現です、いつも。個性を出しません。それが仙台らしさです。札幌とか福岡に行きますと競争です。個性を出し成長している都市です。つまり個性を出さないのが仙台らしさです。と、私は受け取っています。ですから、今日お見えになっていらっしゃる方々は個性を出さないはずです。多分。それが仙台らしさです。
まちづくり議論する公の団体、様々な経済団体があります。いろいろな議論がされますが、個性を出しません。いつも曖昧な表現です。先ほど伊達政宗公のお話がちょっと出ましたが、私は個性を出さない仙台らしさ、これが仙台らしさなのかなと思います。何もしないのが。
ということで、すみません、多少辛辣なお話になりましたが、次に少し具体的な話を……。

内山：
仙台らしさについてはもう少しこの後深めたいと思います。ありがとうございました。
では、次に大沼先生、お願いします。

大沼：
東北工業大学の大沼でございます。
幾つか自己紹介としてお話ししておいたほうがいいかなと思うのは、最近はちょっと活動が活発ではないですが、「まち遺産ネット仙台」という建物保存の活動をしていたことがございました。これは一応続いてはいますけれども。そんな折に一時期、市の景観の委員もやりました。そのときは、建物を全く残さない市の対応についてかなり私は暴言を吐きましたので、今、伊藤さんおっしゃったように「ちょっと個人的な考え方を申し述べるとやはり排除されてしまうということだったのかな」と、思っております。

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

いいよ」とか、「うちの市役所、なかなか楽しいよ」とか、市民の人たちにとってももっと自慢ができる市役所であることがすごく大事かなと思っています。でもそれは市役所の人に任せる話では全然なくて、やっぱり市民自らがそういったところにアクセスをしながら提案をして、逆に使い倒していくというふうなことも視点として必要かなと思います。
あと、もう一つは、歴史的なことで言うと、古い街並みもだんだん失われてしまいましたけれども、それこそ伊達政宗のところまでさかのぼって考えたり、東日本大震災を経験した宮城、福島、岩手という中で政令市として唯一そういったことを体験した自治体であるので、そういったこともちゃんと意識して市役所を考えることも大事かなと思っています。その辺が東北での役割や宮城県内での役割も含めて、市役所の役目が多様にある分、真面目にそれだけに対応するというのではなく、そこに楽しさだといったことも、デザイン的なものとソフト的なものの両方含まれてあるといいんじゃないかなと思っています。以上です。

手島：
ありがとうございました。じゃあ続きまして、佐藤さん、いいですか。お願いします。

佐藤：
佐藤と申します。まず簡単に自己紹介をしますと、私、今年で51になりますけれども、50年間ずっと宮城県に住んでいまして、その25年ぐらいまちづくりの仕事をさせてもらっています。そういう意味で、専門家という立場でしゃべるんでしょうけれども、どちらかというと、ずっと宮城県に住んでいる県民という立場で話をさせていただければなと思っています。
今日のテーマが、「他都市との比較の視点から仙台らしさを考える」ということですが、庁舎について「らしさ」を語るのは非常に難しいんじゃないか、そもそも話が矛盾しているんじゃないか、というところから話を切り出していこうと思います。県民として、または仙台市役所に関わりがあって来る立場として見たときに、そもそも庁舎に「らしさ」って必要なのかどうか、私は話のスタート地点に疑問を持っています。むしろ庁舎という建物そのものの形というより、そこのエリアであったり、そこにアプローチしていくまでの過程の中で「らしさ」を感じていくのではないかと思っています。
仕事柄、ほかの東北6県の市役所にも行くんですが、仙台市の庁舎というのは駅からアプローチすると、例えば「東二番丁通を上ってきて庁舎がある」または「一番町通を歩いてきて庁舎がある」「定禅寺通の公園のある中に庁舎が建っている」というように、皆さんはそんなアプローチで庁舎に来ると思っています。例えばほかの県の市役所に行くと、幹線道路沿いに突然庁舎がぽつんと建っていたり、一部官庁街みたいなものができているのですが、そこに何となくあるというような市役所もあります。そうすると、そこに仕事柄タクシーで行ったりバスで行ったりすると、全然庁舎らしさも感じなければ、そのまちらしさも感じません。タクシー

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

いけない。

佐藤：
後半は、回遊やまちを楽しむためにグランドレベルにどの様な機能が求められるのか、まちと市役所の機能が周辺エリアにしみ出してくることで、界隈性、あるいは波及効果につながるのかなどについて考えを聞かせてほしい。
＜休憩＞

佐藤：
現在の市役所には時間で通り抜けができないことや機能的にも不足している部分がある。建替えをきっかけに、グランドレベルをどの様に計画すれば、周辺のまちがより豊かに過ごせるのか、後半は回遊性と界隈性について、アイデアベースで構わないので考えを聞きたい。

小島：
実際は庁舎が完成すると視認性は悪化するが、グランドレベルに壁をつくらないことや市役所を市民の意見を踏まえて建設することで、心理的な圧迫感はなくなる。その様なプロセスを踏まない

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

いずれにしても残せないですね。建物を一切残せないということが仙台らしさになってしまうかもしれないということを背負って、「そのらしさの話を議論するつもりなのかどうなのか」と、いうことをまず問いたいです。どこまでをらしさと言っていくのかということです。
この団体については、農林中金は民間の所有でしたけれども、その後、仙台政府倉庫という米倉の保存活動を試みました。これは仙台という米どころの、みんなの共通の資産であると思いますけれども、これももちろん残せない。この保存活動のときは仙台市役所では「あなた来るの、30年遅い」と、言われました。私は当時37歳だったですけれども、どうすればいいんでしょうかという話です。
つまり若い人たちが新しい価値を認めようとしているときに、それまでのしがらみとか、いろいろなことで決まってきたことを覆せないというようなことがあります。最近は30代の方々の活躍がすごく目覚ましいと思っていて、悪い意味でのらしさも変革というか、改革できるのかもしれないという淡い期待を持っておりますし、どうありたいのかということも含めてらしさということに置きかえれば、少しは未来の話もできるのかなと思っています。
今は活動に加わっているのが、近代仙台研究会というかなりマニアックな会合です。よろしければ皆さんも、ぜひ加わっていただけるとうれしいです。変わった近代史の研究者が多くて、二宮金次郎の像だけを全部撮りためた人とか、いろんな方がいます。その方々が何を見ているかというと、やはり近年の断面であるとか、それから、まさに木村さんのお話にあったような痕跡の一部をきちんと取り上げて、それを比べることによって都市を縦横にいろいろ切り取っておられる方々ということで、それを見るのも非常に学べるなと思っております。
私自身はもともと針生さんのずっと下の後輩になる建築の設計を志したものですが、昨今はライフデザイン学部というところにおりますので、震災も経験しましたし、東北の自立的ななりわいの再構築みたいなことがやはり根幹にあってこそ、最終的には自分の本分である建築のほうにも帰って来るのかなと思って、そういったなりわいの再構築みたいな活動にも今は尽力しているつもりです。
今回、仙台市役所の話でしたので、先ほどもちょっと「らしさ」の悪い面はあるものの、例えば今日は、絵図の話がいろいろあったと思います。大変武家地が非常に広大に広がっている、城下町と言っても本当に侍屋敷だらけのまちだったということになると思いますし、それは今で言うと公務員みたいな方々ということに

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

の運転手さんに10分、15分連れて行かれて庁舎に入っていくというだけです。そうすると、何かそこの庁舎をシンボリックにつくり込んだものがあったとして、本当にそこに「らしさ」を感じ得ることができるかというと、僕は疑問を持っています。ある庁舎では中に（特産品である）杉材で空間をつくり込んで、そこの市らしさを演出しているところもあります。ほかの庁舎では大きなホールをつくって、市民と活動できそうな演出をしている庁舎があったり、いろいろ皆さん工夫をされていると思うのですが、たった一つの仕掛けで「らしさ」を語るというのは私は無理じゃないかと思っています。もし今回提案できるのであれば、先ほど姥浦先生がおっしゃっていたことであるとか、またテーブルAの中で小野田先生の話では「このメディアテークがつくられてこのような形を醸し出してきた、その歴史の中でまちは育ってきているんだ」というような話があったのですが、できれば庁舎に関しても使われていく中で「らしさ」が出来ていくような…、何というんでしょう、余剰性というか奥の深さというか、そういったものを残していただければ、結果、「らしさ」が醸し出されてゆくのではないかと思っています。
ですので、結論から言うと、「つくり込み過ぎないこと」が結果的に「らしさ」を演出していくのではないかと思っています。特に、先ほどもいろいろお話がありましたが、「最初から市民会議をやる」ようなところも仙台らしさだったんじゃないかと、結果として指摘をされてくるわけです。であれば、そういった余剰性を残すようなものを仙台らしさとして今後の100年先の市民に伝えていけば、もしかしたら200年、300年培っていく中で「仙台ってこういったまちだったね」というふうに繋がっていくんじゃないかと思っています。
特に「その都市らしさ」を誰が感じるかと考えたときに、市民が誇りを持って「らしさ」を言えなければ、多分それは外の人も感じられないものになってしまうのかなと思っています。それを生み出していくためにも、向こうのテーブルではシティホールという言葉を切り口に議論していましたが、とにかく、市民が使えるような場所にしてほしいと思います。そもそも本庁舎は余り市民が来る場ではないので、それをどうやって市民のものとしていくかというと、先ほどのサンフランシスコの事例のように、結婚式場にしたり、そういった形で市民が使いこなせるようなものにしていくと、もしかしたら「仙台らしさと」がそこに生まれていくんじゃないかなとも感じました。ほかのテーブルも回った感想も含めて、そんなふうに「その都市らしさ」を感じております。以上です。

手島：
重要なご指摘をありがとうございます。本当に「らしさ」が難しいのはご指摘いただいたとおり、これは「質の問題」であるんですね。なかなか定量化できないし、或は、感じる人によっても違います。もっと言うと、設計図を見ただけで専門性のある人には分かるけど、でもなかなかそれを伝え辛い、そういう難しさをはらんでいる問題だと思います。一般市民からすると「できてから

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及
効果・相乗効果を考える

で建設すると、単なる大きな壁になる。だから、市役所が完成した後も市民のまちづくりを波及させる仕掛けとしてグランドレベルを考えることが重要である。
定禅寺通の緑地空間が成功しているのは、市役所が運営していないから。昔は買い物公園と言ったが、あそこも下層階は、管理は青葉区役所がやり、運営は商店街に任せている。恐らくエリアマネジメントのはしり。だから賑わっている。ただ、商店街があるだけではない、商店街が一生懸命お客さんを呼び込むためのいろんな仕掛けをしている。
そういう意味では、市役所の１階、２階ついて切り口を変えて、しつらえ方どうするか問題はあるが運営を市民に委ねればいいと思う。
市役所は個人情報の宝庫、情報漏えいが起こらない様に厳しく管理している。その延長で市役所１階を管理すると、何もできなくなる。だから、日曜日閉庁することが当たり前であると思い込んでいる。
管理からアプローチするのではなく、まちづくりとして波及させ、市役所を起点としたとき、切り口を運営に向けるとよい。最終的には必ず管理という問題が出てくるので、それは応用問題として役所に考えてもらう。

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

Table D

【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

本当にびっくり」だけど、専門家からすると「それはもうあの段階から分かっていたよ」という話でもあります。じゃあその「質」をどうつくっていくかということです。（仙台では歴史的文脈の多くが失われてしまっているので、「地域の特質」がみんなで共有されていないため）「地域の特質」を本当にみんなで合意してどうつくっていくかが多分この「らしさ」の一番難しいところかなという気がします。
じゃ、宮本さん、よろしくお願いします。

宮本：
宮本と申します。簡単に自己紹介させていただきますと、私は東京生まれの東京育ちでして、中学と高校はアメリカで暮らしておりました。大学に入るときに日本に戻って、（鈴木先生とはそのとき以来、20年ぶりに今日お目に掛かっているのですが）大学で都市計画を学びまして、民間の再開発コンサルタントに４年ほど勤めた後に、神田を拠点とするまちづくりＮＰＯでしばらく働いておりました。その後、家族の事情で仙台に転居してきて４年半になります。そういう意味では、縁もゆかりもない仙台に突然越してきた転入者の立場でもあります。
住んでみて、仙台の暮らしやすさがすごく気に入っておりまして、何とかここに住み続けられないだろうかと画策をしているところです。転入者の視点から仙台らしさを考えると、やっぱり外から見ているときの仙台らしさと、住んでみてじわじわ感じてくる仙台らしさは違うなと思います。外から見るとすごくわかりやすい伊達政宗であるかとケヤキ並木のような、そういうちょっと記号的にもなっている仙台らしさがあって、最初は越してきてそういうところが目につきました。住んでいると余りそういうのは関係なくなってきて、今一番仙台で気に入っていると思うのは都市の規模ですね。姥浦先生がご発言されたことにも関係しますけれども、いろいろなところが近い。知り合いに会おうと思うと大体15分掛ければ行けるというのは東京ではなかなかない環境ですし、人と人との関係も近いですよね。「知り合いの知り合いになると大体の人は繋がっているんじゃないか」というくらい人との関係が近くて、それが逆にいろいろなことを動かせるエネルギーにもなっているなと思います。例えば知り合いの知り合いの人を辿っていくと、結構それなりに影響力のある人がいたりして、いろいろなイベントが実現できるとか思いついたことが実現できるというのは仙台のすごくいいところかなと感じています。
それと、「人との近さ」ということの一方で、やはり政令指定都市なりの規模がありまして、ふだん我々が出向く役所は区役所であり、そういう意味で私も仙台市役所はこれまでほとんど縁がなかった場所です。なので「市民に開かれた」といっても、仙台市の中での市役所というのは日常的に訪ねる場所というよりは少し敷居の高い場所なのかなとも感じております。少し「ハレの場」的な要素であってもいいのかなと。市役所の役割としてはそういうところもあるのかなと感じました。
市役所が「らしさ」を持つべきか、というところなのですが、やはり外から見たとき、住んでいる人には伊達政宗のマークがつい

Table E

【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

横浜市役所は低層階を商業施設としたことで、波及効果が表れている。市役所に委ねないこと。

佐藤：
グランドレベルを民間で運営しようという大胆な意見であった。

田邊：
私は賛同する。市民の部屋、ギャラリーがあっても、官公庁が運営や企画を考えるのは難しい。ルールを決めて管理する必要はあるが、委託して運営したほうがスムーズである。ただし、ルールを決めることで市民の使い勝手が悪くなっては意味がない。
開かれたスペースがあってもいい。また、眺めがいいのであれば展望レストランがあってもいい。私は市庁舎を高く建てたほうがいいと思っている。そうすることで、公園や市民広場を少しでも広く確保してもらったほうが良い。
今後の財政を考えるとすべてを役所にやってもらおうという考えは破綻している。官民が一緒のテーブルにつけるプラットフォームを作り、社会活動を活性化させ、世代を超え、寄り掛からず、寄り添うソフト面の受け皿を作ってほしい。

Table F

【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

なりますから、ある意味では非常に節度のきいた、それこそ余り冒険的でないような風土だったのかもしれないとすら思うわけです。
しかし、今残されている都市の形態が非常になかなか美しいですし、痕跡を見て歩いても楽しいということは、やはり都市計画がなかなかいいということになるかと思いますし、また、例えば、ビスタとよく言われますけれども、見通しがきくようなつくりであるとか、そういったことを考えると、建物そのもの設計の前に残すべきものは何か、残せるものは残したいですし、また、例えばそこから見通せること、つまり存在しないことも残す対象である場合もあるということです。空間として、ということも含めて、遺産という部分があるのかなというふうに思って先輩方のお話を今聞いていたところです。
この残せないということに関しては私もいつも忸怩たる思いがあるのですけれども、ざっくり仙台開府400年ちょっとというふうに見たとき、やはり500年ぐらいたたないと要するに都市というものはまともにならないのかなという気もちょっとしたりしています。そうすると、今度の市役所は500年に到達しようかというところの500年の計に見合うような建築になるのかどうかということは試されてくるという気がしていて、そういうことでいくと、もちろん何を残し伝えるのかは侃侃諤諤議論したほうがいいと思いますし、また、必ず新規部分が出てくると思いますので、その部分も何を目指すかということは議論されなければいけないと思います。
先ほどお金をこんなに使うのか、という話もあったと思いますし、これも私半分同感なのですが、市の機能も、さまざま移転して一番フィットする立地場所を探してきています。学校も随分移転したりしていると思います。
いつも実は移転している途中なので、何のことはない、市民はいろいろな分散した機能をつなぎながら、生活者のほうがつないで暮らしているようなところがあるわけです。この分散した構造がどうなるのかなというのが気になっています。この分散を逆に否定するだけでなくて、今ある市の資産を広く活用するときに、何でもボリュームを中心に集めて巨大なタワーを建ててどうだとやるのが本当に新しいのか、今ある資産を有機的につなげながら市役所機能がこれまで以上に進化するほうが格好いいのか、これはちょっと考える余地があるのかなと思います。
ましてや、今はもう区役所がきちんとあって、届け出ではお世話になっているわけですから、市役所があって、区役所があって、さらに例えば、スイスのゲマインデハウスじゃないですけれども、

Table D

【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

ているとかって余り関係ないんです。でも外から見たときに市役所って、例えば「仙台市でこんなことがありました」とテレビの全国ニュースで放映されるときに映るのは市役所だったりするんですよね。そういう意味では、外から見るとまちを象徴するという場所であるということはありますので、そこに市民が誇りを持てるような「らしさ」を求めるというのはすごく大事なことかなと思います。
遠州先生がご紹介されたフライブルクの市庁舎はすごくよい事例だと思います。「このまちやまちの人たちは、こういうことを大事にしている」ということが表現されている場所であってほしいとは感じます。
ちょっと取りとめもなくて恐縮ですが。

手島：
ありがとうございます。最後にいただいた、「市民が大切にしていることが表現されている」とおっしゃったのは、本当に今までの皆さんの議論を踏まえて重要な指摘かなと思います。
最後に末さんからお願いします。

末　：
中央復建コンサルタンツ（株）という土木計画のコンサルタントをやっております末といいます。宮城県女川町の復興まちづくりチームのチームリーダーをやっておりまして、以前は中華人民共和国の都市デザインとか交通計画とか、その辺をやっていたところ、震災があったので女川町の復興まちづくりのために宮城県に引っ越してきて、今で８年目になっています。
このテーブルは、仙台市外の方々の話者が集まっているということなので、僕にもよそ者としての視点を期待されているのかなと思っておりまして、その観点から少しお話をしたいなと思います。
とはいえ、もうずらっとお話をされてきて、僕が話すことがほとんど残っていないと言う気もしますので、違う視点からお話をしたいと思います。
というのは、この場で話すことはそもそも誰に届くんだろうという疑問があって、よく分かっていません。そういう意味で姥浦先生や手島さんに向けてお話しするのかなと思っているのですが、というのは要するに、仙台市本庁舎を建て替える担当の人にどんだけ届くのかがよく分からんのです。なので、とにかく姥浦先生と手島さんに託しますということでお話をしたいと思います。
このテーブルのテーマで僕が提供できる視点として事前にお話ししたいと考えていたものが３つあります。ひとつ目はもう既に出ましたが、逆説的ですけれども、「仙台らしさを表現するような建物をつくろうとしない」ということだと思うんですね。建築家が作品を解説するときに「ここら辺でこのマチらしさを象徴しています」みたいな説明をすることがありますが、仙台らしさってそもそも多様なものから成り立っているので、たった一つの建築物でそれを表現しようなんていうのは多分できっこないと思います。
ここで僕が言いたいのは、「この新しい市庁舎が仙台らしさを構成する一部になろうという明確な意思を持つ」ことだと思うんです。

Table E

【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

佐藤：
桃生さんいかがか。

桃生：
公共施設の管理運営を担当していたので、よくわかるが気をつけなくてはいけないのは、ハードとソフトをセットで考えないといけないということだ。
そのためにはコーディネーターが必要である。庁舎を地域に開放しようと考えるのであれば、周辺にある資源をつなぐ、または再構築できる人材が必要になる。
ハードだけを整備してもアクティビティは生まれない。ハード＋αを誘発できるコーディネート力が求められる。リーダーシップよりも多様な情報を持っている人や情報を収集・編集・発信できる人材が求められる。庁舎内にとどまらず、内と外の流れをつくるような媒介としての役割を持った人材が必要である。
一人では多様性がなくなるので様々なバックグラウンドを持っているキーマンが複数名いて欲しい。市民に開放して「使ってください」では、機能しない。コーディネーターとしての視点を持つ人材を配置するということもセットで考える必要がある。

Table F

【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

非常に自主性の高いような市民が中心となるような公共の機能がちゃんとあって、今で言う町内会長さんなのか連合町内会長かわかりませんけれども、そういったところに市役所のある機能が移管されていったときに本当に残るものは何なのかということがどこかで問われなければいけないかなと。とはいえ、皆さんが集まるシティホールとしての機能はあるべきなので、その辺が非常に気になっています。
幾つか言いたいことはありましたが、とりあえず自己紹介ということで終わりたいと思います。

内山：
ありがとうございました。一巡して前半に意図していたいろいろな課題や視点は出たと思います。まず、最初に、石原さんから、名古屋から仙台に引っ越された時に、名古屋の 100 メートル道路と比較したお話がありました。スケールは名古屋より小さくても、このまちの街路の緑の質を見たときに確実に仙台らしさみたいなものを感じられたということでした。
それから、高橋さんからは今計画されているボリュームがあそこに建ったときには、それはやはりちょっと違うのではないかというお話もありました。多分、空間とスケールという点で仙台らしさというものがまず１つあるのかなと思ったところです。
それから、江戸時代のお話になりますと、花村勾当のお話から始まってあのエリアの歴史が大分知識として得られました。そして、段丘崖のこととか表小路がいつ拡大されたかといったこともわかってきました。こういった痕跡をこれからの計画の中でどれほど豊かに埋め込んでいけるかといった視点も後半お話しできたらなと思っています。
それから、針生さんから御指摘いただいた「近代の歴史をどう捉えるか」という問題は非常に大きなテーマで、大沼先生が近代仙台研究会をやられているのもそういった視点があると思います。
これについて針生さんからは今の庁舎を絶対に残すべきだという御意見がありました。私がこれまでお会いした建築の専門家には今の市役所を残すべきだと明言されたかたはいませんでした。多分その理由は今の庁舎に対する価値がまだ明らかになっていないからだと思います。その辺も少し後半の中でお話ししていきたいと思っています。
そして、江戸時代のお話の中から出てきたのが、地震が８回あって、その地震の経験をこれからどう引き継いでいくかという問題です。佐藤先生からはそういったところをハードとして、技術的に解決していく方法というものを学んで実装していく必要があるだろう

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

外側から仙台らしさを建物で表現しようという努力をするのではなくて、この建物をつくることによって新しい仙台らしさをつくろうとするという明確な意思を持つべきだと思います。その意味では、基本構想は力不足と思います。なので、市庁舎が新しく生まれ変わって使われ出して、「仙台ってシティホールをこういうふうにつくったんだな」となっていくことによって、新しい仙台らしさがここから生まれていくことを目指そうと、決めていくべきだというのが１つ目の言いたいことです。
２つ目は、建築物を具体的につくるということを考えると、やはりその場所の特性をうまく活かそうとする姿勢を持つべきだと思います。先ほど鈴木先生からお話があったように、この敷地がどういう場所なのかを見ておく必要があって、そこで失敗している建物というのはやっぱり地域から浮いてしまうと思います。この場所の特性はというと、一つは市民広場と隣接していること。もう一つは定禅寺通と近接していること。この２つの特性を活かすことができれば、おのずと仙台らしい市庁舎が立ち現れると思っております。
市民広場って、毎週のように使われていて活用されている、日本の中でも珍しい都市の広場です。今、定禅寺通でも市民の活動が生まれようとしていて、場所の使われ方、使いこなし方をこれから官民で連携してつくろうとしている。そういったことと、市庁舎が新しく生まれ変わるということはリンクさせないといけない。このプロセスそのものが仙台らしさにつながっていくと思っています。この辺については基本構想にも明確にうたわれているので、これをもう少し空間的なものとして次の基本計画の中で取り入れていくのがいいと思っております。
３つ目に指摘したいのは、検討の対象となるスケールの問題ですね。土木計画をやっている立場からすると、基本計画の中で縮尺が描き込まれた図面が全然ないということが問題かなと思っています。構想の中に、この図ぐらいですよね。2500 分の１のスケールだけじゃなくて、１万分の１のスケールも必要でしょうし、あと、そもそも現在の市庁舎がどういうフロアプランなのかというのも入っていないですよね。僕が見た資料だと入っていなかったのですが、今後こう使っていきたいと考えていく上では、やはり建物が現状どういう使われているのかもしっかりと見ていくミクロの視点も必要だと思います。この敷地の周囲だけではないスケールで見ていくということも必要かなと。そこら辺がきちんと整理されて、だからこういう建物にしていきたいという分析も必要かなと。それを皆さんにお示ししていく、情報を公開していく勇気も要ると思っていて、そういう意味では、先ほど鈴木先生から見せていただいた分析のようなものを、これからやっていくべきと感じさせられたところです。
そういったことを僕からは指摘させていただきたいと思って３点、お話をいたしました。以上です。

手島：
ありがとうございます。１時間 40 分かけて、ようやく一巡しました。もう休みをとらずにどんどん話をしていきたいと思うのです

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及
効果・相乗効果を考える

佐藤：
まさにそういうことをやっているのが桃生さんだ。

桃生：
この役割は目に見えない部分が多いので評価されにくい。そういう人材がなかなか見えてこない。行政の言葉、民間の言葉も理解できる方が必要である。

佐藤：
商店街関係では何かあるか。

工藤：
定禅寺通や市役所に停車するバスの数が非常に減った。市役所の脇にバス停はあるが１８時以降、雨が降ると市役所の軒下に何十人と待っている。どうして市役所を解放しないのだろうか。休日、土曜日も同様に市役所の１階が開放されるのであれば、バスを待つための待合室、ＡＴＭ機能などを充実してもらいたい。震災時市役所は耐震性がなく、物資の配布すらできなかった。市民の逃げ場としては機能しない。通常は会議スペースでもいいが、観光地という割に安全性の高い空間が用意されていない。市民だった

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

というお話があって、それから、田澤さんからは今、沿岸部でやられている活動について御紹介いただいて、その中で印象的だったのは、ただ単にアーカイブをするのではなくて、都市部の人たちが創造的にそれを扱って、これからの再生のための力にしていく方法を模索されているところでした。そういったところは後半で過去を創造的に未来につなげていくためのアイデアとして何かもう少し深めた議論ができればなと思っています。
＜休憩＞

内山：
それでは、皆さんお揃いになったので後半のほうに入りたいと思います。
後半は今までお話ししてきた過去の伝統や経験を未来にどうつなぐか、そのためのアイデアを議論しようという内容になります。前半で「仙台らしさ」というものが１つキーワードとしてあり、その中で空間のスケールとか景観の構造とか、そういったものが１つ議題となったと思います。まずそれについて少し話をしていきたいと思います。
それから、もう１つは過去の経験を語り継いでいくためのソフト的な視点からのアイデアについても話をしたいと思います。
最後に、近代の問題が大きくあると思いますので、それについての価値をもう少し深掘りして、どういった形で、今すごく扱いの難しい近代といいますか、なかなか残すことも難しい近代を、どう未来につないでいけるかというところを最後にお話しして、大きくそんな３部構成でできればなと思っています。
まず１番目の仙台らしい空間やスケールといった視点を議論するために、今仙台市庁舎の建て替え基本構想の中でどういった空間スタディーがされているかを、委員をされていてお詳しい高橋さんから、御紹介いただこうと思います。

高橋：
佐藤先生もいらっしゃるので、フォローをお願い致します。
基本的にこういったような仙台市役所本庁舎建て替え基本構想というものが今年出されていまして、それに基づいて今度基本計画というものがなされる、委員会があってということで進むことになっています。この中で基本的な前提、もうこの時点で前提条件を決めたということになっているのですが、敷地はここで、こちらの高層棟を残して低層棟は解体しても可ということで、ここの位置に建物を建てましょうということが大前提で今あります。
それで、こちらの建物ができてこちらを壊してというようなこと

が、挙手をして、発言されたい方。じゃ遠州先生、お願いします。

遠州：
「都市ビジョンが見えない」という話が前半のAテーブルでもありましたし、ここでもあって、横浜の場合にもどうやって都市ビジョンを織り込むかということが非常に重要な課題で、それを入れてきたという話をされていました。その横浜の都市ビジョンの中で、先ほど「持続可能な国際都市」というフレーズがありましたが、そのビジョンはビジネスをやっている人間から見ると非常によくわかるような気がするんですね。例えばフライブルクの場合の「中世のまちと生きていく」というビジョンは、別にビジネスをやっている人間の話だけではなくて、そこに住んでいる人たち全てにとっての共通の課題であり、誰でも認識しやすい課題なんですよね。公共交通システム全部がとにかくトランジットモールのところに集まるようにできているので、公共交通機関の乗降客は20万人市民の中で1日22万人が乗り降りするので、だから必ず都心に行くわけですよ。そういう意味で、古い中世の街並みが残されている部分ということは、本当に市民にとって共通の財産であり場でもあると。なので、非常にイメージしやすい。
国際都市というときに、一般の人は何でイメージするのですか。

桂　：
横浜の話だけで言いますと、横浜が本当に国際都市なのかという疑問が実は僕の中にはあります。「米軍がいた」とか「開港した」とかという、何となくのイメージもあるんですよ。「じゃ外国人の友達いっぱいいる？」「近所に外国人が住んでます？」と言うと「そうでもない」となる。先ほどの新市庁舎のミッションの中では「国際都市としてこれからもやっていこうね」と謳っているのですが、「でも、それって持続可能なんですか」という裏テーマを逆説的に言ったんです。だから「開港のまちから持続可能で豊かな国際都市に本当の意味でなっていきましょう」と冒頭に入れたんです。これは個人的な思いですけどね。
なかなか難しいのは、やっぱりヨーロッパみたいに「誰もが従うべき規範がまちの中に刻まれている」という状態は、仙台もそうだとは思いますけれども、横浜にも当然なくて、ただ、今それで悩んでいて、50年後の人たちも同じことで悩むのはもったいないなと思っています。つまり、先ほど「人々が自覚して、貫き通すこと」っておっしゃっていた、その境地に早く近づきたいのが多分現状だと思います。それを横浜の場合、運よく50年間、都市デザインとして何らかの形ではやってきたので、次の話がしやすかったというぐらいです。しかも、じゃこれ市民みんながそうだよねというような内容になっているかというと、全くそんなことはないとも思っています。
ちょっと答えになっているかどうか分からないんですけれども。

手島：
ありがとうございます。今の話はすごく重要な話だと思っていまして、やはり日本のまちってなかなか「規範として参照するべき

Table D
【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

ら、小学校や文化施設に逃げようと判断できるが、初めて訪れた方は市役所もしくは県庁と判断すると思う。今度の計画であれば、グランドレベルに開放できる機能を求めたい。１８時以降も４丁目は国分町に隣接するため人通りも多い。定禅寺通もそうだが、仙台駅の次に人がいるのはこのエリアだ。２１時程度まではグランドレベルが開いている運営状況が欲しい。市民も市役所も観光客もみんなにとって有効だと思う。

佐藤：
伊藤さん、市役所にこういう機能が入っていると定禅寺通とのつながりが出てくるか。

伊藤：
二口の奥に野尻地区がある。限界集落のようだ。同じ市として、定禅寺界隈だけでなく、全市にも波及できるような市役所づくりを検討しないといけないと思う。

佐藤：
小林さんいかがか。

Table E
【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

になるということに今決まっています。そのときのケーススタディーで、あくまでもケーススタディーですけれども、ボリュームがどのようなものになっていくかというようなことを検討したものがあります。
まずそのボリュームの出し方ですが、今本庁舎のほかにいろいろ賃貸契約を結んでいる分庁舎的な扱いのいろいろな何とか室、何とか室と分かれているものを全部合算してこの中に持ってくるべきもの専有面積を出して、それプラス廊下などで出たものがこの6万5,900平米という大変巨大なものになっています。
あそこの敷地というのは80メートルまでしか建てられないということで、そういう縛りの中からいくと、まずこの1棟整備パターンというのはあれぐらいのボリュームのものがここにどかんと建ちますよという案。
あと、分棟型なり2棟パターンというのは、Aが行政、議会、災害対策、市民利用というものがあって、この辺に建って、この辺に小さいものを建てましょうと。それの反対とか、があります。
いずれも面積的なものというのが6万8,000とか、非常に大きなもので、ボリューム感覚とすれば県庁舎の真ん中の棟というようなものがここに建ちますということが今の案です。
ただ、ここに建てるのか、こっち側に建てるのかというのはこれから基本計画でボリューム的なものをもう1回見直しをしてとなっていくのだと思うのですけれども、一応仙台市のほうで前提条件としてやっているのは、やはり建物をどこか別なところに仮庁舎を建てるということはとてもお金がかかることで、それはやめたいということがあります。
あと、こっちのほう、こちらとか、こちらも使ってという案もあったのですけれども、私はこっちにつくってもいいのではないかということを言ったので、こっち国の土地が絡んでいるというようなこともあってなかなか難しいと。こちらについては、今ここに駐車場もあり、ここは市民広場として非常に有効活用しているのでやめたいということで、どうしてもここになってしまう。
これをもっと張り出していって、道路も潰してこっち側にやったらいいのではないかという案も出ましたけれども、道路を潰すとここにインフラが入っていますと。ここの駐車場も若干こっちにはみ出ている部分もある。こういうところまで持ってくるのはとてもリスクが大きいというようなことで、現地建て替えで、60年後、また同じようにしたいというところまで話が出ました。
ということで、前もそう、今回もそう、その後もそうというようなことの歴史的なものと言えば歴史ですけれども、そういうことが前提条件であるというようなことです。

Table F
【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

Table D
【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

もの」がない状況だと思います。では、まちづくりをやるとして、「どこまで遡って参照してつくるのか」あるいは「何を参照してつくるのか」「どういう規範でつくるのか」ということが、まだみんなで共有できていないんですよね。それはやはり今つくらなくてはいけないんだということはすごくいい指摘だと思いました。じゃあ、鈴木先生。

鈴木：
横浜もそう規範になるものはないわけです。多分仙台もないと思いますけれども、ないので、じゃ市庁舎を考えるときにヒントがないかというと、そうではなくて、「こうありたいというメッセージをいかにデリバリーするか」を考えたほうがいいと思うんですね。亡くなられた田村明（地域政策プランナー。法政大学名誉教授。「まちづくり」という言葉を広めた）さんによくしていただいて、いろいろとお話を聞いていた中でもたびたび聞いた話なのですが、飛鳥田さんが市長になったときに、建築家の浅田孝さんという人はアドバイスを求められて、「市庁舎のここの部分の壁をぶち抜いて市民に開かれたスペースにしなさい。役所の局長だとかはどうせ仕事がないから、そこにそういうのを並べて、市民と直接話をさせろ。虫干ししろ」という話をしたわけですね。（多分にいろいろな話が盛られているとは思うんですけれども）それって一つのメッセージですよね。「そこに開かれたスペースがある。そこで市民と対峙する、交流する」ということが一つのメッセージになる。それがさっき桂さんが見せた現庁舎の市民広場の原形なわけですよね。
正直な話、他都市だと楽でいいですね、好きに言えるから。
思ったことを言いますと、仙台市庁舎を、ぐるっと一回りしてみましたが、周りは駐車場だらけだし、東側のところはずっと緑化しているけれども、市民が入ることを拒んでいるようなジェスチャーですね。いわゆるアフォーダンス的に考えると、「何も市民に取っ掛かる部分がない庁舎だな」という印象が正直あります。だとしたら、もっと市民に開かれるというか、行政と市民との関係みたいなものをちゃんと形にするというのが結構大事なんじゃないかという気はします。
それから、周りに対して非常に閉じた庁舎になっている現状から考えると、「周りのまちとどう繋がるか」ということを考えたほうがいいんじゃないかと思います。教科書的にアーバンデザインで考えるんだったら、この軸をどうつくるかという話ですよね。「すごくよく使われている市民広場があって、そこから市庁舎とまちにつながっていく」ということをはっきりとジェスチャーとして市民に見せることができたらいいんじゃないかなと思います。基本（構想の資料を今じっと見ていたのですが、敷地内にマンションをつくってもジェスチャーにはならないと思いますし）そういう意味ではもっとはっきりとしたメッセージを伝えたほうがいいのではないかという気はします。

手島：
はいありがとうございます。どなたか。佐藤さん、お願いします。

Table E
【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

小林：
使い方はたくさん出たと思う。市役所前の噴水と四谷用水は関連しているのか？仙台は政宗が水路も考えてつくったまちだと聞いたことがあった。歴史的な背景も取り入れれば、そこを訪れる方もいるかもしれない。
グランドレベルに人が集まって、いろんな人が主体的に管理することも必要だが、それ以上に発信すべきものが必要。発信しないと人は来ない、仙台市の魅力や有益な情報を発信すべきことを続けないといけない。
本日のテーマは定禅寺通なのに縦方向のことばかり考え、私の発言はこのテーマとそぐわないと思った。市役所起点で考えたとき、市役所で情報収集し、買い物しながら歴史的な片平キャンパスまで行く、そこから地下鉄に乗って西公園から定禅寺通を進んで一番町に戻る回遊性を作れるのではないか。
景観が望める場所にテラスを設け、VR を設置し、古今の仙台を見比べると面白いのでは。

佐藤：
情報や魅力を発信する場が必要だという意見であった。次に、まちの中に市役所の機能がにじみ出していくとはどういうことが考

Table F
【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

大沼：
すみません、質問ですけれども、行政の機能を 50 年後の未来像というか、例えばもっとスリム化みたいな話というのは一切ないのでしょうか。

高橋：
それは当然出しました。結局、今自宅で勤務するとか、いろいろあるじゃないかということで。ただ、建築家、建築屋さんのほうにそういう設計が入るとその 6 万 5,000、6 万 8,000 という面積というものが担保された状態で計画をしてしまうでしょうということになれば、そういうことはやめてほしいというようなこと、そういうある上限はそうかもしれないけれども、違う案というものも当然ありますよと、提案しなさいというようなことをやったらどうですかという話はしているので、若干それらしいものは入っているとは思うのですけれども、一応そういう議論は出ましたが。

内山：
ありがとうございました。
今基本構想の中の前提条件を説明いただきましたが、これを受けて前半の議論で出てきた「仙台らしさ」というものを実現していくのにどういった空間があるといいかということについて、また少し御意見をいただければと思っています。石原さん、どうでしょうか。

石原：
私は最初に申し上げたように仙台のイメージが「杜の都」というところから、やはり緑の多い空地をできるだけ多くとって、できるだけ緑の中で、しかも、ちょうど向かい側に市民広場があって、あそこではいろいろなイベントができる。市役所を囲む部分についてやはり杜の都の市庁舎というようなイメージがほうふつするような形であればいいかなと思っています。
それから、どうやってオープンスペースをつくるかというのが多分これからの議論になってくるのかなというふうに思っています。少なくともあそこで建て替えるという中で、定禅寺通ストリートジャズフェスティバルとか、いろいろなイベントで仙台が誇れるいろいろなイベントがあって、本当にすばらしいイベントがあそこでずっと続けられるような空間構成があるといいと思っています。うちで上杉分庁舎をやったときも、「ぜひジャズフェスのステージを 1 つつくってくれ」と、いうようなオーダーを社内で出して

Table D
【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

えられるのか。

桃生：
市役所がないと何が困るのかという逆算から設計する考え方もある。染み出すのであればコンパクトでも、回遊性をつくるのならば点在してもいいのではないか。
もう一つの考え方として、ソフトの視点から、人材がいない、あるいはお金はかけられないならば箱自体を小さくする手段もある。将来的に行政職員も減っていくのでコンパクトに考えてもいい。

佐藤：
現在、建物が散在しているため、まず集約しようとした結果ボリュームが大きくなった。市民が運営するスペース、あるいは情報発信や対話ができるスペースが、まちの中にも飛び出していく、しみ出していくと、１つ大きな機能というよりはちょっとした機能がまちの中に点在していると面白くなる気もする。例えば商店街の中に市役所のどんな機能があるとおもしろいのか。

工藤：
数年前まで市役所と中心部商店街でつくった「仙台なびっく」が

Table E
【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及
効果・相乗効果を考える

いたのですけれども、そういう形でどんどん広がっていく、市民が使えるスペースが広がっていくというのが大事かなとおもっています。ジャズフェスなどがあっても道路を挟んで市役所側というのは閑散として駐車場だけが残っていると。ああいう雰囲気とか、やはり官庁街というような市役所の雰囲気があって、その辺の官庁街というような雰囲気を何とか払拭できないかな。市民がいつでも、土日も何らかの形で関われるような空間構成とか、そういったものがあるといいなと、こんなふうに思います。

内山：
ありがとうございます。
では、木村さん、先ほど表小路のお話など、いろいろな痕跡のお話がありましたけれども、これからつくっていくときにどういったアイデアがあるか少しお話しいただければと思います。

木村：
今日、伺って、もう場所はあそこありきという話のようですが、「本当にあそこが適地なのかな」と、改めて考えると、もっとよそにもふさわしいところが幾つもありそうな気がしています。また400年前の話にこだわってなのですけれども、仙台という地名の由来はもともと政宗がここに来て、自分を仙人になぞらえて、仙人が住む高台の台地という意味でつけていますので、これはどこかというと文字どおり古く仙台にいらっしゃる方々が天守台と呼んでいる仙台城の本丸の上です。あれが文字どおり仙台です。
それで、漢詩から引用して「仙台初めて見る五城楼」ということです。台地の上に、青葉山段丘の上ですけれども、あそこに仙人の住まいを構えて、自分を仙人になぞらえて、５つの楼閣をそびえさせて、あそこを文字どおり仙台だということで、それまで一十百千の千に代表の代と書いて、千代と書いて呼んでいた地名を初めて漢詩から引用して、今の仙台という地名に改めるわけですので、仙台ってもともと川の向こうの呼び名なのです。
いつも城下町の話をするときに最初に話すのですが、「大橋を渡って向こうのほうを皆さん何て読んでいらっしゃいますか」という話をします。改めて聞かれるとみんな「うん？」という顔をするのですけれども、川内です。川の内側は向こうであり、川内という表記は東京に行って新幹線を降りたら降り口が２つありますよねという話をして、八重洲ともう１つはといったら丸の内。文字どおり江戸城の内堀と外堀の間のブロックに入り口が開かれて、本丸や二の丸や三の丸の丸の内なのだと。あそこも城の内側なのだと。「その丸の内という表記と仙台の川内という表記は一緒なの

Table F
【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

佐藤：
今回、「らしさ」ということがテーマになっていますが、庁舎をつくることをきっかけに何を市民に発信していくかというところで「らしさ」も生まれてくるのではないかと思っています。先ほどのフライブルクの事例とかけて、一つ私が関わった事例を紹介させていただきます。岩手県の八幡平市という３町が合併してできたまちなのですが、３つ役場があったものを一つにして、新しく庁舎をつくるのですが、その行為自体はどうかというのはちょっと置いておいて、結果、新しくつくった庁舎をどんなふうに工夫したか、です。その３町を貫くローカル線が走っているのですが、そのローカル線沿いのたまたま空いているところに庁舎の適地が来るのですが、そのときに新しい市長は「鉄道を使ってもらいたい」と考えました。３町がつながって、すごく長い市になってしまうのですが、向こうの旧町からここに来るのに一つ峠を越えなくてはいけなくて、その道路が冬はとまるんですね。そこを電車で来てもらいたいといったときに、何をしたかというと、近くにあって――近くといっても 500 メーターぐらい離れた駅を移設させたんです。鉄道駅を移設させたんですね、ＪＲと交渉して。新駅をつくると非常にお金がかかる（数十億単位で新駅はかかる）と言われたときに、じゃ既存の駅を動かしましょうと、そうすると単純に言うと駅舎を動かすだけなので、新駅ができるわけじゃないですから、駅名が増えるわけでもないし新しい設備が必要なわけでもなく、あくまでもあったものを動かすだけですよ、という論調でかなりの経費を削減しながら、庁舎と文化ホールと鉄道駅を一体にするまちを試みて、結果それは成功するんです。ただ、現在どれほどそれが使われているかは、先ほどのフライブルクの事例でもありましたように、つくった後にいろいろな活動を重ねていかなければならないのですが、あくまで市長は市民に向けて「３町は鉄道も軸になって一つになっていくんですよ」といったことを明確に発信したんですね。「そのために自分は駅舎を移設します」と明言して実行したというところに僕はメッセージ性があって、結果的にシンボルになっていくと思っています。ですから、今回仙台市も「庁舎をつくっていく中に何をメッセージとして発信していくんだ」といったところが浮かび上がってくると、それが最終的には市民の精神性と一体となって「らしさ」が生まれてくるんじゃないかなと感じたので、事例を交えながら紹介させていただきました。

手島：
ありがとうございます。じゃ高森さん、お願いします。

高森：
桂さんと鈴木先生等々の話とちょっと関連するのですが、今日時間があったので、私も市役所周り、市民広場、勾当台公園、県庁を回ってきました。ちょっと質問なんですが、宮城県庁さんと市役所さんは、コミュニケーションがとれる関係なんですかね。札幌市と道庁さんみたいな関係だとちょっといろいろ問題あるかな

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及
効果・相乗効果を考える

あった。商店街の情報交換や市のイベント情報、市民が活動しやすいく情報をとりやすい施設はあった。今は「仙台まちくる」として、広瀬通に移って活動を続けているが、人通りが少ない場所や離れた場所だと連動性に欠ける。

佐藤：
情報発信する機能は存在しているということか。

工藤：
存在している。仙台市主導で運営していたが費用がかかる。商店街も協力したいが、地権者とその持ち主との交渉が難しい。空き店舗があれば、ぜひ機能を整備する必要がある。

桃生：
波及効果という意味では、商店街と庁舎機能を連結させるアイデアもあってもいい。

工藤：
地下鉄の出入口は市役所近くに設置されているが、庁舎と連続はしていない。今後は庁舎と連続し、商店街までつながる機能は確

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

だよ」と、いう話をしているのですが、むしろ川内のほうにどこか用地を求められないのだろうかということも私は考えます。
私も在職中至るところ転々とさせられて、えらく苦い思いをしているのですけれども、これを全部、統合的にまとめていくのは機能的に大事なことかもしれませんが、そうすると、もうあそこの土地は極めて狭いと。先ほどちょっと、皮肉ではないのですけれども、たった侍の屋敷６軒分ですから、そこに今何千人ですか、市役所の職員。全部集めると万単位になります。全機能をあそこに集約させて、そして、そこで本当に災害に強い建物ができるのだろうかと思ってしまいます。
だから、もう少し、考え直していただいて、あそこの土地でないところをもう１回選び直すという選択肢も私はあっていいのではないかという気がします。
それと、先ほど御紹介した元禄の頃の五釐卦の絵図を見ますと、実は市役所の今の庁舎が建っているところの中を江戸時代、四谷用水の支流が流れております。かつては水路が走る水みちがあったのです。用水の本流から大きな支流が３本分かれておりますが、その第１支流が八幡町で分かれて、土橋通をおりてきて北番町街区をジグザグに流れ、ちょうど市役所の庁舎の中を２本の路線で渡って、今の県庁市役所前のバス停のところで勾当台通をまたいで県庁側のほうに行きます。そのまま、今、本町家具のまちと言っている元寺小路をずっと流れて、Ｘ橋のたもとを流れ、駅の東側に移って天満宮の下まで流れていくという壮大な大支流の流れがあるのですが、そのど真ん中に市役所の敷地がありまして、かつて、古い建築関係の方に伺ったのですが、今の市役所庁舎を建てるときに何か基礎を打ったら、なかなか基礎が落ち付かずに、地下水で大分浮いたというお話をちょっと小耳に挟んだことがありますので、「今の庁舎は完全に水みちの上に建っているのではないか。」と、思います。そんな知識とかも頭の中に下敷きに入っていて余計に感じていたのかもしれませんけれども、長い間あの庁舎で暮らしていると言うと変ですけれども、勤めておりまして、地下に行くと何か湿っぽい感じが致します。
藩政期の四谷用水の大変大きな多分３本の支流のうちの第１支流ですから、大分大きな流れが恐らくありました。ここからあといろいろなところに枝分かれして用水が行きます。ですから余り実は立地的にはよろしくない。もし、あそこの土地で建物を何かお建てになって何かするとすれば、私は「あそこに四谷用水をぜひ復元したい」という感じを持っております。そういう生かし方をして、緑とやはり水を大事にするコンセプトで新しい施設をつくっていただきたいというふうに思っております。

Table D
【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

と思って。
いや、実際あの周りを歩いてみて、札幌から見て、緑の量はさすが杜の都というか、そういう感じがしました。また、あの交差点は結構仙台市さんを象徴するような気がしました。県庁があって市役所があって公園があって市民広場がある、この交差点が、すごく象徴性の高い空間だなと周りを回って感じました。
そういう中で、来る前に基本構想をちょっと読ませていただいたのですが、「えっ、ここに？」という、ものすごく違和感を感じました。「せっかく象徴性のあるこの空間をつぶすの？」という感じがしました。どちらかというと、私は空間形成の方をいつもやっているものですから、「これは県庁さんとうまくコミュニケーションとれていないのかな？」と勝手に想像しました。回し方だとか順番だとかいろいろ考えられる中で、あの空間の価値を下げるようなことはしない方がいいんじゃないかと単純に思ったんですね。深い事情も知らない単純な思い付きですけれども。
それともう１点、ちょっと違う観点なんですが、札幌はこの９月６日に、胆振東部地震で札幌に限らず全道で、（計画停電等によるブラックアウトとは異なる）強制的なブラックアウトというものを経験しました。２万人とも言われる、その日の観光客の一部がホテルを追い出され、札幌駅も千歳空港も機能が止まり全然動きがとれない中で、外人観光客も、国内観光客も目指したところは、県庁でも区役所でもなく、市役所本庁舎でした。市役所本庁舎周りに、情報とスマホの充電を求める人が列をなして、１階ロビーも物すごいてんやわんやでしたけれども、市役所周りの空間の重要性や市役所の象徴性について、このブラックアウトで随分と感じさせられました。そのためにも、やっぱり象徴性という部分では、建物自体だけでなく、場所や空間といったものとセットで考えた方が良いんじゃないかと思いました。

手島：
ありがとうございます。どなたかどうでしょうか。じゃ紅邑さん。

紅邑：
難しいことは分からないですけれども、さっきサンフランシスコの話をさせていただいたときに、その市役所の近くに文化ホールだとかそういう文化的な機能というか施設がたくさんあるので、それをある程度市役所がつなぎ合わせる役割を果たしているんだなと思いました。今ちょうど高森さんがおっしゃったように、あの場所って、それこそ市役所の隣は県庁で、その隣は県警があって、向かい側に合同庁舎があって、そして勾当台公園があってということで、今おっしゃったみたいないわゆる特徴的な機能が集積している場所であるわけですね。そういった場所を今後私たち市民が、これまでとは違う形でどう活用できるかという視点をこれから持っていかなければいけないと思います。いわゆるシティホールの役割は、これまでの市役所本庁舎の役割とは違うんじゃないかと考えると、あるものは活かして、これからの社会的なニーズに合ったものは新たにつくってゆくべきだと思います。そういう意味では、「いまあるもの」というのは、歴史的なものであったり、

Table E
【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及
効果・相乗効果を考える

保できるようになるのではないか。雨・雪にもあたらず、三越までは移動できる。

小島：
まちをつくることは、民間ベースで考えれば稼ぐのは当たり前だ。公共投資の発想は税金を投入してそこを維持管理し、全部市役所がやる。そこに稼ぐという発想は全くない。
今後は維持管理が益々増える時代となり、市民からのニーズやにぎわいを創出するために補助金が欲しいといわれても、予算がないため出資できないとなってくる。役所も発想を転換し稼ぐことを切り口にしないといけない。
グランドレベルを指定管理者制度による運営で委託すると、委託料を払い放しの状態になる。収益を上げ稼ぐことを前提に活動の拠点をしていく。ＰＰＰエージェントがいないと継続できない。この視点を抜きにして、まちづくり、市役所の機能の一部を沁みだす問う発想は語れない。
もう一つは、役所寄りになるが、人口が減っても長寿命化は考えていく必要がある。将来の人口減少や行政需要の減少による職員減少を前提にコンパクトな庁舎という考えは、議論としては難しい。そうではなく、市民とのかかわり方、自分たちで市役所を建

Table F
【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

大沼：
さっき私は分散の話をしたのですけれども、東西線で悩んでいるのだったら東西線沿いに市庁舎を建てていったらいいのではないですか。１駅か２駅に１つずつ。そのほうが余程今の遺跡も生かせるのではないですか。だめでしょうか。つなげるのではないでしょうか。そのぐらい何か新しいことを、と思います。しかし、新しいといっても、大体、時代遅れになっているわけですから。遅いわけです。ほとんど、やることやること、みんな遅い。もっと新しいことをやったほうがいいと思うのです。やるのであれば。

内山：
分散させるという案も１つあるし、川内にというのもあると思うのですが、先ほど伊藤さんのお話では市役所と商店街が密接に関係していて、１つの都市空間をつくっているというご指摘がありました。その視点で考えると、何か次の新しい市庁舎に求めたいことありますか。

伊藤：
先ほど中心部地盤沈下の話をしました。今、話題になっています北六番丁の農学部跡地に商業施設ができますと、一番町四丁目周辺は痛手を受けると思います。大きなお店も、もしかするかもしれません。そうした場合に本庁舎は今の場所で建て替えるということは、非常に大事な役目を果たす建物になるだろうと思います。さらには、その周辺です。市役所から南側の事業所があります。その一帯とさらに二番町通を挟んだ地域を含めて、そのエリアを再整備するような形で、考えたら如何でしょう。「ノスタルジーでちょっといいですね」とか、「飲み屋街がいっぱいあっていいですね」と、言うけれども、万が一何かあった場合にはそれは市役所が何もしなかったと言われるような場所もあるわけです。そういう場所も含めて全体を見直す。その地域はもうちょっと、再整備すべきではないかと、考えます。
仙台市の人口が今予測されているのですと、2045 年で 90 万人です。気になる点は、15 歳から 35 歳までの女性が極めて減っていきます。8 万人を切ってしまいます。最近の仙台都心ショッピングは、若い女性がほとんど仙台駅前に行きます。一番町通は私も含めて御年配の方は安心して歩けます。駅前はにぎやかです。活性化しています。刺激的です。そういう場所になってきたので、娘とお母さんとおばあちゃんと一緒の時は駅前に行きますが、おばあちゃんあるいは御夫婦は一番町通です。そこの延長線にあるのは市役所

Table D

【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

文化とかそういったことだと思います。
先ほどお話しした東日本大震災で経験したということで言うと、あのときはたしか市役所も県庁も避難されてきた方たちの居場所としてすごく機能していたんですね。東日本大震災を経験した政令市だからこそ、そういう役割をよりいい形で、シティホールの役割としてプラスしていくことはあってもいいかなと思います。「いまあるもの」は活用していく、「いまないもの」はつくっていくみたいな視点と、あと点じゃなくて面で捉えるというようなことがもっともっとあるといいと思います。
あと、建物の形としては、「らしさ」よりも、（さきほどインスタ映えの話をしましたが）あのまちの市役所ってちょっとおもしろい建物だねとか、そういうのでもいいと思っています。その辺はもっと専門家の方たちがやられることかもしれないのですが、本当にコンペにでもしてそういったことを決めていくような視点も持っていただけるといいなと思いました。

手島：
じゃ姥浦先生、お願いします。

姥浦：
まず最初にちょっとディフェンスをさせていただくと、先ほどからちょっと集中砲火を受けておりましたので。
「新しい仙台らしさ」をつくるというのは、正直、これはかなり難しいと思っています。結局「新しい仙台らしさ」ってそもそも何なの、何を目指すのという話になってしまうので、基本構想を考えていたときは、「今あるものをさらにどう育てていくのか」「もうちょっと育てられるものがさらにあるんじゃないか」という観点を中心に話をしていたというのが実態です。そういう中で、ハードの話としては市民広場なり定禅寺なりですし、もう少し言うと、そこで行われているアクティビティだと思います。さらには、本庁舎なので「そこに来る市民は余りいない」という意見も実はありましたが、そういう事務手続きに来る市民ではなくて、例えばこういう議論をする場というのも、メディアテークでもいいのですが、市役所でやってもいいはずです。もしくは市民広場と一体となって市役所をさらに使っていくという使い方もあるでしょう。ですから、そういうことを想定する中でどう市役所をつくっていくのかだと思います。それが結果として新しい仙台らしさにさらにつながっていけばいいと思うのですが、「それは何か」が、なかなか具体的に見えなかったので、基本構想はああいう形にまとまったのだと思います。なので、基本構想には「市民に開かれた」みたいな、そういうフレーズは多分あったと思いますが、後でもう一回私も見返しておきます。
それからもう一つ、「市役所をもっと広域で考えるべきだ」という話もあったと思いますが、それもいろいろな資料が出ていました。自分たちでつくった部分もあったりして、ごっちゃになっている部分があるのであれかもしれないので、それも見返しておきます。そういう中で桂さんにお伺いしたいのですけれども、デザインコンセプトブックをおつくりになったじゃないですか。あれのよかっ

Table E

【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

設したという自慢や誇りに思える視点を入れる必要がある。

佐藤：
「稼ぐ」というキーワードが挙がった。実用的に使える施設、継続的に動ける施設であるべきだと思う。経済面、心理的に自慢できる場所、市民と市政をつなぐ人がいるシンボル的なものになりえるアイデアをお願いしたい。

桃生：
国際センター、戦災復興記念館、市民活動サポートセンター、市民センターなど仙台市が市民とのインターフェイスとして持っていた拠点施設を、見直す時期に来ている。この建替えに間に合うか難しいが、市民と国際化や子育て、ジェンダー、高齢者福祉、障害者福祉など、いろいろなところで議論が始まっている。このまちに必要な公共施設の機能について、新設や併設、統合も含めて議論を始めるきっかけにはなる。

佐藤：
建替えしている間どうする。５０年に１度、次がいつあるか分からないが貴重な機会ではある。

Table F

【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

です。
市民が用事があるのは、普段は区役所です。本庁舎には用事はないのです。本庁舎に行く方々は事業を営んでいる方々で、あるいは仙台で事業を起こす方です。仙台市役所を訪問する方は、１～２階じゃなくて、上のほうに行きます。１階は、ほとんど、利用されている方は少ない。
そこで、先ほどの本庁舎活用に関わってきます。建て替えるならば、私はまちづくりと、共に考えるべきと思います。まちに関わっている市民の方で議論をし、「こういう市役所を建ててほしい」と、いうのが本来、筋だろうと思うのです。上から建築の皆さん方が関わって、決めてしまったのでは、本来の姿ではないのでは。と、一市民として思いました。まちづくりについては、もっともっと議論していただきたい。市役所の役目はこの地域一帯と、関わっています。例えば、西側の市民会館があって、県民会館がありますが、この一帯は、何とかしなければいけない地域です。
ですから、私は仙台市役所を建て替えるイコール周辺の再整備をする、古いものを残しながら、それを補強しながら、仙台らしさを残しながら、やってほしいと思います。
もう１点は、仙台には迎賓館がありません。新しく国際センターの前にできた建物が、迎賓館なのかどうかちょっとわかりません。ただの箱ですね。お客様が来ても食事をしながら、あるいは歓迎する迎賓館らしきものは１つもない。仙台らしさは何も残っていないのです。みんな壊してしまった。
今の建物はもう地震でどうしようもないので、建て替えるのはやむを得ないと思います。それならば、この本庁舎を建て替えて、できたらば、養賢堂の復元をして、そこに迎賓館として活用して何かできないのかな、と、思います。
もう一方で、仙台市の職員の数が多いです。仙台は拡大、拡大で広げてしまったのですが、市民局のほうが担当なのだそうですが、台原森林公園の近くにあります文学館。私も好きで行きたいのですが、極めて不便です。来場者より、職員のほうが多い。
それならば、市役所の本庁舎１階に、本屋さんがなくなって困るので、本屋さんも移設していただきながら、文学館を持ってきていただいて、子供たちの文学に対する学びの場とする。この地域には、もともとたくさんの文化人がいます。その活躍するフロアーとする各大学の文学部の先生方も含めて活躍できる場所を、全国から、世界から、仙台に来てもらって学べる場所をつくれないのかなと、思います。
もう一つ、同じように近くに科学館が旭ケ丘にあります。一例ですが、八木山に住んでいる御年配の方が調べなくてはいけないこ

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

たところと、反省点や悪かったところを端的に教えていただきたいんです。というのは、ぱっと見た感じは「そうだよね」と感じましたが、逆に言うと、余りとがった部分がないのかなと思ったんですけれども、そのあたりどうなのかなと。
それから、先ほど佐藤さんのおっしゃった「つくり込み過ぎない」というのは私もすごく重要だなと、まさに気付かされました。ハードをつくり過ぎると、結局ソフトの部分、「一体何するの」といったときに非常に使いづらいという話になります。ですからハードが先かソフトが先か、順番としてはどちらが良いのか難しい部分もありますけれども、いずれにせよその両方を高めていくといったときに、つくり込み過ぎないことが重要だと思いました。後から少しずつ決めていくという方法もあると思いますが、そういう意味で、先ほど「市民参加って横浜はすっげぇ遅かったんだ」という話もされましたけれども、そういうあたりで苦労された部分もあったら教えていただきたいですけれども。

桂　：
ありがとうございます。コンセプトブックでは量の話じゃなくて質の話ができたところはよかったと思っています。先ほどの「らしさ」ともつながるのかもしれないです。「らしさ」は僕らも必ずしも無理やりつくろうというよりは、先ほどから言っているように「ベースのところをつくる」ことを考えていました。これから市民がそこに色をつけていくためのベースをつくっていくことが大事だろうと思っています。ちょっとテクニカルな話になってしまいますが、デザインビルドの要求水準書では量の話しかできないんですね。「床面積がこれこれで、天井高さいくつ」といった、そういう話しかできなくて、それを組み合わせたときに「何を生み出したいのか」とか「何が生まれるのか」という話がほとんどできない。これもテクニカルな話なのですが、コンセプトブックは議会を通していなくて、デザインビルドを選定する委員会の人たちに「こういう基準で判断してください」という資料の位置づけなんですね。なので、正式な位置付けが余りないのですが、逆にその分自由に書けるんですね。定量的な、こうあってほしいという「思い」も含めて書けるというのはすごくよかったと思います。特にそのときの神奈川県の建築家協会（ＪＩＡ）は飯田善彦さんという建築家が地域会代表をやられていたのですが、最初、建築家協会からすると「デザインビルドはまずいだろう」という立ち位置をとられるのかなと思ったのですが、「もし横浜市がそれでいくのであれば、そこと戦ってもしようがない。ただ、デザインビルドだけれども、どうやってよいものにしていくかという議論については、(包括連携協定を結んでいるので) 横浜市と一緒に頑張っていきたい」と言ってくださったのです。が、要求水準書は非常に秘匿性が高く（それを知っているとプロポーザル選定で圧倒的に有利なので)、そこには直接関与できない。では、ＪＩＡのような専門家からいただいた意見をどこで吸収したかというと、コンセプトブックに落とし込んだんです。そういうコミュニケーションツールとしてもすごくよかったと思います。それは市民とのワークショップでも有効でしたし、事業者から提案を受けた後も判断

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及
効果・相乗効果を考える

新しい市役所を考える期間は５年程度しかない。それ自体がイベントである。単純に工事をして建替えるだけではない。例えば工事現場の見学会に参加した方にはコーヒーの割引券が出たり直接的に議論にかかわったり、まちでの暮らしや体験がセットになったらおもしろい。波及効果も出てくると思う。

桃生：
プロセスの中で市民のかかわり代をどの様に用意するか。例えば、市民から提案されたウッドデッキの設置を業者に頼むのではなく市民に参加してつくってもらう。そうすると、この施設は自分の一部という感覚になり、関わった市民が積極的に利用し、自らがスピーカーとして広報的な役割を果たすことも現状として起きている。市役所は大きな箱なので、専門家にまかせる部分はあるが、市民のかかわりしろがあれば、そういった機会をストーリーとしてつくっていくことができる。その結果、市役所自体が自分のまちのシンボル的なもの、自分がかかわっているという誇りにつながる。
それがいろんなレベルで発生するといい。くぎを打つでもいいし、専門的に関わるでもいい。いろんな人を巻き込むことができる仕掛けと仕組みであるといい。但し、すでに動き出している中で３、

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

とがあって、東西線に乗って、旭ケ丘の科学館に行ったそうです。「3人の方が対応してくれてよかった。しかし、私以外誰もいなかった」と、言うのです。
いいものが宝の持ち腐れです。そういう施設が仙台市の郊外に分散されてあります。私はたくさんの市民や来外者も利用できる施設を市役所に、１階、２階に設けられないのかと、思います。
私は泉区在住です。いろいろ手続するのは、泉区役所です。青葉区の方は青葉区役所です。本庁舎の１階、２階は市民に開放していただきたい。来外者を歓迎する施設にできないかと、思います。
さらには、先生方が多分関わっていらっしゃると思いますが、仙台市に美術館と博物館があります。元館長さんによりますと、実業人は、事業を成功されると、絵を買うそうです。絵画、骨董品など、お宝をたくさん。デパートさんが喜んで売りに来ます。いっぱい買い取るそうです。たくさん皆さん持っています。
ところが、その方が亡くなりますと次の代の方が、保存維持するのが大変になるそうです。それを「博物館さん、何とか預かってくれませんか」、「美術館さん、預かってくれませんか」、と、寄贈されます。たくさん入っているそうです。あふれてしまっています。その中でお宝もあるでしょう。それを収容する郷土美術館なり博物館があってもいいのではないか。つまり来外者が見に来る、市民が行ける場所です。

二郷：
大事なところだと思います。実は、先ほどの針生さんとか木村さんの御意見も聞きながら、思ったのですが、私は今回市役所の新築計画の進め方は急ぎすぎ、順序が違うような気がいたします。
私どもが、基本計画の段階でこういう論議をするということは、多分仙台市の事業計画の中で、初めてだと思います。しかし、この基本構想ができる前に市民の意見を聞いてほしいところです。といいますのは、昨年「史跡仙台城保存活用計画」案が発表され、パブリックコメントの意見募集がありました。御存じのとおり、文化財保護法の条文が新しい４月１日から出ます。それを読んでいまして、文化財を活用していくためには市民と活動する、その中で、いろいろなものの計画をつくる前に市民の公聴会とか、市民の意見を聞いて、それからやることが望ましいと法律で書いてあります。
ところが、仙台市はそうじゃなくて、全部計画案をつくってしまって、その後にパブリックコメントをとっている。今回のこれも、もっと前の段階でやられたら、皆さん考えているような、もっといろいろなことが出来そうな気がしました。

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

基準として機能したというところはすごくよかったかなと思っています。
あと、空間の話ができたのは、本当によかったなと思いました。
一方で課題としては、デザインという言葉が横浜市の中でも非常に表層的に捉えられているところがあって、最終的に運用するのは横浜市だと市庁舎担当チームだったので、「デザインや景観とは何か」についての理解の行き違いがあり、運用が余りうまくいかなかったこともありました。
また、議会での議決を経ていない資料であったことで、のちのち難しいこともありました。あのタイミングで出すことが重要だったので、あの時点では仕方なかったのですが・・・。
あとは、デザインビルドで受託した設計チームのほうにも非常に強い思いがあって、ワークショップなどを経ても全然案を変えないんですよね。もうちょっとコラボレーションがうまくいくような下地が双方にあるべきだったかなとは思いました。

手島：
ありがとうございます。そうですね、「手続の正当性」というものは、最終的には何にも増して問われてしまうのだと思います。こうした会もそうですが、どういう手続を踏んで、市民の皆さんを巻き込んで広く意見を集めたりしながら、こういった会やここでの結論に、どうやって正当性を持たせるのかが、多分これからの公共物には問われているのかなと思います。多分、この会自体がそういう試みの最初の一歩というつもりでやっていきたいと個人的には思っています。
さて、ご意見何かあればまた挙手をいただいて。どうですか。じゃ遠州先生。

遠州：
もう余り時間がないのであれですけれども、先ほどからメッセージ性という議論がされていたと思うんですけれども、メッセージ性という点で言うと、やった結果が「何がしたかったの？」というのはだめだと思うんですよ。私は仙台にも、すごくいいところもいっぱいあると思うんだけれども、仙台で生まれ育った人間としていうと、どうしても「もっとこうであってほしかった」という気持ちがすごく強いんです。例えばあすとの都市再生緊急整備地域を見ると、何したかったんだろうと思ってしまいます。あんなに散漫で、何が主張なんだろうというのがちっとも分からないというのがあるわけです。例えばドイツのベルリンのポツダム広場の再開発の計画が、私がお配りした資料の中に入っていますけれども、あれもコンペした後に設計変更になったりいろいろな批判も浴びたのですが、ただ地下空間の活用の仕方とか、（それは観光客で行った人にはほとんど見えないんだけれども）行ってみると、これは要するにこういうことが実現されたんだなとすごい感じますね。そういうものがそれぞれ仙台市の中で取り組まれる様々な活動の中に見えるかどうかは非常に大事で、「建物が建ちましたね」ということだけじゃなくて、「それ自体がどういうものを実現しようとしてきたのか」をメッセージとして伝わるようなもので

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

４年というスパンでどこまで検討できるかはわからない。

佐藤：
巻き込んでつくったほかの経験は。

桃生：
漆器や本棚をつくったり、芝生を植えたり、カウンターサービスを一緒にやってもらったり、いろんな視点からかかわり代をつくっていけるのでは。市民活動やビジネス面でもできると思う。販売するスペースが成立するのか。マルシェを試験的に開催し、定禅寺通までの流れをつくれるお店を配置し、実際に効果を検証することで、自分もかかわっている実感が持てればよい。

佐藤：
試しながら人を巻き込んでいくというのはすごくおもしろい。

増田：
平成の大合併が行われた時、それぞれの町が持っていた資料を保存期間が切れていたために捨てた。アーカイブやっている人たちにとっては貴重な資源も含まれていた。サルベージする市民活動

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

先ほどのお話にありました四谷用水のことですけれども、四谷用水の歴史は非常に大事です。この台地に仙台のまちが存在し得たのは四谷用水があってだったと思います。このことを、もっときちっと伝承すべきだと思います。県庁前の池だか何だかわからないような遺構表記は、すぐにでも取っ払ったほうがいいと思います。
現在の市役所のことですが、針生さんがおっしゃったような形で、完全な形での保存というところまでは、私は至りませんが、あの建物を補強して、検討する時間を稼ぐことはできないでしょうか。どうしても危険だということであれば、それをまず補強して、それでもってもう少し検討する時間稼ぎをするというのはありなのかなと思います。補強の方法。例えばコンクリートに頼らないカーボン補強とか、何とかいろいろなものの部材補強、部分補強があるはずです。それについての検討はしているのかどうか、私はわかりませんが、中性化の問題等、100年、200年もたせるということは多分無理だとしても、針生さんが先ほどお話しされたように、今の技術で、できるだけ長く保存活用を検討する余地はあるのかもしれません。

針生：

Table D

【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

あってほしいというのがひとつ目です。
それから、杜の都の話が出たのですが、杜の都というときに「木々の緑が重要」というのは当然ですけれども、もう一つ大事な要素は、広瀬川だと思うんです。しかし、残念ながら仙台市の場合には、広瀬川をどう生かすか、どう位置づけるかということについての議論はほとんどこれまでされてこなかったように思いますし、現実にどういうふうにしてきたかということについて言うと、余りきちんとしたものがないように思います。開かれた空間という話もあったけれども、一番大事なのはパブリックアクセスだと思うんですね。市庁舎もそうだけれども、川にしてもそうですね。仙台にあるさまざまな資源に人々が自由にコストをかけないでどうアクセスできるかというのはすごく重要で、それをどう実現していくのかというのは考えて活用していきたいです。
川について言うと、西日本豪雨でもありましたが、短時間で非常に激しい雨に見舞われるということがこれから頻繁に起きてきて、どこでもダムの管理をものすごく綱渡り的にやっているので、大倉ダムがいつどんな状態になるかというのは、（ならないと報道されないし、食い止めている限りは報道されないので）実は知らないんですよ。だけどいろいろなことが起きてくる可能性もあるので、河川の持っているそういう治水的な意味と、人々に対して潤いを与える面と、両方を考えた上でどう活かしていくのか考えてほしいと思います。
それと、これは本当に雑談みたいな話なのですが、仙台に戻ってきてこのごろ思うのは、羽生結弦さんにしろ、卓球の張本智和君や福原愛ちゃんにしろ、要するに世界的なアスリートが仙台から育っているんですよね。私が子供のときのことを考えると信じられないです、そういう人たちが仙台から生まれているということが。でも、それが生まれてきているという要因は一体何かと考えると、もしかしたら仙台の魅力ということが生んでいる可能性もありますよね。私にははっきりはわからないけれども、それ何かなということをわかったら嬉しいなと思っています。

手島：
ありがとうございます。鈴木先生、お願いします。

鈴木：
「もともと（仙台という都市には参照するべき）規範がない」という話でちょっと前から議論を展開してきたと思うのですが、逆に言うと、都市のつくり方とか建築のつくり方ってその時代時代で考え方があって、区画整理という手法もその時代の一番それがよいであろうという考え方であったと思うんですね。現庁舎についても「駐車場に囲まれて…」みたいな話をしましたけれども、その時代には「こんな立派なビルができた」と思われていたと思うんです。決してそれが最初からひどい計画であったわけではないと思うんです。でも、やっぱり時代によって求められる空間だとか計画のあり方みたいなものは確実に変わってきているわけです。さきほど、「メッセージ性が重要だ」という話が出ましたが、仙台市庁舎の空間が「これからの仙台のまちづくりとは何か」という

Table E

【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

はあってもいい。昔の資料が欲しいと思っている方がいると思う。目録をつくるのは大変だが、市民がやることがおもしろい。メディアテークや博物館で、そういう活動が起こり、市役所に人が集まれば面白い。

田邊：
現場見学会で事故などが起こると大変だと思う。しかし、建設期間中の騒音や閉ざされた空間は陰気だ。進捗に合わせレポートしたり、ＷＥＢサイトを通じて報告することで、市庁舎が完成した時に市民の中から、市庁舎の建築通が出てきたり口コミで広まるような、ベースがつくれたら楽しい。

佐藤：
おもしろい。他にないか。

小林：
実は子供たちは建築現場がすごく大好き。マンションの免震装置の見学を案内したら子供たちが殺到した。
大人も子供も現場を見学したり体験したりすると、大きくなったときに愛着の持てる建物になると思う。現庁舎を保存したいとい

Table F

【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

建て替えを前提にしているからそういう話になるのでは？何百億かけるわけでしょう。レトロフィットのところに100億ぐらいかけたらいいのでは？充分やれます。何故、そういうことの専門家がいないのか、おかしいですね。

内山：
この市役所の計画の進め方の議論については、これまでコンクリートの中性化の検討や、それから基本構想の策定など手順を踏んでやってこられたとは思います。今回こういった場が設けられたというのはかなり画期的なことであって、この議論は何に反映されるかというと基本計画です。基本計画の検討委員会がこれから６回行われていくのに並行して、こういったことを何度かやっていって、声を届けていくという場になる。その１回目なので今日はいろいろな課題を出していけばいいかなと思っています。
今の市庁舎の話になったので、これは３番目と思っていたのですが、近代の建築、特にコンクリートのモダニズムの建築について議論したいと思います。私は地元が栃木県なのですが、栃木県県庁舎の建て替えでも、昭和初期のルネサンス様式の建物は保存されましたが、もっと新しいメタボリズムの思想でつくられた議会棟は壊されました。
つまり新しくて機能的なものは壊されて、古いものは残されたというように、昭和40年代ぐらいにつくられた建物の価値というのは、なかなか共有されていないと思います。この場は多分その時代の建物の価値はどういったものかということを議論する場であってもいい。針生さんにはかなりはっきりしたイメージを持たれていると思うので、そのあたりを少し深掘りしていただけるとありがたいと思います。

針生：
現庁舎を壊すのを前提の話でやっているのですか？残すのを前提であれば、残し方はいろいろな技術が今は進んでおります。使い勝手の話は今まで使ってきているわけですから、ちょっと改良すればいくらでもよくなります。
私は、低層棟も全部残したいと、考えています。どちらかというと、旧庁舎と新庁舎を巧く組み合わせて群建築としたほうが防災上は安全であると言えます。
もう１つは、日本の美学には、わびさびというものがあります。みんな何でも新しいものというのではないのです。古いものと新しいものを組み合わせて、味のある市庁舎としてのたたずまいが創られると思います。

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及
効果・相乗効果を考える

う話が出てないのはなぜか。あれは自分が見に行って、くぎを打ったとか、土をまぜたという子供たちが大人になったときに、やっぱりこれは大事な建物だから守りたい。リノベーションしても使いたいと思われる大事な建物にしてもらいたいと思う。見学会はぜひ開催してもらいたい。

佐藤：
お金を稼ぐ手段が考えられると本当にいい。商店街として何かアイデアはあるか。

工藤：
アーケード建設は自己負担で約４億円かかる想定。約２割の補助金が充当されても３億２千万円は自分たちで調達する必要がある。そのため、市民に寄附を募る話もある。
旭川駅を見に行った。レンガタイルを全面に貼った駅舎で、そのタイルには寄付をした市民の名前が刻まれており、自分たちの駅を自分たちで造ったと誇らしげに思えた。金を稼ぐ方法も大事だが、その一方で、何階建てになるのかわからない現時点で、このような議論をするのは難しい。市役所の青写真ができたら、またこのような機会を設けてほしい。どのぐらいの期間で建替えて、

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

デザイン、施工性、オープンしてからの運用性等の多面に亘る評価がなされ、施主、設計者、施工者の三者が表彰されるのがＢＣＳ賞です。世界的にも非常にレベルが高い賞です。それを壊すこと自体がどうなのでしょう。
今のものはみんな何か建て替えのところの視点で固まっているのでは、こんなシンポジウム開いても何の意味もない。現庁舎の残し方、その上で、どうつくるかという話も大事です。私の考えでは、現庁舎を残すということは、新しい庁舎の間に外部空間ができるわけです。
例えば、パリのシャンゼリゼに６階建ての建物があります。６階建てで屋根裏部屋があって、全部中庭が空いています。真ん中がコートハウスになっている。350 年もっています。それから、京の町屋。全部通り庭があって、光庭や坪庭が全部あります。あんな密集地で、ずっと住み続けています。地中海のカスバにあるコートハウス。壁を共有していて、みんな中庭が空いているから、住み続けられている。
実は、最近、建築というのは、多孔質（ポーラス）じゃないとだめだと、わかりました。隣の県庁にしたって、３つに分かれています。超高層でもよかったのですが、３つに分かれているのは、何なのだろうと思います。

だから、今度のものはどういうフィロソフィーでやっているのかというのが聞きたいのです。特に委員の方に聞きたいです。どういう建築哲学でやっているのか。他がやっているから、そういうふうにやるというのではないのです。仙台は仙台らしさでやるのが仙台らしさになるわけです。
私はどういうことを考えているかというと、地下駐車場の排気塔は撤去して、敷地を南側の市道を越えた広場まで含めて計画すべきだと思います。現庁舎に対して新庁舎は噴水広場から市道をまたいで排気塔まで南北に長い平面形となります。広場の上は抜きます。２層分抜きます。屋根のついた広場になります。ピロティに柱は何本か出るかもしれません。南北の両端にコアを設けます。このコアは動線のコアであり、構造のコアでもあります。
この新棟は３万 5,000㎡くらいですから、現庁舎と３階レベルでブリッジでつなぎます。新棟の東西面はバルコニーを階段状に出して 10 階ぐらいまで緑化したら良いと思います。今の地下駐車場は新築後、復活します。更に現庁舎の北側駐車場は撤去し、現庁舎から８m離して立体駐車場（30 台）を 12 本設けたらいいと思います。昨日考えただけなので、まだまだ素案です。ピロティーは２層。階高が１階５メートル、２階５メートルぐらいが良いと思います。３階で 10 メートルとしたら８メートルがピロティの天井高として

Table D
【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

あり方を示すようなものであることが大事なんじゃないかと思います。
例えば公園というのも、今公園のあり方というのも物すごいスピードで変わってきていますよね。そういった考え方を取り入れるという事も重要です。市庁舎でも、近年は権威の象徴というよりは、「１階部分が市民に開放された庁舎」みたいなものが普通にいろいろなところでやられているし、今回の横浜の市庁舎もそういうふうになってほしいと思っています。先ほど桂さんも「新しい横浜市庁舎の１階に、こんな風にみんなで議論している風景が広がっているといいな」と言っていて、私も全くそうだなと思ったんですけれども、やっぱり「いかに市庁舎を開いていくか」ということであったり、横浜の場合で言ったら「水辺に対して開く」ということですね。そういう形で市庁舎が構想されていって、それが一つのスタンダードになっていき、周りに波及効果をもたらしてほしいなと思います。

手島：
ありがとうございます。さて、どうでしょう、会場も含めてもし意見があれば手を挙げていただきたいと思います。誰でもいいですよ。末さん、どうですか。

末　：
いろいろとお話があった中に僕がつけ加えたいのは、「どのような場をつくりたいと思っているか」という具体的な提案がこれから必要と考えると、市役所として「どういうサービスや将来像をつくろうとしているのか」の検討が必要です。これは今からやる基本計画の中でつくるのか、あるいはつくらないのかは見えていないのですが、これから先80年間掛けて使っていく市庁舎の中で、「市民から公共サービスを負託されている市役所が、どういうふうに活動していこうか」という分析や将来像が必要になってくると思います。これについては、「担当部署と受注者である設計者だけで考える話なのかどうか」というところなんですよね。「市役所の将来像」については、かなり難しい話なので、「検討すること」と「検討したものに対して意見をもらって修正していく」という、そういうプロセスのデザインが必要と思っていて、それも含めてデザインだと思うんです。間に合うのであれば、そういったものを並列でつけ加えたほうがいいし、そこの中で出てきたものに関しては、計画や設計を変えるということを位置づけておく必要があると思います。「もう既に計画が終わったから変えられません」と言うだけではなくて、やはり「具体的な形が見えてきたから初めて意見が言えるようになる」という部分もありますし、そういうときに「意見を言うタイミングはもう終わっている」という話ではなくて、そのプロセスをしっかりと決めておくことが重要だと思います。先ほど桂さんが言われた、「これって誰が決めたんだ」みたいな話についてですが、「ここで議論された話はどう使われるのですか」ということも含めて、やはりプロセスとしてデザインしておかないといけないと思います。以上です。

Table E
【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

その間ほかに移るのか、建替えた後、分散している建物はどう使われるのか。青葉区役所は目の前にある。中を移して、青葉区役所を売却すればいいと思ったりもする。仙台市からの情報を待っている商店街は、建替えている間、人が少なくなるのであれば、行政やまちと連携して、サービス券を配るなど、催し物を考えないといけない。

小島：
噴水の場所に庁舎を建設することになると思う。北側庁舎を運用しながら建設する。完成した後に、新しい庁舎に職員は移動する。新しい庁舎に移動すると民間施設を借用している部署や古い庁舎で働いている職員も移動してくる。今後は、水道局庁舎や北庁舎をどうするのかという議論になると思う。また二日町駐車場があって、市役所の建築中の話も非常に大事。盛り上がりで終わらせず継続してまちづくりを進める。波及効果としてどの様にまちをつくっていくか、そのときに古い庁舎をどの様に活用するのか、議論すべきだと思う。そうすることで、市役所の建替えも生きてくると思う。仙台市の街づくりにおいて市役所建替えは、終着点ではなく通過点として取り組むことが大事。
民間とパートナーシップで進めようとするとき、ＷＥＢをつくる

Table F
【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

取れるので、屋根つき広場になります。今の市民広場から屋根付きピロティと更に県庁前公園と空間は連続し、東西軸として、県庁ゾーンへのゲートとなります。東一番町からは南北軸として、誘われる様に広場、現庁舎へと流れが演出されます。

内山：
かなり具体的なイメージを提示していただきましたけれども、その中で提示していただいた価値というのは多分、群としての建築という価値が１つあるかと思います。それから、やはり緑です。壁面を緑にするというようなところとか、それは石原さんが最初におっしゃった緑とも関係あるかなというふうに思います。
針生さんにはかなり空間的なイメージを提示していただきました。

針生：
道路をまたぐのはいいと思います。

内山：
ちょっと時間もなくなってきてしまいましたが、ちょっと近代建築の話から空間の話にまた少し戻ってしまいますが、今、針生さんから御提示あった幾つかのキーワード以外に何か都市空間としての空間についてあればその話を。

二郷：
今回、ぜひとも検討していただきたいのは、歴史から見て30年に一度は必ず地震が来ます。仙台の場合、中央部で避難所がほとんどありません。仙台市の新庁舎には、どういう形であれ、１階～２階の部分に避難所を兼ねた人を収容できる多目的なホール、空間を、初めから、とってほしいと思います。それが地震とか何かあったときの防災センターとしての機能を持つということはいかがでしょうか。
又、「ＺＥＢ」ゼロエネルギービルについて、省エネルギー、独立したエネルギー源の検討が今回全然されていないと思います。これから50年先のことを考えた場合、緊急防災センターとして機能するためにはエネルギーの確保が必要です。
それからもう１つ、先ほど市電の写真をお見せしたのは、交通システムの変化というものも考えてほしいということです。50年後の交通というのはどう変わるかを考える必要もあると思います。私たちの時代、夢だと思っていたドローンが今、空を飛んでいます。それから、今まさに検討されている無人タクシー、バス、そういうものを処理できるような空間エリア、機能についても、新市庁

Table D

【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

手島：
ありがとうございます。じゃ、マイク渡していただけませんか。

会場１：
建築のコンサルタントをやっている高野と申します。末さんと一緒に女川のまちづくりにもう４年ぐらい関わっていて、あと大学時代、札幌で４年間いたりですとか、横浜のＣＭ（コンストラクションマネジメント：建設プロジェクトにおいて、建設発注者から準委任を受けたコンストラクション・マネジャーにより、中立的に全体を調整して、所期の目的に向かって円滑に事を運ぶ為の行為のこと）会社にちょっと関わっていたりですとか、結構いろいろとやっているんですけれども、今日の中ですごく思ったのが、皆さん、つくるところまで、建物が建つところまでの議論が多いなと思っていて、その後のことを、もうちょっと計画段階から見ていただきたいなと思います。この建物を、どう使い倒すのか、どう使っていくのかをもっと市民からがんがん意見を入れていただいたらいいんじゃないかなと思うんですよね。
よく、持続可能性という面で、どうやってお金を使っていくか、どうやって施設を運営していくかというところが今注目されますけれども、せっかく今、総合計画を２年のスパンでつくるタイミングでもあるので、そこの計画で、先ほど仙台らしさというところがあったと思うんですけれども、施設ではなくて、施設以外のところでの「らしさ」や、まちとしての「らしさ」を、どうつくっていくのかを総合計画をつくりながら施設に反映させていくのが良いと思います。ちょうど女川は今そういうことを今やっているんですよね。（町レベルだからできたというところはあるのかもしれないのですが）たまたままちが流れてしまって、町の計画をつくらなければいけない、施設もつくらなければいけないというところで今やらせていただいています。仙台は東北の顔だと思うので、市民広場でのイベントが多いというお話もありましたが、あそこでやっているイベントって東北絡みのイベントが多いと思うので、東北を発信する場として機能させるというのも一つの手かと思いますし、それが仙台らしさにつながっていくのかなとも思うので、そういうところを計画段階から入れていただきたいなと思いました。以上です。

手島：
ありがとうございます。さて、どうですか、ほかに意見は。じゃ宮本さん。

宮本：
最後に抽象的な意見になりますけれども、私はアメリカで中高と育った中で幾つかの都市を訪れていて、アメリカではシティホールってまちの中心にあって、ガイドブックに載っていて観光客が訪れるような場所だったりするんです。ご紹介にあったシティホールツアーというのも大抵のところでやっていますし、そのときにシティホールという言葉が含むものというのは、行政機関というよりも議会、市民の代表者が集まって議論する場所という意味合

Table E

【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

のは市役所の職員にも得意な人もいる。そこと協働で進めるために、互いに問いかけをすることが大事。一緒にできるという成功体験をさせる必要がある。
建替えもまちづくりの一環、建設中のこともしっかりと考えていくべきだ。子供たちが目を輝かせ、ここにかかわった気持ちを奮起させるために市役所と民間、市民が協働して進めることを考え提言できれば良い。

佐藤：
グランドレベルの運営を市民に託す話題につながっていくことを期待する。

小島：
できる。結局キャッチボールは従来と同じ委託だ。キャッチボールができないと発想が豊かにならない。違うシステムの中でやっていく。一緒に取り組む方がいて、その方が儲けてもいいという流れが制度的にできるはず。それを市がいいと言ってくれるかどうか。公民連携を市がどの様に考えてくれるか、制度的に全国の先鞭を切ってやるわけではない。事例はある。

Table F

【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

舎計画では検討する必要があると思います。我々が50年先を見きわめるのであれば、交通の問題、防災の問題、それからエネルギーの問題、この３点の検討をした上で計画を進める必要があると思います。我々の、この街の過去の経験を踏まえた上で次の世代に何をするか考えることは大事なことです。そういう意味での歴史的な空間とか、そこで起きた事象は検証し、これをまちづくりに生かすべきだと思います。

内山：
これから50年後に地震が複数回必ず来るだろうという前提で新しい市役所を考えるといったときに、空間的に求められることというのがまず１つあると思うのですが、そこについて佐藤先生、次の50年間あり続ける市庁舎でどういった空間を用意しておけばいいか。あるいは技術でも結構なのですが、その辺の知見を御提示いただければと思います。

佐藤：
具体的な立地場所ですとか、具体的な空間については、なかなか私はもともと構造だということもありまして、お話を伺って勉強させて頂いておりました。先ほど、針生さんがおっしゃっていた１棟案はやはり防災上課題が多いということに対して、私もリスク分散という意味では複数棟で進めていくのが防災上も冗長性を高める上でもいいのかなと思って話を伺っていました。
加えて、未来に向けてというところで、ぜひ申し上げたいことがあります。学校の子供たちへの防災教育に学校の先生方と一緒に関わらせていただく機会が多いものですから、今回の新しい庁舎がどういう建物で空間になるかが議論されているところでありますが、市庁舎を子どもたちにとっての防災教育の教材にしてほしいと私は思っています。免震でも制震でもいろいろなデバイスが使われたときに、それを直接、子ども供たちが見られたり、触れたりできるように意図的に見学できるようにしてほしいと思っています。防災関係のいろいろな設備ですとか、あるいは先ほど避難のお話もありましたけれども、備蓄している物でさえ、セキュリティー上支障のない範囲で積極的に仙台市の市庁舎として、ハードも備蓄等もこういうふうに仙台市が取り組んでいるということを子ども供たちに学んでもらえるような装置しかけを組み込んでほしいと思っています。市庁舎だけでその学びの場を設けるという意味では決してなくて、田澤さんのメモリアル交流館などいろいろな学びのネットワークがある中に新しい市庁舎も含んでほしいなと考えておりました。

いのほうが大きいんです。シティホールはすごく象徴的な中心としてあるのですが、いわば民主主義の象徴としての建物なんですよね。だから、今の公共のあり方としては、議会だけでなく、いろいろな市民活動やＮＰＯなどの多様な主体が担って、それを分け合っていこうという時代なので、そういうのが反映されたような現代的な民主主義の象徴となるような場所だといいなと感じました。

手島：
ありがとうございます。素晴らしい意見です。どうでしょうか、またそれを受けてどなたか。桂さん、何かありますか。

桂　：
こういった話題も都市空間と一緒で、従うべき規範が見えないというか、日本の民主主義って難しいと思います。僕もコンセプトブックをつくっていて、これは民主主義とか市民社会の話だなと思い至って、はたと悩むみたいなことはよくありました。
先ほどの会場からご意見をいただいた使い方みたいな話とも絡んでくる話です。コンセプトブックというのは、基本的にはハードの話だったのですが、マネジメントビジョンという、今度はつくったハードをどうやって運用、運営していくかという、コンセプトブックのソフト版をしかけてもいたんですが、そっちはあまりうまくいきませんでした。
それでも諦め切れなかったので、実は今、低層部に市民のための場をつくる市役所側のプレーヤーとして１部屋確保して、そこのつくり込みをやっています。そういった意味ではまだまだチャンスはあるというか、できたら終わりじゃなくて、使って育てていくみたいなところが本当の勝負かなと思っています。このメディアテークのオープンスクエアのような場所に、僕たちの市庁舎の低層部もなってほしいなと思っていますし、少し仙台がうらやましいところでもあります。完成して20年近くたっているのかな、きっとメディアテークみたいな空間に育てられた気風が、一つ文化になりつつあるのではないかと思うので、ここと、さして遠くないところにできる新しい市庁舎がこの新しい文化を加速するようなものになるといいなと思いました。

手島：
ありがとうございます。おっしゃるとおり、本当にこのメディアテークはそういう意味ですごく素晴らしい都市空間だと思います。あともうひとつ、こういうみんなで議論する場をつくろうということなったのは、やっぱり僕らにとって決定的なのは震災復興なんです。震災復興の現場で、合意形成がどれぐらい力を発揮するかを思い知りました。幾らデザインがいいからと言ってもなかなかうまくいかない。正しいことを言ってもなかなか通らない。結局、合意の厚みだとか正当性だとか、やっぱりそういうことが最終的に必ず問われます。合意形成をきちんと組み立てているかどうかが社会的にもやっぱり重要ですし、行政手続上も一番力があるのかなという気がします。ありがとうございます。

Table D
【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

佐藤：
そこに向かうためにどの様なアクションを起せばいいのかがテーマになる。市役所の１・２階の運営を市民に託す方向性は、様々な波及効果が出てきそうだ。食堂、ＡＴＭ、市民ギャラリーなどオーソドックスな空間だけではなく、こういう機能を一緒につくっていくためのアイデアをまとめて終わりにしたい。
本日上がった話題は、
・情報発信やゆっくりできる空間という話から、回遊性をつくるという話題に発展。
大前提としてシティーホールには異なる特徴を持つ定禅寺通、一

Table E
【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

針生：
私は2009年に八戸の観光交流施設で6,000㎡ぐらいの中心市街地のプロジェクトに参加しました。観光交流施設という内容でしたが、観光という概念を変えて、みんなのミュージアムの提案をしました。八戸ポータルサイトミュージアムはっちです。それが５階建てで、上にもアーティスト・イン・レジデンスをつくりました。まちの中にあるから、避難施設にしたかったので、全館床冷暖房とし、自家発は普通の３倍ぐらいの容量をとりまして、なおかつ、免震にしました。
2010年に八戸駅と新青森駅間の東北新幹線が開業します。八戸の市長は元自治省の方で、ちょっと見識が広い人で、青森の観光交流施設は12月なので、八戸はニッパチでいいと、２月11日オープンにしました。ソフトも丁寧に組んだのですけれども、八戸は、えらい寒いです。２月の末までずっと人が誰も来なかったそうです。
市長はこのはっちに大変入れあげていましたから、ソフトが必要だというので、ソフトの費用まで用意していただいたので、困りました。私はちょうど大手術で入院していました。３月11日に津波が来て八戸も大分やられました。当時、避難というと、体育館などで寒くて、年寄りが死んだりしました。ところが、「はっち」は、全館床暖冷房で床に毛布なしでも寝られるわけです。はやぶさが八戸駅でとまってしまったから、300人全員をバスで運んで、彼らは「はっち」に四泊五日いました。更に、周辺の人もどんどん集まってきました。「何だ、これはいい建物だ」という話になって、それから沢山の人が来るようになりました。それからはもう中心市街地も人口や交通量がふえて、予想以上の活性化に役立っています。
私は床暖冷房とか、３階とかは少しだだっ広い交流広場にしておけば、ここを中心に全館避難施設にもなると思います。

二郷：
補足させていただきます。今、床暖というお話ありましたけれども、これを補完するゼロエネルギー的省エネビルの検討は可能です。今は。まさに太陽光、地下熱、地熱、地下水の熱から、多様なものを利用するZEBシステムが考えられています。せっかく計画するのであればそのような、先を見込んだ、50年先に通じるようなシステムも検討し、防災教育も含め、多様な展開が出来るような計画であってほしいと思います。
木村さんが先ほど言った歴史的伝承すべき事例の、例えば、四谷

Table F
【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

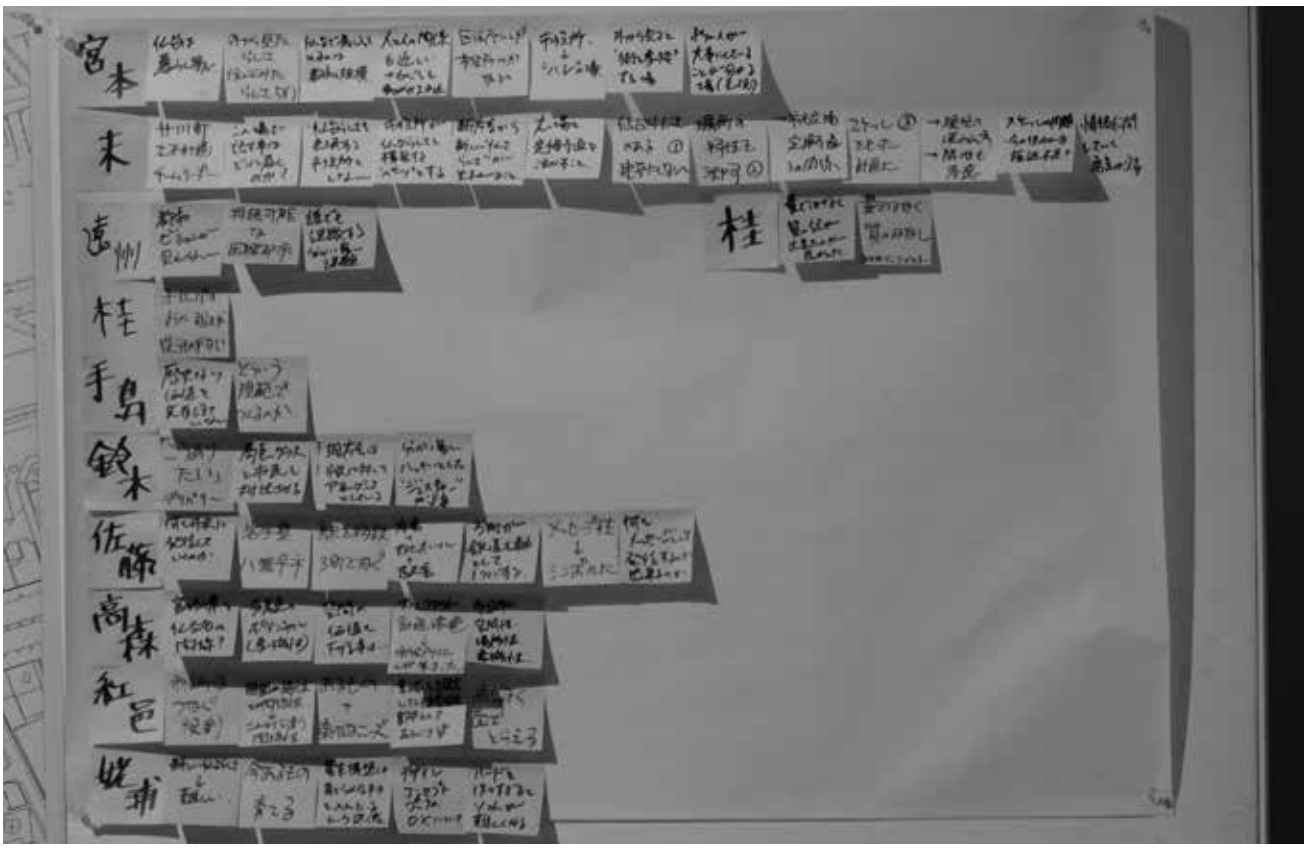


Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

番町、仙台駅エリアの回遊起点になってもらいたい。さらに地域の歴史的な背景とつながりが持てるとよい。いずれにしろ、周辺地域の資源と市役所の多様な機能をつなぐコーディネーターが必要だ。

・グランドレベルの運営について

「スペースを用意したので自由に利用して」ではなく、ラウンドテーブルの様な検討している段階から市民を巻き込み、完成後は市民自らが運営に積極的にかかわることで、新しいビジネスが生まれ、商いも可能になる。土日や夜に関わらず、自由往来ができ、様々なイベントやバスの待合及び災害時などにも連動して使える空間の必要性や心理的な壁をつくらないことが大きな波及効果の１つである。今後さらに多様な機能をつけ足せる余地が残っている。

・市民とのインターフェイスについて

仙台市域は非常に広い。勾当台エリアに限定するのではなく、５区にまたがる地域の特徴（観光地、名産品、地域のイベントなど）や人材など市役所を訪れることで、収集できる機能が必要だ。また、既存の公共施設の機能を見直したり、掛け合わせたり、まぜ合わせることで、相乗効果が期待できる。建設中のトピックスの公開や建設中の見学と商店街のタイアップ企画、レンガタイルなどを用いた寄附の募り方、建設中からかかわっていくことが、その後

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

用水の痕跡をきっちりその中に残すことも必要です。１階部分の全空間、かつての武家屋敷部分の遺構表示をしても構わないと思います。歴史的空間としての事象、イベント広場としてのその空間広がり、いろいろなことを多目的に、何にでも対応できるようにできないでしょうか。

内山：

歴史の話から防災の話になったのですけれども、やはり災害時に快適な場所であり続けられる能力を備えるというのは、やはりエネルギーのことや交通のことなどを考えなくてはできない話なので、「これは全部つながっているのかな」というふうに聞いておりました。

災害の話になってきたので、今までのお話を聞いて田澤さん、今までいろいろな施設をネットワークしていってはどうかという議論も出たし、いろいろ経験を伝承させていくという話もあったのですが、そのあたりについてコメントお願いします。

田澤：

針生さんが提示してくださった複数棟プランで、私は興味深いなと思ったのは、その間に界隈性を持たせるというか、最初の御発言で「横丁空間をつくる」というようなこともおっしゃっていて、私はそういう市民のよりどころをつくるというのはすごく大事なことなのではと思いました。

例えば、先ほどもシャンゼリゼ通りの話がありましたけれども、建物の中にいて外に視線を向けたときに、やはり市民の活動が見られるというのはすごく大事なことだと思います。それが例えば、今の１棟プランだと19階からの眼差しはもう見えないというか、市民活動が見えなかったり、あとは震災伝承という部分においては、しかるべきところがしかるべき対策をするべきだと思うんですけれども、例えば何気ない会話の中で「昨日の地震びっくりしたね」というところから普段自分が日常的にどういう対策をしているのかとか、やはり未来に向けて何ができるのかというところに発展すると思います。さらに、やはり震災のとき怖かったのに何もしていない自分に改めて気づくとか。

そういう意味で、今回過去と未来の話という部分の間をつなぐのはやはり市民の対話だと思います。それがやはり今の本庁舎には機能としても、全くないような気がしていますし、私も打ち合わせのときしか本庁舎に行かないのですが、緊張してしまうので、肝心かなめの議論しかしないで、あと帰ってしまうのです。それが例えば下が有事の際の大きなホールというか、そういう施設に

どうでしょう。じゃ、鈴木先生。

鈴木：
済みません、若干今までと違う話をすると、先ほど桂さんの話の中でデザイン･ビルドの話がありましたけれども､ＰＦＩ（公共サービスの提供に際して公共施設が必要な場合に、従来のように公共が直接施設を整備せずに民間資金を利用して民間に施設整備と公共サービスの提供をゆだねる手法）とかも庁舎の整備ではあり得る話だと思うんですね。ところがＰＦＩの審査をやってみてわかるのは、デザインとかなかなか数値に表しにくいものは評価の対象にならないですね。要求水準書に沿っているかどうかみたいな話で、審査しているほうも必ずしもデザインの専門家でない人がデザインの点数をつけたりすることもままあって、それは「よりよいものをつくろう」というよりも、「より効率的に無駄のないものをつくろう」という場面では機能するのですが、「市民に開かれた市庁舎をつくる」とかそういう話になったときにＰＦＩやデザイン・ビルドのような数値だけの話だけになっていくと非常に困ったことになってしまいます。困ったことになってコンセプトブックをつくるという話にもなったわけですね。だから、やり方をしっかり考える必要があるのかな。基本構想の書類を見ると、マンションを上に積んだ場合とかと書いてあるので、既にそういうことも考えていらっしゃるんじゃないかと思うんですけれども、そこはやはり最初の方向性を出した時点で大きく全体が変わってくるので、慎重に市民の意見を聞いて決めたほうがいいんじゃないかと思います。

手島：
発注の仕方によってもある意味選択が決まってくるという、これは多分専門家にしかわからない現実なんですよね。やはりそれは、私としては、こういった場で明快に言っていただきたいです。これも素晴らしい意見だと思います。また、どういう手法をとるべきかというのも、多分今後こういった場で話をしていければと思いました。
そういう投げかけでもいいので、どなたか何か最後の余った時間にご意見いただけないでしょうか。紅邑さん、お願いします。

紅邑：
海外での、例えばまちづくりに関わる市民の関わり方ってもうちょっと密接じゃないかと思うんですけれども、さっきの民主主義の話じゃないのですが、私たちは、そういうことに余り慣れていないなと思うので、まちづくりに市民が関わりやすい機会をもっとつくっていかなければいけないと思うし、今日のような場もすごく大事だと思うんですね。さっき別なところのテーブルで、議員の方たちが議会の市庁舎のことについての委員会を設けたと言っていたのですが、そちらは全然開かれていないんですよ。むしろそちらこそ開かれるべきじゃないかなと私は思うので、そういった意味で、もうちょっと風通しのいい形で議員の方たちとも市民がつながる、要するに支持者だけではなくて、もうちょっと

Table D
【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

の市役所のシンボル性につながっていく。
・四ツ谷用水について
噴水の話題から､四ツ谷用水に発展した。市役所周辺も流れていた。勾当台公園にも古図広場がある。水の流れに合わせて人の動きを誘導してみるというおもしろいアイデア、そして、そこに足湯なども併せて計画。
・市役所の建替えが周辺市街地を喚起する
老朽化した建物が多いエリア。商店街のアーケード建替えを含めリノベーションや土地の有効活用を検討するきっかけになってほしい。北庁舎、二日町駐車場エリアは、市役所と連動してゲート性や魅力的な開発を進められるエリアとなる。
・サルベージについて
市役所にとって不要な資料でも、研究や活動をしている人にとっては貴重な資料も含まれる可能性もある。建物の一部保存、建物や地域の記憶や歴史などを市政の蓄積として生まれ変わらせることができる。

伊藤：
定禅寺通も３０年ぐらい前はネオンで色とりどりだった。条例が制定され一掃され、定禅寺に住んで６３年目になる。定禅寺が一

Table E
【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

なっていたら、階段とか１階に降りがてら、雑談しながら、そこから広がる話が出てくると思います。
仙台らしさという部分においても、私は横丁空間ってすごく大事なことだと思いますし、私は仙台市史を読んでいて一番好きなのは近世のまちのにぎわいの部分がすごくおもしろいなというか、やはりお店とお店でどういうやりとりが生まれていたのかとか、お店とお客さんがどういうやりとりが生まれていたのか。
その中でも、もうお店の中で働けなくなった高齢者がまちでどう過ごしていたのかというくだりが私はとても好きで、まちの中に人がいるからこそ役割が生まれて、そのまちに対して何をしようかという考えが生まれてくる。
今やはり空間的にもそれを奪っているような気がしているので、そうした市民力をもうちょっと頼ってもいいのではないかなと思うと、それを機能とか計画するってすごく難しいことだとは思うのですけれども、もう少し市民の顔が見えるような空間というか、施設になったらいいなと思いました。

内山：
大沼先生からコメントをお願いします。

大沼：
短く。最後じゃないとは思いたいのですけれども､今､田澤さんおっしゃったことも結局、ちょっと私たちもすぐ建築という何か肩書きがついてしまうのですけれども、ランドスケープのほうがより包括的で、もしかしたら杜の都にもつながるのだろうと思います。多分、今のボリュームが増えてしまう問題というのは、オフィスとして足りないという話と、市民が集うホールとしての機能とをいろいろ混ぜて、話をしてしまっているのですが、いろいろ考えると敷地も屋敷６軒分しかないしということでいくと、今、必ずしも何でもあそこに盛り込もうとする計画ということではなくて、そこに出たものを全部１回見るのだけれども、それがどのぐらい分散して連携させられるのかは絶対スタディーすべきであって、それでも、残るものがあそこに残る、いわゆる市庁舎だと思います。ここにもう１つシンボルというようなものをどう捉えるのかというのは、皆さんのやはりいろいろなイメージがあって、それは先ほどゲストをどうもてなすかという話にもつながると思います。ここには皆さん市民がずっとあそこは市庁舎があったと思ってきた部分をどう生かすかということは当然あるので、シンボルがあの場所なのか、お城の近くなのか、それはいろいろ議論はあると思います。

Table F
【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

Table D
【他都市との比較の視点から】「仙台らしさ」を考える

広い市民とつながっていく機会を増やしていくのが重要だと思いました。これをきっかけにこれからそういった展開があると、横浜に学んだり、札幌に学んだり、またお互いに学び合ったりという関係が活きて来るんじゃないかなと思いました。

手島：
ありがとうございます。
どうでしょう。ほかに何かありますか。お願いします。

佐藤：
姥浦先生に応援メッセージを入れておこうかなと思いますけれども、多分「らしさ」って結構、今日の議論をしただけでもかなり難しかったじゃないですか。そうすると空中合戦で話をしていても、今後、市民を入れていくといっても、多分かなりいろいろな言葉が飛び交って前に進まないんじゃないかと思います。姥浦先生にはもう腹を据えて叩かれ台をつくって、もうボコボコになってもらおうかなということで、ぜひ頑張っていろいろなアイデアを出して、結果を受けとめていただければと思いますので、ぜひ頑張ってもらいたいなと思います。

手島：
ありがとうございます。
じゃ。

姥浦：
後ろの方にお願いなんですけれども、今回の市役所建替えでは、マンションは出来ないんですけれども、大きく分けると、オフィス部分と市民参画部分と多分２つあると思うんですね。さっきどなたかされていましたけれども、これから人口も減っていく中で、オフィス部分をどうするという話は、それはプロフェッショナルな世界で考えるべきことだと思うんですけれども、もう一つは、市民エリアをどうするのかというのは、これはプロフェッショナルで考えてもしようがなくて、先ほどから出ているように、「誰が使うの」とか「何のために使うの」というように、プレーヤーがいて初めてできる話なわけですよね。ですので、意見書でも書いていただいて、「私たちはこういう使い方をしたい」とか、そのために「こんな空間を用意してくれ」というようなものがあると、設計条件をつくるのも非常に楽だと思うんです。それがない中で「良いシティホールをつくれ」と言われてもなかなか難しい部分があります。つくって「何でこんな使えない空間つくったんだ」と怒られるだけになっちゃうので、むしろ「何をしたい」「こういうことをしたい」ということを、抽象的でも具体的でも何でもいいのですが、いろいろなご意見をいただければと思います。今日もそういう場だったと思いますけれども、そのあたりをどれだけ市民の側が出せるかが結構重要かなと思います。責任転嫁じゃないですけれども、そのあたりでご意見をいただけると楽だなということでございますので、ぜひお願いいたします。

Table E
【まちづくりの視点から】界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

番好き。４０年前はこの地域でもトンボをたくさん捕まえることができた記憶がある。自然あふれる風景が懐かしい。まち中でもそれが実現できないだろうか。

工藤：
組合としては、市役所建替え、定禅寺の再編、まちエリアとしてどの様に育てていくかを考えながら、アーケード改築、町並み構成、店舗のリーシングなどを考え、仙台市の発展に貢献できるように頑張っていきたい。

桃生：
計画を進める上で、関わる人の信頼関係が大事だと思う。プロセスの透明性、情報公開が大事だと思う。市民が関わる機会をつくるという意味ではリスクもある。専門家に任せる部分は専門家に任せて、市民で議論するべきところを整理する必要である。やみくもに市民を参加させ意見を反映させると、平均的な意見に集約されてしまう場合もある。その点は切り分けて考えるべきだ。

田邊：
市庁舎の建替えは、市民協働のプラットフォームづくりのトレー

Table F
【過去から未来への視点から】時系列の中での市役所の在り方を考える

ただ、そんなにちまちまとくっつけなくてもすごく城下が広くて、ましてや市域がものすごい広いわけですから、そういうことの中の中心というのはかなり広い視点が必要なのかなと思っています。
最後、近代建築の話がありましたけれども、個別性を問いにくいからモダニズム時代のものは価値がどうのこうのという話は価値づけしにくいみたいな話が出やすいのですが、私は実は博論のテーマが経年醸成価値といって、時間とともに深まる価値は何があるかという話でした。その３つは、結局は愛着と、風合い美、先ほど先生方からありました風合い美みたいなもの、そしてあとは歴史性です。コンテクストです。歴史性です。
そうすると、市民が価値を決めるべきなのです。同じような形のモダニズム建築であっても、そこが大事だと思えばそれは大事です。そこの市民が、東京の誰かとか海外の誰かが褒めてくれないから大事だと思えていないというところが多分あるのかなと思いましたので、ちゃんとそれは議論すべきだと思いました。

内山：
もう時間がなくなってしまいましたけれども、かなりいろいろな視点が出たかと思います。今回のラウンドテーブルはこれから何回かやっていくというふうに聞いていますので、その中で今日出てきたテーマをどんどん深めていければなと思っています。

伊藤：
少子高齢化で人口が減ってきます。昨年の 11 月が 109 万でしょうか。少し先ですが 90 万になります。
先ほど本庁舎が、今１万坪、分散している施設を足すと２万坪ですと、人口が減るのにそんなに大きな建物を建てなくてもいいのではないかと。であれば都心再整備した建物に入る。具体的に経済局はまちの中に、まちづくり政策局は一番町にあってもいいのではないかと。文化観光は駅前にあってもいいのでは。市民・来街者の近い場所で行務を行う分庁舎として。効率重視し何も無理やり１カ所に集める必要はないのではないのかと思います。また遠くない時期に災害があった場合はリスク分散が出来ると思います。人口が減り若者は少なくお年寄りばかりです。どうするかです。今現実に郊外で起きています。バスも来なくて、空き家だらけで、空き地だらけです。それを先に議論していただかないと。本庁舎も大切ですが、周辺も議論してください。
今、仙台市・仙台商工会議所などでマスタープランの議論中と聞きます。さらに、立地適正化まで踏み込んだものを政策として打ち出してほしいと思います。少々波風立つも将来に向けてしっか

Table D

【他都市との比較の視点から】
「仙台らしさ」を考える

手島：
はい、ありがとうございます。
そろそろこの会も終了のようなので、これで終わらせていただきますが、今日出た意見をまとめるだけでも、かなりの内容に迫れたと思います。最初このテーマでやろうと言ったときには、「こんなの大丈夫なのか」とみんなに心配されたのですが、何かこの困難さも含めてかなり見えてきたと。ある意味で、取り組むべき方向性も見えてきたかなという気はします。ひとことでまとめると、「大きなビジョンを書いて、そこに至るプロセスをどう市民に開いていくか」ということが「仙台らしさ」を醸し出してゆくのかなということだと思います。
じゃ、今日はどうもありがとうございました。（拍手）
以上

Table E

【まちづくりの視点から】
界隈や定禅寺通への波及効果・相乗効果を考える

ニングをするチャンス。「できるできない」を議論し続けることで、具体的な棲み分けや工夫が見えてくる。

小林：
市役所の建替えにかかわったのだといえるように取り組みたい。

小島：
市民協働においては、パブリックマインドを持った市民と行政がパートナーを組んで、市民にサービス提供するという意識で今日の取り組みを反映しないといけないと考える。

増田：
委嘱を受けている委員の立場としては、税金を投じて建設される本事業に対し、どのような機能の庁舎が、市民合意を得られるのかが一番の関心事だ。最小限のオフィスビルだけで十分だ。または、費用はかかるが付加価値がある施設にしたいという意見もあり得る。今後、費用対効果も踏まえさまざまな議論を固めていきたい。

Table F

【過去から未来への視点から】
時系列の中での市役所の在り方を考える

りしたビジョン、戦略、実行、市民に届くものを先行指標として提示いただくことをお願いします。その柱が市本庁舎だと思います。

内山：
語り残したテーマとしては全体の中でのネットワークという話があると思います。多分駅前に魅力が集中してしまっているけれども、ほかの場所も多分それぞれ魅力がある、つくっていくべきだ、そういった中でこの勾当台のあり方というものがあると思います。その他にいろいろな問題が挙げられました。近代建築の価値の問題、緑の価値の問題などです。今日の会では全然時間が足りなくて難しいですけれども、これから深めていければと思いますので、よろしくお願いいたします。
今日はどうもありがとうございました。（拍手）

第一回仙台ラウンドテーブル
Round-Tab
「市役所（シティホール）を考える」
市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替えシンポジ
主催：仙台市
（社）宮城県建築士会
（一社）宮城県建築士事務所協会
（公社）日本建築家協会東北支部宮城地域会
テーブル6

3.1 主催

主催

仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
一般社団法人　宮城県建築士会
一般社団法人　宮城県建築士事務所協会
公益社団法人　日本建築家協会東北支部宮城地域会

企画委員会

菅原　大助	仙台市財務局理財部本庁舎建替準備室
髙橋　香奈	仙台市財務局理財部本庁舎建替準備室
吾妻　光	仙台市財務局理財部本庁舎建替準備室
石原　修治	宮城県建築士事務所協会
中居　浩二	宮城県建築士事務所協会
佐々木　昌喜	宮城県建築士事務所協会
大宮　利一郎	宮城県建築士事務所協会
川口　裕子	宮城県建築士事務所協会
奥山　和典	宮城県建築士事務所協会
栗原　將光	宮城県建築士事務所協会
髙橋　直子	宮城県建築士会
清本　多恵子	宮城県建築士会
小林　淑子	宮城県建築士会
錦織　真也	宮城県建築士会
石井　順子	宮城県建築士会
辻　一弥	JIA 宮城地域会
松本　純一郎	JIA 宮城地域会
手島　浩之	JIA 宮城地域会
安田　直民	JIA 宮城地域会
阿部　元希	JIA 宮城地域会
佐伯　裕武	JIA 宮城地域会

報告書編集

安田　直民　　JIA 宮城地域会

付記

本誌に掲載されている登壇者等の肩書、所属は各回の仙台ラウンドテーブルが開催された当時の物です。
宮城県建築士事務所協会とは「一般社団法人宮城県建築士事務所協会」を、宮城県建築士会とは「一般社団法人宮城県建築士会」を、JIA 宮城地域会とは「公益社団法人日本建築家協会東北支部宮城地域会」を指します。
本誌に掲載されている事例報告、各団体等の活動報告、ならびにラウンドテーブルの討議録は、当日の録音及び発表原稿をもとに文字におこしたものです。一部、録音の不鮮明な部分、口語体で理解が難しい部分については加筆をおこなっています。
内容については上記の文責のもとに原稿を作成いたしました。

市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替シンポジウム

CITY HALL

第１回仙台ラウンドテーブル
「市役所（シティホール）を考える」

2020 年 8 月 17 日　第一刷発行

著作・監修：　仙台市
一般社団法人　宮城県建築士会
一般社団法人　宮城県建築士事務所協会
公益社団法人　日本建築家協会東北支部宮城地域会

発行所：　公益社団法人　日本建築家協会東北支部宮城地域会
〒 980-0811　仙台市青葉区一番町４－１－１
仙台セントラルビル４F
http://www.jia-tohoku.org/archives/author/miyagi
電話　022-225-1120　FAX　022-213-2077

落丁・乱丁本はお取替えいたします。
本書の無断複製（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。
また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化することは、
たとえ個人や過程内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

© 2020 City of Sendai, Miyagi Society of Architects & Building Engineers, Miyagi Association of Architectural Firms, Miyagi Association, the Japan Institute of Architects Tohoku Chapter
ISBN978-4-903378-30-5

本書の内容に関するご意見・ご感想は下記までお寄せください。
仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
E-mail : zai003075@city.sendai.jp